

「竹林七賢」はいかに描かれたか

— 古典詩の場合 —

中央大学大学院文学研究科中国言語文化専攻博士課程後期課程

河野 哲宏

目次

序	4
第一章 庾信以前	9
第一節 「詠史詩」として詠われた「竹林七賢」	10
第二節 典故として用いられた「竹林七賢」	19
第二章 庾信	34
第一節 「風流」	35
第二節 嵇康の「処刑」にまつわる属性	40
第三節 「途窮」	42
第四節 典故としての「竹林七賢」	46
第三章 李白	51
第一節 「竹林七賢」	52
第二節 「五君詠」という認識の枠組み	54
第三節 「五君詠」という認識の枠組みを越えて	63

第四章	杜甫	83
第一節	阮籍	84
第二節	嵇康	95
第三節	その他の五人	104
第五章	白居易とその周辺	114
第一節	白居易	115
第二節	劉禹錫	133
第三節	劉白連句	148
第六章	蘇軾	160
第一節	阮籍と嵇康	161
第二節	山王と劉伶	179
結語		196

序

魏晋の際を生きた人物に「竹林七賢」と称される人物たちがいる。一般的には、次のように説明されている。

ちくりんのしちけん【竹林の七賢】

個性的な思想と行動を理想とした魏晋時代の7人のグループ。すなわち阮籍・嵇康・山濤・劉伶・阮咸・向秀・王戎。なかでもリーダー格は阮籍と嵇康。彼らはいつも竹林に集って大いに酒を飲み、談論風発したという。(後略)。(執筆担当…吉川忠夫氏) -

ここに触れられる、彼らが「大いに酒を飲」んだことやその他諸々の故事は、劉宋に成立したとされる『世説新語』や、唐代に編纂された『晋書』の列伝などに見ることが出来る。そして、そのような読み物とは別に、詩という文学ジャンルにおいても、「竹林七賢」や彼らの故事は言及されている。

先行研究においては、「竹林七賢」それぞれの作品や事跡などを、置かれた社会的状況などによって読み解く、もしくは、作品の内的世界の考察など、「竹林七賢」そのものや、個々の人物の名が署名された作品を中心とした研究が行われてきた^三。このような研究が意義あるものであることに異論はないが、違った観点からの研究も必要ではないだろうか。

「竹林七賢」は、後世の詩人たちが、折に触れて、自身の詩において言及する人物であり、その事実は、「竹林七賢」が一定の価値を有しており、少なからず、後世に影響を与えた人物であったことを示している。小論では、「竹林七賢」そのものを対象とする研究に価値を認めつつも、そのような観点は用いず、後世の詩人に描かれた「竹林七賢」像を考察の対象としたい。

私たちが、詩や文を読み、素朴な評価を下すのと同様、例えば、李白や杜甫などの詩人も、意識的か無意識的かは別として、「竹林七賢」に対して何らかの評価を下している。その評価や描かれ方を見ることによって、「竹林七賢」がどのような認識で理解されたのかを考察することは、「竹林七賢」の独自性や典型性、影響力といった「竹林七賢」を読み解く一つの進捗点となるのではないだろうか。

小論は、以上の観点で、「竹林七賢」に言及した詩を対象として論を進めていく。

方法としては、対象となる詩の、詩人の置かれたコンテクストや用いられる典故の内容、またその用いられ方を補助線として、細部の表現を読み解くこととなる。同じ人物の同じ属性に言及した、誰しも一見すれば、理解できるような同趣旨の作品であっても、その細部においては、表現にずれが見られる。そのずれこそが、言及された対象への認識の表れであり、見るべき部分だろう。

しかしながら、「竹林七賢」に言及した現存する詩のすべてを考察の対象とするのは、個人の力量の限界

や時間の制限を越えているため、小論では、各時期を代表していると称するに足る詩人のうち、まとまった量の「竹林七賢」への言及が見られる詩人に対して、時間の許す限り考察を加えた。

対象となる詩人は、六朝期を代表する詩人として庾信、盛唐の李白、杜甫、中唐の白居易、劉禹錫、北宋の蘇軾である。また、それ以外に、「竹林七賢」に言及した詩が作られ出した東晋から庾信以前の時期（庾信の同時代も含む）に当たる詩人も取り上げている。詳細は後述するが、庾信による「竹林七賢」への言及が、「竹林七賢」に対する認識の典型を打ち立てたと考えられ、その比較に用いるためである。

今日では、彼ら詩人たちが物した詩のすべてが見られるわけではないため、当然ながら、彼らの「竹林七賢」に対する認識のすべてを読み解くことはできない。であるから、小論における考察は、現存する作品のみを書かれたものと仮定した上での考察となる。

以上のような前提で、論を進めていくが、その前に「竹林七賢」と「竹林の游」との関係について、確認しておく。

福井文雅氏は、「七賢達の各人の行跡に触れた著作は、世説新語や文選などの注に多く残っている魏氏春秋、晋陽秋、竹林七賢論、名士伝、王隱晋書、虞預晋書、鄧粲晋紀、中興書、臧荣諸晋書などである」^四とし、「上掲の書の中で『七賢』の名称が最も早く見えるもの」^五は『魏氏春秋』であると指摘している。『三国志』『魏志』巻二十一「王粲伝附嵇康伝」裴松之の注に引かれる『魏氏春秋』には、次のように書かれている。

嵇康は河内の山陽県にかり住まいしており、彼と遊ぶ者は、今までその喜んだり怒ったりした表情を見たことがなかった。陳留の阮籍・河内の山濤・河南の向秀・籍の兄の子咸・琅邪の王戎・沛国の劉伶と互いに親しく交友し、竹林にて遊び、七賢と号した。^六

また、『文選』巻二十一、顔延之「五君詠」の「向常侍」注に引く『魏氏春秋』には、

嵇康は河内の山陽にかり住まいし、河内の向秀と互いに親しく交友し、竹林にて遊んだ。^七

とも書かれている。

「竹林七賢」の人々自身による言及では、向秀「思旧賦」に、「私は嵇康、呂安と家が近かった」^八とあるが、他の人物の作品には、彼らの交遊は言及されていない。確かに、七賢の作品全てが、完全に現代ま

で保存されているとは考えられない。現存する量も個人によってまちまちである。しかし、彼ら自身による「竹林七賢」という言葉が、まったく残っていないのでは、「竹林七賢」というグループの信憑性は疑われる。

また、『世説新語』や『晋書』に見える故事では、彼ら「竹林七賢」が彼らの交遊について言及することがあるが、彼ら自身ではなく、別人の筆によるものであるため、その真偽は判断できない^九。

松浦崇氏は、袁宏『名士伝』及び戴逵『竹林七賢論』という二つの書物の性格と思想的意義から鑑み、「西晋の滅亡を契機として活発化した東晋以後の清談派と反清談派との対立の中から、竹林七賢の存在が大きくクローズ・アップされるようになり、「乱世を何よりも精一杯に生き抜こうとした中国人の典型として、理想化され、伝説化されていった」^{一〇}と結論づけている。

先に挙げた『中国文化史大事典』の後略部分にも、

それにもかかわらずひとつのグループにまとめられたのは、彼らそれぞれがさまざまの生き方を引き出すべき人間の典型とされたからであろう。一一

と説明されているように、松浦氏の説が通説となつていられると思われる。

このように、彼ら「竹林七賢」個々の間での交遊が疑われることはないが、実際に一堂に会していたかということについては、最近の研究においては、否定的に考えられている。

以下の章に見るように、後代の詩人は、その詩に「竹林七賢」もしくは、「竹林の遊」を描いている。一堂に会したという記録がないにも関わらず、彼らの交遊を描く。これは、彼ら詩人の認識において、事実とは無関係に「竹林七賢」が成立していることを示している。よって、最近の研究において、否定的に考えられていることは認めつつも、小論では、詩人の認識において、事実とは無関係に成立しているという点に注目し、「竹林七賢」という一つのグループがあったという仮定で進め、その真偽については触れないこととする。

一 尾崎雄二郎／竺沙雅章／戸川芳郎編『中国文化史大事典』（大修館書店、二〇一三年五月一〇日、初版第一刷）、八二六頁。

二 『世説新語』は成立当時、歴史書として認識されていたと思われる節もあるが、後代の認識では、小説とされている。『晋書』は、当然、歴史書とされる。いずれもみな、ひとまず「読み物」として捉えておく。

三 これらの研究とは別の観点であり、小論の観点到に近いものとして、後世の詩人の詩に見られる「竹林七

賢」という点を考察した、中尾健一郎「洛陽時代の白居易と魏晉の士人——『竹林七賢』を中心に」(『中国文学会報』第十八号、二〇一一年十月、一七〇—一七三頁)が見られる。中尾氏論考については、第五章にて詳述する。

四 福井文雅氏「竹林七賢についての一試論」(『Philosophia』第三七号、一九五九年、八八頁)。

五 前掲論文、八八頁。

六 原文「康寓居河内之山陽縣，與之游者，未嘗見其喜愠之色。與陳留阮籍、河内山濤、河南向秀、籍兄子咸、琅邪王戎、沛人劉伶相與友善，遊於竹林，號爲七賢。」(『三国志』、中華書局、二〇〇五年二月、第二版北京第一八次印刷、六〇六頁)。

七 原文「康寓居河内之山陽。與河内向秀相友善。游於竹林。」(李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、三〇四頁)。

八 原文「余與嵇康呂安。居止接近」(前掲『文選』、一二二九頁)。

九 注二で触れたように、『世説新語』の性質を考えれば、より面白さを求め、あるいは、リアリティを出すため、創造された内容を歴史上の人物に語らせるといったことがあったと考えられる。

一〇 松浦崇氏「袁宏『名士伝』と戴逵『竹林七賢論』」(『中国文学論集』第六号、一九七七年五月、一一頁)。

一一 前掲『中国文化史大事典』、八二六頁。

第一章 庾信以前

はじめに

庾信（五一三―五八一）の「竹林七賢」観を見る前に、庾信以前の時期に位置する詩人、また、庾信と同時代に生きた詩人の詠った「竹林七賢」を見ていく。庾信は六世紀、隋の建国の年（五八一年）に没している。「竹林七賢」が生きたのは、魏晋の際であり、その後、南朝は、宋・梁・斉・陳と移り変わる。その間に、何らかの形で「竹林七賢」に言及していると考えられる詩が幾つか見られる。本章では、それから「竹林七賢」に言及していると考えられる詩句、詠われた属性などを挙げ、庾信に至るまでの時期に描かれた「竹林七賢」像を一通り確認する。言及のされ方から二つに分けて考察を加える。一つは、人物を詠うことが念頭に置かれた「詠史詩」であり、もう一つは、典故として用いられる場合である。

第一節 「詠史詩」として詠われた「竹林七賢」

「詠史詩」は、歴史上の人物を詠うことを一つの形式（広い意味での）としている。ここでは、詠われる人物の事跡や属性が詠われ、当然なことだが、典故として人物に言及する場合と比べて、描写が細かく、また詠われる属性も多くなる。

ここで「詠史詩」と見做すのは、次の三作品である。

顔延之（三八四―四五六）「五君詠五首」

蕭統（五〇一―五三一）「山濤王戎を詠ふ詩二首并序」

庾肩吾（？―五五〇？）「賦して嵇叔夜を得る」二

顔延之「五君詠」五首は、「竹林七賢」と称された阮籍・嵇康・山濤・王戎・向秀・劉伶・阮咸の七人から、山濤・王戎の二人を抜いた五人を「五君」とし、五言八句で詠った連作詠史詩である。

顔延之が「五君詠」を制作した動機は、『宋書』卷七十三「顔延之伝」の記載によれば、「地方へ左遷され永嘉太守となった。顔延之はこれに対して非常に憤り、そこで『五君詠』を作った」^三ということである。先行研究において、この沈約の記述に対する疑義は出されておらず、「五君詠」制作の動機として受け入れられている。

また、顔延之「五君詠」は、「竹林七賢」の七人のうち、山濤・王戎を除いた五人を「五君」として詠ったものだが、顔延之が「竹林七賢」から「五君詠」へという操作を行った理由も、『宋書』卷七十三「顔延

之伝」の記載によって、『五君詠』を作り『竹林七賢』の事を叙述したが、山濤・王戎は高位に昇つたため退けられた^四と理解され、特に問題とはされていない。

これまでの先行研究は、『宋書』『顔延之伝』の説明を受け入れ、その上で、当時の社会的状況や作品に関する考察を行うものが主である^五。特に、顔延之が「五君詠」において行った操作について、その意味を問う研究はなされていない。

このような顔延之と「五君詠」に対する『宋書』『顔延之伝』の記述によつた一般的な理解は、次のように整理できる。

「退けられた」と言う以上、「七賢」から「五君」へという操作は、価値判断であり、批評的な行為である。それは、詠われなかった山濤・王戎に対する否定であると考えられる。

しかし、「退け」ただけが、批評なのではない。「七賢」から山濤・王戎の二人を「退け」ることによつて、「七賢」として均質な評価を得ていた五人は、新たにより密度の濃い評価、「五君」という評価を受けている。その意味で「五君詠」は、顔延之による「五君」の人物批評と読み得るだろう。

つまり、「七賢」から「五君」へという操作は、「退け」という山濤・王戎に対する否定であると同時に、「五君」を「七賢」から突出させる肯定であると考えられる。

「五君詠」で行われた「七賢」から「五君」へという操作は、七人から五人を選ぶということから、「五君詠」制作者にとつても、それを読む者にとつても、絶えず「七賢」のイメージが付いてまわることが考え合わせれば、「五君詠」は、「五君」とされた五人に対する明示的な批評であると同時に、外された山濤・王戎に対する暗示的な批評であると考えることができると同時に、外された山濤・

それでは、「五君詠」にて、顔延之がどのように「竹林七賢」を認識していたのか見ていく。
まずは、阮籍である。

「阮歩兵」

阮籍は表立って行動しなかつたけれども、

見識は奥深かつた。

その輝きを隠すように酔いつぶれ、

何かにかこつけて自分の気持ちを述べるような表現をした。

達人を慕うように長嘯し、

礼俗を乗り越えて人々を驚かした。

人の善し悪しを論じることはないが、

ただ行き詰まっては慟哭するばかりだ。六

第一句は、「世俗のことに関わらなかった」七「喜びや怒りなどの感情を見せなかった」八と評され、王昶との面会では、「一日中一言も話さなかった」ので、(王昶は)その人となりや推し量ることができなかった九と言われるような阮籍の行動を踏まえた表現だろう。そしてそのような阮籍が一たび口を開けば、一見際どい言葉に見えて、周囲の人間が敬服する言葉を発する一〇。それが第二句の見識の称賛に繋がるのだろう。

そして、第三句では、韜晦としての酒一が描かれ、第四句は、「阮籍伝」に『詠懐詩』八十余篇を作り、世間で重んぜられた一二とあるのを考慮すれば、「詠懐詩」を念頭においた表現だと考えられる。

第五句は、阮籍が「長嘯していた」一三ことや、蘇門山での孫登との故事一四を踏まえ、第六句は、「礼教にこだわらなかった」一五ことを言う。第七句では、「人物批評をしなかった」一六ことを挙げ、そんな阮籍の生き難さを、第八句「途窮」に慟哭した故事一七によって表す。

詩全体を通して見れば、阮籍の卓越した人物像を描いており、その卓越さゆえに、出る杭が打たれることの多かった「魏晉」という時代を生きる苦しさや表現されている。特に、末尾の「途窮」は、阮籍の代表的な属性として、後の時代の文人に頻繁に用いられる語となる。つまり、顔延之の「阮籍」は、類稀な才能と志を持ちながらも、時代の制約によって存分に働くことのできなかつた人物として認識されている。次は、嵇康である。

「嵇中散」

嵇康は世間には合わなかつた、

なぜなら仙人の素質があつたから。

形骸を離れたのは仙人となつた証、

議論からは精神が集中していたのがわかる。

俗世間に立つては世俗の通念に逆らい、

山を訪ねては隠者と打ち解けあう。

鳳凰のような翼が時には傷つこうとも、

龍のような性質は誰にも飼ひ馴らすことはできない。一八

第一句から第三句まで、嵇康が世俗とは合わなかつたことの原因として、「仙性」を挙げている。特に、

第三句は、嵇康が仙人になった^{二九}とまで言っている。そして、第四句は、第三句との繋がりから言えば、嵇康の著した「養生論」などが念頭に置かれているのだろう。

第五句は、嵇康自身が、「山巨源に與ふる絶交書」にて「堪えられないことが七つあり、甚だ許されないことが二つあります」^{三〇}と言明するように、嵇康の他の人々と同じように官職につくことへの障害となる嗜好や、当時の社会通念に反する考えを示し、孫登との故事^{三一}に見られるような隠者との邂逅を第六句に言及している。

末尾の二句では、嵇康の容姿の素晴らしさの形容として用いられる「龍」「鳳凰」^{三二}を、権力機構に取り込まれることを拒んだ嵇康の精神性として用いている。

全体を通して、顔延之は、嵇康の「仙性」を中心に描き、世俗との対立を際立たせていると考えられる。また、梁の庾肩吾も嵇康を詠っている。

「賦して嵇叔夜を得る」

山林は明滅を重ね、

風月は騒がしい俗世間に臨んでいる。

書を著しては隠士を思い、

奥深いことを談じては靈妙な力を留める。

雁は重くなれば却ってその性質を損ない、

蚕は寒くなれば更に身を養う。

広陵には古い曲を残し、

山陽には昔寓居が有った。

俗人はどうして邪魔ばかりするのか、

才能の多いことが却ってその身を煩わす。

山濤に言付けて言った、

現世の垢に塗れたあなたを手伝うことはできません。^{三三}

冒頭二句、第九句にて、世俗との対立を描き、末尾の二句で、「山巨源に與ふる絶交書」の嵇康の語を踏まえて、山濤^二世俗／嵇康^三超俗という対立を立て、第三、四句と第九、十句にて、著述や思考などの才能に関する卓越さを詠う。これらは、顔延之と共通した認識である。

異なる点としては、「広陵散」の故事^{三四}の用い方だろうか。庾肩吾は第七句にて、「広陵には古い曲を残し」

す、と「広陵散」に言及している。「広陵散」は、すぐに連想されるほど、嵇康の刑死と密接な関わりがある。よって、ここでは、嵇康の刑死が含意されており、同様に、第八句の「山陽の寓居」も、向秀が今は亡き友人である嵇康を傷んだ「思旧賦」を連想させ、嵇康の死が含意されていると考えられる。顔延之が踏まえたと思われる、顧凱之「嵇康讚」では、次のようになっている。

徐寧は、夜部屋の中から琴の音色を聞き、その巧みさをいぶかしんで（鮑靚に）尋ねた。鮑靚は「嵇康だ」と答えた。徐寧が「嵇康は東市で処刑されました、どうしてここにいることができるのでしょうか」と尋ねると、鮑靚は「嵇康は刑死したように見せたが、実は屍解して仙人となったのだ」と答えた。二五

ここでは、嵇康は死んでしまったのではなく、屍解して仙人となっている。沈約の言うように、顔延之は「五君」に自身を仮託していると考えれば、刑死ではなく、仙人となったとするほうが、自身を擬えやすい。それに対して、庾肩吾は、詩題に「賦して嵇叔夜を得る」と言うように、客観的に嵇康を詠っている。つまり、刑死を中心として、顔延之はその生からの解放を重視し、庾肩吾は人生の終焉としての死を描いている。その差異が、「広陵散」故事の用い方に表れていると考えられる。

しかし、詩全体を通して見られるのは、やはり、嵇康の超俗性や才能の卓越さであり、大筋の方向としては、顔延之と同様の認識で以て描かれている。次は、劉伶である。

「劉參軍」

劉伶は巧みに世間から離れ、

見たり聞いたりする物事で感情を動かすことはなかった。

鼓鍾では喜ばすことはできず、

俗世の快樂などは彼には無意味だった。

素晴らしい才能を隠すように日々飲んだくれるが、

実際にはその飲みっぷりが荒れたものではなかった。

酒徳頌は短文だが、

奥深い心が自然と見えるのだ。二六

劉伶は、酒に関する故事で有名な人物である。顔延之も、劉伶を酒飲み的人物としてはいるものの、その酒の性質が異なる。第五句にて、「飲んだくれる（沈飲）」と評されているが、それは、「素晴らしい才能を隠す（韜精）」ためであるので、「荒れた飲みっぷりではない（非荒宴）」とされている。ほぼ酒に関する故事しか残っていない劉伶だが、第一句「巧みに世間から離れ（善閉關）」や第四句「俗世の快樂などは彼には無意味だった（榮色豈能眩）」という劉伶の超俗性が示されていることから、顔延之の認識では、世俗を超越した人物という認識なのだろう。第七、八句にて、劉伶の「酒徳頌」を評価するのは、後の時代にもよく見られるものである。

この詩では、明確な故事は用いられておらず、いくつかの故事から読み取った顔延之の劉伶像を詠っているように思われる。

また、「顔延之伝」に次のようにある。

身の処し方はさっぱりとしており、財産には興味がなく、衣服や食事も粗末なものであり、一人郊外にて酒を飲み、その心に適っているときには、そばに人がいないかのように振る舞った。二七

このように、顔延之は、酒好きであり、世俗の榮華に興味を持たない、と評されており、顔延之の劉伶評と軌を一にしている。「阮步兵」や「嵇中散」は、多くの描写を費やして、それぞれの才能を描いていたが、「劉參軍」では、顔延之自身の性質を投影して描いていないのだろうか。

次は、阮咸である。

「阮始平」

阮咸は高潔な人格であり、

真にその天分は人民より秀でている。

音楽に通じているとはどうしてわかるのか、

音楽を聴いて微細なことを感じ取ったのだ。

郭奕は心酔し、

山濤も低く評価することはなかった。

しばしば推薦されたが官界には入らず、

指図されやむなく太守となった。二八

阮咸は、その音楽の才能が言及されることが多い。第三、四句にて、それが言及されている二九。第五句では郭奕^{三〇}から、第六句では山濤^{三一}から称賛された故事が用いられている。この山濤による称賛（「貞素寡欲」）に見られるような阮咸の人物としての評価の高さが、冒頭二句の「高潔な人格（青雲器）」という評価に繋がるのだろう。しかし、阮咸は積極的に権力に近づくことはせず^{三二}、荀勗の嫉妬によって左遷させられたこと^{三三}を踏まえて、詩を終える。

全体を通して、阮咸は、阮籍と非常に近い認識で捉えられていることがわかる。二人とも見識や人格など、素晴らしい才能を持つてはいたが、酒によって韜晦し、彼らの才能が露出していたのは、阮籍は著述であり、阮咸は音楽であったということだろう。つまり、阮咸は、言及されることの多い音楽の才能だけを有する人物ではなく、人格や天分など、人に優れたものを持つていた人物であり、また、政争に巻き込まれる恐れのないはずの音楽という分野の才能でさえ、嫉妬によって左遷させられてしまうという、当時の生き難さをも描いていると考えられる。最後に、向秀である。

「向常侍」

向秀は味もそっけもない生活を余儀なくされたが、

奥深い心は筆と紙に託した。

道を探っては物事の奥深さを好み、

書物を読んで内容の精神を理解しない解釈を卑しんだ。

呂安・嵇康の知遇を得て高みに上ったのだ。

いつまでも河で遊んで帰らなかったが、

（その交遊を思い出して）悲しみ傷んでは山陽にて賦す。^{三四}

この詩において、描かれる向秀は、主に二点に集約できる。まずは、前半四句を通して、向秀が、『莊子』を好み、その注を作ったこと^{三五}が描かれる。次に、後半四句では、呂安・嵇康との交友とその交友を懐かしみ、傷んで作った「思旧賦」^{三六}が描かれている。向秀と嵇康が頻繁に議論を交わしたことも、前半四句に含意されていると考えれば、嵇康らとの交友というテーマで一つに括することも可能だろう。

ここまで、顔延之「五君詠」を見てきたが、先にも述べたように、顔延之は「竹林七賢」から山濤・王戎の二名を除いて「五君」とした。この「五君」それぞれを詠った詩を見れば、「五君」はいずれも、世俗

を超越した人物であり、それぞれが、人に称賛されるに値する何かしらの才能を持ってはいたが、時代の制約によって、自ら発揮することを望まなかった人物として描かれていた。

一般的に、超俗的な士の場合、推薦された際には、拒絶するか、病と称して辞すなど、推薦を受けない。まったく推薦を受けずに高位に昇っていくことは考えられないので、入口で拒否する超俗的な士は、高位に昇ることはなかっただろう。

晋王室の外戚である山濤と瑯琊の王氏という名門出身の王戎が、散官や在野にいることの方が、権力者にとつて気になることであつたはずであり、山濤・王戎が高位に昇つたのは、彼らが望む望まないということではなく、仕方がないことだつたかもしれない。

しかし、顔延之は、この点を重視したことによって詠わなかつた。書かれていないことから判断するのは、誤りを生むかもしれないが、顔延之の明示的な批評である「五君詠」を裏返した場合に、詠われなかつた山濤・王戎への批評が現れるとすれば、顔延之によって「五君」が称賛されている点、つまり、超俗性と才能の二点、特に超俗性が、山濤・王戎には欠如していたのではないだろうか。それは、「高位」に昇つたという事実にも表れているだろう。

それでは、「山濤王戎を詠ふ詩二首并序」を制作した蕭統は、どのように、山濤・王戎を認識していたのだろうか。

その詩序において蕭統は、「顔延之『五君詠』は山濤・王戎のことを詠わなかつたので、私は二人を詠つてみた」三七と云う。この言説は、「詠われなかつた山濤・王戎を顔延之に代わつて詠む」との意にとるこ
とができる。その場合、蕭統が顔延之「五君詠」と同じ五言八句という形式で詠うということを意味する
のみならず、その作品が、顔延之「五君詠」の存在があつてはじめて成立したということを示している。

先に顔延之「五君詠」を人物批評として位置付けた。同様に、蕭統「山濤王戎を詠ふ詩二首并序」を確
認すれば、蕭統「山濤王戎を詠ふ詩二首并序」は、その詩序に「顔延之『五君詠』は山濤・王戎のことを
詠わなかつたので、私は二人を詠つてみた」と言うように、顔延之が「五君詠」にて詠わなかつた二人（山
濤・王戎）を詠つたものである点において、「五君詠」と同様に人物批評と見なすことができる。ただ、こ
の二人に対する扱いが顔延之とは異なる。これは、蕭統の二人（山濤・王戎）に対する認識が異なるだけ
ではなく、「五君」と二人（山濤・王戎）、つまり「竹林七賢」に対する認識が異なっていることを示して
いる。

このような観点に立ちつつ、蕭統「山濤王戎を詠ふ詩二首并序」を検討していく。
まずは、山濤である（個別の詩題なし）。

山濤は見識広く度量も大きく、
早い時期に竹林の歎から離れた。
自ら参上して英主に出会い、

身は廟堂の端に遊んだ。

位は五教の職に上がり、

その能力で五品の官をめぐった。

君主のために働くことは簡単であつたから、

有能な臣下であるのは難しくなかつた。三八

第一句で、山濤の見識、度量が称賛されている。そして、若い頃の放縦から離れ、官界へ入り、活躍したことが、第二句から末尾まで続く。山濤の功績として多く言及されることは、人物を見抜き、適切な人材を朝廷に推挙したこと^{三九}である。実際、「竹林七賢」のうちでも、嵇康と阮咸が推挙されている（どちらも失敗したが）。この官吏としての有能さと、外戚としての身分によって、高官となつたとされるが、蕭統は、この点に関して否定的な評価を与えてはいない。このような官吏として有能であるという山濤評価は、ごく一般的なものだと考えられるので、顔延之が暗示的に示した「才能の欠如」という点においては、合致しない。

次は、王戎である（個別の詩題なし）。

王戎はとりわけ寂しい人生であり、

晩年になって司徒となつた。

神を求めて影を見る結果となり、

ひそかに行つて蓄財にあつた。

嵇康はすでに世を去り、

阮籍も死んでしまった。

宴の残滓を求め、

酒屋の周りを一人徘徊していた。四〇

冒頭二句では、王戎の「有能さの欠如」が描かれる。第二句の「晩年になって司徒となつた」は、高位

に昇ったことを言うが、それは「晩年に」であって、才気によって高位に昇ったと言うよりも、その名族としての力によって（王戎の力量とは無関係に）、高位に昇ったという意味に受け取れる^{四一}。

そして、第三、四句では、「神」を得ることができず、「蓄財」^{四二}に走ったことを言うことから、その俗物性を意味していると考えられる。そんな王戎が、嵇康、阮籍の在世中、彼らともにいるという恩恵を受けていただけであるかのように、後半部分では、嵇康・阮籍亡き後の寂しい姿が描かれている^{四三}。

王戎に対する蕭統の認識は、その有能さの欠如、俗物性、名族の出であるだけという揶揄である。山濤への認識と比べれば、高位に昇ったという共通点はあるながらも、その内実は真逆であり、官吏としての有能さの横溢／欠如という対立を立てられている。

以上の「詠史詩」とそれに準ずるものを概括すれば、「竹林七賢」それぞれの事跡、属性が詠われ、三者三様の思い描く人物像が示されている。それぞれの詠われる属性は、後に表で示す。傾向として、顔延之は、「五君」の超俗性に注目し、著述や能力の高さを称賛していることが挙げられる。それに対して蕭統は、山濤の官吏としての有能さに注目し、王戎については、有能さの欠如に言及する。庾肩吾は、嵇康のみを詠っているが、顔延之と同様、その超俗性に注目していると考えられる。

これら三作品は、「竹林七賢」それぞれに細かい描写を加え、三者の人物観を示してはいるが、ともすると故事の羅列になりかねない。それに対して、人物を詠うという「詠史詩」の制約から逃れた典故による言及では、コンテキストとなる故事に限定が加えられ、より詠われる人物に対する評価や用いる意図が明確になると思われる。

第二節 典故としての「竹林七賢」

前節では、「詠史詩」という形式において「竹林七賢」を詠ったものを見た。この節では、典故として、「竹林七賢」に言及しているものを見ていく。見られた作品は以下の通りである^{四四}。

- ・東晋（三一七—四二〇）
 苻朗（？—三九〇？）「臨終詩」
- ・南朝宋（四二〇—四七八）
 謝靈運（三八五—四三三）「道路にて山中を憶ふ」
 范曄（三九八—四四五）「臨終詩」

- ・南朝齊（四七九―五〇一）
- 王融（四六七―四九三）「散曲」
- 蕭鈞（四七三―四九四）「晚景遊泛し友を懷ふ」
- 任昉（四六〇―五〇八）「郡を出で傳舎にて范僕射を哭す一首」
- ・南朝梁（五〇二―五五六）
- 何遜（四六七？―五一八？）「徐主簿を傷む」
- 吳均（四六九―五二〇）「鍾山に登りて讌集し西靜壇を望む」
- ・南朝陳（五五七―五八九）
- 張正見（五二七―五七五）^{四五}「對酒」
- 江総（五一九―五九四）「南に還り草市の宅を尋ぬ」^{四六}
- 「陳に在りて旦醒を解きて共に顧舎人を哭す」^{四七}
- 「洛陽道二首」

以上に挙げた詩を詠われた人物ごとに見て行く。言及に偏りがあるため、嵇康、阮籍を中心に整理する。まずは、現存する限り、最も古い時期に詠われた嵇康である。東晋の苻朗「臨終詩」の部分のみ挙げる。

この隱逸を求める男（私）はどうしたら良いのだろうか、

忽ち東市に処刑されることになろうとは。

この百年という時間の隔たりを無くして、

遠き時代の嵇康のように処刑に臨もう。^{四八}

苻朗は、前秦の第三代皇帝である苻堅の甥であり、父・苻洛と共に謀反して敗れ、東晋に帰順した。末年、政敵の王国宝によって処刑されることとなり、その臨終の際にこの詩を作ったとされる。

挙げた部分は、処刑に臨んでの心持を語った部分である。ここでは、嵇康が処刑に臨んだ際の姿を意識し、嵇康のように泰然として処刑に臨むことを願う。苻朗の人となりは、「性質は雄大で物事に通じており、その精神はさすがしく人に優り、幼い頃から奥深い趣きを抱いており、一時的な榮華を顧みなかった」^{四九}と評され、「やむを得ず官職に就いた」^{五〇}とされるように、隱逸の好む超俗の人物であったと考えられる。またその著作は、「老莊の一派」とされている^{五一}。よって、同じように老莊を好み、超俗を願った人物であり、同じように処刑される自身の理想となる人物像として、嵇康を捉えていると考えられる。

また、挙げた部分の二句目「東市」は、嵇康が処刑されたとされている洛陽の東市である。苻朗は、東晋において処刑されたので、洛陽で処刑されることは考えられない。これは、処刑されるという嵇康との類似から、「東市」としてあるのであり、一つの「詩蹟」であると思われる^{五二}。つまり、この部分は、隠逸を好むという類似（一句目）、「東市」という歌枕（二句目）によって嵇康を導き出し、時間を越えた（三句目）、嵇康と自身との融合を願っている（四句目）のである。このように、処刑に臨んで「嵇康のようになりたい」と願うことは、南朝宋の范曄にも見られる。范曄「臨終詩」の部分を挙げる。

どうして盗跖の処刑を論じ、

伯夷・叔斉の餓死を明らかにすることができるだろうか。

処刑の前に琴を弾いた嵇康のようにはいられないが、

顔色一つ変えなかった夏侯玄のようでありたい。五三

良く知られるように、范曄は『後漢書』の撰者である。その范曄も苻朗と同様、処刑された人物である。その理由は、南朝宋の文帝・劉義隆への謀反であり、この詩も苻朗と同じく処刑に臨んで作られたものとされている。

挙げた部分の一、二句目で盗跖と伯夷・叔斉に言及している。これは『莊子』を踏まえたものだろう。『莊子』では、私欲のために処刑された泥棒・盗跖と、名節のために餓死した伯夷・叔斉は、ともにその性を損なった点は同じであり、両者に小人／君子という対立を立てるべきではないとする^{五四}。これを踏まえて、范曄は、自身の処刑に対する弁解を述べ、自身への慰めとしているのだろう。そして、処刑に臨んでは、泰然として琴を弾いた嵇康の領域に至るとは言えないけれど、「顔色一つ変えなかった夏侯玄のようでありたい」^{五五}と願う。

ここでも、苻朗の認識と同じく、嵇康は、処刑に臨んでも泰然としていた人物として認識されている。嵇康そのものに言及するのではなく、嵇康の処刑によって、絶えてしまった「広陵散」に言及するものもある。南朝宋・謝靈運の「道路にて山中を憶ふ」の末尾部分を挙げる。

明月の曲は悲しく響き、

広陵散は痛ましい。

心をこめて琴の音を求め、

嘆きながらも笛に思いを込めよう。五六

この詩は、謝靈運が臨川太守となり赴任する道中にて、隠逸を思い詠ったものである。ここでは、故郷である始寧の山中を思い、その思いの表現として、悲しく響く「明月の曲」、痛ましい「広陵散」を挙げている。「広陵散」に言及してはいるが、嵇康の処刑という含意は、直接汲み取ることとはできない。しかし、「広陵散」に言及する以上、嵇康をまったく意識していないとは考えられない。とすれば、ここでは、嵇康の死によって「広陵散」が絶えてしまったように、自身と故郷・始寧の山中との断絶を表していると考えべきだろう。

他に、「広陵散」を悲しい調べの曲として捉えるものに、南朝齊の王融「散曲」（「齊明王歌辭七首」）がある。部分のみ挙げる。

楚調のように悲しい広陵散の調べ、
琴柱にかかる秋風の弦。五七

ここでは、謝靈運の詩よりもさらに「広陵散」の調べの悲しさに焦点が当てられていると思われる。悲しい調べの成因として、嵇康の処刑が存在することは否定できないが、琴曲として一般化され、嵇康の処刑との関連性を詠うという意識は薄れているように思われる。

以上のような嵇康の処刑に関わる故事について言及したのではなく、嵇康と山濤の交友に言及したのもある。南朝陳・江総の「南に還り草市の宅を尋ぬ」の部分のみ挙げる。

道が崩れては求仲を悲しみ、
林が荒れ果てては山濤を思う。五八

ここでは、「山濤を思う」というところから、自身を嵇康に擬えていると考えられる。以前、友人と遊んだ林が荒れ果てているのを見て、かつての友人との交遊を懐かしむことを、官界に戻った山濤を思う嵇康によって表現している。ここでは、二人の交友、友情が示されているのだろう。

以上、嵇康に関わる故事を詠った詩を見てきたが、次の詩は、嵇康の故事とともに、阮籍に言及したものである。南朝梁の何遜「徐主簿を傷む」の部分のみ挙げる。

旅人の簫は楽しさがあると云つても、隣家の笛は痛ましく感じてしまう。

琴を持って阮籍のところへ行き、酒を戴いて揚雄を探し求める。五九

挙げた一、二句目は、向秀「思旧賦」を踏まえたものである。「思旧賦」は、向秀が今は亡き友人である、嵇康と呂安を懐かしんで作ったものであり、ここでは、自身を向秀に、徐主簿を嵇康に擬えて友人への哀惜を表現していると考えられる。

また、三、四句目では、琴／酒、阮籍／揚雄という対立が立てられている。琴／酒は、「風流」という属性を示すものであり、阮籍は、「琴賦」を著しており、揚雄は、「酒賦」を著しているので、それぞれの大家として挙げているのだろう。この詩は、詩題に言うように友人を傷む詩であるので、徐主簿が琴／酒の大家である阮籍／揚雄と親しく交われるほどの風流な人物であるということを示しているのだろう。次の南朝陳・張正見の「對酒」は、劉伶と共に阮籍に言及している。末尾部分のみ挙げる。

（酒を楽しんだ人物として）ただ劉伶と阮籍がいたが、

（彼らは）夢中になって杯に心を寄せたのだ。六〇

この詩では、劉伶と阮籍が酒を好んだ人物として引かれている。詩題に言うように、この詩は、「酒に對して」作った（もしくははそのように仮構して作った）作であるため、酒を好んだ人物として二者を引くが、ここには、酒に耽溺する、もしくはは韜晦としての酒といった評価が透けて見えることはない。酒に對する善きものという評価が、まずあり、そしてそれを好んだ人物という構造だろう。

次の二例は、王戎に言及したものである。まずは、江総「洛陽道二首」其の一である。部分のみを挙げる。

飾った船で李膺は棹を取り、

王戎は轡を取って子馬に跨る。六一

ここでは、使徒となった王戎が子馬に乗って出掛け、人々はそれが王戎とは思わなかったという故事を踏まえた表現がなされている。この詩は樂府であり、洛陽を描くというテーマが設定されている。そこで、

名門貴族である琅邪の王氏の一族であり、洛陽がまだ西晋のものであった時期に活躍した王戎を挙げることとで、過去の洛陽の繁栄を言う。また王戎は、この故事から考えれば、「高官」という属性を与えられていると考えられる。李膺が仙人と見間違えられたという故事とともに引かれることから、「高官」であるのに、地位に合った尊大な態度や装いで出掛けるのではなく、子馬に乗って出掛けるということ善きこととして描いているのだろう。

次の任昉「郡を出で傳舎にて范僕射を哭す一首」では、王戎の人を見る眼が称えられている。部分のみ挙げる。

王戎は李毅を得たが、

范雲は私のような狂っている人物に出会った。六二

『文選』のこの詩句の注には、次のように記されている。

傅暢は讚嘆して言った。王戎、字は濬沖。王戎は選官の際、江夏の李重字茂曾、汝南の李毅字茂彦について、李重は邪念がなく高尚であるとして、李毅は心が広く物事に通じているとして、二人の有様は異なっていたが、共に要職に就かせた。王戎は觀察眼によって二人を任用し、それぞれその能力を発揮する場所を得た。六三

この故事では、王戎の觀察眼が描かれており、それを踏まえて范雲による自身の引き立てを、任昉は描いているのだろう。先の江総「洛陽道二首」其の一では、「高官」という属性が詠われていた。引き立てる役柄を与えられていることから、この詩でも「高官」という属性は含意されていると考えられる。

ここまで見てきた作品では、個人（並称も含む）を挙げており、阮咸を除く六名が少なくとも一回は言及されている。複数回言及されている人物（嵇康、阮籍、王戎）は、細かい部分では異なるが、大筋同じような認識で描かれていた。そのようなそれぞれに与えられた認識と、「竹林七賢」全体への認識では、どのような差異があるのだろうか。以下、「竹林七賢」（「竹林の遊」を含む）に言及した三例を見て行く。

一つ目は、蕭鈞「晚景遊泛し友を懷ふ」六四である。末尾の部分の挙げる。

一たび（石崇の）金谷の宴（のような楽しい宴）を辞してから、

竹林の遊（のような君との遊び）を空想してばかりだ。六五

ここでは、友人との交遊を「竹林の游」、石崇の金谷園での宴に擬えている。擬えることで、友人の歓待が、石崇の豪華な宴のような素晴らしきであるとともに、「竹林の游」のような「風流」なものであるという意味なのだろう。

次の江総「陳に在りて旦醒を解きて共に顧舎人を哭す」も、友人との交遊を「竹林の游」に擬えている。冒頭部分のみ挙げる。

一人酒を飲み、

高らかに七哀詩を詠う。

どうして永久の別れを言うことがあるのか、

また竹林での出会いがあるのだから。六六

この詩は友人を哭す詩なので、ともに引かれるのが王粲の「七哀詩」である。王粲は、「竹林七賢」とともに、魏晋を代表する交友である「建安七子」の一人であり、この四句では、二つの交友を直接対比として示さないが、意識していることは確かだろう。今は亡き友人とのもう起こり得ない交遊を「竹林の游」に擬えることで、「風流」という属性を示し、自身の慰めとしている。

最後の一つは、呉均「鍾山に登りて讌集し西静壇を望む」である。部分のみ挙げる。

才気は商山四皓に勝り、

文才は竹林七賢より高い。六七

先の二例とは異なり、ここでは、ともに宴を張った友人たちを称賛するために、「商山四皓」と「竹林七賢」を挙げている。ここでは、「竹林七賢」の文才を比較対照としているが、比較対象となるものの価値が低ければ、比較は意味を為さない。よって、「竹林七賢」の文才は、高いという認識を見ることができ。しかし、現存する作品を見る限り、文筆で名の知れた人物は、阮籍、嵇康、向秀の三者のみである^{六八}。これは、この三者の文名の高さを敷衍して「竹林七賢」の文才として捉えているのか、呉均の生きた時代では、他の四名の著作を見ることができたということなのか、詳細はわからない。

おわりに

ここまで見てきた例をまとめれば、顔延之は、詠史詩として「竹林七賢」を詠っており、触れられる属性が多くなる。それに模擬したと考えられる蕭統も同様である。また、嵇康を詠った庾肩吾の詩も見方によつては詠史詩と考えられ、同様に多くの属性を詠い、一つの人物像として嵇康を描き出している。

それに対して、典故として言及した例を比べると、それぞれの詩のコンテクストに置かれる以上、描かれる属性がほぼ一つに収斂する。それぞれの詩に詠われる属性は、下記の表にまとめる。

これら詠われた属性を見ていくと、いくつかの傾向にまとめることができる。

まず、「風流」と「超俗性」という属性である。顔延之は、「風流」よりも「超俗性」を強調しているが、その後、蕭鈞や何遜などのように、「超俗性」よりも「風流」を強調するものへ移っていく。

次に、苻朗、范曄の用いた「臨終詩」という形式での嵇康への言及がまとめられる。これらは、嵇康の「処刑」に関わる属性（それに付随する向秀や山濤との「友情」という属性）を詠い、処刑に臨む自身の理想とする人物像として示される。謝靈運、王融の作品は、「臨終詩」ではないが、同様な属性を示していると思われる。

言及される数に目を移せば、「竹林七賢」全体に触れていると思われる蕭鈞、吳均、江総を除けば、言及は阮籍と嵇康、王戎に集中しており、三者への相対的な興味の高さが見られる。後に見るように、阮籍、嵇康は後の時代にも、言及されることが多いが、王戎への言及はあまり見ることができなくなる。そのことを加味すれば、王戎への言及は、琅琊の王氏が、名門貴族として権力を握っていたこの時期の特徴と言えるだろう。

また、言及の偏りを考えれば、顔延之と蕭統が、阮籍、嵇康の二人以外の人物を詠ったということは、獨創性を有していると言えるだろう。さらに、言及される属性とその多彩さという観点から見れば、「竹林七賢」それぞれのイメージの定着に大きな影響を与えたことが推測される。

庾肩吾	蕭統	顏延之	
		見識 酒作 著作 超俗性 至慎 途窮	阮籍
超俗性 琴流 風流 才氣		超俗性 仙性 著作 龍性 不羈	嵇康
		超俗性 酒作 著作	劉伶
		高潔 音樂 山濤からの評価 仕官の拒否	阮咸
		著作 呂・嵇との交友 哀傷	向秀
	見識 度量 風流 高位 有能	(高位)	山濤
	寂寞 無能 高位 蓄財 孤独	(高位)	王戎

江 總	張 正 見	吳 均	何 遜	任 昉	蕭 鈞	王 融	范 曄	謝 靈 運	符 朗	
風 流	風 酒 流	文 才	風 琴 流	風 流	風 流					阮 籍
友 情 風 流		文 才			風 流	蕭 瑟	泰 然 琴 処 刑	琴 処 刑	泰 然 処 刑	嵇 康
風 流	風 酒 流	文 才		耽 酒 溺	風 流					劉 伶
風 流		文 才			風 流					阮 咸
風 流		文 才			風 流					向 秀
友 情 風 流		文 才			風 流					山 濤
高 位 風 流		文 才			風 流					王 戎

一 検索、引用には、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（北京、中華書局、二〇〇六年一月、第一版北京第五次印刷）を使用し、適宜、他のテキストを参照した。以下、『南北朝詩』と略す。中国語文は拙訳により、原文を注に示す。

二 これは厳密には「詠史詩」ではないが、人物を詠っているということから、「詠史詩」に準ずるものとしてここに含める。

三 『宋書』卷七十三「顔延之伝」「出爲永嘉太守。延之甚怨憤，乃作五君詠」（『宋書』、北京、中華書局、一九七四年、第一版、一八九三頁）。

四 原文「作五君詠以述竹林七賢，山濤、王戎以貴顯被黜」（前掲『宋書』、一八九三頁）。

五 管見の限りでは、国内の「五君詠」について言及した先行研究に、顔延之の文学全般を扱った、高橋和巳「顔延之の文学」（『高橋和巳作品集九 中国文学論集』、河出書房新社、一九七二年、三七二頁）、顔延之の詩の特色を扱った、大矢根文次郎「顔延之の詩」（『世説新語と六朝文学』、早稲田大学出版部、一九八三年三月、初版、一九七〇二二六頁）、「五君詠」の製作年代についての考察として、甲斐勝二「顔延之小論三題」（『福岡大学総合研究所報』第一一五号、一九八九年一月、四一九〜四三四頁）、「五君詠」創作に至る社会的背景についての考察として、佐藤正光「南朝宋初の政治と文学——顔延之「五君詠」詩創作に至る背景——」（『学芸国語国文学』第二十七号、一九九五年三月、五〇〜六一頁）、「五君詠」の創作意図とその寓意を考察した、佐藤正光「顔延之「五君詠」詩について」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年十月、五九五〜六〇九頁）、沈約に同じく「褊激の性」と評された顔延之と謝靈運との比較において、顔延之の性質の確認として「五君詠」に触れた、森野繁夫「『宋書』顔延之傳について」（『中国中世文学研究』第五十四号、二〇〇八年九月、一〜十八頁）などがある。

六 国外のものでは、「五君詠」の分析として、葛天民「千秋絶唱《五君詠》」（『中文自学指導』第五期、一九九四年、六〜七頁）、詠史詩の概論として「五君詠」に触れている、江艶華「魏晉南北朝詠史詩論略」（『雲南師範大学社会学学報』第二十六卷第四期、一九九四年、五十一〜五十五頁）、顔延之と蕭統の詩創作時における社会的状況の類似を指摘する、江建俊「顔延之〈五君詠〉與蕭統〈詠山濤王戎〉作意蠡測」（『成大中文学報』第十期、二〇〇二年一〇月、一〜二八頁）などがある。

七 原文「阮公雖淪跡。識密鑿亦洞。沈醉似埋照。寓辭類託諷。長嘯若懷人。越禮自驚衆。物故不可論。途窮能無慟。」（前掲『南北朝詩』、一二三五頁）。

八 原文「不與世事」（房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版北京第二次印刷、

一三六〇頁)。

八 原文「喜怒不形於色」(前掲『晋書』、一三五九頁)。

九 原文「終日不開一言，自以不能測」(前掲『晋書』、一三五九頁)。

一〇 「阮籍伝」に「帝引爲大將軍從事中郎。有司言有子殺母者，籍曰：『嘻！殺父乃可，至殺母乎！』坐者怪其失言。帝曰：『殺父，天下之極惡，而以爲可乎？』籍曰：『禽獸知母而不知父，殺父，禽獸之類也。殺母，禽獸之不若。』衆乃悅服。」(前掲『晋書』、一三六〇頁)とある。

一一 「阮籍伝」に「籍本有濟世志，屬魏晉之際，天下多故，名士少有全者，籍由是不與世事，遂酣飲爲常。」(前掲『晋書』、一三六〇頁)とある。

一二 原文「作詠懷詩八十餘篇，爲世所重」(前掲『晋書』、一三六一頁)。

一三 原文「能嘯」(前掲『晋書』、一三五九頁)。

一四 「阮籍伝」に「籍嘗於蘇門山遇孫登，與商略終古及栖神導氣之術，登皆不應，籍因長嘯而退。至半嶺，聞有聲若鸞鳳之音，響乎巖谷，乃登之嘯也。」(前掲『晋書』、一三六二頁)とある。

一五 原文「不拘禮教」(前掲『晋書』、一三六一頁)。

一六 原文「口不臧否人物」(前掲『晋書』、一三六一頁)。

一七 「阮籍伝」に「時率意獨駕，不由徑路，車迹所窮，輒慟哭而反。」(前掲『晋書』、一三六一頁)とある。

一八 原文「中散不偶世。本自餐霞人。形解驗默仙。吐論知凝神。立俗迂流議。尋山洽隱淪。鸞翮有時鍛。龍性誰能馴。」(前掲『南北朝詩』、一二三五頁)。

一九 『文選』「五君詠五首」「嵇中散」注引顧凱之「嵇康讚」に「寧曰。嵇臨命東市。何得在茲。靚曰。叔

夜迹示終。而實尸解。」(李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、三〇三頁)とある。

二〇 原文「有必不堪者七。甚不可者二」(前掲『文選』、六〇二頁)。

二一 「嵇康伝」に「至汲郡山中見孫登，康遂從之遊。」(前掲『晋書』、一三七〇頁)とある。

二二 「嵇康伝」に「人以爲龍章鳳姿」(前掲『文選』、一三六九頁)とある。

二三 原文「山林重明滅。風月臨囂塵。著書惟隱士。談玄止谷神。鴈重翻傷性。蠶寒更養身。廣陵餘故曲。山陽有舊鄰。俗儉寧妨患。才多反累身。寄言山吏部。無以助庖人。」(前掲『南北朝詩』、一九八八頁)。

二四 「嵇康伝」に「康顧視日影，索琴彈之，曰：『昔袁孝尼嘗從吾學廣陵散，吾每靳固之，廣陵散於今絕矣！』」

(前掲『晋書』、一三七四頁)とある。

二五 原文「寧夜聞靜室有琴聲。怪其妙而問焉。靚曰。嵇叔夜。寧曰。嵇臨命東市。何得在茲。靚曰。叔夜

迹示終。而實尸解。」(前掲『文選』、三〇三頁)。

二六 原文「劉伶善閉關。懷情滅聞見。鼓鍾不足歡。榮色豈能眩。韜精日沈飲。誰知非荒宴。頌酒雖短章。

迹示終。而實尸解。」(前掲『文選』、三〇三頁)。

深衷自此見。」(前掲『南北朝詩』、一二二三五頁)。

二七 原文「居身清約，不營財利，布衣蔬食，獨酌郊野，當其爲適，傍若無人。」(前掲『宋書』、一九〇二～一九〇三頁)。

二八 原文「仲容青雲器。實稟生民秀。達音何用深。識微在金奏。郭奕已心醉。山公非虛覲。屢薦不入官。一麾乃出守。」(前掲『南北朝詩』、一二二三五～一二二六頁)。

二九 「阮咸伝」に「咸妙解音律，善彈琵琶。」(前掲『晋書』、一三六三頁)とある。

三〇 「阮咸伝」に「太原郭奕高爽有識量，知名於時，少所推先，見咸心醉，不覺歎焉。」(前掲『晋書』、一三六二頁)とある。

三一 「阮咸伝」に「山濤舉咸典選，曰：『阮咸貞素寡欲，深識清濁，萬物不能移。若在官人之職，必絕於時。』」(前掲『晋書』、一三六二頁)とある。

三二 山濤の推挙に対して、武帝・司馬炎は、「耽酒浮虛」であるとして取り上げなかったが、この飲酒に耽っていたことは、阮籍に対する認識と同様、韜晦としての酒として認識されていると考えられる。

三三 「阮咸伝」に「荀勗每與咸論音律，自以爲遠不及也，疾之，出補始平太守。」(前掲『晋書』、一三六三頁)とある。

三四 原文「向秀甘淡薄。深心託毫素。探道好淵玄。觀書鄙章句。交呂既鴻軒。攀嵇亦鳳舉。流連河裏遊。側愴山陽賦。」(前掲『南北朝詩』、一二二二六頁)。

三五 「向秀伝」に「始，秀欲注，嵇康曰：『此書詎復須注，正是妨人作樂耳。』及成，示康曰：『殊復勝不。』」(前掲『晋書』、一三二七四頁)とある。

三六 「思旧賦」序に「余與嵇康呂安。居止接近。」(前掲『文選』、二二二九頁)とある。

三七 原文「顔生五君詠不取山濤、王戎。余聊詠之焉」(前掲『南北朝詩』、一七九五頁)。

三八 原文「山公弘識量。早廁竹林歛。聿來值英主。身游廊廟端。位隆五教職。才周五品官。爲君翻已易。居臣良不難。」(前掲『南北朝詩』、一七九五頁)。

三九 「山濤伝」に「濤再居選職十有餘年，每一官缺，輒啓擬數人，詔旨有所向，然後顯奏，隨帝意所欲爲先。」(前掲『晋書』、一二二二五～一二二六頁)とある。

四〇 原文「濬冲殊蕭散。薄暮至中台。徵神歸鑿景。晦行屬聚財。嵇生襲玄夜。阮籍變青灰。留連追宴緒。墟下獨徘徊。」(前掲『南北朝詩』、一七九五頁)。なお、前掲『南北朝詩』は、「冲」を「充」に作るが、前掲『文選』によって改めた。

四一 実際「王戎伝」では、「戎在職雖無殊能」と政治的な無能さに触れている(前掲『晋書』、一二三三三頁)。

四二 「王戎伝」に「積實聚錢，不知紀極，每自執牙籌，晝夜算計，恒若不足。」(前掲『晋書』、一二三四頁)

とある。

四三 「王戎伝」に「嘗經黃公酒壚下過，顧謂後車客曰：『吾昔與嵇叔夜、阮嗣宗酣暢於此，竹林之游亦預其末。自嵇、阮云亡，吾便爲時之所羈縲。今日視之雖近，邈若山河！』」（前掲『晋書』、一二三五頁）とある。

四四 復讐の王朝に跨つて生きた人物は、主に活躍した時期の人物として挙げる。

四五 江総とともに時代としては、庾信と同時代の人物である。

四六 『文苑英華』では、詩題の「還」を「行」に作る。

四七 この作品の詩題は、『藝文類聚』では「傷顧野王」となっており、『古詩紀』では「在陳且解醒共哭顧舍人」とし、一に「傷顧野王」に作るとする。

四八 原文「如何箕山夫。奄焉處東市。曠此百年期。遠同嵇叔子。」（前掲『南北朝詩』、九三二頁）。

四九 原文「性宏達，神氣爽邁，幼懷遠操，不屑時榮」（前掲『晋書』、二九三六頁）。

五〇 原文「不得已起而就官」（前掲『晋書』、一一九三七頁）。

五一 「苻堅戴記」に「著苻子數十篇行於世，亦老莊之流也。」（前掲『晋書』、二九三七頁）とある。

五二 この点に関してより確かなものにするために、他の「東市」を用いた例を探して検討する必要があると思われるが、今ここで行う余地はない。今後の課題としたい。

五三 原文「豈論東陵上。寧辨首山側。雖無嵇生琴。庶同夏侯色。」（前掲『南北朝詩』、一一〇三頁）。

五四 『莊子』「駢拇第八」に「伯夷死名於首陽之下，盜跖死利於東陵之上，二人者，所死不同，其於殘生傷性均也，奚必伯夷之是而盜跖之非乎！天下盡殉也。彼其所殉仁義也，則俗謂之君子；其所殉貨財也，則俗謂之小人。其殉一也，則有君子焉，有小人焉；若其殘生損性，則盜跖亦伯夷已，又惡取君子小人於其間哉！」

（郭慶藩撰、王孝魚点校『莊子集釈』、新編諸子集成、北京、中華書局、一九八九年一〇月、第五刷、第二冊、三二三頁）とある。

五五 『三國志』「魏書」諸夏侯曹佗附夏侯玄伝に「玄格量弘濟，臨斬東市，顔色不變，舉動自若，時年四十六。」（『三國志』、二九九頁）とある。

五六 原文「悽悽明月吹。惻惻廣陵散。殷勤訴危柱。慷慨命促管。」（前掲『南北朝詩』、一一七七頁）。

五七 原文「楚調廣陵散。瑟柱秋風弦。」（前掲『南北朝詩』、一三八七頁）。

五八 原文「徑毀悲求仲。林殘憶巨源。」（前掲『南北朝詩』、二五八八頁）。また、『初學記』は、「求」を

「仇」に作る。「求仲」は、「蔣詡三徑」の故事を踏まえていると思われるが、『藝文類聚』では、「求」を「嵇」にしている。これは次句の「林殘憶巨源（『藝文類聚』は「源」を「原」に作る）」との関連から、嵇康へと繋がり、字の異同となったのだろうか。

五九 原文「客簫雖有樂。鄰笛遂還傷。提琴就阮籍。載酒覓楊雄。」（前掲『南北朝詩』、一六九五頁）。

- 六〇 原文「獨有劉將阮。忘情寄羽杯。」（前掲『南北朝詩』、二四八〇頁）。
- 六一 原文「仙舟李膺棹。1小馬王戎鑣。」（前掲『南北朝詩』、二五六九頁）。
- 六二 原文「濬冲得茂彦。夫子值狂生。」（前掲『南北朝詩』、一六〇〇頁）。
- 六三 原文「傳暢讚曰。王戎。字濬冲。戎為選官時。江夏李重字茂會。汝南李毅字茂彦。重以清尚。毅淹而通。二人操異。俱處要職。戎以識會待之。各得其用。」（前掲『文選』、三三三頁）。
- 六四 この詩について、『古詩紀』は、唐の蕭鈞の作の可能性に触れているが、今は『初學記』が、「梁蕭鈞」としてゐるのに従う。
- 六五 原文「一辭金谷苑。空想竹林遊。」（前掲『南北朝詩』、一五九一頁）。「苑」を『太平御覽』は、「苑」に作り、また、『古詩紀』は、「想」を一に「思」に作るとする。
- 六六 原文「獨酌一樽酒。高詠七哀詩。何言蒿里別。非復竹林期。」（前掲『南北朝詩』、二五八八頁）。また、『文苑英華』は、「樽」を「罇」に作る。
- 六七 原文「才勝商山四。文高竹林七。」（前掲『南北朝詩』、一七三〇頁）。
- 六八 劉伶の「酒德頌」と山濤の「啓事」も文筆に含めれば、五名となるが、王戎、阮咸については著作が残っていない。

第二章 庾信

はじめに

前章では、庾信に至るまで（庾信と同時代も含む）の六朝期の詩人に見られる「竹林七賢」に言及した詩を見た。詠史詩では、詠われる人物の故事を踏まえた表現が多く、その触れる属性も多岐に渡る。それに対して典故として「竹林七賢」を用いた場合、大きく二つの属性にまとめることができる。一つ目は、「風流」という属性である。詠史詩では、超属性を中心に認識されていた「竹林七賢」が、典故として用いられる場合には、「風流」という属性で描かれる。これは、当時、宴会という場での詩作が多かったことを考えれば、世俗の超越という属性よりも、宴会自体や列席した人々を讃える「風流」という属性が用いられ易かったのだと思われる。

二つ目は、嵇康の「処刑」にまつわる属性である。それらは特に、処刑された人物の臨終詩や、友人を傷む詩に用いられる。処刑に際して、泰然とした態度を見せた人物は、嵇康以外にも存在したが、処刑の場で琴を奏で、その奏でた曲がそれを最後に絶えてしまったという故事の劇的さによって、人々の心に残り、用いられ易かったのだろう。

本章では、若い頃から梁の宮廷サロンにて活躍した詩人であり、その後、北朝に留め置かれ、祖国に戻ることでできなかった望郷詩人でもあった庾信（五一三―五八一）の詩を見る。このような特異な経歴を持つ人物でありながら、六朝詩の大成者とされ、後世の詩人にも大きな影響を与えている人物として、「竹林七賢」を描くということに関しても、一つの指標となると思われる。

まず、第一、二節にて、「風流」、嵇康の「処刑」にまつわる属性それぞれを確認し、そして、第三節にて「途窮」という属性に言及している詩を見る。そのうえで、第四節にて典故としての「竹林七賢」という問題を考える。

なお、庾信に先行する人物の詩、庾信の詩は、当然ながら現在すべてを見られるわけではない。よって小論は、現存する作品に限るという限定付きの考察となる。

第一節 「風流」

まず、「竹林七賢」が風流を好んだという属性に言及しているものを挙げる。この属性は、宴席など人々の集まる場において、詩が作られるという状況から考えると、一般的に触れられやすい属性であり、このような属性を詩に含ませることによって、場を和ませるといった作用を持っていたと思われる。前代の作品を挙げれば、蕭鈞、何遜、蕭統、庾肩吾、張正見、江総らが、何らかの形で「竹林七賢」のこの属性に触

れている。

「賜酒を蒙る」

金膏という仙薬は神山から下り、

玉のしずくは蓬莱島にある。

仙人のような人物にたまたま出会って酒を飲み、

私はそれを二三杯わけてもらった。

ふと桑の葉が散る音が聞こえなような、

ちようど菊の花が開くときのような素晴らしい酒だ。

阮籍は衣服を広げながら進み出で、

王戎は笑みを含みながらやって来た。

これからは仙薬を手に入れるのに、

瑤台まで行かなくてもよさそうだ（こんな素晴らしい酒を下さる人がいるのだから）。二

この詩は、ある人に酒を頂き、そのお礼として詠われた詩である。頂いた「酒」を「仙薬」に喩え、その素晴らしさを讃えている。ここでは、阮籍と王戎が引かれており、踏まえられているのは、次のような阮籍と王戎の交友を示す故事だろう。

王戎がまだ弱冠の頃、阮籍のところへやって来た、そのとき劉公榮もその場にいた。阮籍は王戎に言った。「ちようど二斗のうまい酒があるから、一緒に飲もう。……三

この故事では、阮籍の韜晦としての酒というイメージは読み取れない。このように、王戎とともに飲酒を楽しんだという故事を引くことで、「風流を好む」という属性を強調しているのだろう。次は、王戎が言及されたものである。「對酒歌」の部分のみ挙げる。

山簡は帽子を逆さまにかぶり、

王戎は如意を持って舞っている。

箏の音は金谷園に鳴り、

笛の音は平陽の集落に響く。四

この詩は、酒を前にしてその楽しみを述べたものである。挙げた部分は、酒にまつわる人物や酒宴の様子を詠っている。ここで王戎は、山濤の息子であり、酒飲みとして有名な山簡^五と共に挙げられ、続く句では、石崇の別荘のあった金谷園^六、馬融の「長笛賦」^七が引かれている。ここでも、酒とともに風流といった属性が挙げられている。

次も、王戎が引かれている。「王司空に酒を餉らるるに答ふ」の部分のみを挙げる。

まだ畢卓が酔いつぶれるほどの酔いではないが、

それでも王戎を舞わせるには十分だ。

仙人の甘露も、

あきらかに杯中のこの酒には及ばない。八

この詩は、酒を贈られた返礼の詩である。詩題の王司空とは王褒を指すと思われる。ここで、王戎は畢卓^九とともに引かれている。王戎の舞いに関しては、『世説新語』任誕篇に次のような故事がある。

王長史（濛）、謝仁祖（尚）はともに王公（導）の掾となった。王長史は言った。「謝さんは珍しい舞いができます。」謝はすぐ立ち上がって舞った。その様子は非常にのびのびとしたものだった。王公はじつと見ていたが、客に向かって言った。「王戎を思わせるものがある。」一〇。

これに関して、王戎が酒を飲んで舞うことがあったのか、配下となつてすぐにお客のいる場にて舞ったことが王戎の放達に似ているという意味なのか、判断がつかない。しかし、矢嶋美都子氏がこの句について「王戎が酔って舞う風雅な気分になった」一一と解釈されているのに従えば、お礼を述べた詩というコンテキストに王戎を並べた以上、「王戎が舞うくらい、十分に酔っている」という意味であり、そのような良い酒を贈ってくれたことを感謝するという方向で解釈するべきだろう。つまり、王戎の「風流」という属性を挙げているのだろう。また、王戎が詩の送り先である王褒の祖先であることも、王戎を用いた大きな要因だろう。

山濤を引いて、「風流」という属性を詠ったものもある。「詠畫屏風二十五首」其の一の前半部分を挙げる。

浮橋には富貴な人々の鳥の羽根で飾った車があふれており、夜が明けて雍門が開かれる。

石崇は客の到着を迎え、

山濤は妓女を載せてやって来る。一三

この詩は、詩題から屏風に描かれた絵を題材としたものと考えられる。「其の一」のもとになった絵は、長安郊外にあった城門「雍門」の往来を描いてあったのだろう。ここでは、山濤が石崇とともに引かれている。石崇は先に「對酒歌」で見たように、別荘「金谷園」を有し、西晋における富貴な人物として知られる。山濤が「妓女を載せてやって来る」という句のもとになった故事は、知られないが、石崇とともに引かれていることから、「風流」といった属性で引かれているのだろう。

次の「暮秋の野興、賦して傾壺酒を得たり」では、「竹林の游」が否定されている。

劉伶がちょうど酒を手に取り、

嵇康は琴を弾こうとしている（ような楽しい宴だ）。

（彼らも）ただ秋菊に巡り合えば、

竹林に出かけるまでもなかつただろうに。一三

この詩は、劉伶と嵇康を引いて、自身の参加する宴の素晴らしさを喩えている。ここでは、「竹林」よりも「秋菊」を価値あるものとし、秋菊に比べれば、竹林にはわざわざ行く必要はないと言う。しかし、もちろん、嵇康ら「竹林七賢」が竹林に赴いたのは、竹林を眺めるためだけではない。彼らは世を避けるために竹林に入ったのであるから、諧謔を込めて言及し、自身の参加する宴の価値を高めるために引いているのだろう。しかし、このような対象を貶めることによって自己の価値の上昇を図るには、貶められる対象自体の価値が高くないと成り立たない。よって、言及される劉伶、嵇康だけではなく、「竹林七賢」は、庾信の中で風流な人物として、一定の価値を有していると考えられる。

以上、「風流」という属性に関するものを見てきたが、ここで「超俗性」という属性に目を向けてみたい。「趙王の隠士に和し奉る」の部分のみを挙げる。

阮籍はただ長く嘯き、

嵇康は一絃だけの琴を誦っている。一四

この詩は、詩題が示すように北周の趙王・宇文充の「隱士」に和したものである（宇文充の詩は、現在見ることができない）。詩全体の流れとしては、古来の隱士を挙げ、その暮らしぶり、暮らす土地を述べ、後世に名が伝えられることを詠う。挙げた部分は、阮籍、嵇康を引き、隱士に出会った二人の様子を述べる。

阮籍を引く句は、「阮籍伝」の次の部分を踏まえており、

阮籍はかつて蘇門山で孫登に出会い、太古からこれまでの歴史及び栖神導氣の術について論じたが、孫登はすべて答えなかつたので、阮籍は長嘯して去った。山の中腹まで来ると、鸞鳳の鳴き声のような音が、険しい谷に響くのを聞いたが、それは孫登の嘯いたものだった。一五

嵇康を引く句は、『太平広記』に引く『神仙伝』の次の記述を踏まえている。

嵇康は琴を弾くのが上手かった。そこで孫登は一絃の琴を弾き、それで音曲を成したので、嵇康は嘆息して諦めた。一六

この故事では、阮籍、嵇康が隱者に讃嘆したことを述べて、隱者の価値を高めている。そして、この故事を踏まえ、俗世を超越していたとされる有名な人物として阮籍、嵇康を引き合いに出し、隱者の「超俗性」をより高めている。

「超俗性」や「隱者」を主題に「竹林七賢」に言及するものは、以上の一首だけだが、庾信が「酒」に言及した際、多く「仙性」にも触れている。この「仙性」が「超俗性」と近いものと考えれば、庾信は、「酒」を詠う詩において「仙性」を盛り込むことで、顔延之や庾肩吾が「竹林七賢」に、「超俗性」という属性を直接的に示したのと違う方向で表現していると考えられる。想像をたくましくすれば、「竹林七賢」の属性として、「風流」／「超俗性」という対立において、どちらか一方を選択するのではなく、どちらの属性をも含める表現を目指したのではないだろうか。

しかし、この「趙王の隱士に和し奉る」は、詩を作る以前に、主題が「隱士」と決まっていたものであるため、純粹に「竹林七賢」の「超俗性」という属性を詠ったのだろう。

これまで見てきたように、「竹林七賢」に与えられた「風流」という属性は、庾信以前の詩人から詠われている属性であり、複数名の詩人が何らかの形でこの属性に言及していることを考えれば、「竹林七賢」の一般的な属性と考えられる。つまり、「竹林七賢」もしくはそのうちの誰かに言及するということは、「風流」という属性を補助線として、その作品が解釈されるということである。

第二節 嵇康の「処刑」にまつわる属性

「竹林七賢」のうち、処刑されたのは、嵇康だけであるが、先に見たように、謝靈運、范曄、苻朗、王融は、嵇康の処刑のときの様子や、その時弾かれた「広陵散」に言及していた。ここでは、「竹林七賢」そのものの属性とは言い難いが、その一員である嵇康の「処刑」にまつわる属性に言及したのを見ていく。

まずは、「広陵散」に言及したものである。「夜衣を搗つを聴く」の部分のみ挙げる。

杵の音は「広陵散」のように小刻みで、

「漁陽摻搗」のように急である。

新月の光は水面に揺れ、

秋雲は乱れながら過ぎていく。

いったい誰が辺地を守る兵士のことを憐れむだろうか、

今夜あの人は遙か彼方の交河の地にいる。一八

この詩は、辺境の地へ守備に赴いた夫のことを思いながら、衣を搗く女性を詠っている。ここでは、「漁陽摻搗」一九とともに「広陵散」が引かれ、悲壮な雰囲気を作り出している。辺境の地の守備は、必ずしも生きて帰れるものではなく、このような生死の別れとも言える状況を「広陵散」によって表現し、悲壮といった属性を挙げているのだろう。

次は、向秀の「思旧賦」を引いているものである。「王司徒褒を傷む」の部分のみを挙げる。

ただ山陽の笛の音が聞いただけで、

向秀の思旧の篇が私の心を悲しませる。二〇

この詩は、庾信と並んでその文才を称賛された王褒を傷んだ詩である。この末尾の部分において、庾信は、「山陽の笛」、「思旧の篇」という向秀の「思旧賦」に関わる語句を引いている。「思旧賦」の該当箇所は、まず、序の次の部分であり、

隣人に笛を吹く者がいて、その音色は透き通って遠くまで聞こえる。昔共に遊んだ付き合いに思いを馳せ、その笛の音色に心を動かされ悲嘆にくれる。二一

また、本文の次の部分である。

黄河を渡って舟を浮かべ、山陽の旧居を通り過ぎた。二二

向秀は、その序で述べるように、嵇康、吕安との交遊二三を思い、「思旧賦」を著した。これを踏まえて、庾信は、共に北地で過ごした王褒を思い、その王褒を傷む詩で、向秀の「思旧賦」を引いていると考えられる。ここでは、彼らのかつての交遊とその交遊の楽しさ、親密さの故に強調される悲しみ、また、友に先立たれる孤独といった属性が挙げられている。

次も同様に「思旧賦」を引いている。

「徐陵に寄す」

我が友よ、もし私のことを思ってくれるなら、

私が生きているこの時に思ってほしい。

(あの「思旧賦」にあるように) 山陽の道で、

空しく笛の音を聞いて悲しむのを待たないで。二四

この詩は、徐陵に送った詩である。先に見た「王司徒褒を傷む」と同様、向秀「思旧賦」を引いている。「王司徒褒を傷む」と異なるのは、友の死を悲しむ主体が庾信ではなく、詩を送られる徐陵であるという点である。向秀が嵇康、吕安を悲しんだように、自身の死後に悲しむのではなく、今思ってくれという願いである。ここでも、前詩と同様、かつての交遊や別離の悲しみと言った属性が挙げられているが、悲しむ主体が異なるので、取り残された孤独といった属性は読み取れない。

以上の例では、嵇康が処刑に臨んで弾いた「広陵散」、そして、嵇康、呂安との交友を懐かしんで作られた向秀の「思旧賦」を引くことで、友との友情や、その死を悲しむといったことが詠われている二五。

第三節 「途窮」

顔延之は「五君詠」にて、阮籍の苦境を「途窮」と表現した。この「途窮」が杜甫によって自身の政治的苦境を表現する際に多用されたことは、良く知られたことである。ここでは、庾信が阮籍を含めた「竹林七賢」を引くことによつて、どのように自身の苦境を吐露しているのかを見ていきたい。

まずは、阮籍、嵇康を引いたものとして、よく知られる「擬詠懷二十七首」其の一を挙げる。

阮籍のように酒に酔うこともできず、

嵇康のように琴を弾くこともできない。

生氣がなく世俗に染まらない意気も失い、

頭がはつきりせず世俗の功利に迷わされている。

水溜りで苦しむ鮒が水のことばかりを考えるように苦しみ、

驚き飛び立つ鳥がいつも棲みかを失うように放浪している。

風雲が色を変えるように時勢は変わり、

松や竹に譬えられる忠節の士を任じる私も今は悲しく吟じている。

もともと思い通りになることが少なかった私だが、

どうしてはるか遼東の長岑まで行かなければならないのか。二六

この詩は、阮籍の「詠懷詩」に擬したものとして知られている。世俗から距離を取ろうという気持ちも失い、現状に苦しみ、滅亡した祖国を悲しむだけで、そんな自分がどうして異国のために働かなければならないのかと詠う。ここで阮籍、嵇康の二人が引かれるのは、同じような状況にありながらも、自身とは異なり、酒を飲み、琴を弾き、権力機構に貢献することがなかった二人を挙げ、その二人の酒、琴を引き合いに出すことで、阮籍、嵇康のように生きたいがそれもできないということを強調していると思われる。つまり、阮籍、嵇康は、苦境に立たされながらも、節を守った人物として描かれている。

「擬詠懷二十七首」其の四では、顔延之が「五君詠」にて阮籍を詠った語「途窮」を、語順を入れ替えて（「窮途」）用いている。末尾の部分のみを挙げる。

あの「途が窮まって慟哭した」という阮籍を思えば、
私の行く路も行き詰まっていることを思い知らされる。二七

この詩も前詩と同様、現状に苦しんでいることが詠われる。そして、その苦境に立つ自身を述べるのに用いられるのが、阮籍の「途窮の哭」二八であり、それを詠った顔延之の「途窮」という語である。
次の詩も同様に苦境を阮籍、嵇康を引いて詠っている。「永豊殿下の言志詩に和し奉る十首」其の九の部分を挙げる。

(しかし) 阮籍のようにいつまでも酒に浸ることを思い、
嵇康のように怠惰によって仕事をやる気がない(という心境です)。二九

この詩は、詩題が示すように永豊県侯であった蕭撫の「言志詩」に和したものである(蕭撫の「言志詩」はすでに逸し、見ることができない)。内容は、仕えていた梁朝の滅亡によって頼るものを失い、何物にも頼らずに生きることもできず、隠遁することもできず、阮籍や嵇康のように権力からの逃避を思っているということと思われる。

次は、亡国の情は詠われないが、苦境は表現されている。

「酒鵝を賜はるに答へ奉る」

雲間から射し込む光がとりわけ眩しく、

風の音は私の心を閉ざさせるばかり。

凍えた猿は雪をかぶって鳴き、

凍えた魚は氷を抱いて沈んでいる。

このような朝に送られた一壺の酒、

これは実に千金にも勝る送り物だ。

恩を掛けていただきながらお礼のしようもなく、

(竹林七賢のように) 竹林に向かい酒を楽しむことしかできない。三〇

この詩は、酒(と鵝)を頂いたことへのお礼を詠っている。前半で、酒を頂いた時であろう冬の厳しさ

を述べ、後半にて、その厳しさと対比で酒のありがたさを述べ、さらに、感慨を述べている。末尾にて、「竹林七賢」が触れられている。酒を贈ってくれた人物は詳らかにされないが、酒に絡めて（そのお礼として）、「竹林七賢」が世を避け、竹林に向かったことに触れることで、自身の苦境を表現しているのだから。

直接的に苦境が表現されてはいないが、苦境を読み取れるものもある。

「喜び有りて酔ひを致す」

庶子の息子が文才を継いだ枚乗のように息子の誕生がうれしく、

陸賈のように子沢山になるかもしれないと喜ぶ。

日ごとに客をもてなすために嵇康のように琴を弾き、

連日阮籍のように酒を飲む。三一

この詩は、北地にて娶った妻との間に子が生まれたことを喜んで詠んだものである。枚乗、陸賈とともに嵇康、阮籍が引かれている。枚乗、陸賈は、子供に関する故事によって引かれており、嵇康、阮籍は、琴と酒に関する故事によって引かれている。この四句は、すべて庾信の喜びを表している。しかし、実際の嵇康の琴、阮籍の酒は、庾信の場合とは違って、喜びの発露ではない。それぞれ琴、酒への偏愛はあったとされるが、一般的に「嵇康の琴」と言えば、その性質ゆえに権力に寄り添って生きることのできない嵇康の孤独を表し、「阮籍の酒」と言えば、権力と距離をとるための手段としての韜晦を示す。つまり、庾信は、そのような一般的な意味で嵇康、阮籍を引いているのではないと思われる。

この二つの語句には、どのような意味が込められているのか。

この詩は、庾信が北地へ赴き、祖国へ帰れないという状況にて詠われたものである。この状況を、嵇康、阮籍の生きた魏晋に当てはめれば、嵇康や阮籍が思うように生きられない状況にあって、自身の救い、あるいは生きる手段として見出した「琴」、「酒」は、庾信にとっては異民族が支配する北地にあって、祖国に帰ることのできない自分に訪れた喜びとしての「息子の誕生」と同種のものと考えられる。

「息子の誕生」と同様、苦境での自身を慰めるものという意味で、阮籍と嵇康の「琴」に言及するものが他にもある。

「淮南公の琴を聴きて弦の断ゆるを聞くに和す」

阮籍は明月を眺めて琴を弾き、

嵇康は行雲に向かつて琴を弾いた。

弦が切れ一絃になってしまいただ一つの韻しか出せなくても、

司馬相如のように卓文君の心を動かすことができるのだ。三二

この詩は、詩題にて言うように、淮南公の詩に和した詩である。琴に関する内容ということで、阮籍、嵇康ともに琴に関する内容が引かれている。阮籍に関しては、「詠懷詩」の、

夜中眠ることができず、

起き上がって琴を弾いた。

薄い帳に月の光が降り注ぎ、

清らかな風が私の襟元を吹いていく。三三

を念頭においていると思われる。

嵇康に関しては、「嵇康伝」に「常に養生服食のことを修め、琴を弾き詩を詠じて、自身の思いを満たしていた」^{三四}とあるように、琴を好んでいたとされる。「行雲に向かつて琴を弾いた」という句が直接踏まえる故事は見られない。

また、続く三句目は、先に「趙王の隠士に和し奉る」のところで挙げた『太平広記』に引く『神仙伝』の内容を踏まえていると思われる。

これらの内容を踏まえていることを考慮すれば、この詩は、次のように読める。琴を好んだ阮籍、嵇康は、「明月」あるいは「行雲」に向かつて琴を弾いた。彼らのように思いを込めて琴を弾けば、たとえ一絃しかない琴の音色であっても、司馬相如が卓文君の心を動かしたように、人の心を動かすことができるのだ、ということだろう。

ここで描かれる阮籍、嵇康は、琴を好んだという属性を付与され、また、「明月」、「行雲」に向かつて弾くことから、誰に聞かせることもなく、遣る瀬無い心の内を琴に託した、志を果たせぬ人物という属性も加えられている。

以上、「途窮」という属性を詠った詩を見てきたが、そこで引かれるのは、阮籍、嵇康の二人であり、「竹林七賢」の他の人物は名前を挙げて引かれることはない。「竹林七賢」の他の人物の事跡を考えれば、至極当然だと思われるが、庾信が自身の上手くないかかない思いを表現するのに「竹林七賢」の阮籍、嵇康を引い

ていることは、確認できる。

第四節 典故としての「竹林七賢」

第一章及び本章にて、庾信以前の詩人の作品に詠われた「竹林七賢」と庾信の作品に詠われた「竹林七賢」を見てきた。ここで、庾信と庾信以前の詩人との差異をまとめたい。

まず、言及の量に関して。あくまでも現在見ることができ作品が全てではない、という限定は付されるが、「竹林七賢」を引いた例が、前代に詩人に比べて、庾信の作品に多く見られることが見出せる。

次に、言及の質に関して。確かに、「竹林七賢」個々の人物像を詳細に詠ったという点では、顔延之やそれを模擬した蕭統が重視されるだろう。しかし、彼らの作品は詠史詩であり、始めから人物、事跡を詠うことが念頭に置かれている。このような前提を考慮すれば、庾信が、自身の感慨を述べるような作品で、「竹林七賢」を引くということを行ったことは、注目するに足るだろう。そして、これは量が大きな要因ともなるが、様々なコンテキストで、「竹林七賢」に言及し、同一の属性についても、多様な表現を用いて示している。

詠われた属性に関して。第一節で示した「風流」という属性で詠われるものでは、蕭鈞、何遜、蕭統、庾肩吾、張正見、江総といった少なくない数の詩人が、「竹林七賢」の「風流」という属性を詠っている。これは、庾信の時代に至るまでに、「竹林七賢」||「風流」という認識が共有されていたということを示しており、庾信もその流れに乗って、「竹林七賢」||「風流」という図式で詠っている。また、第一節の末尾で挙げた「超俗性」という属性は、顔延之らによって詠われてはいるが、「仙性（超俗性）」を、酒を詠う詩に盛り込み、「風流」/「超俗性」という対立の統一を図っていることが読み取れる。

第二節で示した嵇康の「処刑」にまつわる属性は、「臨終詩」という自身の死が近いことを悟り作られたものに先例が見られる。「臨終詩」を作った苻朗、謝靈運^{三五}、范曄らは実際に処刑された人物であり、処刑にまつわるエピソードのあった嵇康に思いを寄せることは考えやすいことである^{三六}。そして、庾信は、嵇康の「処刑」とそれにまつわる属性を、向秀との交遊を絡め、自身と友との友情を含ませることによって、「処刑」から「友情」へと変化させている。

第一、二節で示した二つの属性について、庾信は、直接的な関連は見出せないが、前代の詩人の作品を受け継いでいるように見える。これは、この二つの属性が庾信に至るまでの時代の共通の認識であったというを示していると考えられる。そして、庾信はそれに変化、発展を加えていると見ることができ。

第三節で示した「途窮」という属性は、この語自体が、顔延之「五君詠」で阮籍を詠うのに用いられた

ものである。筆者の操作によって、庾信が阮籍や嵇康に言及しつつ、上手くいかない、行き詰った、という思いを詠ったものを、この語でまとめたが、実際、先に見たように、庾信も「擬詠懷二十七首」其の四にて引いている。顔延之以後、庾信に至るまで、このような属性で、「竹林七賢」を引いて詠った作品は見ることができないので、庾信は顔延之を先例として考えていたということが推測される。そして、詩において、自身の苦境を典故として阮籍、嵇康を用いるということは、庾信において初めて行われたと考えられる。それにより、この阮籍、嵇康を用いて得られたイメージは、少なからず庾信のイメージを形作る一つの要素となっているだろう。

これまでのそれぞれの場合について検討した結果を比較し、庾信を含めた六朝期の「竹林七賢」に言及した詩に特徴的なものを挙げれば、王戎への言及が挙げられる。王戎について、顔延之は高位に昇ったという事で、山濤とともに除外し、その顔延之の操作に反応した蕭統の詩においても、高い評価は与えられていない三七。第二章で見たように、庾信においては、王戎は「風流」という属性において言及される。第二節で触れた庾信の友人、王褒は王戎と同様、瑯琊の王氏の出身であり、当時一級の貴族である。王戎を引いて、「風流」という概念を詠うことは、庾信にとっては自然なことであったのだろう。むしろ、その「風流」という属性に関する言及のみを取り出せば、「竹林七賢」の内、「風流」という属性で詠うのに一番ふさわしかったのは王戎だったのかもしれない。

おわりに

典故は、作品に奥行きを持たせる。詩人が見、感じたことを類似する物事で比喩的に表現するだけではなく、引かれた物事、人物の事跡、それらを取り巻く環境などを自身の作品の背後に含ませることで、作品に、詩人の見、感じたことだけではない、用いられた典故の持つ背景までをも含ませることができ。本章で見えてきたように、庾信は、「竹林七賢」もしくはその個々の人物や事跡をその詩で多く言及し、多様な表現で詠った。庾信は、典故を多用した詩人であるので、このような例は、庾信の典故使用における一つの側面でしかないかもしれないが、「竹林七賢」を詠うという観点から見れば、非常に大きな意味を持つだろう。

現在見ることでできるものに限るという限定が付くが、庾信以前に庾信と同等もしくはそれ以上に「竹林七賢」に言及した人物はいない。また、量の多さは質の多様性に繋がる。これらの点を、詩に現れた「竹林七賢」という系譜の中で考えれば、「竹林七賢」を典故として確立させたのは、庾信であると考えられる。特に、「途窮」という語を自身の生きにくさや苦しい境遇の典故として用いるのは、庾信に始まると言える

だろう。後に見るように、この「途窮」は杜甫にとつて重要な語となる。杜甫が庾信を好んだことを思えば、杜甫は顔延之「五君詠」を直接受容したのではなく、庾信を通して受容したとも考えられるが、残念ながら小論では、この点を論証する余裕はない。今後の課題としたい。

- 一 引用には庾信撰、倪璠注、許逸民校點『庾子山集注』、北京、中華書局、一九八五年五月、第一版北京第二次印刷を使用する。以下『集注』と略す。なお、中国語文は拙訳により、注に原文を示す。
- 二 原文「金膏下帝台，玉歷在蓬萊。仙人一遇飲，分得兩三杯。忽聞桑葉落，正值菊花開。阮籍披衣進，王戎含笑來。從今覓仙藥，不假向瑤台。」（前掲『集注』、二八六頁）。
- 三 原文「王戎弱冠詣阮籍，時劉公榮在坐。阮謂王曰，偶有二斗美酒，當與君共飲。……」（劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』（以下『世說』）上海古籍出版社、二〇〇二年一月、第一版第一次印刷、六三九頁）
- 四 原文「山簡接羅倒，王戎如意舞。箏鳴金谷園，笛韻平陽塢。」（前掲『集注』、三八七頁）。
- 五 「山簡傳」に「時時能騎馬，倒著白接羅。」（房玄齡等撰『晉書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版北京第二次印刷、一二三〇頁）とある。
- 六 「石崇傳」に「崇有別館在河陽之金谷」（前掲『晉書』、一〇〇六頁）とある。
- 七 馬融「長笛賦」序に「獨卧鄆平陽鄆中。有雒客舍逆旅。吹笛為氣出精列相和。」（李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版成都第二次印刷、二四九頁）とある。
- 八 原文「未能扶畢卓，猶足舞王戎。仙人一捧露，判不及杯中。」（前掲『集注』、三四七頁）。
- 九 「畢卓傳」に「卓嘗謂人曰：『得酒滿數百斛船，四時甘味置兩頭，右手持酒杯，左手持蟹螯，拍浮酒船中，便足了一生矣。』」（前掲『晉書』、一三八九頁）とある。
- 一〇 原文「王長史，謝仁祖同為王公掾。長史云：『謝掾能作異舞。謝便起舞，神意甚暇。王公熟視謂客曰：『使人思安豐！』』（前掲『世說』、六二五頁）。
- 一一 矢嶋美都子「庾信の『蒙賜酒』等について」（『日本中国学会報』第三十四集、一九八二年）、一〇四〜一〇五頁。
- 一二 原文「浮橋翠蓋擁，平旦雍門開。石崇迎客至，山濤載妓來。」（前掲『集注』、三五三頁）。
- 一三 原文「劉伶正捉酒，中散欲彈琴。但使逢秋菊，何須就竹林。」（前掲『集注』、三七五頁）。
- 一四 原文「阮籍唯長嘯，嵇康訝一弦。」（前掲『集注』、二二七頁）。
- 一五 原文「籍嘗於蘇門山遇孫登，與商略終古及栖神導氣之術，登皆不應，籍因長嘯而退。至半嶺，聞有聲若鸞鳳之音，響乎巖谷，乃登之嘯也。」（前掲『晉書』、一三六二頁）。

一六 原文「叔夜善彈琴。於是登彈一絃之琴。以成音曲。叔夜乃歎息絕思也。」（李昉等編『太平廣記』、中華書局、二〇〇三年六月、新一版北京第七刷、六三〇―六四頁）。

一七 矢嶋氏は、庾信の酒を賜る詩における「顕著な特徴として、賜った酒を仙酒、仙人から贈られた酒、と喩える手法が使われている」（矢嶋氏前掲論文、九九頁）と指摘されている。

一八 原文「聲煩廣陵散，杵急漁陽摻。新月動金波，秋雲汜濫過。誰憐征戍客，今夜在交河。」（前掲『集注』、二六三頁）。

一九 『世説新語』「言語篇」に「禰衡被魏武謫爲鼓吏。正月半試鼓，衡揚枹爲『漁陽摻槌』」（前掲『世説』、五三頁）とある。

二〇 原文「唯有山陽笛，淒余思舊篇。」（前掲『集注』、三〇八頁）。

二一 原文「鄰人有吹笛者。發聲寥亮。追思曩昔遊宴之好。感音而歎。」（前掲『文選』、二二九頁）。

二二 原文「濟黃河以汎舟兮。經山陽之舊居。」（前掲『文選』、二二九頁）。

二三 「思旧賦」の序に「余與嵇康呂安居止接近」（前掲『文選』、二二九頁）とある。

二四 原文「故人倘思我，及此平生時。莫待山陽路，空聞吹笛悲。」（前掲『集注』、三六七頁）。

二五 また、嵇康と王戎に言及したものととして「樂儀同の苦熱に和す」の「臨淄迎子禮，中散就安豐。」がある。これは、どのような故事に基づくのかわからないが、詩題と「臨淄迎子禮」（曹植が邯鄲淳を迎えたのが暑い日であったという故事を踏まえる）の句から考えて、暑い日の故事に基づいていると思われる。その示す意味は、良くわからない。

二六 原文「歩兵未飲酒，中散未彈琴。索索無真氣，昏昏有俗心。涸鮒常思水，驚飛每失林。風雲能變色，松竹且悲吟。由來不得意，何必往長岑。」（前掲『集注』、二二九頁）。

二七 原文「唯彼窮途慟，知余行路難。」（前掲『集注』、二二九頁）。

二八 「阮籍伝」に「時率意獨駕，不由徑路，車迹所窮，輒慟哭而反。」（前掲『晋書』、一三六一頁）とある。

二九 原文「阮籍長思酒，嵇康懶著書。」（前掲『集注』、三三七頁）。

三〇 原文「雲光偏亂眼，風聲特噤心。冷猿披雪嘯，寒魚抱凍沉。今朝一壺酒，實是勝千金。負恩無以謝，惟知就竹林。」（前掲『集注』、三四三頁）。

三一 原文「既喜枚都尉，能歡陵大夫。頻朝中散客，連日步兵廚。」（前掲『集注』、二八八頁）。

三二 原文「嗣宗看月夜，中散對行雲。一弦雖獨韻，猶足動文君。」（前掲『集注』、三七八頁）。

三三 原文「夜中不能寐，起坐彈鳴琴。薄帷鑑明月，清風吹我襟。」（陳伯君校注『阮籍集校注』、中華書局、二〇〇四年六月、第一版北京第二次印刷、二一〇頁）。

三四 原文「常修養性服食之事，彈琴詠詩，自足於懷」（前掲『晋書』、一三六九頁）とある。

三五 謝靈運の「臨終詩」は、嵇康に言及してはいないが、「臨終詩」を作ったという範疇でひとまず括る。

三六 後藤秋正氏は「六朝期の『臨終詩』」において、これらの人物が、「初期には老荘思想、とりわけ嵇康の強烈な個性を強く意識し」（後藤秋正『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八年一〇月、第一版第一刷、二七頁）ていたことを指摘している。

三七 蕭統は太子であったので、他の詩人ほど王氏一族に対する遠慮を持つ必要がなかったからだと思われる。

第三章 李白

はじめに

杜甫と並び称される李白（七〇二―七六二）は、酒を好んだとされ、「竹林七賢」と少なからず共通する属性を有していると思われる。そのような詩人の詩に、前代の俊賢である「竹林七賢」は、どのように語られるのか。

本章では、「竹林七賢」が後世の文人の詩にどのようなように現れ、どのような属性で語られるのかを、次章で扱う杜甫とともに、盛唐という時期を代表する詩人として李白の詩を見ていく。

李白の詩は、その多くが失われているとされており、現在見ることのできる作品のみで、李白の「竹林七賢」観を読み解くのは、実際とは異なる可能性がある。（しかし、李白の記した全ての作品を見ることは、今はもうできない。よって、限定付きの考察となる）。

李白の「竹林七賢」に対する言及の数は、以下の通りである。「竹林七賢」三、阮籍六、阮咸七、嵇康九、山濤二、王戎一、向秀一（全て並称を含める）。劉伶については、言及を見つけないことはできなかった。

本章の構成は、第一節にて「竹林七賢」全体に言及していると思われるものを扱う。そして、第二節にて李白の「竹林七賢」理解に見られる認識の枠組みとして、顔延之が「竹林七賢」を詠った「五君詠」という認識の枠組みを確認したい。その上で、第三節にて、「五君詠」という認識の枠組みを越えた理解と考えられる阮籍、阮咸への言及を見ていく。

第一節 「竹林七賢」

ここでは、李白の「竹林七賢」観として、李白が「竹林七賢」に「風流を好んだ」という属性を見ていたと思われるものを見ていく。

まず、「魯郡堯祠にて寶明府薄華の西京に還るを送る」である。部分のみ挙げる。

山簡は高陽池にて盛んに酒を飲んだと言うがそれは些細なこと、
彼の酩酊なぞ私に比べられない。

竹林の七子は今はもうどこかへ去ってしまい、
蘭亭の雄筆など誇るに足るものだろうか。二

この詩は、魯郡の堯を祀った祠にて行われた友人の送別の宴を描いたものである。挙げた部分では三者が否定されている。まず、山濤の息子である山簡。山簡はその酔いっぷりが多く言及されるが、ここでは「大したことではない」との評価が下される。そして次に、「竹林の七子」と王羲之らの「蘭亭の集い」が否定される。これは、過去の有名な集いを挙げ、否定して見せることで、この送別の宴の素晴らしさを述べていると思われる。このような否定による称賛は、否定されるものの価値が高くなければ成り立たない。よって、ここで否定されている「竹林の游」と「蘭亭の集い」は、李白によって、一定の評価がなされていると考えられる。特に評価に値するのは、「風流を好んだ」という属性だろう。次の「従叔當塗の宰陽冰に獻ず」でも「竹林の游」を描いていると思われる。部分のみ挙げる。

（李陽冰は）顧みて青雲の器を持ちながらも發揮できなかった自分を恥じ、誤って玉樽を傾け飲酒に耽ってしまった。

山陽（にて「竹林七賢」が遊んで）から五百年が経過したが、

（李陽冰の飲酒の集いは）当時のようにまた緑竹が栄えるようだ。三

この詩は、詩題に言う通り、族叔の李陽冰に献じたものであり、全編にわたって李陽冰を称賛している。挙げた部分では、李陽冰が才能を有しながらも政治的な成功を果たせず、飲酒に耽ったことが描かれている。ここで言われる「青雲の器」とは、後に阮咸のところでも詳しく見るように、顔延之「五君詠」に見える語であり、直接的には才能を有していることを示していると考えられる。

また、ここで触れられる「山陽」は、嵇康の寓居があったとされる地であり、「竹林の游」もここで行われたとされている。李白が「山陽」を引き、延いては「竹林の游」を李陽冰の飲酒に喩えるのは、才能を有する人物が、世に容れられないことによる韜晦を表し、李陽冰を弁護するためと思われる。同時に、「風流を好む」という属性も付け加えられている。これを裏返せば、「竹林七賢」の飲酒も、ただ酒に耽ったのではなく、世に容れられない思いを晴らすためのものであったという認識が見られる。

そして、「五君詠」と「山陽」という語の連続から、族叔である李陽冰を阮咸に比し、李白を含めた李一族を、阮籍、阮咸ら阮一族に擬えていると考えられる。この点に関しては第三節にて詳しく触れるため、ここでは、「風流を好む」という属性の指摘に留める。

以上、「竹林七賢」に「風流を好んだ」という属性を見ている代表的なものを二つ挙げた^四。その中から、「竹林七賢」に対する李白の認識を読み取れば、風流を好んだという属性の評価であり、また、

その表現は、自身の参加する酒宴を「竹林の游」に擬えて表現されているということである。このように、李白が「竹林七賢」に言及するとき、そこから読み取れるのは、風流を好んだという属性である。この属性は、六朝期にも「竹林七賢」の属性として認められるものである。しかし、それだけが李白の「竹林七賢」に対する認識なのだろうか。以下、節を改めて李白の「竹林七賢」への認識をさらに細かく見ていく。

第二節 「五君詠」という認識の枠組み

「竹林七賢」の七人に個別に言及するとき、詠われる属性はどのように変化するのだろうか。以下の節では、個別に言及しているものを挙げ、それぞれの語られる属性について見ていく。特に注視したいのは、李白が「五君詠」という認識の枠組みの中で、「竹林七賢」を理解しているということについてである。

1 「山濤・王戎から「五君詠」へ

まずは、言及が二例見られた山濤である。「楊少府の選に赴くを送る」では、山濤の人物を見抜く力に関する言及が見られる。

正しい政治が行なわれる世では全てのものが受け入れられるように、
時が来れば招き求められるのだ。

ごらん、あの吏部尚書だった山濤を、

(山濤のような人物がいれば)当然才能のある人物が隠遁することはないだろう。五

この詩は、楊某が少府として県令に従い、その功績による榮進のため都に帰るのを送った詩である。山濤が引かれるのは詩の末尾の部分である。ここでは「山吏部」として、山濤の吏部尚書としての有能さを詠っている。

この詩に即して言えば、今、山濤のような人物が上層部にいることによって、楊某の功績が認められた、やっと君の有能さをわかる人物が現れたという李白の友人に対する称賛を表すために山濤が引かれていると考えられる。

他にも、山濤の観察眼が描かれているものがある。「趙判官の黔府中丞叔の幕に赴くを送る」の前半部分を挙げる。

私は広い心と高い志を持っており、

(その志を果たそうと) 広く友人と交際してお金が無くなってしまった。

人は私のお金が無くなってしまおうと交際していたことも忘れてしまおう、
まったく笑わせてくれることだ。

私は疲れ髪の毛も半白となり、

意気盛んであったころにはもう戻れない。

昔山濤は石鑑を叱って、

この大事な時に何をしているのだと言った。

謝安は青々としたかざらの生い茂る自然を忘れられず、

会稽の東山に帰って隠棲しようとした。^六

この詩は、友人の趙某がその叔父のところへ行くのを見送った詩である。山濤に触れているのは、七、八句目である。この句は、次の故事を踏まえている。

(山濤が) 石鑑と共に宿に泊まったとき、夜中に起き出して石鑑を蹴って言った。「今がどんな時かわかって寝ているのか。太傅(司馬懿)が病に伏しているのが何を意味しているのかわからないのか」と。石鑑は答えた。「宰相(曹爽)は司馬懿が三度登朝しなかったから、詔書を与えて屋敷に帰らせたのだ、君は何を心配しているのか」と。山濤は、「ああ、君は政変に巻き込まれないように」と言い、伝(割符)を投げ捨てて去って行った。それから二年も経たない内に、政変が起こった。山濤は身を隠して世のことには係わらなかった。^七

この故事は、隠遁について語られている。と同時に、その前提として山濤の先見の明も讃えられている。李白の詩ではこの山濤の故事と謝安の故事^八を引いているが、どちらの故事も、政変や俗世からの逃避として読み取れる。詩の後半部分では、趙某とその叔父を讃えているが、趙某がまた帰ってくることも期待している^九。つまり、旅という今ここからの移動を、あるいは政治的な先見の明による出処進退の結果であったり、趣味嗜好による隠遁であったり、行くも去るも多様な背景がある、ということ

表現したかったのかもしれない。

以上、山濤に関する言及は二例だけであったが、共通する属性として、物事や人物を見抜くその観察眼が挙げられている。また、「竹林七賢」に言及するときとは異なり、風流を好むといった属性は見られない。

次は、王戎である。直接王戎に言及したものではないが、王戎に関連する内容として、「張卿夜南陵に宿し贈らるるに酬ゆ」の部分のみを挙げる。

私は客星が太微を動かす一〇のように讒言に遭い、

一朝にして洛陽殿を去ることとなった。

その後李毅とも言うべき君と出会ったが、

君は漢に七代も仕えた名門の子孫である。一一

この詩は、張卿という人物が南陵に泊まって李白に詩を贈り、そのお返しに贈った詩である。ここでは、次の任昉の詩句を踏まえていると思われる。

王戎は李毅を得たが、

范雲は私のような狂っている人物に出会った。一二

『文選』のこの詩句の注に次のように記されている。

傅暢は讚嘆して言った。王戎、字は濬沖。王戎は選官の際、江夏の李重字茂曾、汝南の李毅字茂彦について、李重は邪念がなく高尚であるとして、李毅は心が広く物事に通じているとして、二人の有様は異なっていたが、共に要職に就かせた。王戎は観察眼によって二人を任用し、それぞれその能力を発揮する場所を得た。一三

この故事では、山濤と同じような王戎の人物を見抜く観察力が描かれている。それを踏まえて任昉は、謙遜して自分を取り立ててくれたことを比べているのだろう。そして、李白も友人である張卿を讃えるため、この王戎の故事を踏まえた任昉の詩句を引いているのだろう。王戎は、『晋書』にて、「王戎は職

にあつてとりわけ優れた能力があつたわけではないが……」^{一四}と言われているが、任昉、傅暢、李白と時代を越えて、この故事に言及していることから、この故事はある程度知られており、王戎の観察力が優れるという属性も知られていたと考えられる。そして、山濤と同様、風流を好むといった属性は読み取れない。

以上、山濤と王戎に言及したものをみてきたが、両者に共通して語られる属性は、人材を見抜く観察眼である。山濤と王戎は、ともに人事を掌握する吏部尚書の官に就いていたという経歴を持つており、官界への推挙を求めて多くの人物に詩を贈った李白からすれば、このような属性が語られるのは当然と思われる。そして、この属性は、有能な官吏としての一般的に理想的な属性の一つである。特に山濤は、その人材抜擢の能力が優れていたとされており、「竹林七賢」の嵇康・阮咸を推挙しようとしたという故事が残っている。

公孫崇・呂安からあなた（引用者注…山濤）が自身の後任に私（引用者注…嵇康）を推薦しようと言われたことを聞きました。^{一五}

山濤は阮咸を典選に推挙し、言った、「阮咸は純真・寡欲であり、深い清濁の道理をわきまえてるので、どのような物もその心を動かすことはできません。もし（このような人物が）官職にあれば、必ず一時に冠絶することでしょう。」^{一六}

嵇康・阮咸のどちらも理由は異なるが、推挙に失敗している。阮咸は、推挙に応じる意思を有していたかどうか確認できないが、武帝にその酒への耽溺によって拒絶されている。嵇康は、「山巨源に與ふる絶交書」にて、自身を推挙するという行為に対して、反発し、絶交を宣言している。その理由として、嵇康が挙げるのが、「七つの我慢できないことと二つの許容されないこと」^{一七}という彼の属性についてである。李白がこのような嵇康の属性に言及しているものがある。「王補闕翼、恵莊廟丞の宋泚の贈別に酬ゆ」の部分のみ挙げる。

私の鳳凰のような翼は断ち切られたが、
君たちは龍のような性質を飼ひ馴らされたりしないでくれ。^{一八}

この詩は補闕の官にあった王翼と恵莊廟丞の官にあった宋泚の二人から送別の詩を送られたのに答えて作られた詩である。詩の内容から、李白が翰林院から追放された頃の作と思われる。挙げた「私の鳳凰のような翼は断ち切られたが」は、翰林院からの追放を示しているのだろう。この二句には典故がある。

鳳凰のような翼が時には傷つこうとも、

龍のような性質は誰にも飼い馴らすことはできない。一九

これは、顔延之が「五君詠」にて嵇康を詠った句である。顔延之は嵇康を評して「鳳凰」「龍」と讃えたが、それを李白は、自身を「鳳凰」に、王翼と宋泚とを「龍」として評している。これは、友人に贈った詩というコンテキストによって、このような表現が採られていると思われる。実際、李白が言いたかったのは、李白を含めた三人が嵇康と同じように、「鳳凰」「龍」のような独立不羈の属性を有しているということだろう。また、そのような属性を持つ友人に対する仲間意識も読み取れる。

顔延之は、「五君詠」において、山濤・王戎を「高位に上った」として詠わなかったとされている。李白は、「高位に上った」からといって詠わないという選択はしておらず、山濤・王戎を共通の属性で詠っている。特に、それぞれの詩のコンテキストを考慮すれば、それは、高官による抜擢を望むという李白の願望の表れとも読み取れる。このような願望の表れには、前提として高官という存在は不可欠であり、その高官に比されるのが、山濤・王戎なのである。ここで、山濤・王戎は構造的に高官の位置に当てられている。

この点とともに、「五君詠」による嵇康評の語を引き、自身とその友人の属性を述べていることを勘案すれば、李白は自身を嵇康（敷衍すれば「五君」）の位置に置き、高官である山濤・王戎の抜擢を願っているということになるだろう。しかし、嵇康は山濤の推挙を断った。李白は、属性という点において、嵇康に自身を比しているが、嵇康という人物に自身を全的に比すことは、自身の願望と異なることになるだろう。それでは、李白は他の作品において、嵇康にどのように言及するのだろうか。項を改めて、呂安、向秀との関係を含めて確認したい。

2 嵇康と向秀、呂安の交遊、そして阮咸

嵇康の友人関係として特に知られるのは、呂安、向秀との交遊である。二人との交遊を引いているも

のがいくつか見られる。まずは、「坊州の王司馬が闇正字と雪に対し贈らるるに酬ゆ」の冒頭部分のみ挙げる。

各地を放浪する私李白は東南の地方から来て、
河南を経て長安にやって来た。

それは無心にふわふわと漂う雲が、
忽ち西北の地方へやって来たようだ。

昔王徽之は雪の夜に戴逵を訪ねて会わずに帰ったが、

私は呂安が思いのままに嵇康を訪ねたように王氏と交遊を結んだ。二一

この詩は、王が闇と雪に対して詠んだ詩を李白に送り、それに対する返礼の詩である。ここに挙げたのは冒頭の六句である。嵇康が言及されるのは、六句目であり、呂安との交遊の故事が引かれている。

嵇康は平素から呂安と友人であった。一たび互いを思うと千里の距離であっても馬車を命じた。二二

呂安は、嵇康の刑死に密接な関係を持つ人物である。この故事では、嵇康と呂安の交遊の親密さが描かれている。この嵇康と呂安との親密さが、王某と李白との親密さの比喻として用いられている。嵇康と呂安との関係では、互に行き合ったとされているが、この詩では、呂安∥李白が嵇康∥王某を訪ねたことが強調されている。堀誠氏がすでに指摘するように二三、次の表現は、より嵇康と呂安との関係性を示していると思われる。

東平の呂安は嵇康の気高さに心服し、一たび嵇康を思うと、千里の距離であっても馬車を命じた。
嵇康は友として呂安と仲良くした。二四

この記載によれば、主に呂安が嵇康を訪ねていたとされている。この記載の「心服し」という表現を合わせ考えれば、呂安が嵇康に敬服し、交遊を求めたと解釈できる。では、李白と王某との関係はどうか。同詩の末尾の部分を見れば、

王さんは人望の厚い人であるから、

私に志を果たせるように翼を貸してくれることでしよう。

鳥にとつての風、魚にとつての水のようなお力添えを頂ければ、

隠者のような魚釣りなんて止めて天下国家を助けたいと考えております。二五

と、援助を求めている。末尾の句から、この援助は官界への推挙を指すと思われる。呂安は嵇康に敬服し、無意識的に嵇康の持つ何かを求めたのだろうが、李白は意識的に援助を求めている。共通するものとしては、呂安、李白ともに、何かを求めていることであり、そのため、ある意味一段低い位置にいると考えられる。このような関係性から、李白は自身を呂安に比し、王を嵇康に比しているのだろう。

また、この故事と対となって五句目に引かれているのが、戴逵に会いたくなり出掛けたが、門より先に進まずに帰ったという王徽之の故事である。

王徽之が会わなかったのは自身の興が尽きたからである。この故事の次に嵇康、呂安の故事を引くことによつて、李白自身は、興が尽きてはいないということを示し、王某に会いたいという気持ちをより強調しようとしていると考えられる。

他にも、呂安、嵇康の故事を用いているものがあるが、次の「岑勛に尋ねられ元丹丘に就きて酒に對し相待つに詩を以て招かるるに酬ゆ」では、呂安、嵇康の関係性と言うよりも友人関係の親密さに重点を置いて用いられている。冒頭部分のみ挙げる。

黄鶴が東南から飛んで来て、

あなた（岑勛）は誠に心のこもった手紙をくださった。

松の木に寄りかかってその封を開くと、

あなたが腸が断たれるほど私を思ってくださいていることを知った。

そして千里もの距離を遠いものとせず、

馬車を命じて招いてくれたことも。

途中で元丹丘に出会い、

嶺に登り空と接するかというところで宴を催された。

酒に向かうと忽ち私のこと思い出され、

声を長く引いて詩を賦し清らかな風に興を覚えていようですね。二六

この詩は、岑勛が李白に使者を送って安否を訪ね、また元丹丘のところまで酒を用意して待っていると

の誘いに対して答えた詩である。冒頭五、六句目に前詩と同様、呂安と嵇康との故事が引かれている。ここでは、互いに相手に会いたいと思つて出掛けるのではなく、招かれたことに対する感謝を述べるために、友人関係の親密さを示すものとして上記故事が引かれているのだろう。次の「饒陽の張司戸燧に贈る」では、嵇康と向秀との友人関係が触れられている。冒頭部分のみ挙げ

朝には蒼梧山の泉の水を飲み、
夕には煙る碧海にて眠る。

凡人はどうして鸞や鳳凰が、

遠い椅や桐の木に生息するのかわかるわけもない。

藺相如を思慕したのは司馬相如だけではなくあなたもそうで、

嵇康の知遇を得たいと今の世で願っているのでしょうか。

私は黄石老ではないので、

あなたの張良のような才能を知ることではできません。二七

この詩は、饒陽県の司戸の官にあつた張燧に贈つた詩である。六句目に引かれる「攀嵇」は、顔延之が「五君詠」にて向秀を評した語である。

呂安・嵇康の知遇を得て高みに上つたのだ。二八

顔延之の認識では、向秀は、呂安、嵇康の知遇を得たことによつて、元々持っていた素質が開花したということであり、李白も「五君詠」を引いていることから、その認識に異議を唱えていたとは思えない。また、張良と黄石老の故事二九を引いていることも考え合わせれば、ここでは、自分は向秀にとつての嵇康のような存在にはなれないと言っていると考えられる。

ここまで、嵇康と向秀、呂安の交遊に関する言及を見て来たが、李白が嵇康に関する言及をするとき、それは主に友人関係を詠うという状況にて行われている三〇。始めに挙げた「王補闕翼、惠莊廟丞の宋泚の贈別に酬す」では、李白自身を嵇康に比しているように見えるが、それだけではなく、友人との仲間意識のようなものが見られる三一。また、嵇康と呂安、向秀との親密さを伝える故事に言及しているものでは、どのようなコンテキストに置かれても、嵇康は称賛される何かを有する人物として見られて

いる。そのような李白の認識が、「饒陽の張司戸燧に贈る」では、嵇康のような存在にはなれないという自己否定に繋がっているのだろう。

前節での考察を踏まえれば、やはり、李白は嵇康に対して、自身を全的に仮託してはいない。それはまた、嵇康、呂安との交遊でしか言及されない向秀についても同様である。

李白は、山濤・王戎を高官として捉え、また、嵇康、向秀への言及は、「五君詠」における顔延之の認識の範囲を抜け出していない。それでは、もう一人の山濤に推挙された人物、阮咸についてはどうだろうか。

顔延之の「五君詠」における認識に関わる阮咸への言及の例として、次の「清漳の明府姪聿に贈る」がある。部分のみ挙げる。

我が李一族には無数の子孫がおり、
国中の隅々にわたって生きている。

天は我が李一族に高潔な人格を与え、

(我々は) 日々人々のために憂えている。 三二

この詩は、李白が清漳の県令であった甥の李聿に贈った詩である。挙げたのは冒頭の四句であり、これに続いて李聿の善政を述べ讃えている。ここで問題にしたいのは冒頭三句目の「高潔な人格(青雲器)」である。「青雲」はそれだけで、また、「志」や他の語と繋がって高潔な人物を形容するのに頻繁に使われる。よって、李白も、特に他の意味を含めずに、単なる熟語として用いていることも考えられる。

しかし、この詩において、李白が李聿を阮咸に擬えている可能性は捨てきれない。先に見たように、嵇康、向秀への言及に顔延之「五君詠」を引いている。この詩においても、顔延之「五君詠」を意識的に引いている可能性がある。

阮咸は高潔な人格であり、真にその天分は人民より秀でている。 三三

これは顔延之が「五君詠」にて阮咸を詠った句である。ここで顔延之は、阮咸を「高潔な人格(青雲器)」と評しており、李白は、それと同じ語を用いて、自身の甥を称賛している。実際に言及されているのは、李一族であるが、続く内容を考えれば、李聿に対するものと解釈できるだろう。

ここまで、李白の「高官」という山濤・王戎に対する認識、そして嵇康の「鳳凰」「龍」のような独立不羈の属性、嵇康、向秀、呂安の交遊、阮咸の「高潔な人格（青雲器）」という属性を顔延之「五君詠」を引いて表現しているものを見て来た。これらを総合して考えれば、李白は、「竹林七賢」を「五君」と山濤・王戎に分けるといって顔延之の「五君詠」における操作を、顔延之の山濤・王戎を詠わないという選択よりも幾分穏やかではあるが、受け入れていって考えられる。そして、李白の嵇康、向秀、阮咸への言及から、その「竹林七賢」理解は、「五君詠」における顔延之の認識の範囲を出るものではないと思われる。つまり、李白は、「五君詠」という認識の枠組みにおいて「竹林七賢」を理解していると考えられる。しかし、その理解は、「五君詠」という認識の枠組みにおいて「竹林七賢」を理解している疑問を解く鍵が先ほど挙げた「清漳の明府姪に贈る」にある。

「清漳の明府姪に贈る」で、李白は、「高潔な人格（青雲器）」を引き、甥である李聿を称賛している。しかし、実際に言及されているのは、李一族である。それでは、なぜ範囲を広げ李一族としているのが問題である。

李白は、甥李聿に「高潔な人格（青雲器）」という属性を与え、「日々人々のために憂えている」とその甥の善政を讃える。しかし、「高潔な人格（青雲器）」という属性を与えられているのは、李白を含む李一族であり、その李一族が官職に就いた例として李聿が挙げられていると考えられる。であれば、この甥と同様に「高潔な人格（青雲器）」という属性を与えられた李白も、官職に就けば、同様に称賛に値する善政を敷くことができるということになる。このように考えれば、甥を称賛するだけでなく、李一族、より正確に言えば李白自身の価値を高めるために、ここは、李一族を挙げる必要があったのだろう。

顔延之は、「高潔な人格（青雲器）」という評価を阮咸に下している。しかし、それが政治に向けられ、「善政」を敷くことができるという評価までは下していない。李白が、「李一族」を挙げて、善政を敷くことができるという属性を表すことは、顔延之が見ていなかったことを示している。つまり、阮咸に向けられたこの「善政」を敷き得るといって属性が、李白独自の評価である。この点において、李白の「五君詠」という認識の枠組みを越えようとする「竹林七賢」理解が見られる。

第三節 「五君詠」という認識の枠組みを越えて

以下の節で、前章で見た「五君詠」という認識の枠組みを越えた李白の「竹林七賢」理解を見ていく。それは、前節の最後に触れた阮咸への言及とこれまで小論で触れてこなかった阮籍への言及である。

1 阮咸

ここでは阮咸に言及したものをを見ていく。この阮咸の阮籍との甥・叔父の関係に対する言及が、李白の詩にいくつも見られる。

「侍郎叔に陪し洞庭に遊び酔後三首」其の一
今日の遊は竹林の遊に比すべき宴、

我が家の叔父は賢明な人物。

三杯の酒を飲み干せば阮咸のような私を受け入れ、

酔っ払って詩酒を縦にする私を許してくれる。三四

この詩は、李白がその叔父李暉に従って洞庭湖にて遊び、酔った後に作った詩である。この叔父との交遊を「竹林の遊」に比し、叔父を阮籍、自身を阮咸に比している。ここでは、風流を好む人物として、叔父を讃え、また自身も風流を解す人物であると述べていると思われる。

また、直接的に阮咸に触れてはいないが、状況から自身を阮咸に比していると思われるものがある。

「雪に対し任城の六父秩満ちて京に帰るに餞し奉る」

龍や虎は牛馬のように鞭打たれることはなく、

鳳凰は小鳥のように時を告げたりはしない。

ご覧になってください、あの海辺の鶴を、

籠の中に囚われた鶉と似ているでしょうか。

天地のような広大な心を自身の心とすれば、

身体は浮雲のように頼りないものだ。

官職に就いて働いていても、

その心は煙霞の立ちこめる山水に親しんでいるのだ。

私の叔父は優れた風格があり、世間を超越している人物。

夢うつつの内に官吏としての任期は満ち、

辞任して長安へと帰る。

寶公が華やかな送別の宴を設けられ、
錚々たる文人がみなやって来た。

北方の歌が歌われれば北から来た雁も地上に降りて耳を傾け、
南方の曲を歌えば春が巡ってくるような盛況な宴。

車を引く馬は別れを惜しむように何度も嘶き、
車も意思があるかのように路上の埃を舞わせる。

叔父は躊躇して立ち去るのを惜しみ、
この宴席に集まった人々と離れがたく思っている。

私はこの詩を送って叔父の車を留め、
別れを惜しんで真心を尽くす。

いつになったら竹林七賢のように竹林の下で、
叔父と隣り合って楽しむことができるだろうか。三五

この詩は、李白の叔父で任城県令であった人物が、任期が満ちて長安に帰るのに送別の宴を設け、饒別として詠った詩である。冒頭の八句は、龍や虎、鳳凰、鶴などを例として、世俗を超越している人物は官職に就きながらも山水への思いを内に秘めていることを言う。次の八句にて、叔父を讃え、その叔父の送別の宴の盛況を述べる。最後の八句にて、送別に際して、去る者も送る者も皆別れを惜しむ様子を描く。

ここでは送別の宴であるが、自身と叔父、友人との交遊を「竹林の游」に比しており、阮籍（原文では「歩兵」）を挙げているのは、状況から見て、叔父を指していると思われる。李白と叔父との関係から、叔父が阮籍であれば李白は阮咸であり、ここでも李白は、阮咸を自身に比していると考えられる。冒頭の八句と続く八句の叔父への称賛とを考慮に入れれば、この叔父は、世俗を超越し、山水を好む人物であるということになり、その酒宴に連なる李白自身も風流を解す人物であると見なされるだろう。次の詩も状況から自身を阮咸に比していると思われる。

「夜郎に流さるるとき江夏に至り、長史叔及び薛明府に陪し興徳寺の南閣に宴す」
紺色の建物が長江のほとりに横たわり、
青々とした山は水面に映っている。
川岸はうねうねと曲がって砂地は続き、

太陽が川に映って川の水は澄み切った空にも思える。

天上の音楽とも思える音楽が寺院の内に流れ、

蓮を採る舟は夕暮れの風に揺れている。

私はうやうやしくこの竹林の宴のお供に与り、

陶淵明のような薛さんと共に酒を飲んでゐる。 三六

この詩は、夜郎に流される途中、江夏に立ち寄り、長史であつた叔父と県令の薛某と共に酒を飲んだことを詠っている。詩は、宴の舞台となつた寺院とその風光明媚な土地を描き、宴の楽しさを伝える。末尾にて言及される「竹林の宴」は、「竹林の游」を示していると思われ、叔父と薛某との「お供に与る」というところから、直接の言及はないが、李白は、自身を阮咸の位置に置いていると思われる。次の詩も同様である。

「江夏の使君叔の席上にて史郎中に贈る」

鳳凰は禁中にて、

紫泥で封された詔書を口にくわえる。

私は昔屈原が放逐された三湘の地に流されたが、

今生きながらえて帰ってきた。

仙人とも思えるあなた（史欽）と別れて久しいが、

私のところまで慰問に来てくれた。

轍に溜まって涸れゆく水たまりにいる魚が流水を思うようにあなたの温情を思うが、

浮雲が漂つて元の居場所を失うように行くべきあてもない。

華やかな役所に勤めるあなた方に対して自身を恥ずかしく思うが、

私のような放逐された家臣を疎外しないでほしい。

あの竹林の下でのように、

忝く思いながらも素晴らしい酒宴に初めてお供したような気持ちなのだから。

どうか私に羽翼を生じさせ、

北海の魚が大鵬に化すように援助して頂けませんか。 三七

この詩は夜郎に流されたが恩赦に与り、江夏まで戻ってきた際に、江夏の太守である叔父のところへ

の酒宴にて、郎中であつた史欽に贈つた詩であり、史欽に対して援助を願う内容である。末尾から四句目にて「竹林の游」が触れられている。この酒宴の状況と「竹林の游」とを比べてみれば、叔父と李白、史欽という関係から、李白は自身を阮咸の位置に置いていると思われる。ここでも直接的な言及は見られないが、李白が自身を阮咸に比していることが読み取れる。

状況から自身を阮咸に比していると思われる詩が、さらにもう一つ見られる。

「瓜州新河に題し族叔舍人賁に餞す」

私（李白）は叔父（李賁）を見送りに行き、

櫂を置いて流れるまを樂しむ。

楊の花は水面を覆つて流れ、

龍山の雪が流れてきたのかと思つた。

この竹林での興を惜しみ、

山陽の別れを迎えるのを悲しく思う。

叔父の向かう旅路が清らかであることを眺め、

帰つては空しきで何も手に付かない。三八

この詩は、一族の叔父李賁に餞別した詩である。「この竹林での興を惜しみ」^{三九}とは、叔父との交遊を、かつて竹林七賢の行つたとされる「竹林の游」に譬えて述べ、また「山陽の別れを迎えるのを悲しく思う」というのも同様に「竹林の游」に譬えていると思われる。「竹林の游」に譬えることで、叔父と李賁との交遊が凡俗な交遊ではなく、風雅なものであつたということを示しているのだろう。この李白と李賁の甥・叔父の関係を、竹林七賢に重ねれば、阮咸と阮籍の關係に等しい。ここでは直接的に言及されないが、李白は自身を阮咸に比していると思われる。

ここまで、直接的に阮咸に言及し、自身を阮咸に比している詩一例、直接的な言及は見られないが、状況から自身を阮咸に比していると思われる詩四例を見て来た。李白が自身を阮咸に比す場合の条件を考えてみたい。

まず、李白が同姓の人物をほとんど全てと思われるほど、自身の同族として扱っていることは夙に知られる。その理由として、親密さを増すことによつて獵官運動を行い易くすることが挙げられるが、例示したどの詩にも李白の叔父または、同姓の年長者に贈るなど、叔父的な存在が詩の内容に関わっていることである。

次に、詠われた状況が、別れや再会といった差異はあるが、酒宴であるということである。

さらに、これは例示した詩全てに当てはまるものではないが、風流を好むという属性が語られることである。その場にいる人々が風流を好む人物であることにより、その宴に相伴する李白自身も風流を好む人物であるとの解釈を促す。

これらの条件は、いずれも阮咸に関わるものである。阮籍との甥、叔父の関係はもちろん、「酒」という語は、「竹林七賢」を語る際に頻繁に用いられるものであり、同様に風流を好むという属性も多く用いられる。よって、これらの条件がいくつか見られる状況のとき、李白は自身を阮咸に比していると思われる。

これまで挙げた詩から、自身を阮咸に比すことは、李白にとって重要なことであつたと考えられるが、しかし、李白が自身を阮咸に比すことなく、阮咸に言及している詩がある。次の詩では、李白は阮咸に対する阮籍の位置に来ており、この操作によって読み取られる李白のイメージは、阮咸から阮籍、延いては阮一族へと敷衍していく。

「楊山人の天台に帰るを送る」

我が家の甥は阮咸のようであり、

赤城の辺り（天台山）で官職に就いている。

詩人として重要視されているが、

官費を浪費するようなことはない。

しかし興が起れば登山用の下駄を履き、

感情が湧き立てば海に船を浮かべて遊ぶこともある。

（君は天台山に帰って石橋を渡って仙境に入るだろうが）私も石橋を渡れたら、

手を携えて雲煙の立ち込める仙境に入って行くこととしよう。四〇。

この詩は、楊某という山人が天台山に送るのを見送った詩である。ここでは、李白ではなく、その甥が阮咸に比されている。ここで李白の甥は、阮咸とともに、謝靈運、謝安に比されており、共通点を抽出すれば、風流を好んだということだろう。六句に亘って甥を紹介しているのは、甥の風流を好むという属性を示すことよって、その叔父である李白もそのように風流を好む人物であると思わせる効果を期待したのだろう。ひいては末尾の二句で自身も仙境に入っていける人物であるとの自負が示される。風流を好む人士ならば、阮咸である必然性はない。実際、謝靈運^{四一}、謝安^{四二}の行動が引かれている。

そこをあえて阮咸に比しているのは、阮咸と阮籍の甥・叔父関係に連想させるためであり、李白は阮籍のような人物であると思わせたかったのだろう。

先ほど挙げた条件をこの詩に当てはめてみれば、李白の立ち位置が阮咸ではなく阮籍に移ってはいるが、甥・叔父の関係は保たれたままであり、「帰るを送る」という詩題から、当然別れの酒宴を張っていたと思われる。そして、謝靈運、謝安の風流を好んだという故事が引かれていることから、風流を好むという属性も語られている。つまり、この詩においては、先に挙げた五例と李白の立ち位置が異なっているだけであり、他の条件は同様である。

ここから読み取れるのは、酒、風流を好むという属性が語られるとき、阮籍と阮咸とは入れ替え可能な概念として考えられており、その詠われる対象となる人物が李白の叔父であれば、李白は阮咸となり、甥であれば阮籍となるということである。このように阮籍、阮咸を入れ替え可能な概念と考えた場合、李白にとって重要であったのは、自身が阮籍、阮咸的な人物、つまり、風流を好む人物として見られることであつたと思われる。さらには、李白の阮籍、阮咸の二人に共通の属性として、風流を好むという属性を第一に見ていたと考えられる。それが「竹林の游」として描かれていることから、阮籍、阮咸を代表とした「竹林七賢」の属性と考えていたと認めることができるだろう。

また、阮籍と阮咸は、時にその子孫・親類を含めて「阮一族」と総称されることがある。阮籍・阮咸を共通の属性で語ろうとすることは、この総称に対して、李白が前章末尾で見た「清漳の明府姪聿に贈る」におけるように「李一族」という総称を対置しているとも考えられる。

阮咸への言及のほとんどは「五君詠」という認識の枠組みを越えるものではない。阮咸への言及にて重要なのは、阮籍と阮咸を入れ替え可能な概念として示すことである。そして、風流を好むという属性が阮籍と共通することから、「阮一族」という認識に対して、「李一族」という認識を人々に与え、李氏が支配する唐朝において、数多くいる李姓を持つ人々を一つの概念でまとめ、自身もそこに含まれる人物であり、また、価値を有する人物であると人々に見られることを願っている。

このように、阮籍と阮咸から「阮一族」、「李一族」、李白と敷衍させていく操作は、「阮一族」の筆頭と目される阮籍の属性を、阮咸を含めた「阮一族」、「李一族」、そして、李白の属性へと転移させることを目的としていると考えられる。

2 阮籍

このような操作によって、自身に転移させたい阮籍の属性とはどのようなものなのか。李白の阮籍への言及に関しては、大きく二つに分けて考察していく。一つは、阮籍を友人に比している場合である。もう一つは、阮籍に李白自身を仮託している場合である。まずは、阮籍を友人に比している場合であるが、阮籍の官吏としての有能さを示す次のような言及がある。

「閭丘宿松に贈る」

阮籍は太守となり、

驢馬に乗って東平に赴いた。

着任して十日間にして、

東平の風俗は清らかになった。

たまたま赴任して短期間で立ち去る、

誰も阮籍の考えをわかるものはいなかった。

四三

これは、閭丘某という人物に贈った詩である。前半部分にて阮籍に触れている。この阮籍に言及した内容は、『世説新語』任誕篇（「歩兵校尉缺」條）注引「文士傳」の内容を踏まえていると思われる。

阮籍は思いのままに行動し、世間を軽んじ、官職にも就かなかつたが、晋の文帝は親しく阮籍を愛し、共に語り合い、阮籍の思い通りにさせ、官職に就くことを強要しなかつた。阮籍が寛ぎながら言うには、「かつて東平に遊んで、その土地の風俗を楽しみました。できましたら東平の太守にしてくださいませんか」と。文帝は喜んでその願いを入れ、阮籍は驢馬に乗って東平に着任すると、役所の壁をみな壊し、建物の内の人と外の人がお互いに望めるようにし、廉潔を押し広めること十余日にして、また驢馬に乗って去って行った。

四四

この阮籍の東平太守としての善政を挙げ、それに対して、閭丘某の宿松の統治の様子を挙げていることから、阮籍の行動は賞賛に値するものであり、それに匹敵するであろう閭丘某の行動を賞賛していると思われる。

後半にて言及される宓子賤、陶淵明を「二賢」と言い、その名を「掩う」と言うところから四五、閭丘某は、宓子賤、陶淵明の名声を凌ぐようになるだろうという李白の友人に対する賞賛が読み取れる。

さらに、前半部で閻丘某と阮籍を同様に賞賛していることから、李白は、宓子賤、陶淵明と同様に、もしくは二者以上に阮籍の行動を賞賛していると考えられる。特に賞賛されているところは、阮籍の善政と名利に対する恬淡さだろう。

この認識は、一般的な能吏のイメージとは異なるが、風流を好み、名利に恬淡な人物の善き官吏としてのイメージとして、李白が理想としたものだったのではないだろうか。

一般的に「名利に恬淡な」人物であれば、わざわざ仕官を求めたりはしないだろう。しかし、李白は、これまで見てきた詩の随所に見られるように、仕官を願い、求めている。この矛盾にこそ、李白の仕官を求めるその願望の強さが隠されて示されていると考えられる。

次も東平太守としての阮籍の故事が引かれている。

「従弟南平の太守之遙に贈る二首」其の二

東平の阮籍と南平の李之遙と、

時代は異なるが両りともに歩兵。

心から酒を愛し、

職務を顧みない。

左遷されて桃源県へ行くとのことだが、

(そこは) 花を尋ねて出かける必要もないだろう。 四六

この詩は、従弟である南平太守李之遙に贈った詩である。南平は四川の巴郡であるから、東平との地名の類似と李之遙と阮籍とが二人とも歩兵校尉であったという経歴の一致によって、両者を比していると思われる。また、そのような外面的な類似のみならず、両者の内面的な類似を李白の語句から読み取れば、両者ともに酒を愛したという属性があり、職務を顧みなかったという属性が見られる。

先の「閻丘宿松に贈る」では、阮籍の東平太守としての行政手腕を讃えていたが、この詩では、贈られた李之遙が、貶謫されたということから、行政手腕といった属性には触れず、酒を求めて歩兵校尉となったという阮籍の故事を持ち出し、「職務を顧みない」と言っているのだろう。つまり、李白は阮籍の官吏としての属性として、先の「閻丘宿松に贈る」に見られるような、東平太守であったときの賞賛に足る属性と、酒を求めて歩兵校尉となったという社会的に賞賛されると思われぬ属性という、相反する二つの属性を認めていると考えられる。

しかし、その後者の属性も、友人への贈答というコンテキストから考えれば、非難をしているのでは

なく、むしろ「あの阮籍だつて酒を求めて官職に就いたのだから、君が酒浸りで左遷されたのも大したことではない」という慰めであり、後に続く「左遷されて桃源県へ行くとのことだが、（そこは）花を尋ねて出かける必要もないだろう」の二句からも、阮籍のように風流を解する李之遙にとつて、桃源県への左遷は悲しむべきことでもないという慰めが読み取れる。つまり、ここでは、李之遙が阮籍と同じく官吏としての職務よりも、酒や風流を優先させる姿を描いており、それもまた善いとの評価を与えていると考えられる。さらに推測を加えれば、このような風流を解する人物を理解することのできぬ権力者への批判の意が込められているのではないだろうか。

ここまで見て来た例から読み取れる李白の見た阮籍の属性として、名利に恬淡な善き官吏という属性と風流を好むという属性が挙げられる。それでは、李白自身を阮籍に仮託した場合には、どのような属性が語られるのだろうか。

「古風、五十九首」其の五十四

劍を佩して高台に上り、

悠々と春の景色を眺める。

青々と茂る雑木は丘を蔽い、

玉のように美しい香草は深い谷間を覆い隠す。

鳳凰は崑崙山の瑤池で鳴くが、

集まろうとしても鳳凰が止まるに足る珍木がない。

山鴉のような小鳥が棲むところを得、

蒿のもと同類を満たすほど栄えている。

春秋の晋国が衰えその道徳が日々廃れたと言うが、

（現代も同様であり）阮籍のような私は行き詰って慟哭しているのだ。 四七

「青々と茂る雑木」「山鴉のような小鳥」は小人の比喩であり、「玉のように美しい香草」「鳳凰」は李白自身を含めた賢才の比喩と思われる。「青々と茂る雑木」が日の当たる「丘」に栄え、「玉のように美しい香草」は日の当たらず「深い谷間」に位置し、「山鴉のような小鳥」が棲むところを得るのに対して、「鳳凰が止まるに足る珍木がない」。末尾の「春秋の晋国が衰えその道徳が日々廃れた」と言うのが、暗に唐代を指しているとすれば、李白は、道徳が廃れ、風俗が乱れるのを悲しむが、阮籍と同じように、どうすることもできぬ境遇にあるため慟哭するのだろうか。「玉のように美しい香草」「鳳凰」|| 李

白、という自負を考慮に入れれば、自身を比している阮籍も「玉のように美しい香草」「鳳凰」のような賢才であると考えられる。才能を有しながらも、發揮する場所を与えられないという李白の嘆きが、阮籍の「途窮の哭」の故事^{四八}によつて表現されている。同様の嘆きを、「途窮の哭」ではなく、「詠懷詩」から引いているものがある。「梁園吟」の部分のみ挙げる。

この平臺のあたりに来てみると憂愁の思いがこみ上げ、それを紛そうと酒を飲みながらこの梁園の歌を作る。

するとあの阮籍の詠懷詩が思い浮び、「緑の水面は波立ち」と詠ってみる。

(阮籍の当時と同じように)波は大きくうねり長安への道を迷わせ、道は遠くどうして都に帰ることが出来るだろうか。^{四九}

この詩は、李白が梁園に遊んだときにその感慨を述べた詩である。これは阮籍の「詠懷詩五言八十二首」其の十六を引いている。

蓬池のほとりを彷徨い、
大梁の城跡をかえりみる。

緑の水面は波を立て、
広々とした野原は草に覆われ果てしない。

走り回る獣は思い思い乱れ走り、
空を飛ぶ鳥は連れだつて飛んでいく。

今は鶉火の星が真南に現れる秋の末、
太陽と月が互いに向かい合う。

北風も厳しい寒さをいっそう増して、
陰気は薄く霜を下ろす。

旅路にあつて連れ立つ友もなく、
俯き仰いでは哀しみを抱くばかり。

小人は打算で動こうとするが、

君子には従うべき規範がある。
どうして疲れ苦しむことを惜しむだろうか、
思いを述べてこの詩を著す。五〇

阮籍の「詠懷詩」を引いて李白が述べたかった思いは、自然の偉大さに対する人間の営為の悲哀であり、自身の現状に対する不満であると思われる。その不満は、才を有しながらも志を果たす場所が与えられないという自己評価から来ているのだろう。であるからこそ、李白は「梁園吟」の末尾にて、

謝安は東山で枕を高くして休んでいたが時が来れば立ちあがったように、
人々を救うべき時が来たら私も立ち上がるのだ。五一

と云うのだろう。この李白の自己評価が「詠懷詩」に基づくことから、阮籍も「人々を救うべき時が来たら」「立ち上がる」人物として評価していたと考えることができる。

李白が自身を阮籍に比すときに語られる属性は、才能を有しながらも發揮する場所を与えられない、志を果たすことができないという属性である。それに対し、友人を比すときの阮籍の属性は、名利に恬淡な善き官吏、風流を好むといったものであった。つまり、後者の姿は、ある程度、李白の理想が叶った姿であり、その理想が叶わない現実の姿が前者なのだろう。

しかし、阮籍に対する批判も見られる。「広武の古戦場に登り懷古す」の部分のみ挙げる。

乱を打ち平らげるのは豪傑聖人のなすべきこと、
到底俗儒にわかることではない。

阮籍は酒を飲み耽り項羽劉邦を豎子と呼んだが、
これは狂った言葉であり公正な評言ではない。

私はこの黄河が湾曲する地に来て掌を撫で、

阮籍を笑うばかりである。五二

この詩は、李白が、昔楚漢が争ったという古戦場に行き、古のことを思った詩である。ここで阮籍は、その認識^{五三}を笑われている。

しかし、この阮籍の言葉に対する李白の批判を蘇軾は誤解とする。

父の友人であった史経臣、字は彦輔がかって私にこう言った。「阮籍は広武に登って嘆じて、時に英雄がいなかったために豎子に名をなさしめてしまったと嘆いて言ったが、それは劉邦のことを言ったのだろうか」と。私は言った、「違います。時に劉邦、項羽のような英雄がいなかったのを嘆いたのです。『豎子』とは、魏、晋の間の人を指しています」と。五四

そして、李白の詩を引いた後、次のように言う。

李白もまた阮籍の言葉を誤解していて、父の友人史経臣の考えと同じだったことがわかる。阮籍はやりたい放題に振る舞ったが、元々世を救おうとする志があった。魏、晋の間は難しい局面が多くあり、一時酒に頼みただけなのだ。どうして劉邦を豎子と呼んだりするだろうか。五五

つまり、阮籍が項羽、劉邦を「豎子」と呼んだことは李白の誤解であったということだが、ではなぜ李白は阮籍の言葉を批判したのだろうか。

「乱を打ち平らげるのは豪傑聖人のなすべきこと」であり、「到底俗儒にわかることではない」と李白は言っている。

唐人が唐の時代を漢の時代として表現することはよく見られることだが、ここで李白が楚漢の興亡を描きながら、唐の建国に思いを馳せているとすれば、楚漢の興亡にも劣らぬ隋唐の戦乱を収めた唐の高祖—太宗は、正しく「豪傑聖人」ということになる。

また、李白の生きた時代を考え合わせれば、「豪傑聖人」として考えられているのは、玄宗とも思われる。則天武后の退位後、中宗を毒殺した韋后の篡奪を防いだのは玄宗であり、この功績によって、玄宗は皇太子となった。楚漢の興亡に言及していることから、唐建国を想定しているとするのが妥当だが、「乱を打ち平らげる」という表現に注目すれば、中宗毒殺後の混乱を指しているとも考えられる。

この詩は、七四五年の作とされているが、この詩に玄宗への賛美が込められていると仮定すれば、七四四年に讒言によって都を去った李白が、もう一度取上げてもらいたいという思いを込めていると考えられる。

このような推測を背景として、阮籍に対する批判を考えれば、阮籍と同様酒に浸り、玄宗の前で酔いつぶれていた李白は、「公正な評言」を行わなかったものであり、しかし、今はそのような「李白」ではなく、かつての自分の愚かさを笑えるようになった「李白」であるという表明にも取れる。つまり、こ

の詩における「阮籍」とは、かつての李白自身を彷彿とさせるような「酒」「狂った」といった属性で語られていると考えられる。そして、阮籍に対して李白が自身を比していると考えれば、このように「酒を飲み耽」ることを止め、志を果たそうとすれば、阮籍と同様、善き官吏としての属性が自身にもあると考えていたのだろうか。

顔延之は「五君詠」にて次のように阮籍を詠っている。

阮公は表立って行動しなかつたけれども、
見識は奥深かった。

その輝きを隠すように酔いつぶれ、
何かにかこつけて自分の気持ちを述べるような表現をした。

達人を慕うように長嘯し、

礼俗を乗り越えて人々を驚かした。

人の善し悪しを論じることはないが、

ただ行き詰まっては慟哭するばかりだ。

五六

ここに見られるのは、阮籍の見識の奥深さ、韜晦、超俗性、志を果たせないという思いである。顔延之は、阮籍の見識の奥深さといった有能さを評価しているが、それら阮籍の属性がどのように政治の舞台で有効に活用されるのかは語らない。

顔延之「五君詠」と李白の詩を比較すれば、李白の語る阮籍の二つの属性の内、志を果たせないという思いは、「五君詠」における阮籍像と重なる部分であり、名利に恬淡な善き官吏としての属性は、「五君詠」という認識の枠を越えたものであると考えられる。

ここまで、阮籍と阮咸とに言及した例を見て来たが、どちらにも共通する属性として、李白は、風流を好むという属性を考えていたと思われる。そして、阮籍、阮咸に自身を仮託することで、そのような属性を李白自身が有していると思われるのを願っていたのだろうか。そして、風流を好む阮籍、阮咸が官吏としても有能であったということを述べる。この有能さは、一般的な有能さではなく、「清漳の明府姪聿に贈る」で、「琴を弾きながら古の堯が行った政治を詠い」^{五七}と云うように、「無為の治」を挙げています。つまり、阮籍、阮咸と同様に風流を好む李白が官職に就けば、「無為の治」を実現させ、

しかも、名利に恬淡であるため、腐敗や汚職など考えられない善政を敷くことができると喧伝しているのである。そのため、阮籍、阮咸の有する多様な人物像の内から、上記の属性を挙げていると考えられる。

おわりに

先に述べた通り、李白の詩はその多くが失われていることから、限定付きの考察となっている。その限定された中での考察から、李白の「竹林七賢」理解を述べれば、度々引かれることから「五君詠」を認識の枠としていえると考えられる。しかし、その認識の枠を越えて語られるのが阮籍と阮咸である。阮咸に関しては、「清漳の明府姪聿に贈る」を除いたほとんどの言及が、風流を好むという属性であり、それは、阮籍との入れ替え可能な概念として語られる。これは、阮籍と阮咸という叔父・甥関係から「阮一族」へと敷衍し、それに「李一族」を対置することによって、阮籍の有する属性を李白に転移させるためのものとして考えられる。

このような操作によって李白が自身を仮託して述べたいのは、阮籍の名利に恬淡な善き官吏という属性であり、この属性は「五君詠」という認識の枠を越えた李白独自の認識であると思われる。「五君詠」という認識の枠の中で、「竹林七賢」を理解しつつ、阮籍に関しては、「五君詠」という認識の枠を越えて理解していることは、李白にとって阮籍（という名で語られる属性）が如何に重要な存在であったかを示しているのではないだろうか。

また、「竹林七賢」の一人、劉伶に関する李白の言及は見られなかった。李白の作品は散逸したものが多くとされていることから考えれば、李白は劉伶に言及したのだが、現存していないとも考えられる。一方、言及しなかったということも考え得る。現存する作品に限るとい仮定の下、現実とは異なる可能性があることを承知で想像をたくましくするならば、李白は劉伶に対して語る価値がないという判断を下したと考えられる。その理由を推測してみれば、酒という属性のみで語られる劉伶に対して、自分は酒という属性のみではないという同族嫌悪とそこからの脱却を願うことによって触れることができなかったのではないだろうか。

一 詩の引用には、瞿蛻園、朱金城校注『李白集校注』上下（上海古籍出版社、一九八〇年七月第一版第一次印刷）を用いる（以下『校注』）。なお、中国語文は拙訳により、原文を注に示す。

二 原文「高陽小飲眞瑣瑣，山公酩酊何如我。竹林七子去道賒，蘭亭雄筆安足誇。」（前掲『校注』下、

九八六頁)。

三 原文「顧慚青雲器，謬奉玉樽傾。山陽五百年，綠竹忽再榮。」(前掲『校注』上、八一五頁)。
四 他にも「校書叔雲に餞す」の「向晚竹林寂，無人空閉關。」(前掲『校注』下、一〇六二頁)などいくつか言及が見られる。

五 原文「大道安棄物，時來或招尋。爾見山吏部，當應無陸沉。」(前掲『校注』下、九八三頁)。

六 原文「廓落青雲心，結交黃金盡。富貴翻相忘，令人忽自哂。蹭蹬鬢毛斑，盛時難再還。巨源咄石生，何事馬蹄間。綠蘿長不厭，却欲還東山。」(前掲『校注』下、一〇六八頁)。

七 原文「與石鑒共宿，濤夜起蹴鑒曰：『今為何等時而眠邪。知太傅臥何意？』鑒曰：『宰相三不朝，與尺一令歸第，卿何慮也！』濤曰：『咄！石生無事馬蹄間邪！』投傳而去。未二年，果有曹爽之事，遂隱身不交世務。」(房玄齡等撰『晉書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版、一一二二三頁)。

八 『世說新語』「排調第二十五」に「謝公在東山，朝命屢降而不動。」(劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』(以下『世說』)上海古籍出版社、二〇〇二年一月、第一版、六六四頁)とあり、また「謝公始有東山之志，後嚴命屢臻，勢不獲已，始就桓公司馬。」(前掲書『世說』、六六六頁)とある。

九 同詩末尾に「東風春草綠，江上候歸軒。」(前掲『校注』下、一〇六九頁)とある。

一〇 『後漢書』「逸民列伝」に「太史奏客星犯御坐甚急。」(范曄撰『後漢書』、北京、中華書局、一九七三年八月、第一版、二七六四頁)とあり、「太微」が三垣の一つであり、天子の庭を示すことから、卑しい人物によつて讒言されたことを言うと思われる。

一一 原文「客星動太微，朝去洛陽殿。爾來得茂彥，七葉仕漢餘。」(前掲『校注』下、一一一三頁)。

一二 原文「濬沖得茂彥。夫子值狂生。」(前掲『南北朝詩』、一六〇〇頁)。

一三 原文「傳暢讚曰。王戎。字濬沖。戎為選官時。江夏李重字茂曾。汝南李毅字茂彥。重以清尚。毅淹而通。二人操異。俱處要職。戎以識會待之。各得其用。」(李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、三三三頁)。

一四 原文「戎在職雖無殊能」(前掲『晉書』、一一三三頁)。

一五 原文「顯宗阿都。説足下議以吾自代。」(前掲『文選』、六〇〇頁、「山巨源に與ふる絶交書」)。

一六 原文「山濤舉成典選，曰：『阮咸貞素寡欲，深識清濁，萬物不能移。若在官人之職，必絶於時』」(前掲『晉書』、一二六一頁)。

一七 原文「有必不堪者七。甚不可者二」(前掲『文選』、六〇二頁、「山巨源に與ふる絶交書」)

- 一八 原文「鸞翻我先鍛，龍性君莫馴。」（前掲『校注』下、一一一七頁）。
- 一九 原文「鸞翻有時鍛。龍性誰能馴。」（前掲『南北朝詩』、一二三五頁）。
- 二〇 なお、呂安・向秀との関係以外で嵇康が言及されるものもいくつもある。嵇康「秀才が入軍するに贈る五首」其の四の句「目送歸鴻。手揮五絃。」を引く「陵陽山に至り天柱石に登り韓侍御に招かれて黃山に隠るるに酬ゆ」や、嵇康が処刑に臨むにあたって弾いた曲、「廣陵散」に言及する「崔郎中宗之南陽に遊び吾に孔子の琴を遺るを憶ひ、これを撫し澗然として舊に感ず」と「溧水の道より王炎を哭す、三首」其の三、嵇康を評價するのに用いられる「龍章」を用いて友人を喩える「溧水の道より王炎を哭す、三首」其の一など。これらはみな友人との交遊に関して詠った詩である。
- 二一 原文「遊子東南來，自宛適京國。飄然無心雲，倏忽復西北。訪戴昔未偶，尋嵇此相得。」（前掲『校注』下、一一一〇頁）。
- 二二 原文「嵇康與呂安善，每相思，千里命駕。」（前掲『世説』、六四一頁）。
- 二三 堀誠「不在の友——『呂安題鳳』故事考——」（『流謫の花』研文出版二〇〇三年一月、初版第一刷、七七〜九八頁）。
- 二四 原文「東平呂安服康高致，每一相思，輒千里命駕，康友而善之。」（前掲『晋書』、一三七二頁）。
- 二五 原文「主人蒼生望，假我青雲翼。風水如見資，投竿佐皇極。」（前掲『校注』下、一一一〇頁）。
- 二六 原文「黃鶴東南來，寄書寫心曲。倚松開其緘，憶我腸斷續。不以千里遙，命駕來相招。中途元丹丘，登嶺宴碧霄。對酒忽思我，長嘯臨清飈。」（前掲『校注』下、一一一五頁）。
- 二七 原文「朝飲蒼梧泉，夕棲碧海煙。寧知鸞鳳意，遠託椅桐前。慕蘭豈曩古，攀嵇是當年。媿非黃石老，安識子房賢。」（前掲『校注』上、六四〇頁）。
- 二八 原文「交呂既鴻軒。攀嵇亦鳳舉。」（前掲『南北朝詩』、一二三六頁）。
- 二九 「留侯世家」に「良嘗閒從容步游下邳圯上，有一老父，衣褐，至良所，直墮其履圯下，顧謂良曰：『孺子，下取履。』良鄂然，欲毆之。為其老，彊忍，下取履。父曰：『履我。』良業為取履，因長跪履之。父以足受，笑而去。良殊大驚，隨目之。父去里所，復還，曰：『孺子可教矣。後五日平明，與我會此。』良因怪之，跪曰：『諾。』五日平明，良往。父已先在，怒曰：『與老人期，後，何也。』去，曰：『後五日早會。』五日雞鳴，良往。父又先在，復怒曰：『後，何也。』去，曰：『後五日復早來。』五日，良夜未半往。有頃，父亦來，喜曰：『當如是。』出一編書，曰：『讀此則為王者師矣。後十年興。』十三年孺子見我濟北，穀城山下黃石即我矣。」遂去，無他言，不復見。且日視其書，乃太公兵法也。良因異之，常習誦讀之。」（司馬遷撰、裴駟集解、司馬貞索隱、張守節正義『史記』北京、中華書局、一九七五年三月、第七刷、

二〇三四〜二〇三五頁）とある。

三〇 友人関係に関わるもの以外では、「襄陽歌」の「清風朗月不用一錢買，玉山自倒非人推。」（前掲『校注』上、四七三頁）がある。これは、嵇康の酔いつぶりを称賛したものである。

三一 「陵陽山に至り天柱石に登り韓侍御に招かれて黄山に隠るるに酬ゆ」では、「秀才が入軍するに贈る五首」其の四の「目送歸鴻。手揮五絃。」を引き、韓雲卿に対する思いを、嵇康の嵇喜への思いに擬え、嵇康は兄を見送ることしかできなかったが、私は見送るのではなく、あなたと共に行こう、と嵇康を否定する形で、その親密さ、敬愛さを表現していると思われる。

三二 原文「我李百萬葉，柯條布中州。天開青雲器，日爲蒼生憂。」（前掲『校注』上、六四二頁）。

三三 原文「仲容青雲器。實稟生民秀。」（前掲『南北朝詩』、一二三五〜一二三六頁）。

三四 原文「今日竹林宴，我家賢侍郎。三杯容小阮，醉後發清狂。」（前掲『校注』下、一一九一頁）。

三五 原文「龍虎謝鞭策，鸚鵡不司晨。君看海上鶴，何似籠中鶉。獨用天地心，浮雲乃吾身。雖將簪組狎，若與烟霞親。季父有英風，白眉超常倫。一官卽夢寐，脫屣歸西秦。竇公敞華筵，墨客盡來臻。燕歌落胡雁，郢曲迴陽春。征馬百度嘶，游車動行塵。躊躇未忍去，戀此四座人。餞離駐高駕，惜別空慙。何時竹林下，更與步兵鄰。」（前掲『校注』下、九八四頁）。

三六 原文「紺殿橫江上，青山落鏡中。岸迴沙不盡，日映水成空。天樂流香閣，蓮舟颺晚風。恭陪竹林宴，留醉與陶公。」（前掲『校注』下、一一八八頁）。

三七 原文「鳳凰丹禁裏，銜出紫泥書。昔放三湘去，今還萬死餘。仙郎久爲別，客舍問何如。涸轍思流水，浮雲失舊居。多慚華省貴，不以逐臣疎。復如竹林下，而陪芳宴初。希君生羽翼，一化北溟魚。」（前掲『校注』上、七三七頁）。

三八 原文「我行送季父，弭棹徒流悅。楊花滿江來，疑是龍山雪。惜此林下興，愴爲山陽別。瞻望清路塵，歸來空寂蔑。」（前掲『校注』下、一四四〇〜一四四一頁）。

三九 原文では、「竹林」とはせず、「林下」となっているが、続く「山陽」という語と合わせ考えれば、「竹林の游」を指していると考えられる。

四〇 原文「我家小阮賢，剖竹赤城邊。詩人多見重，官燭未曾然。興引登山屐，情催汎海船。石橋如可度，攜手弄雲煙。」（前掲『校注』下、九七六頁）。

四一 「謝靈運伝」に「尋山陟嶺，必造幽峻，巖嶂數十重，莫不備盡。登躡常著木屐，上山則去其前齒，下山去其後齒。」（李延壽撰『南史』北京、中華書局、一九七五年六月、第一版、五四〇頁）とある。

四二 「謝安伝」に「嘗與孫綽等汎海，風起浪湧，諸人並懼，安吟嘯自若。舟人以安爲悅，猶去不止。風

轉急，安徐曰如此將何歸邪。舟人承言即迴。衆咸服其雅量。」（前掲『晋書』、二〇七二頁）とある。

四三 原文「阮籍爲太守，乘驢上東平。剖竹十日間，一朝風化清。偶來拂衣去，誰測主人情。」（前掲『校注』上、七二六頁）。

四四 原文「籍放誕有傲世情，不樂仕宦。晉文帝親愛籍，恆與談戲，任其所欲，不迫以職事。籍常從容曰：『平生曾遊東平，樂其土風，願得爲東平太守。』」文帝說，從其意。籍便騎驢到郡，皆壞府舍諸壁障，使內外相望，然後教令清寧。十餘日，便復騎驢去」（前掲『世說』、六一一頁）。

四五 「何慙宓子賤，不減陶淵明。吾知千載後，却掩二賢名」（前掲『校注』上、七一六頁）。とある。

四六 原文「東平與南平，今古兩步兵。素心愛美酒，不是顧專城。謫官桃源去，尋花幾處行。」（前掲『校注』上、七五一頁）。

四七 原文「倚劍登高臺，悠悠送春日。蒼榛蔽層丘，瓊草隱深谷。鳳鳥鳴西海，欲集無珍木。鸞斯得所居，蒿下盈萬族。晉風日已頹，窮途方慟哭。」（前掲『校注』上、一八二頁）。王琦注によれば、後半六句を「翩翩眾鳥飛，翱翔在珍木。群花亦便娟，榮耀非一族。歸來愴途窮，日暮還慟哭。」とする本もあるが、今は採らない。

四八 「阮籍伝」に「時率意獨駕，不由徑路，車迹所窮，輒慟哭而反。」（前掲『晋書』、一三六一頁）とある。

四九 原文「平臺爲客憂思多，對酒遂作梁園歌。却憶蓬池阮公詠，因吟綠水揚洪波。洪波浩蕩迷舊國，路遠西歸安可得。」（前掲『校注』上、五〇一頁）。四句目「綠」は、『校注』では「淥」に作るが、陳伯君校注『阮籍集校注』（中華書局、二〇〇四年六月第一版、北京第二次印刷）によって改めた。

五〇 原文「徘徊蓬池上，還顧望大梁。綠水揚洪波，曠野莽茫茫。走獸交橫馳，飛鳥相隨翔。是時鶉火中，日月正相望。朔風厲嚴寒，陰氣下微霜。羈旅無疇匹，俯仰懷哀傷。小人計其功，君子道其常。豈惜終憔悴，詠言著斯章。」（前掲『阮籍集校注』、二七〇頁）。

五一 原文「東山高臥時起來，欲濟蒼生未應晚。」（前掲『校注』上、五〇一頁）

五二 原文「撥亂屬豪聖，俗儒安可通。沉涵呼豎子，狂言非至公。撫掌黃河曲，嗤嗤阮嗣宗。」（前掲『校注』下、一二五九頁）。

五三 「阮籍伝」に「嘗登廣武，觀楚漢戰處，嘆曰：『時無英雄，使豎子成名！』」（前掲『晋書』、一三六一頁）とある。

五四 原文「昔先友史經臣彥輔謂余，阮籍登廣武而歎曰：『時無英雄，使豎子成名。豈謂沛公豎子乎。』」余曰『非也，傷時無劉，項也。』豎子者，指魏，晉間人耳。」（張志烈、馬德富、周裕鍇主編『蘇軾全

集校注』石家莊、河北人民出版社、二〇一〇年六月、七五八七頁）。

^{五五} 原文「乃知李白亦誤認嗣宗語，與先友之意無異也。嗣宗雖放蕩，本有意於世，以魏、晉間多故，一放於酒耳，何至以沛公為豎子乎。」（前揭『蘇軾全集校注』、七五八七頁）。

^{五六} 原文「阮公雖淪跡。識密鑿亦洞。沈醉似埋照。寓辭類託諷。長嘯若懷人。越禮自驚衆。物故不可論。途窮能無慟。」（前揭『南北朝詩』、一二三三五頁）。

^{五七} 原文「絃歌詠唐堯」（前揭『校注』上、六四二頁）。

第四章
杜甫

はじめに

杜甫（七一―七七〇）は、李白とともに盛唐を代表する詩人であるだけでなく、中国を代表する詩人と言える。では、そのような中国を代表する詩人は、前代の俊賢である「竹林七賢」をどのように捉え、その詩に描いたのだろうか。

これまでなされてきた杜甫の詩に関する研究の多くは、詩の制作年代に重きを置き、その時々の杜甫の感慨や置かれた状況といったことを考察している。これらの研究は、至極当然であり、筆者もそれに異を唱えるつもりはない。しかし本章では、杜甫の詩を考察の対象とはするが、詩の制作年代を考慮せずに進めていく。それは、以下に見ていくように、杜甫が制作し、現在見ることのできる詩の内、「竹林七賢」に言及している詩を見ると、杜甫の「竹林七賢」理解に経年による評価の大きな変化はないからである。そこで小論では、杜甫の「竹林七賢」理解の総和として、「竹林七賢」がどのように語られているかを見ていく。

「竹林七賢」に言及した詩は、四七例見つけることができたが、「竹林七賢」全員に言及していると思われるものは二例、阮籍二八例、嵇康一四例、阮咸四例、山濤二例（全て並称を含める）であり、王戎、劉伶、向秀の三名は言及されている詩を見つけてはできなかった。言及される数に差があることから、まず、第一節にて阮籍に関するものを扱い、第二節にて嵇康に関するもの、第三節にて残りの五名をまとめて考察する。

第一節 阮籍

杜甫の詩において、阮籍はどのように語られるのか。

杜甫の詩に描かれた阮籍を見ていく上で、「途窮」は頻繁に言及され、杜甫の阮籍観を示す重要な語となると思われる。まずは、「阮籍」、「歩兵」、「青眼」など阮籍自身を示していると思われる語を用いた詩を中心にみていくが、やはり「途窮」はそれらの語とともに頻繁に現れる。

まず、「敬んで鄭諫議に贈る十韻」を見る。部分のみ挙げる。

（あなたが）一諾を重んずるのを約束してくれば、
すぐさま私は心を寄せましょう。

あなたは（私が）途が窮まって慟哭しているさまを知っているのだから、

その阮籍のような私を心配してくれるべきではないですか。二

この詩は、諫議大夫の官にある鄭氏に対し、前漢の季布の故事を引いて鄭氏の義気を言い、自身の窮状を阮籍に比して言う。ここで触れられるのが「途窮哭」だが、後藤秋正氏は、杜甫の詩に見える「窮途」を、「あるいは旅先での生活のゆきづまりを言い、あるいは安史の乱以後も各地で戦乱が続く国家の状況とも結びついて自身の進路が見出せない悲痛な心境を表現している」^三と説明している。

また、「窮途」の語が詩に用いられるようになったのは、顔延之「五君詠」からだと言われている^四。顔延之「五君詠」の該当する部分は次の通りである。

人の善し悪しを論じることはないが、
行き詰っては慟哭するばかりだ。^五

後藤氏の指摘に従えば、顔延之「五君詠」より始まる「窮途」という詩語は、他の淵源が見つからない限り、阮籍の故事、さらには阮籍自身を意味しているということになる。
『晋書』卷四十九「阮籍伝」には、次のような記載がある。

ある時気の向くまま一人車に乗って出掛け、わき道を通らずに車を走らせ、道の窮まったところまで行き、慟哭して帰って来た。^六

この記載では、阮籍が思うままには生きられない苦しさが表示されていると考えられる。

杜甫は、先の詩の中で自身の「途窮の哭」の理由として「使者は顔闔の出仕を求めたのに、諸公は禰衡を厭う」^七を挙げている。これは、作品が玄宗の眼に触れ、試験を受けることができたが落第したことを指し、李林甫政権による妨害によって官途に就けないということを行っている。つまり、杜甫は、そのような状況における自身を阮籍に比すことで、阮籍を志がありながらも、外的な要因で、その志を遂げることができない人物として捉えていると考えられる。

また、次の「即事」では、阮籍と「窮途」とに同時に言及している。部分のみ挙げる。

病気がちな司馬相如は起き上がる日がなく、
行き詰った阮籍はいつ醒めるのだろうか。^八

この詩では、阮籍は司馬相如とともに引かれていた。ともに、「病気がち（多病）」「行き詰った（窮途）」で困難を示し、「起き上がる日がなく（無日起）」「いつ醒めるのだろうか（幾時醒）」とその困難な状況を打破できないでいることが言及されている。ここでも阮籍は、司馬相如と共に、杜甫自身に比されていると考えられる。「いつ醒めるのだろうか（幾時醒）」と阮籍が酒に耽溺したことを持ち出していることからすると、行き詰まりの状況にあったから、阮籍は酒によって韜晦したのであって、その時代状況が合えば、酒に耽溺することなく、その才能を発揮したであろうという杜甫の阮籍観を見ることが出来る。そして、その評価は杜甫の自己評価として読み得る。

次の「晦日崔戢李封を尋ぬ」でも、「窮途」には触れないが、阮籍と酒との関係が言及されている部分のみを挙げる。

上古葛天の民は、

天子に心配をかけることはなかった。

今日では阮籍のような人々（自分たち）が、

酒に耽溺することで自身の身の安全を図っている。九

この詩でも、阮籍は杜甫とその友人に比されており、飲酒は韜晦の手段であったとの認識が見られる。さらに、この飲酒も最善の行為ではなかったという認識が、阮籍に言及する直前の二句から読み取れる。現代（杜甫にとっての）は戦乱の世である。そのような世において、天子を手助けするのではなく、自分の身の安全を図ろうとするのであるから、己むを得ず行う行為であると考えられる。しかし、杜甫は実際に酒に耽溺して身の安全を図ろうとしているのではない。現代（杜甫にとっての）は戦乱の世で、天子が心を傷めている状況である。杜甫は、何かを成し得る立場にいないので、何もできないのは当然である。このような何もできないでいる自分が友人と酒を飲むことを、阮籍の酒による韜晦に重ねている。つまり、友人を訪問し、共に酒を飲んでい、ただそれだけのことを、阮籍の酒による韜晦を持ち出して誇張して表している。

『晋書』「阮籍伝」に次のような記載がある。

阮籍は本々世を救おうとする志を持っていたが、魏晋の時代では、世の中に難事が多く、名士でその生を全うする者が少なかったので、（阮籍は）世の中のことに関わらず、常に酒に酔っ払って

いた。一〇

このような阮籍の飲酒に対する、ただ耽溺したのではないという肯定的な評価が一般的となっていたことを背景に、自身の国を思う姿勢を誇示しているとも考えられる。

次の「早に發す、射洪縣南途中の作」では、直接「窮途」「途窮」とは言わない。しかし「阮籍途」というように、「窮途」「途窮」とほぼ同じ内容を言っていると考えられる。部分のみ挙げる。

茫然と阮籍と同じような行き詰った途に立ち尽し、

さらに楊朱のように向かう方向に迷って涙を流す。一一

ここでは、『荀子』の楊朱の故事が共に引かれている。行き止まりや岐路という先の見えない不安を表現するのに、自身を阮籍、楊朱に仮託して表現していると考えられる。

次の「秋日荆南の述懷三十韻」では、「阮籍」と言う代わりに、「歩兵校尉」から採られた「歩兵」が使われている。部分のみ挙げる。

(わたしは) 前途に迷っては阮籍のように慟哭し、

眠れず寝返りを打っては王粲のように哀しんでいる。一二

この詩では、阮籍の「途窮」の故事による自身の行き詰まりに加えて、戦乱によって荒廃した長安を詠った王粲^{一三}が共に描かれている。行き詰まりという自身の境遇は、これまでと同様だが、そこに王粲を加えることによって、志を持ちながらも不遇という属性に加えて、戦乱を嘆くという属性を示しているとも読める。

また、次の「秦州雜詩、二十首」其十五のように、「途窮」とは言わず、「阮籍」の語だけで、「途窮」をも合わせて表現しているものもある。部分のみ挙げる。

阮籍のような私も(東柯へ行けば) 興を覚えることが多いだろうし、

龐徳公のように山に隠れて世間に帰ることはない。一四

この詩は、秦の地にあつて、東柯へ行くことへの思いを述べており、前半四句では、現状を述べ、後

半四句にて、東柯に住んだらという期待を述べていると思われる。その第五句に、阮籍への言及がある。「(東柯に行けば)興を覚えることが多いだろう」という言表は、現状では興を覚えることは少ないということを含意している。そのような杜甫の置かれた状況が、行き詰った阮籍のようだとして自身に比していると考えるのが適切である。また、龐徳にも触れることにより、隱棲への気持ちを表していることも考えられる。

また、人口に膾炙した、青眼・白眼を使い分けたという次の故事から「青眼」を引いているものもある。

阮籍は青眼と白眼を使い分けることができ、礼俗の士を見るときは、白眼で対した。一五

この記載では、阮籍が礼俗の士を憎んだことが表現されている。

次の「巫峽の敝廬にて、侍御四舅が別れて澧朗に之くに贈り奉る」は、「阮籍」の代わりにこの「青眼」を用いている。

赤眉はまだ世を乱しており、

青眼(私)はただ行き詰っている。

桃源の客に伝えて欲しい、

自分も今戦乱を桃源へ避けたあなたたちと同じように世を避けていると。一六

この詩は、舅である崔某が澧州・朗州へ行くのに贈った詩である。ここでは、阮籍を自身に比してはおらず、むしろ杜甫が人々に迎え入れられていることを語っている。「青眼」とは、阮籍が俗物を白眼視し、自身の気に入った人物には青眼で応対したということから、杜甫は阮籍によって自身の価値を表していると考えられる。また、続く句にて言うところからすると、後半部分は、阮籍にも認められるような価値ある自分(杜甫)は、阮籍や桃源の客と同じように、戦乱によって行き詰まり、世を避けているのだと自身に価値を与えつつ、現状に対する自己弁護をしていると考えられる。

次の「短歌行、王郎司直に贈る」も「青眼」を用いている。末尾の部分を挙げる。

(私は)高らかに歌い青眼でもって君との別れを惜しんで眺めやる、

眼中の人よ、私は老いたなあ。一七

この詩は、司直の王某に贈った詩であるが、ここでは、阮籍を自身に比して、「青眼」の語を用いることよって、王某が俗人ではないという評価を与えている。

他にも、同様に「青眼」やそれに類する語を用いたものがいくつか見られる。しかし、それらの詩は、「青眼」によって阮籍を描くというよりも、阮籍から離れ、一つの熟語として用いられていると思われるので、ここでは扱わないこととする^{一八}。

次の「嚴公が野亭に寄せ題せし作に酬い奉る」は、先に見た「青眼」の故事に見られる阮籍の礼法の士を憎んだという属性を用いたものである。

謝安のようなあなたは山水に登臨する費用を惜しまないが、

阮籍のような私に礼法に叶っていないということがわかりません。

わざわざ我が家にお越しくさるということですから、

草が繁って見えなくなった小道を手入れしておきましょう。一九

この詩は嚴武が寄せてくれた詩に返事をした詩である。ここでは、嚴武を謝安に、杜甫自身を阮籍に比している。これは、嚴武の詩「杜拾遺の錦江の野亭に寄せて題す」の「興を発したら必ず駿馬を馳せて君のところへ伺おう」^{二〇}に対する杜甫の返事である。通常ならば、成都尹である嚴武の下に杜甫が行くはずである。自身を礼法の士を憎んだ阮籍に比すことよって、官位の低いものが高官のところへ行くという礼法に適った行動から逃れ、その礼法に則らず、来てもらうということ、「わざわざお越しくさる（枉沐）」と言っているのだろう。

ここまで、杜甫の阮籍に言及した詩を見てきたが、多くの場合において、杜甫は自身を阮籍に仮託している。また、その多くが「途窮」と共に言及されることから、杜甫が阮籍に言及する主な要因は、このような阮籍の志を有しながらも果たせなかったという属性と考えられる。なお、「示姪佐」では、「嗣宗」として阮籍に触れているが、阮籍のことより、阮咸に対して言及の比重があると思われるので、ここでは論じない。

ここからは、先に見た「途窮」の使用は、顔延之「五君詠」から始まるとする後藤氏の指摘を前提に、「阮籍」や阮籍を示すような語は出てこないが、「窮途」「途窮」を用いた表現が見られる作品を確認し

ていく。

まずは「章留後侍御に陪して南樓に宴す」の部分を挙げる。

命令を出すころにはこの江城も暗くなり、

紅い蠟燭のもと私は詩を書き付ける。

この身体は醒めてはまた酔っているという状態だが、

行き詰って慟哭するような真似はしない。二一

この詩は、東川節度使の留後で、また侍御史でもあった章彝の供をして梓州城の南樓で酒盛りをしたことを詠っている。「しばしばごちそうにな（屢食）り、「馬まで借りて乗る（仍騎御史驄）」といった厚遇を受けているので、阮籍のような窮状にある私だが、あなたのおかげで慟哭するようなことにはなっていないという感謝の気持ちを表している。

「途窮」と言いつつも、阮籍とは違って官途に就けるように運動している次の「集賢院の崔于二學士に留贈し奉る」のようなものもある。

このすばらしき御代に老いていく私だが、

行き詰ってどうすることもできず宮廷の門番に叫んだのだ。

その意気は星のあなたへ衝き入り、

その言葉は帝王の感情をも動かした。二二

勅旨による特別試に応じるために献呈した「三大礼賦」が玄宗に認められ、試験を受けることができず、結果は落第。この詩は、去るに及んで、集賢院の學士、崔国輔・于休烈の二人に送った詩である。

内容は、作品が玄宗の眼に触れ、試験を受けることができたが落第し、李林甫政権による妨害をほめかしつつ、励ましてくれた二人の學士に謝意を示す。「宮廷の門番に叫ぶ」とは、作品を献呈したことである。そこに至る状況が、「行き詰まり（途窮）」と表現されているが、皇帝に認めてもらい、任官の道を求めるといふことは、権力の中枢に近づくこととみなされた阮籍の事跡とは合わない。であるから、杜甫の詩における「行き詰まり（途窮）」は、政権の中枢に近づくことを拒んだ阮籍の精神性は閑却され、志がありながらも外的要因によって任官できないという状況のみを抽出して表現されていると思われる。

次の「哥舒開府に投贈す二十韻」も、同様に精神性を閑却して用いられている。部分のみ挙げる。

春草が枯れるのを見送ったのはもう幾年か、
今日の私は日暮れの途が行き詰っている状況です。

孫楚のような反骨の士を幕僚に留め、
兵卒の間から呂蒙を見出したあなた。

私にあるのは身を守る一振りの長剣ですが、
あなたの本陣のそばにある崆峒山にそれを立てかけたと思います。二三

この詩は、当時安祿山と並んで最も有力な軍人である哥舒翰に「投贈」、つまり、先立って交際していなかった人物に贈った詩である。内容は、哥舒翰への賛美と自述であるが、「行き詰まり（途窮）」とその状況からの脱却を願う部分がある。苦しい現状を伝え、抜擢を期待している。「日暮れの途（暮途）」は、楚の伍子胥の嘆きを指すと思われるが、それに「窮」を加えて、「行き詰まり（途窮）」の意味をも付け加えている。ここでは、現在の窮状と官職への願望が語られている。

このように、杜甫は阮籍の「途窮の哭」の故事の精神性を閑却し、志がありながらも外的要因によって官途に就けないという状況を指して用いていると考えられる。二四

顔延之が「五君詠」にて用い、阮籍の逸話を示す「途窮」ではあるが、「阮籍」や阮籍を示すような語と共に用いられるのではなく、単独で「途窮」（または、「窮途」）を用いる場合、阮籍の事跡から離れて、様々な要因による現在の窮状を示す熟語となる傾向が強い。無論、顔延之が阮籍の事跡を「途窮」と詠ったことに端を発するのであるから、阮籍の事跡と全く関係がないということは考えにくい。しかし、杜甫は「途窮」によって示される阮籍の事跡をそのまま自身に置き換えるだけではなく、自身の置かれた境遇や状態などを付け加えて用いていることから、必ずしも阮籍を示すのではなく、困窮などの状態を示す熟語として用いられていると考えられる。

「途窮」を単独で用いた例からは、実際に阮籍自体を示す語を用いた例のような、杜甫の阮籍への仮託を多く見ることはできない。しかし、この「途窮」を使用する例が多く見られることから、杜甫がこの語を好んで用いていたことが考えられる。その背景には、やはり杜甫の阮籍への仮託があると思われる。

杜甫の阮籍への仮託を示す次のような興味深い例がある。次の「丹青引」は、「青眼」に関わる内容である。部分のみ挙げる。

將軍の絵は神妙さを備えており、偶然にも素晴らしい人物に出会えばその真の姿を描くだろう。

しかし今は兵乱の最中に漂泊し、

しばしばただのつまらない人物を描いている。

戦乱によって行き詰まり（その絵画は）俗眼に受け入れられず、將軍より貧乏なものはないという状況である。

昔から盛名を担う人物は、

いつも不遇がその身に付きまといっているものだけだ。二五

この詩は、唐代の著名な画家、曹覇に贈られた詩であり、詩全体を通して、曹覇の描く絵の素晴らしさを詠っている。

全体の流れとしては、曹覇の先祖である魏の武帝・曹操から説き起こし、書から絵画へ進み、その絵の巧みさを表すものとして、凌煙閣の功臣像と玉花驄の故事が語られる^{二六}。

次に、その技術を受け継ぐものとして韓幹が挙げられている。韓幹は、「惜しいことに姿は描くがその精神を描かず、駿馬の意気を萎ませてしまっている（幹惟畫肉不畫骨、忍使驂驪氣凋喪）」と否定的に描かれるが、これは曹覇の卓越さを示すための否定的な評価だろう。

そして、挙げた詩の末尾部分では、天子にたびたび拝謁するという栄光から一転、安史の乱による漂泊と窮乏を描いて終わる。

この詩は、一見曹覇を阮籍に比しているように見えるが、次のような見方が存在する。

私が思うにこの詩において公（杜甫）は曹覇を借りて自身を述べている。二七

これは、明の王嗣奭の「丹青引」評である。このように、「丹青引」の末尾の一段は、曹覇に贈ったというコンテキストから、曹覇を描いてはいるが、自述であるとする見方がある。このような見方によれば、杜甫が自分と阮籍を重ね合わせているとも言える。

杜甫が自身と阮籍を重ね合わせていることに注目し、この詩を杜甫の祈りという観点から見れば、「素晴らしい人物に出会えばきっとその真の姿を描くだろう（偶逢佳士亦寫真）」とは、杜甫自身の素晴らしさを見抜いてほしいという意味と考えられる。また、「戦乱によって行き詰まり（その絵画は）俗眼

に受け入れられず（途窮反遭俗眼白）」とは、杜甫自身も曹覇と同じような境遇であり、同様に人々から受け入れられていないという意味と考えられる。そして、「昔から盛名を担う人物は、いつも不遇がその身に付きまといつているものだということを見るばかりである（但看古來盛名下，終日坎壈纏其身）」と言うところからすると、杜甫は自身が、書、絵画における曹覇の卓越さを認めているのと同じように、自身に何らかの価値を認めて欲しいという願望、もしくは、自分にも何らかの価値があるという自負を述べていると考えられる。

このような杜甫の祈りは、曹覇に贈られた詩という制約から、直接的には表現されない。つまり、描かれた曹覇と描いた杜甫を重ね合わせて読んで欲しいという控えめな表現となっている。そして、この詩には異文が存在する。末尾から三句目、

將軍より貧乏なものはない状況である（世上未有如公貧）。

とあるところが、『文苑英華』では、

他の人は富み今や自分だけが貧しいという状況にある（他富至今我徒貧）。二八

という異文を挙げている。この異文における「我」は、詠われている曹覇のことであるが、先に見たようなこの詩が自述であるとする見方で考えれば、「我」は杜甫をも意味していると考えられる。自述としては露骨になるが、仮託という観点からすれば、興味深い異文である。

この異文と「本文」との先後関係は不明であり、異文が杜甫自身の手によるものかどうかどうも不明である。この異文が杜甫自身の語であるとすれば、先に見たように杜甫が自身を阮籍に仮託している一つの例と考えられる。それに対して、この異文が他者の語であるとすれば、杜甫の阮籍への仮託を過剰に盛り込んだものと思われる。

杜甫が阮籍に自身を仮託していることは、これまで見て来た例から読み取れる。しかし、二例だけではあるが、阮籍を否定しているものがある。

次の「大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿塘峽を出づ、久しく夔府に居り、將に江陵に適かんとして漂泊す、詩有り凡そ四十韻」では、表面上での否定が見られる。部分のみ挙げる。

私は素晴らしい時代に生を受けたので、

行き詰って慟哭することを本分とはしない。

今は病に伏せて旅客となつてゐるが、

天子の恩を受け早くから傍に仕えたものだ。

自然に背かず（思ったことを言つてしまひ）天子と論争し、

正直な気持ちから地方の地を乞うて中央を去つたのだ。二九

この詩では、阮籍の生きた時代と現代（杜甫にとつての）とを比較し、真似をしないということ言っている。それでは、行き詰るのはどうしてか。房琯の事で、「天子と論争し（廷争）」、その結果、「中央を去つた（乞江湖）」からだと言つた杜甫が、これまでの人生を振り返り、自分の納得できる解釈をしていると考えられる。「行き詰って慟哭することを本分とはしない（誰分哭窮途）」と言うからには、行き詰つてゐるといふ状況にあると言ふことと同じであり、時代は違ふと、自分は阮籍と同じような志をもつた人間だといふ自負が見られる。つまり、ここでの否定は、表面上での否定であり、阮籍自体やその属性を否定しているのではなく、杜甫に阮籍という仮託はそのままに、生きた時代状況が異なることから、同じように志を持ったといふ属性だが、その行動も異なるということ述べていると考えられる。

次の「秋日夔府の詠懐、鄭監李賓客に寄せ奉る一百韻」は、「途窮」「窮途」とは言わない。しかし「途中」といふ表現を用いて、同様の内容を言つてゐると思われる。部分のみ挙げる。

（この途を行く私は）行き詰つて慟哭して帰つた阮籍ではなく、
筏に乗つて西域へ向かつた張騫のようである。三〇

この詩では、行く末の不安ではなく、希望を抱いてゐると考えられる。また、「張騫のよう」だと阮籍よりも張騫に自身を比しているが、「有感五首」其の一に「どこにも張騫のような人物を見つけないとができない（それほど素晴らしい人物だ）」^{三〇}とあるように、杜甫は張騫を評価していることがわかる。つまり、志を持ちながらも行き詰まつては泣いてゐた阮籍よりも、遙かな西域へ旅立つて行つた張騫をより評価しているといふことである。

杜甫は、先祖に杜預や杜審言など有名な人物を持つてはいたが、杜甫が生まれたころには典型的な没落士族であり、有力な後ろ盾もおらず、科擧にも落第した。生涯の内、就いた官職も、ほとんどが地方の官職であり、中央の官職に就いたときも、すぐに左遷され、志を果たす機会は与えられなかつた。こ

のような生涯とその詩からすると、杜甫は生涯を通して志を果たせないことを嘆いたと言っても過言ではないだろう。

そんな杜甫にとって、「志を果たした自分」という自己像は、常に理想であったと考えられる。先に見た張騫は、杜甫の「志を果たした自分」として夢想する一つの例であろう。

その理想とする「志を果たした自分」に至れぬ、今現在の自分を仮託して、自身の素晴らしさを喧伝するのに適した人物としたのが阮籍だと考えられる。杜甫にとって阮籍は、もちろんただの無能な酒飲みで、街を車でうろついては泣いて帰るといふ狂人なのではなく、志を持ちながらも時代や境遇のせいで、世のために力を発揮することができないという存在と思われる。このように考えれば、前詩に見るような阮籍に対する否定は、志を果たせなかった阮籍の自分に対する否定を示していると考えられる。阮籍を否定しているように見える詩においても、阮籍への仮託ということは変わらず、むしろ、阮籍的自分に対する否定ということで、より強く仮託していたのかもしれない。

第二節 嵇康

前章では、「窮途」は阮籍を念頭に置いて用いられたものという前提に立って見てきたが、念頭にあったのは阮籍だけではないと思われる。次の「悶を遣る、嚴公に呈し奉る二十韻」のようなものがある。

あなた（嚴武）は寛容で不器用な私をそつとしておいてくれ、
行き詰った私を馬の毛並みを整えるように世話してくれる。三二

この詩は、前出の嚴武に奉った詩であり、嚴武に対する感謝を述べている。しかし、「どうして（嚴武の）幕下に来てしまったのか（胡為來幕下）」、「座ることによる足の痺れ（坐痺）」、「頭痛（頭風）」、「他課の人と意見の衝突がある（分曹失異同）」、「亀が網に引っ掛かっているようだ（信然龜觸網）」、「籠の中から外を覗いている鳥のようだ（直作鳥窺籠）」と官に就くことによる束縛を嫌っているようなことも同詩にて語っている。

このような束縛を嫌う言葉は、阮籍よりも嵇康の方が近しいと思われる。次の「河南の韋尹丈人に寄せ奉る」では、さらに嵇康に近づく。部分のみ挙げる。

あなたの榮達は私とは地が絶たれたほどに差があり、

勝手気ままである私は途が窮まったように感じられる。

どぶろくを好んだ陶淵明を尋ね、

丹砂を煉る葛洪を訪ねるように隠逸を試みた。

この世界に粗末な服を漂わせ、

霜や雪のような白髪がざんばら髪に増えてきた。

大いなる天地の間に落ちぶれて、

うろつき回ってみてみたが道術が身についたわけではない。三三

この詩は、河南尹である韋濟は栄達したが、そのような立場を超えて自分を気にかけてくれることに感謝して寄せた詩である。官界への道が閉ざされていることに対する絶望感を述べており、官途が断られたことによって隠逸の真似事をしていくという自身の状況を指して、阮籍の当時の状況と重ねているとも考えられる。つまり、阮籍の隠逸は司馬政権への出仕を逃れるための方便だという考えである。

以上は、杜甫が自身を阮籍に比しているとした場合の解釈となる。もう一つ、嵇康に比した場合の解釈を考えてみたい。

まず、第二句「勝手気まま（疏放）」であるが、向秀は「思舊賦」の序において次のように言っている。

しかしながら嵇康の志は遠大だがむらがあり、呂安の心は广大だが気ままである^{三四}

向秀は、嵇康の志、呂安の心を評している。それぞれ挙げられた「遠大（遠）」と「むら（疏）」、「广大（曠）」と「気まま（放）」の内、否定的な評価である「疏」と「放」を合わせたものが、「疏放」である。つまり、杜甫は自身のことを嵇康や呂安のように遠大な志、广大な心を持つてはいるが、その志はむらがあり、気ままな人物であると主張していると考えられる。

そして、嵇康は、「山巨源に與ふる絶交書」において、次のように言っている。

自分で推測してみたところ、道が尽き行き詰ってしまうことははっきりしている^{三五}

嵇康は、官途に就いた場合を推察して絶望している。ここで、嵇康がその「山巨源に與ふる絶交書」において「途窮」と言っていることから、「勝手気ままである私は途が窮まったように感じられる（疏

放憶途窮」とは、嵇康を念頭において述べられたものとも考えられる。しかし、嵇康は山濤に自身の後任として推薦されたことに対して絶交書を書いた。杜甫が官職を望んで得られない状況とは異なる。それでは、どのような解釈が可能か。

筆者が可能だと思う解釈は、杜甫は、嵇康が推薦を拒んだことなどを全て理解した上で、それを転倒し、「嵇康は官に就きたくなくて絶望したが、私はその反対に官に就けなくて絶望しています」と述べているとすることだろう。

これまで見てきた例からもわかるように、もちろん、「途窮」は阮籍と強く結びついている語であることから、阮籍を全く念頭に置いていなかったとすることはできない。であるから、杜甫は、阮籍とともに嵇康をもその念頭においていたと考えたい。杜甫の嵇康に対する考えを見ることにより、杜甫が嵇康への思慕も抱いていたことを確認していく。

まずは、「比部の蕭郎中十兄に贈る」を見る。部分のみ挙げる。

山陽にて鍛冶をして暮らしていた嵇康や、

野谷の村で牛を飼っていた愚公のように暮らしたいのです。

どうしてあなたのような長者の車を迂回させて訪問させることができましょうか、

故郷へ帰って隠居し身を運命に任せようと思いません。三六

この詩は従兄の蕭某に贈った詩である。嵇康の鍛冶の故事が引かれている。ここでは、二つの方向が考えられる。一つは、「どうしてあなたのような長者の車を迂回させて訪問させることができましょうか」の句と合わせて考えれば、嵇康が向秀と共に鍛冶をしており、鍾会の訪問を受け入れなかったこと三七を念頭に置いているとする解釈である。蕭某は従兄であるから、訪問を受け入れないということとはなかったと思われるので、官職にある従兄に対して、うだつの上がない自分を卑下していると考えられる。もう一つは、「故郷へ帰って隠居し身を運命に任せようと思」うの句と合わせて考えれば、嵇康が政治の世界に見向きせず、鍛冶を好んでやっていたように、自分も好きなことをして暮らそうと表明していると考えられる。しかし、二つの解釈は互いに矛盾するものではないので、両方を含意していると考えたい。

嵇康が刑死させられたのは周知のことだが、杜甫も嵇康の死について二つの詩にて触れている。一つは、「酔ひて馬より墜つるを為す、諸公酒を攜へて相看る」である。部分のみを挙げる。

どうして馬を走らせて来て見舞う必要があったのか、君も知っているだろう嵇康が養生論を書いたのに殺されたのを。三八

この詩は、酒を飲んで馬から落ちた杜甫を、友人が見舞いに来てくれたことを描いた詩である。ここでは、嵇康が「養生論」を書いたということ、刑死させられたということとを繋げて、「養生論」を書くのが長生きしない人もいるし、老いた身で馬から落ちても死なない人もいる、寿命は天命だと言っていると考えられる。嵇康の「養生論」と刑死は、関係のあるものではなく、「養生論」の養生は、刑死しないための養生ではなく、道家の養生である。嵇康の生涯の内の二つの要素を合わせて、友人に対するユーモアとして提示していると考えられる。

もう一つは、「興を遣る五首」其の一である。部分のみ挙げる。

龍は冬の三ヶ月を穴に竈って過ごし、

老いた鶴は万里の大空を飛ぼうという心を抱いている。

昔の俊賢も、

まだ時運に乗れていなかったときは自分が現今を眺めているような気持ちだったのだろう。

嵇康は良い死に方をしなかったが、

孔明はわかり合える友人を得た。三九

この詩は、古の人物のことに触れて、自身の気持ちを述べた詩である。「老いた鶴は万里の大空を飛ぼうという心を抱いている」と、老いてはいるが志は持っているという自負を語り、「昔の俊賢も、まだ時運に乗れていなかったときは自分が現今を眺めているような気持ちだったのだろう」と古の賢俊に思いを馳せる。嵇康は、その俊賢として言及されている。しかし、嵇康は賢俊のうちでも良い死に方ではなかった人物として描かれている。

次の「蕭二十使君に贈り奉る」は、友人関係を表すのに、嵇康を引いたものである。

（あなたは厳武にとって）張孟のように家事を取り仕切る人物であり、

（私にとって）嵇康が息子を託した友人のような存在である。四〇

この詩は、厳武の幕下にあったときの同僚蕭某に贈った詩である。この「友人」とは、息子の嵇紹を

託した山濤だと思われる。友人関係を表現するには、「管鮑の交わり」や「刎頸の交わり」など、古来用いられてきた典故がある中、嵇康と山濤を選んでいるところに、自身を嵇康に比すというこの重要性が示されていると考えられる。

嵇康を自身に比しているものもある。「李人祕書に贈り別る三十韻」の部分のみを挙げる。

（君が）司馬相如のように病気がちだと言って退いてから、

（わたしも）嵇康のようにあまり人と交遊しなくなった。四一

この詩は、李某に贈った詩である。ここでは、李某を司馬相如に比し、自身を嵇康に比している。嵇康が妄りに人と交際をしなかったことを持ち出して、自身に比している。

次の「同谷縣より發す」では、直接的に嵇康に言及してはいない。だが、嵇康の「幽憤詩」を引いている。

普段から無精で世渡りの下手な私だが、

偶然にも隠棲するのに良さそうな地に出会った。

行くも留まるも自分の思いと異なり、

林の中に所を得た鳥を仰いでは恥ずかしく思う。四二

この詩は、隴右から劍南へ赴くことを描いている。直接的には嵇康に言及していないが、嵇康の「幽憤詩」を引いている。「自分の思いと異なり（與願違）」がそれである。「幽憤詩」の関係する部分は次の通りである。

樂しげに鳴き交わす雁は、

翼を羽ばたかせて北へ飛ぶ。

季節に従って移り行き、

満ち足りて心配することなどないのだ。

ああ 私は憤り嘆く、

雁と比べるべくもない。

状況は私の思いと食い違い、

囚人として獄に繋がれている。
苦難も栄光も天命なのだから、
求めても仕方がないのだ。四三

ここで重要と思われることは、どちらも鳥四四を自由の象徴として描いていることであり、また、置かれた事態が自分の思い通りにならないという嘆きである。
また、「幽憤詩」だけでなく、「山巨源に與ふる絶交書」からの引用もいくつか見られる。
まずは、「張十二山人彪に寄す三十韻」である。部分のみ挙げる。

自分は無精もので名声によって世に出たはいいが一身の処置を誤り、
東西を走り回るのはめになって自分のありのままの姿を失ってしまった。四五

この詩は、隱者の張彪に送った詩である。この「無精もの（疏懶）」は、嵇康が「山巨源に與ふる絶交書」にて自分自身を説明するのに用いている（表記は「疏懶」）。

性格は怠けもので、身体はなままって緩んでおり、頭と顔は月の半分は洗わず、ひどく痒くなければ、身体を洗いません。四六

杜甫には、他にも「疏懶」を用いて自身の無精さを説明しているものがある。「佐山に還りて後寄す、三首」其の一の部分のみ挙げる。

お前（甥である佐）は心得ていてくれる、
この無精な叔父はお前に手を引いてもらう必要があるということ。四七

この詩は、甥の佐が山に帰ったあと寄せたものである。ここでも、杜甫の無精さの説明に用いられている。

阮籍のところでも触れた「秦州雜詩、二十首」其十五でも「疏懶」に触れている。該当箇所のみ挙げる。
東柯では思いつきり無精をするつもりなのだから、

鬢の斑になった白髪を切ることなんてやめよう。四八

ここでは、無精をすることへの期待を述べるのに用いられている。次の「屏跡三首」其の二は、髪に関するものである。部分のみ挙げる。

子供は学業を怠るがそのままにしており、いつも貧乏だが妻に心配させたままにしている。

生涯ずっと酔っぱらっているのが願いで、

無精で一月中頭に櫛を入れることはない。四九

この詩は、浣花草堂での生活を描いている。これは、頭髮など身体の手入れということの一つの範疇に括れば、先ほど挙げた「山巨源に與ふる絶交書」の「頭と顔は月の半分は洗わず（頭面常一月十五日不洗）」を踏まえていると思われる。

次の「傷秋」でも髪に関して触れられている。

私は怠惰で気ままだから髪もたまにしか櫛を入れず、
艱難辛苦を経て帯もたるんでしまった。五〇

前詩と同様に「山巨源に與ふる絶交書」の「頭と顔は月の半分は洗わず（頭面常一月十五日不洗）」を踏まえていると思われるが、ここで言う「怠惰で気ままさ（懶慢）」も、「山巨源に與ふる絶交書」の「私の大雑把さは礼儀に反してしまいが、怠惰と気ままさは私の中で結びついている」^{五一}を踏まえていると思われる。

ここまで、嵇康に関わるものを見てきたが、杜甫がその詩において、嵇康が自身を説明した語句を用いて自身を説明している例がいくつか見られた。杜甫は、阮籍のところで見たように、度々志を果たせぬことを述べているが、嵇康も志を果たせぬことを述べている。「幽憤詩」に見える例を挙げれば、

内を省みては平素の志に背き、

外に対しては良友に恥ずかしく思う。五二

とあり、また、

私一人がどうして、

志を抱いても遂げられないのか。五三

とも言っている。つまり、嵇康は志を果たせぬまま、その生涯を終えた人物であり、杜甫は、自身が志を果たせぬことの内在的な原因の一つとして、嵇康と同じように「無精」という属性を挙げていると考えられる。

杜甫は、その絶頂期と言える、中枢に近い左拾遺の職にあつたとき、房琯を擁護したことでも左遷させられている。良かれと思つて言つたことによつて、良くない結果を招いたということを、「至慎」^{五四}と評され、情勢を鑑み、口を閉ざすことができた阮籍のように黙つていくことができないと自己評価していた可能性がある。

この点に関して、阮籍と嵇康に対する杜甫の考えの差異は、どのようなものだったのだろうか。「衡州に入る」に次のような句がある。

私は嵇康を師とするものであり、

世間では郴州掾の張勸のことを賢人だと評している。

郴州へ行ったら質素な家を樂土に建て、

その張勸が出世するのを眺めよう。五五

この詩は、潭州にて乱に遭い、衡州に逃れ、郴州に行くことを考えていること描いた詩である。この「嵇康を師とする」は「山巨源に與ふる絶交書」の次の言説を踏まえていると思われる。

阮籍は人の欠点を口にすることがなく、私はいつも彼を師として学ぼうとしているが、未だに及ぶことができません。五六

「衡州に入る」の「嵇康を師とする」ということが、嵇康の言説を典故として用いられていると考え

れば、次のように考えられる。

嵇康は、「人の欠点を口にしたことがない」阮籍を師として学ぼうとした。杜甫は、その嵇康を師として学ぼうとしている。つまり、同じく志を果たせなかった阮籍と嵇康ではあるが、杜甫は、阮籍のように「至慎」と評される態度をとることができず、思ったことを口にしてしまうという嵇康を師としたいと考えていたということである。

また、もう一つの方向が考えられる。杜甫がこれまでの人生を振り返ったときに、自分自身の有する属性が、「無精」であり、思ったことを言ってしまうということであったことに気づき、それが嵇康に似ていると判断したという方向である。

以上のような二つの方向が考えられるが、どちらにも共通するのは、杜甫の謙遜という意識である。前者では、私は嵇康のような人間であり、阮籍のようにはなれませんという謙遜であり、後者は、思ってみれば私は嵇康のような属性を持った人間でしたという謙遜である。

阮籍が志を果たせなかったのは、先に見たように、外在的な理由によると杜甫は捉えていた。嵇康の場合は、その無精さ、思ったことを口にしてしまうという内在的な理由である。杜甫にとっては、外在的にはその出自、李林甫政権による妨害、安史の乱といった理由があり、内在的には、その無精さ、思ったことを言ってしまうということが、杜甫自身の言葉から読み取れる。実際に、杜甫がどの程度無精であり、どの程度思ったことを口にしたのかは知ることができない。しかし、自身を謙遜して示す人物として嵇康という存在が考えられていたと考えられる。

杜甫の阮籍と嵇康に対する捉え方は、同じように志を果たせなかった人物ではあるが、その要因に外在的、内在的という差異が見られる。

では、その阮籍と嵇康が同時に引かれた場合を見てみたい。阮籍、嵇康を並称して言及している例は二つある。まずは、「台州の鄭十八司戸を懐ふこと有り」を部分のみ挙げる。

これまで魑魅を防げと遠方へ流された人々は、

その多くは才名が高かったためである。

あなた（鄭虔）は昔の嵇康・阮籍のような人物であり、

そのためにさらに世俗のものに憎まれたのだ。五七

この詩は、台州に司戸として左遷された友人鄭虔を思って詠った詩である。これは鄭虔を、才名があ

り、嵇康・阮籍のように世俗を超越した人物として評している。次に「台州の鄭司戸蘇少監を哭す」を見るが、これも部分のみ挙げる。

私は才能があまりなかったが交際を許され、

お二人に追随したがそれは形骸に囚われない精神的な交遊であった。

お二人は昔の班固・揚雄のようにその名声は盛んで、

嵇康・阮籍のように超俗しては互いに必要とした。五八

この詩は、前詩に登場した鄭虔と秘書少監であった蘇源明とを哭した詩である。ここでは、二人との交遊が描かれている。これも前詩と同じように鄭・蘇の二人の「超俗」という属性を、嵇康・阮籍を引いて評価している。

以上、阮籍・嵇康を二人同時に言及している例を二つ見た。一人ずつ言及する場合では、世俗を超越していたという評価を持ち出すことは少ないが、並称した二例は両方とも超俗という属性について触れている。これは、阮籍や嵇康を同時に引くことによつて、その個人の属性が薄まり、共通の属性、つまり「超俗」という属性が前面に出てきていると思われる。また、阮籍、嵇康の二人を引くときは、「嵇阮」となっており、「阮嵇」とはなっていない。二例だけで判断できないが、「嵇康を師とする」と言っていることから、杜甫は、同様に志を果たせなかった人物であっても、嵇康の方により親しみを覚えていたのかもしれない。

第三節 その他の五人

前章まで、言及の多く見られた阮籍、嵇康の二人を考察してきたが、この章では、言及のあまり見られなかった残りの五名を見ていく。

まずは阮咸である。「八哀詩、故の著作郎、貶台州司戸、滎陽の鄭公虔」の末尾に次のようにある部分のみ挙げる。

百年と言われる生涯において私は生き残り君は死んでしまった、
残されたさびしい私は誰を頼ったら良いのか。

君はいなくなつてしまつたが阮咸とも言うべき君の甥がいる、

君の甥の進退は私と同じように世の網に引つ掛かって左遷させられている。
後日江陵へ君の甥を訪ねるときは、

君への哀しみを含みつつ君の代わりに私の漂泊の身の上話を聞いてもらおうと思う。 五九

前節にも登場した友人鄭度を哀しんでいる。ここでは鄭度を阮籍、その甥を阮咸に比して、それぞれを評価していると考えられる。この叔父、甥の関係を阮籍、阮咸に比している例がいくつも見られる。次の「姪佐に示す」もその一例である。部分のみを挙げる。

阮籍には多くの子供、甥がいたが、
その中でも阮咸が賢いと前から思っていた。 六〇

この詩は、甥の佐に示した詩である。ここでの阮籍は杜甫自身を指し、阮咸はその甥の佐である。自身と甥の関係を阮籍と阮咸の関係に比して、甥の佐を評価していると思われる。

次の「忠州の使君姪の宅にて宴す」も叔父、甥の関係を述べている。部分のみ挙げる。

我が杜家の血を引く甥は中央から出て刺史となっている、
他郷ではあるが今日はここで宴会だ。

叔父、甥の関係であるので阮咸に比すべき甥の家で遊んでいるのであって、
この先の湖灘という難所を恐れているわけではない。六一

この詩は、忠州刺史である甥の宅で宴会をしたことを詠った詩である。この甥は前詩に登場した甥の佐と同じ人物ではないと思われるが、ここでも阮籍、阮咸の関係を引いている。

次の「阮隱居に貽る」は、叔父、甥の関係ではなく、阮氏一族を引いている。部分のみ挙げる。

陳留の風俗は衰え、
傑出した人物は世間において数えるに足るものはいない。

ところがこの秦州にてあなた（阮昉）と知り合った、
あなたこそ同じ阮姓である阮籍や阮咸の風格を継ぐ人物である。 六二

この詩は、隱者の阮昉に贈った詩である。ここでは、阮昉を評価するのに、阮籍、阮咸を含める阮氏一族を引いている。阮昉が隱者であるということもあるが、ここでも、阮籍、嵇康を同時に引いたのと同様、阮籍、阮咸らをまとめて言及することで、その個人の属性が薄まり、阮氏一族という「超俗」の属性で語られている。

ここまで、阮咸に言及した四例を見てきたが、阮咸に言及すると言つても、阮咸個人に言及するのではなく、叔父、甥の關係として、阮籍、阮咸を用いるという言及のされ方であった。「阮隱居に貽る」では、阮籍、阮咸を含めた阮氏と同姓である阮昉という關係性が述べられていた。杜甫が阮咸個人に対してどのような評価を下していたかはわからないが、阮籍との關係によつて、友人とその甥を評価していることから、阮咸に対しても少なからず肯定的な評価をしていたと考えられる。

次に山濤に言及したものを、わずかに二例ではあるが見ていく。まずは、「魏二十四司直が嶺南掌選崔郎中の判官に充てらるるを送り兼ねて韋韶州に寄す」である。部分のみを挙げる。

崔氏の鑑識眼は山濤のように明白であり、

魏氏は陸賈のように千金の装いを人からもらって嫌疑がかかるようなことをしてはならない。六三

この詩は、魏某が崔某の属官、判官に充てられ嶺南に向かうのを送り、兼ねて韶州刺史の韋迢へ寄せた詩である。崔氏の鑑識眼を評価するのに、山濤が引かれている。

次の「張十三建封に別る」は、直接的には山濤に言及していないが、嵇康との交遊で山濤に言及している。部分のみ挙げる。

君は范雲が晩年に友人とするに値した謝朓のような人物であり、

嵇康が死に臨んで息子を託した山濤のような人物でもある。六四

この詩は、張建封との別れに臨んで詠った詩である。張建封は、杜甫の友人の子であり、幼いころ会ったことがある。ここで、杜甫は自身を嵇康に比し、張建封を山濤に比して、嵇康が死に臨んで「山濤がいるから、お前は一人ではない」^{六五}と言ったように、自身の息子を託していると思われる。

山濤に言及したものは、「山公啓事」で知られる山濤の鑑識を評価するものと、嵇康との交遊が触れられている。興味深いのが、阮咸のところで見たとように、阮籍と阮咸とが言及されたとき、杜甫は阮

籍の位置にあり、嵇康と山濤に言及したときには嵇康の位置にあることである。杜甫自身は、常に阮籍、嵇康の位置にあることから、阮咸、山濤に一定の評価を与えつつも、やはり、阮籍、嵇康に対する思い入れが強く表れていると思われる。それは、第一、二節で見たように、阮籍、嵇康の志を果たせなかつたという属性に、杜甫自身が己を見ていることから来ていると考えられるだろう。

その点から考えると、言及が見られなかつた王戎、劉伶、向秀の三人は、そのような属性でもって語られることがなく、血縁、友情という面でも阮咸、山濤ほど阮籍、嵇康に近いとは見られなかつたからだろう。向秀に関しても、嵇康との交遊が知られているが、死に関わり、また、子を託すというその故事の劇的さによって、山濤のほうが選ばれやすかつたのだろう。

最後に、「竹林七賢」全員と言うよりは、その「竹林の游」を示すと思われるが、嵇康の旧居があつたとされる地、「山陽」を引いているものを見ていく。まずは、「王二十四侍御契に贈る四十韻」である。部分のみ挙げる。

「竹林七賢」が集つた山陽に比すべきここには俗物はおらず、
鄭當時が賓客をもてなしたように私をもてなしてくれる。六六

この詩は、侍御史である王契に贈つた詩である。王契の邸宅を褒めているが、この「山陽に俗物はない」には、二つの意味が含まれていると思われる。一つは、自分たちを「竹林七賢」に喩え、王契の邸宅を嵇康の旧居があつた「山陽」に喩え、その超俗という属性を主張するということである。もう一つは、それに付随して、次の故事を踏まえている場合である。

嵇康、阮籍、山濤、劉伶が竹林で酒を飲んでいると、王戎が遅れて来た。阮籍は言った。「俗物がまた来て人の良い気分を壊す」と。王戎は笑って答える。「君たちの気分は、壊すことのできるようなものなのか」と。六七

この逸話を踏まえて考えると、一つ目の超俗を主張するという意味は補強される。そしてさらに、王戎は俗物であつたという杜甫の否定的な評価が得られる。これだけで、杜甫が王戎に否定的な評価を下していたと断定するには至らないが、詩において阮籍、嵇康には言及しているが王戎に言及していないことから、そのような推測は許されるだろう。

次の「翰林の張四學士に贈る」は、「山陽會」と言うところから、「竹林の游」を念頭に置いていることは確かだと思われる。部分のみ挙げる。

万一あなたが我々が集った山陽の会のことを思うのなら、

この悲しい歌を聴いてください。六八

この詩は、翰林學士であった張垞に贈った詩である。張垞たちと交遊したことを「山陽の会」として表現している。交遊の親密さを言っていると考えられるが、さらに自分（杜甫）は、「竹林七賢」と同じような属性を持った人物であるという仮託が見られる。

おわりに

本章では、杜甫の詩に見られる「竹林七賢」への言及を見てきた。ここで、杜甫がどのように「竹林七賢」を捉えていたのか、まとめておく。

まず、「竹林七賢」という語での言及は見当たらず、それに近いものとして「山陽」を用いたものが挙げられるが、その場合、「竹林七賢」はその超俗性を詠われており、それを友人との交遊に比していることから、肯定的な評価であったと考えられる。

次に、言及の数の多さとして阮籍、嵇康が突出している。これはその知名度や作品の数などからして妥当なものと思われるが、その詠われるイメージは阮籍と嵇康で差異が見られた。阮籍は、その「途窮」の逸話に見られるように、志を果たせぬというモチーフが度々現れる。その志を果たすことのできない原因は、外在的なものであり、杜甫の自身の外在的な要因による志を果たせぬ思いを阮籍に託していると思われる。

それに対して嵇康は、その怠惰や思ったことを口にしてしまうという属性が挙げられ、阮籍と同じように志を果たせぬ人物だが、それは内在的な原因によるという解釈がなされ、杜甫も自身の不遇を嵇康と同じように内在的な原因を挙げて示していた。ここから、

外在的な原因によって志を果たせぬ人物 || 阮籍
内在的な原因によって志を果たせぬ人物 || 嵇康

という杜甫の二人の人物に対する認識が読み取れる。

そして、阮咸、山濤についての言及では、一定の評価を下しつつも、それは叔父、甥の関係として阮籍に、劇的な友情関係として嵇康に関わっていることによる言及であり、それぞれを積極的に用いるということではなかった。

王戎、劉伶、向秀に関しては言及が見当たらず、判断を下せないが、これまでの阮籍、嵇康理解、阮咸、山濤に対する言及のされ方から推し量るに、三名に対しては、特に取り上げるほどの興味を抱かなかったと思われる。

杜甫の関心は、阮籍、嵇康の二人に集中しており、小論は純然たる「七賢観」とは言えないかもしれない。しかし、杜甫は「山陽」という語で、「竹林の遊」に言及し、阮籍、嵇康以外にも阮咸、山濤にも言及していることから、「竹林七賢」という概念を、杜甫が有していたのは確実と思われる。「竹林七賢」としての七人を認識しながら、関心を二人に集中しているということは、裏を返せば、その他の五人は杜甫にとって重要な存在ではないということだろう。

杜甫の「竹林七賢」理解とは、彼らは俗世を超越した人物であったというもの以上のもではない。「竹林七賢」から離れたときに、阮籍、嵇康のその志を果たせなかつたという個々の属性が現れる。この二人は、杜甫が自身の不遇という状況を表現し、さらにはそれに意識的に近づこうとするような存在であったと考えられる。

一 杜甫の詩の引用は、全て仇兆鰲注『杜詩詳注』（北京、中華書局、一九七九年一〇月、第一版）を用いる。なお、引用は拙訳にて示し、原文を注で示す。

二 原文「將期一諾重。欸使寸心傾。君見途窮哭。宜憂阮步兵。」（前掲『杜詩詳注』、一一二頁）。

三 後藤秋正氏『窮途』補記・詩語のイメージ（『北海道教育大学紀要』人文科学・社会科学編、五三卷一号、二〇〇二年九月、二七〜四二頁）二八頁。

四 前掲論文、二九頁参照。

五 原文「物故不可論。途窮能無慟。」（前掲『南北朝詩』、一二三三五頁）。

六 原文「時率意獨駕。不由徑路。車迹所窮。輒慟哭而反。」（房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版、一三六一頁）。

七 原文「使者求顏闔。諸公厭禰衡。」（前掲『杜詩詳注』、一一一頁）。

八 原文「多病馬卿無日起。窮途阮籍幾時醒。」（前掲『杜詩詳注』、一七八三頁）。

九 原文「上古葛天民。不貽黃屋憂。至今阮籍等。熟醉為身謀。」（前掲『杜詩詳注』、二九七〜二九八

- 頁)。
- 一〇 原文「籍本有濟世志，屬魏晉之際，天下多故，名士少有全者，籍由是不與世事，遂酣飲爲常。」(前掲『晋書』、一三六〇頁)。
- 一一 原文「茫然阮籍途。更灑楊朱泣。」(前掲『杜詩詳注』、九五五頁)。
- 一二 原文「蒼茫步兵哭。展轉仲宣哀。」(前掲『杜詩詳注』、一九〇六頁)。
- 一三 王粲「七哀詩二首」其一に「西京亂無象。豺虎方遘患。復棄中國去。遠身適荆蠻。」(李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、三二九頁)とある。
- 一四 原文「阮籍行多興。龐公隱不還。」(前掲『杜詩詳注』、五八五頁)。
- 一五 原文「籍又能為青白眼，見禮俗之士，以白眼對之。」(前掲『晋書』、一三六一頁)。
- 一六 原文「赤眉猶世亂。青眼只途窮。傳語桃源客。人今出處同。」(前掲『杜詩詳注』、一六八二頁)。
- 一七 原文「青眼高歌望吾子。眼中之人吾老矣。」(前掲『杜詩詳注』、一八八六頁)。
- 一八 見られた例は以下の通り。「飲中八仙歌」の「宗之蕭灑美少年。舉觴白眼望青天。」(前掲『杜詩詳注』、八三頁)。「秦州にて救目を見るに、薛三璩は司議郎を授けられ、畢四曜は監察に除せらる。二子と故有り、遠く遷官を喜び、兼ねて索居を述ぶ、凡そ三十韻」の「別來頭併白。相見眼終青。」(前掲『杜詩詳注』、六三三頁)。
- 一九 原文「謝安不倦登臨費。阮籍焉知禮法疏。枉沐旌麾出城府。草茅無徑欲教鋤。」(前掲『杜詩詳注』、八八七頁)。
- 二〇 原文「興發會能馳駿馬」(彭定求等奉勅撰『全唐詩』、北京、中華書局、二〇〇三年七月、第一版第七刷、第八冊二九〇七頁)。
- 二一 原文「出號江城黑。題詩蠟炬紅。此身醒復醉。不擬哭途窮。」(前掲『杜詩詳注』、一〇一七頁)。
- 二二 原文「昭代將垂白。途窮乃叫閭。氣衝星象表。詞感帝王尊。」(前掲『杜詩詳注』、一三〇頁)。
- 二三 原文「幾年春草歇。今日暮途窮。軍事留孫楚。行間識呂蒙。防身一長劍。將欲倚崆峒。」(前掲『杜詩詳注』、一九二頁)。
- 二四 同様に阮籍から離れ、熟語としての「途窮」の用例がいくつも見られる。戦乱による交通の不便の意味で用いられる「地隅」の「江漢山重阻。風雲地一隅。年年非故物。處處是窮途。」(前掲『杜詩詳注』、二〇三〇〜二〇三一頁)。「金錢における困窮の意味で用いられる「率府の程録事が郷に還るを送る」の「内愧突不黔。庶羞以調給。素絲挈長魚。碧酒隨玉粒。途窮見交態。世梗悲路澀。」(前掲『杜詩詳注』、三四四頁)。「客夜」の「計拙無衣食。途窮仗友生。」(前掲『杜詩詳注』、九三一〜九三二頁)。「老い」という要素が加えられた「嚴侍郎を送りて綿州に到り、同じく杜使君の江樓に登りて宴

- す」の「窮途衰謝意。苦調短長吟。」（前掲『杜詩詳注』、九一五頁）、「立秋雨る、院中にて作有り」の「窮途愧知己。暮齒借前籌。」（前掲『杜詩詳注』、一一六九頁）。「窮乏」「老い」が合わせて描かれる「暮秋將に秦に歸らんとす、湖南の幕府の親友に留別す」の「途窮那免哭。身老不禁愁。」（前掲『杜詩詳注』、二〇八九頁）。子供にとつての旅路のことを指す「閩州自り妻子を領し卻りて蜀に赴かんと山行す、三首」其二の「僕夫穿竹語。稚子入雲呼。轉石驚魑魅。揮弓落狄鼯。真供一笑樂。似欲慰窮途。」（前掲『杜詩詳注』、一一〇三頁）。
- 二五 原文「將軍畫善蓋有神。偶逢佳士亦寫真。卽今漂泊干戈際。屢貌尋常行路人。途窮反遭俗眼白。世上未有如公貧。但看古來盛名下。終日坎壈纏其身。」（前掲『杜詩詳注』、一一五一頁）。
- 二六 張彥遠撰『歷代名画記』卷九に「曹霸。魏曹髦之後。髦畫稱于後代。霸在開元中已得名。天寶末。每詔寫御馬及功臣。官至左武衛將軍。」（叢書集成簡編、台北、台灣商務印書館、民國五五年、三〇二頁）とある。
- 二七 原文「余謂此詩公借曹霸以自狀。」王嗣奭撰『杜臆』（『続修四庫全書』上海、上海古籍出版社、一九九五年、三月、影印本、一三〇八冊、四九一頁）
- 二八 李昉等編『文苑英華』（北京、中華書局、一九九五年二月、第四刷、第三冊一七五八頁）に「世上未有如公貧」は一に「他富至今我徒貧」に作るとある。
- 二九 原文「此生遭聖代。誰分哭窮途。臥疾淹爲客。蒙恩早廁儒。廷爭酬造化。樸直乞江湖。」（前掲『杜詩詳注』、一八七〇頁）。
- 三〇 原文「途中非阮籍。查上似張騫。」（前掲『杜詩詳注』、一七一三頁）。
- 三一 原文「無處覓張騫。」（前掲『杜詩詳注』、九七一頁）。
- 三二 原文「寬容存性拙。剪拂念途窮。」（前掲『杜詩詳注』、一一七九頁）。
- 三三 原文「尊榮瞻地絕。疏放憶途窮。濁酒尋陶令。丹砂訪葛洪。江湖漂短褐。霜雪滿飛蓬。牢落乾坤大。周流道術空。」（前掲『杜詩詳注』、六八〇六九頁）。
- 三四 原文「然嵇志遠而疏。呂心曠而放。」（前掲『文選』、一二一九頁）。
- 三五 原文「自卜已審。若道盡塗窮則已耳。」（前掲『文選』、六〇三頁）。
- 三六 原文「中散山陽鍛。愚公野谷村。寧紆長者轍。歸老任乾坤。」（前掲『杜詩詳注』、六七頁）。
- 三七 「嵇康伝」に「初、康居貧、嘗與向秀共鍛於大樹之下、以自贍給。潁川鍾會、貴公子也、精練有才辯、故往造焉。康不爲之禮、而鍛不輟。良久會去、康謂曰：『何所聞而來。何所見而去。』會曰：『聞所聞而來、見所見而去。』會以此憾之。」（前掲『晉書』、一三三三頁）とある。
- 三八 原文「何必走馬來爲問。君不見嵇康養生被殺戮。」（前掲『杜詩詳注』、一五九一―一五九二頁）。

- 三九 原文「蟄龍三冬卧。老鶴萬里心。昔時賢俊人。未遇猶視今。嵇康不得死。孔明有知音。」（前掲『杜詩詳注』、五六二頁）。
- 四〇 原文「張老存家事。嵇康有故人。」（前掲『杜詩詳注』、二〇五二頁）。
- 四一 原文「文園多病後。中散舊交疏。」（前掲『杜詩詳注』、一四五六頁）。
- 四二 原文「平生懶拙意。偶值棲遁跡。去住與願違。仰慚林間翮。」（前掲『杜詩詳注』、七〇六頁）。
- 四三 原文「嗚嗚鳴鴈。奮翼北遊。順時而動。得意忘憂。嗟我憤歎。曾莫能儔。事與願違。遘茲淹留。窮達有命。亦又何求。」（前掲『文選』、三二八頁）。
- 四四 嵇康の詩に表れる「飛鳥」のイメージを論じたものに、興膳宏「嵇康の飛翔」、『中国文学報』第十六冊、一九六二年、一〇二八頁）がある。
- 四五 原文「疏懶爲名誤。驅馳喪我真。」（前掲『杜詩詳注』、六五七頁）。
- 四六 原文「性復疏懶。筋驚肉緩。頭面常一月十五日不洗。不大悶癢。不能沐也。」（前掲『文選』、六〇一頁）。
- 四七 原文「舊諳疏懶叔。須汝故相攜。」（前掲『杜詩詳注』、六二九頁）。
- 四八 原文「東柯遂疏懶。休鑷鬢毛斑。」（前掲『杜詩詳注』、五八五頁）。なお、「疏懶」は、一に「疏放」に作るが、どちらも嵇康を示していると思われる。
- 四九 原文「失學從兒懶。長貧任婦愁。百年渾得醉。一月不梳頭。」（前掲『杜詩詳注』、八八三頁）。
- 五〇 原文「懶慢頭時櫛。艱難帶減圍。」（前掲『杜詩詳注』、一七八二頁）。
- 五一 原文「簡與禮相背。懶與慢相成。」（前掲『文選』、六〇一頁）。
- 五二 原文「內負宿心。外惡良朋。」（前掲『文選』、三二八頁）。
- 五三 原文「予獨何爲。有志不就。」（前掲『文選』、三二八頁）。
- 五四 『世說新語』「德行」篇に「晉文王稱阮嗣宗至慎，每與之言，言皆玄遠，未嘗臧否人物。」（劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』上海古籍出版社、二〇〇二年一月、第一版、一五頁）とある。
- 五五 原文「我師嵇叔夜。世賢張子房。柴荆寄樂土。鵬路觀翱翔。」（前掲『杜詩詳注』、二〇七一〜二〇七二頁）。
- 五六 原文「阮嗣宗口不論人過。吾每師之。而未能及。」（前掲『文選』、六〇二頁）。
- 五七 原文「從來禦魑魅。多爲才名誤。夫子嵇阮流。更被時俗惡。」（前掲『杜詩詳注』、五六〇頁）。
- 五八 原文「許與才雖薄。追隨跡未拘。班揚名甚盛。嵇阮逸相須。」（前掲『杜詩詳注』、一一九一頁）。
- 五九 原文「百年見存歿。牢落吾安放。蕭條阮咸在。出處同世網。他日訪江樓。含悽述飄蕩。」（前掲『杜詩詳注』、一一九一頁）。

詩詳注』、一四一三頁)。

六〇 原文「嗣宗諸子姪。早覺仲容賢。」(前掲『杜詩詳注』、六二八頁)。なお、「嗣宗」は、一に「阮宗」に作るが、同じく阮籍を指していると思われる。

六一 原文「出守吾家姪。殊方此日歡。自須遊阮舍。不是怕湖灘。」(前掲『杜詩詳注』、一一二四頁)。

六二 原文「陳留風俗衰。人物世不數。塞上得阮生。迴繼先父祖。」(前掲『杜詩詳注』、五四四頁)。

六三 原文「明白山濤鑒。嫌疑陸賈裝。」(前掲『杜詩詳注』、二〇五六頁)。

六四 原文「范雲堪結友。嵇紹自不孤。」(前掲『杜詩詳注』、二〇一〇頁)。

六五 原文「巨源在，汝不孤矣。」(前掲『晋書』、一一二二三頁)。

六六 原文「山陽無俗物。鄭驛正留賓。」(前掲『杜詩詳注』、一一二七頁)。

六七 原文「嵇，阮，山，劉在竹林酣飲，王戎後往。步兵曰：『俗物已復來敗人意。』王笑曰：『卿輩意，

亦復可敗邪？』」(前掲『世說新語彙校集注』、六五二頁)。

六八 原文「儻憶山陽會。悲歌在一聽。」(前掲『杜詩詳注』、一〇〇頁)。

*本章は、中央大学人文科学研究so「中国文化の伝統と現代」研究チームにおける研究活動の成果である拙稿「杜甫の『竹林七賢』観」(『人文研紀要』第七七号、中央大学人文科学研究so、二〇一三年九月、二九く七五頁)を改稿したものである。

第五章

白居易とその周辺

はじめに

本章では、白居易とその晩年の詩友であった劉禹錫、そして、彼ら二人が参加した連句を対象に、中唐という時期の白居易を中心とした文人たちの「竹林七賢」への認識と、当時の政治情勢との兼ね合いによる表現の変化などを中心に確認する。まず、白居易の詩に見られる「竹林七賢」観を、中尾健一郎氏の研究成果をもとに考察し、次に、そこで得た白居易の認識との比較のため、同時期を共に生きた劉禹錫の認識を確認したい。この二名に関しては、主に政治的なものごとに関わる「竹林七賢」の用い方を見るのが、中心となる。そこで、白居易、劉禹錫が参加した連句の考察を通して、政治的なものごとから離れた際の、「竹林七賢」の用いられ方を確認する。

第一節 白居易

唐という時代を見渡せば、盛唐の李白、杜甫の名は絶大なる存在感を持つ。そして、二人に勝るとも劣らない詩人として、中唐の白居易の名が挙げられるだろう。ここまで筆者は、詩に見られる「竹林七賢」の描かれ方を見てきた。対象としたのは、主に六朝の庾信、盛唐の李白と杜甫の詩であり、彼らは、それぞれの時代を代表する詩人である。となると、李白、杜甫の後、宋に至るまでの間の時期を代表する詩人として、白居易の詩を見ないわけにはいかないだろう。

しかし、白居易の研究は古くから行われており、白居易の詩に現れる「竹林七賢」に触れた研究も存在する。特に、白居易にとって、「竹林七賢」は何を示すのかという観点から行われた研究に、中尾健一郎氏の「洛陽時代の白居易と魏晉の士人——『竹林七賢』を中心に」がある。

そこで、本節では、中尾氏の研究を受け、その指摘するところを、中尾氏が用いなかった材料、または問題としなかった細部を用いて、論証することを目的としたい。つまり、阮籍、嵇康、劉伶の三者という中尾氏の限定（白居易の詩による「竹林七賢」への言及自体が、ほぼこの三者に限られるが）を継ぎ、そしてその内の阮籍と嵇康への認識を読み解くことになる。よって、「白居易の『竹林七賢』観」と銘打ってはいるが、その実、問題とするのは阮籍、嵇康の二人である。

まず、1にて、中尾氏の考察を確認し、2では、阮籍に関する詩、3では、嵇康に関する詩を見る。

1 先行研究の確認

まず、前提となる中尾氏の考察^二を確認したい。

中尾氏は、阮籍、嵇康、劉伶に言及している詩を、洛陽時代以前と洛陽時代とに分けて比較している。特に中尾氏が注目するのは、洛陽時代以前と洛陽時代に詠われた「竹林七賢」への言及の変化によって見られる、白居易の後半生の処世についてである。

洛陽時代以前の作とされているのは、次の作品である。(一)内に言及されている部分を挙げる。

- ・「唐生に寄す」(「賈誼哭時事，阮籍哭路岐。」)
- ・「馬上の作」(「彈琴復有酒，但慕嵇阮徒。」)
- ・「酒に對す」(「所以劉阮輩，終年醉兀兀。」)
- ・「王質夫を哭す」(「篇詠陶謝輩，風襟嵇阮徒。」)
- ・「微之の詩に和す二十三首」其の十一「新樓北園に偶集し、孫公度、周巡官、韓秀才、盧秀才、范處士を從へて小飲す、鄭侍御判官、周、劉二從事皆先に歸るに和す」(「天地為幕席，富貴如泥沙。嵇劉陶阮徒，不足置齒牙。」)
- ・「秋齋」(「阮籍謀身拙，嵇康向事慵。」)
- ・「讀史五首」其の二(「馬遷下蠶室，嵇康就囹圄。」)
- ・「雜感」(「呂安兄不道，都市殺嵇康。」)
- ・「慵を詠ず」(「常聞嵇叔夜，一生在慵中。」)
- ・「馬侍御の贈らるるに答ふ」(「淺薄求賢思自代，嵇康莫寄絕交書。」)
- ・「微之の詩に和す二十三首」其の十六「鄭侍御が東陽にて春悶に懷を放にし越遊を追ひて寄せられしに酬ゆるに和す」(「生何足養嵇著論，途何足泣楊漣沔。」)
- ・「陶潛の體に效ふ詩十六首」其の十三(「晉朝輕高士，林下棄劉伶。」)
- ・「橋亭卯飲」(「生計悠悠身兀兀，甘從妻喚作劉伶。」)

洛陽時代以前では、並称を含め、阮籍六例、嵇康九例、劉伶四例が見られる。詠われる属性では、並称では、「名利や富貴をもとめない風雅な先人」という属性が挙げられている。また、単独での言及では、「困難な時世を生きた先人」といった属性が挙げられている。これら詠われた属性から白居易の認識をまとめれば、

つまり洛陽時代以前の白居易にとって、阮籍・嵇康・劉伶は風雅の徒であると同時に、同情すべ

き先人として意識されていたと言える。三

となるのだろう。

次に、洛陽時代のものとしては、次の作品が挙げられている。同様に（ ）内に言及している部分を挙げる。

- ・「琴酒に對す」(「祇応康与籍，及我三心知。」)
- ・「詩酒琴の人、例として多くは薄命なり、予酷だ三事を好む、雅に此科に當れり、而るに得る所已に多く、幸たること斯に甚し、偶狂詠を成し、聊か愧懷を寫す」(「中散步兵終不貴，孟郊張籍過於貧。」)
- ・「鄭二司録と李六郎中と寒食の日相過り、同じく宴して贈らるるに酬ゆ」(「迎接須矜疏傳老，祇供莫笑阮家貧。」)
- ・「令狐留守尚書が贈らるるに酬ゆ十韻」(「慵於嵇叔夜，渴似馬相如。」)
- ・「老慵」(「近来漸喜知聞断，免惱嵇康索報書。」)
- ・「詠懷」(「嵇康日日懶，畢卓時時醉。」)
- ・「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」(「嘗聞嵇呂輩，尤悔生疎頑。」)
- ・「皇甫郎中が秋曉同じく天宮閣に登り懷を言ふに和す六韻」(「張翰一杯酣，嵇康終日懶。」)
- ・「洛下に閒居し山南の令狐相公に寄す」(「不鍛嵇康彌懶静，無金疏傳更貧閑。」)
- ・「家醞を詠ず十韻」(「独醒従古笑靈均，長醉如今數伯倫。」)
- ・「詠興五首」其の五「小庭にも亦た月有り」(「幕天而席地，誰奈劉伶何。」)
- ・「北窗の三友」(「嗜詩有淵明，嗜琴有啓期。嗜酒有伯倫，三人皆吾師。」)
- ・「洛陽に愚叟有り」(「抱琴榮啓期，縦酒劉伶達。」)
- ・「崔二十四常侍を哭す」(「伯倫每置隨身錡，元亮先為自祭文。」)
- ・「吳祕監美酒有る毎に、獨り酌み獨り酔ふ、但し詩報を蒙るのみにして、飲を以て招かず、輒ち此に戯れ酬い、兼ねて夢得に呈す」(「頼有伯倫為醉伴，何愁不解傲松喬。」)
- ・「醉中上都の親友の書を得るに、予が俸を停められしこと多時なるを以て、貧乏を憂問す、偶酒興に乗じ、詠じて之に報ゆ」(「異世陶元亮，前生劉伯倫。」)

洛陽時代では、阮籍は減少して三例となり、嵇康は八例でほぼ変わらず、劉伶は増加し七例となり、中尾氏は大幅に増加したとしている。また、洛陽時代以前に多く見られる並称が減り、個人での

言及が多くなる。それにつれて、彼らを「風雅の徒」として詠わなくなっているとしている。阮籍の属性として挙げられるのは、「琴酒を好んだ」、「地位が低かった」、「貧しかった」である。

嵇康の属性としては、半数の四例が「慵」「懶」について言う。そして、中尾氏は、嵇康の例の数が洛陽時代以前に比べて変わらないことから、「白居易が甚だ嵇康を好んだことを窺わせる」としている。

劉伶への言及が増えたことは、「晩年の白居易が、嵇康に決しておとらないほど劉伶を愛好したこと」を示すとされている。また、洛陽時代以前では多く見られた嵇康・阮籍との並称がなくなり、陶淵明との並称が増えている。これは、「『達者』としての陶淵明と劉伶に甚だ親近感を覚えた」からであるとされている。

また、阮籍・嵇康／劉伶・陶淵明という対立を同情／敬慕という対立として捉え、阮籍・嵇康から劉伶・陶淵明へと言及の軸が動いていくことも指摘している。阮籍・嵇康の持つ「名利を超越した」／「時流に抵抗した」という二面性のうち、「時流に抵抗した」という一面が、白居易の当時の政治的な状況・志向を踏まえると、「阮籍と嵇康が師として賞揚する人物としてふさわしくなかった」としている。つまり、「彼ら（引用者注・「竹林七賢」や陶淵明等）の如く危難を避けようとするならば、やはり中央政界に執着の無いことを示す必要があったのではないか」^四ということになる。中尾氏は、いくつかの白居易の詩を引き、当時の状況を踏まえて、この仮定を論証している。

ここまで、中尾氏の論考を見てきた。中尾氏が提出した白居易の「竹林七賢」への認識について、筆者は大筋同意する。

しかし、中尾氏が白居易が「竹林七賢」に言及した例として挙げられているのは、姓名や別称の類を挙げ、直接的に言及したものである。それでは、「竹林七賢」に関わりのある故事を引いている場合、中尾氏の指摘していた白居易の「竹林七賢」への認識との間に、差異が見られるのだろうか。

この点を確かめるため、以下では、中尾氏が採用した洛陽時代以前と洛陽時代という区分を引き継ぎ、主に阮籍に関わる故事を引いた例と、「竹林七賢」に言及した詩の細かい描写を中心に、中尾氏の提出した白居易の「竹林七賢」への認識を確認していきたい。

2 阮籍に関わる故事の使用

白居易が阮籍に関わる故事を引いている作品は、九例見られた。そのうち、故事によってまとめれば、「青眼」「白眼」などの「眼」に関わるもの六例、「途窮」に関わるもの三例である。まず、「眼」に関わるものから見ていく^五。

・「青眼」「白眼」

阮籍が俗士を憎んだことを表現する、次のような故事がある。

阮籍は青眼と白眼を使い分けることができ、俗士を見るときは、白眼で対した。嵇喜が弔問に訪れた際、阮籍は白眼で対し、嵇喜はそれを喜ばず帰った。嵇喜の弟の嵇康はこのことを聞き、酒を用意し琴を脇に手挟んで来ると、阮籍は大いに喜び、青眼で対した。^六

洛陽時代以前に、「青眼」「白眼」など「眼」に関わる阮籍の故事を引いたものは、三例見られた。まず、「江樓にて夜元九の律詩を吟じ三十韻を成す」である。部分のみ挙げる。

君と私は各々詩がたくさんあるが、

遠く隔たり互いに海に投げ捨てるようなやりとりとなっている。

詩を詠うたびに白髪は増え、

青眼でもって視野に穴が空くほど君のいる遠くを眺める。^七

この詩は、遠く離れた土地にいる友人、元稹を思つて詠われたものである。ここでは、自身の眼を阮籍が気の合う仲間へ向けた「青眼」に譬えて、元稹への思いを表現している。次は、友人の眼差しを「青眼」に譬えたものである。

「春雪に皇甫の家を過る」

夕方駕籠に乗って雪の中を出掛けてみれば、

うれしいことに君の家の門がちょうど開くのに行きあつた。

この上は主人である君が青眼でもって接してくれば、

琴酒談笑が自然と生じるだろう。^八

ここでは、俗士には決して向けられない「青眼」が、白居易に向けられている。友人との親密さという含意とともに、白居易の自分は俗士ではないという自負が読み取れる。

そして、次の「蘇庶子に答ふ」では、白居易と友人双方がともに「青眼」であることが述べられる。

たまたま関東への使者に命じられ、
また洛陽にて君とともに遊んだ。

病のために酒を断ち、

老いて愁えているばかりだ。

君と互いに青眼でもって親しむが、

共に挫折を味わった白髪頭だ。

私は宮中の閑職に身を置くが、

君の太子付きの役職も似たようなものだろう。九

先に挙げた「江樓にて夜元九の律詩を吟じ三十韻を成す」では、遠く離れた友人を思い、「春雪に皇甫の家を過る」では、友人が迎えてくれたことを「青眼」を用いて表現していたが、この詩では、友人と会っている際か、またはその交友を思い出して詠っているのです、どちらかが「青眼」ではなく、双方が「青眼」として描かれている。

以上、洛陽時代以前の三例を見た。次に、洛陽時代での「眼」に関わる阮籍故事の使用例を見ていく。まず、「青眼」を用いたもの二例を先に見る。「酔後重ねて晦叔に贈る」の部分のみ挙げる。

君と私は詩癖があり、

ともに酒を飲むことで仙人になろうとした。

青眼を巡らして笑いながら語り合い、

酔っては白髪頭を並べて眠る。一〇

この詩も洛陽時代以前の最後に挙げた「蘇庶子に答ふ」と同様、友人との交友を描いたものであり、双方が「青眼」として表現されている。

次の場合は、双方ではなく、「青眼」を向けられるのが白居易であるものである。

「劉汝州が侍中に長句を寄せらるるに酬ゆるに和し、因りて集賢坊の勝事を書きて、戯れて之に問ふ」

私のいる洛陽と君のいる汝州は境界を接しているが、私と裴度さんとは互いの家を行き来している。

汝州にいる君（劉禹錫）との距離は遠くはないが、裴度さんとは百歩余りの距離なのでより親密なのだ。

裕福な裴度さんの宴会にしばしば呼ばれ、私が酔って吐いてもその青眼に笑みを湛えて許してくれる。

聞くところによると汝州の役所には酒があるそうだが、風流な景色を前に共に飲む友人はいるのかな。――

この詩で「青眼」でもって白居易を見るのは裴度であり、白居易は見られる位置にある。また、この詩では、次の丙吉の故事も用いられている。

丙吉の馭者に酒好きで、しばしば職務を怠ける者がいた。あるとき丙吉に従って出かけたが、酒に酔って丞相用の車で吐いてしまった。西曹主吏がこの馭者を斥けようとすると、丙吉が言った。「酒による失敗で処分していたら、この人を受け入れてくれるところがあるだろうか。許してやってくれ、車の敷物が汚れただけじゃないか」と。こうして馭者は去らずにすんだ。――

この故事を用いて、白居易を馭者に、裴度を丙吉に譬え、裴度の度量の大きさと親密さを描いている。「青眼」の故事を加えて解釈すれば、この馭者（＝白居易）は、酒に酔って車を汚すが、俗士なのではないということを示すのだろう。

また、末尾の二句は、詩題に言うとおりの「戯れて」言っていると思われるが、「酒を飲むときには呼んでほしい」という意味で捉えられないだろうか。

『世説新語』「任誕」篇（「歩兵校尉缺」条）注引『文士傳』に、次のような故事がある。

後に歩兵校尉の役所に酒が三百石有るのを聞き、喜んで歩兵校尉の職を求めた。役所に入ると、劉伶と共に思う存分飲んだ。――

末尾の二句が、この故事を踏まえた表現と考えれば、「友人の役所に酒があることを知って、お相伴に預かろうとしている」という構造を踏まえているのだろう。ここでも「青眼」を用いた場合同様、阮

籍を友人に擬え、白居易自身はその「青眼」に見られる位置（ここでは劉伶）にある。

「青眼」を用いた場合では、友人、自分、双方という三者の内の誰かが、阮籍の位置にある。そして、洛陽時代以前と洛陽時代とに大きな使用上の変化は見られない。

次の「春深に和す二十首」其の十一では、一例だけではあるが、「青眼」ではなく「白眼」が使用されている。

春がすばらしいのはどこだろうか、

それは隠者の家。

薜蘿の葉で作った服を着て、

松の花を晒して食料とする。

蘭で作った帯に帯玉を差し、

蒲を車輪とした車が停まっている。

林の間で足を投げ出して座り、

軽蔑した目つきで俗人をにらむ。一四

この「春深に和す二十首」は、冒頭二句がほぼ同じであり、それぞれ詠われる対象が、「何處春深好、春深隠士家。」の「隠士」の部分で入れ替わる。第一句にて問いを立て、第二句以下でそれに答えていく形式であることにより、描かれる人物への仮託とはならない。

この詩は、「隠士」を対象として詠っているが、明らかに阮籍をイメージしているのが読み取れる。冒頭二句によるテーマの提示のあと、第三〜六句では、隠者の生活が描かれる。そして、末尾の二句で、隠者の典型として阮籍に譬えて「隠士」を描いている。その描写を細かく分析すれば、「林の間（林間）」というのは、「竹林」をイメージさせ得る。また、時の権力者の前でも「足を投げ出して座る（箕踞坐）」ことは、阮籍の故事^{一五}として知られている。そして、「軽蔑した目つき（白眼）で俗人をにらむ（向人斜）」。これだけ阮籍をイメージさせる言葉を用いるのは、白居易が典型的な隠者として阮籍を認識していたからだろう。

しかし、この詩で重要なのは、いかに阮籍を描いたかではない。ここで重要なのは、阮籍の故事を用いて、「阮籍」など阮籍を直接示す語を用いずに、阮籍を描きつつも、白居易自身はその描かれる「隠士」を観察する立場に身を置いていることである。この「春深に和す二十首」という詩に採用された形式や、「白眼」の使用例が一つしかないことから、簡単に比較はできないが、推測を逞しくすれば、「青

眼」を使用した場合に比べて、白居易が自身を阮籍に仮託することを慎重に避けているのではないだろうか。

また、「青眼」は「白眼」と表裏一体の概念だが、「青眼」は主に親愛を示し、反対に「白眼」は俗士の排除という攻撃性を含む。このような「白眼」という語の持つ攻撃的なイメージが白居易に仮託を避けることを促したのではないだろうか。

これは、第一章にて見た中尾氏の言う阮籍の一面、「時流に抵抗した」という属性が自身に付属することを避けるという行動を示す例となるだろう。

・「途窮」

『晋書』巻四十九「阮籍伝」には、次のような記載がある。

ある時氣の向くまま一人車に乗って出掛け、わき道を通らずに車を走らせ、道の窮まったところまで行き、慟哭して帰って来た。^{一六}

この記載では、阮籍が思うままには生きられない苦しさが表現されていると考えられる。

前節では「青眼」「白眼」という「眼」に関わる故事を用いた例を見たが、ここでは、「途窮」の故事を用いた例を見ていく。

「途窮」の語は、後藤秋正氏に従えば^{一七}、顔延之「五君詠」に始まる。「五君詠」の該当箇所は次の通り。

人の善し悪しを論じることはないが、
行き詰っては慟哭するばかりだ。^{一八}

顔延之は「五君詠」で、阮籍の「途窮」の故事を念頭に、阮籍の上手いかわらない、行き詰ったという心境を表現していると考えられる。白居易が阮籍と「途」の関係を意識していたことを示す次のような例がある。「唐生に寄す」の冒頭部分を挙げる。

その昔賈誼は時事に哭し、

阮籍は岐路に哭した。
唐生も今哭しているのは、
時代は異なるがその悲しみは彼らと同じだ。一九

この詩は、洛陽時代以前の作である。ここでは、阮籍が分かれ道に泣いたと言う。「途窮」という語を用いてはいないが、「岐路」（原文では「路岐」）を用い、阮籍と「途」という関係を意識していたことが窺える。

次の「渭村に退居し、禮部の崔侍郎、翰林の錢舍人に寄する詩一百韻」では、「阮籍」などの阮籍を直接示す語は用いず、「途窮」を用いている。部分のみ挙げる。

道が行き詰って憔悴するばかりで、

道があつたらあつたで彷徨うことになる。二〇

ここでは、道があつても無くても悪い結果となってしまうという白居易の苦悩の様が述べられているが、やはり念頭にあるのは阮籍だろう。

洛陽時代以前の作はこの二例しかない。「唐生に寄す」では、友人を阮籍に擬え、「渭村に退居し、禮部の崔侍郎、翰林の錢舍人に寄する詩一百韻」では、自身を阮籍に擬えている。

それでは、洛陽時代になるとどうなるだろう。

「春深に和す二十首」其の二

春がすばらしいのはどこだろうか、

それは貧賤の家。

庭は荒れ果て、

あたりの花は散り失せる。

男は他人に雇われることに苦しみ、

妻は車引きに出なければいけないことを愁う。

道が行き詰れば平らな道でも険しく感じるものであり、

一歩進むことも褒斜谷を越えることより大変に思うのだ。二一

「春深に和す二十首」其の十一は先に「白眼」を用いた例として挙げた。この詩は、同様な形式で、「貧賤」を対象としている。先に述べたことだが、この「其の二」でも、白居易は他者を描き、仮託という意図はない。自身や自分に近い友人などが「途窮」という状況に陥るのではなく、「貧賤」の人々が挙げられており、阮籍の「志を果たせない」という属性は読み取ることができない。次の「新たに沐浴す」でも、「途窮」が使用されている。末尾の部分を挙げる。

どこかへ出征する人もいるだろうし、旅に出る人もいる。

道が行き詰って食料がなくなる旅人もいるし、

寒く暗い監獄に繋がれる人もいる。

彼らはどうして苦しみ多い人生を送るのか、

思うままに生きる私は何が優れていたというのか。

胸を撫でて恥じるしかないのだ、

誰もその理由などわからないのだから。二二

この詩でも、「途窮」という状況にあるのは、無名の「旅人」である。ここまでは、先に挙げた「春深に和す二十首」其の二と変わらない。しかし、この詩では、「途窮」という状況にある者と対比的に、白居易自身が現れている。「苦しみ多い人生（勞生）」に対する「思うままに生きる（遂性）」私（白居易）である。

洛陽時代以前の作である「渭村に退居し、禮部の崔侍郎、翰林の錢舍人に寄する詩一百韻」では、「途窮」という状況にあった自分を語るが、洛陽時代の作である「春深に和す二十首」其の二では、仮託を意図せず、「新たに沐浴す」では、「途窮」の対極にある者として語られる。

このような「途窮」の使用法の変化は、何に起因するのだろうか。そして、「途窮」という、背後に阮籍が絶えずついて回る語をわざわざ用いるには、阮籍を好んだという理由以外に、何かしらの理由が必要だろう。

「途窮」という語の意味を、一般的な「行き詰る」といった意味ではなく、より政治的な部分に限定して定義し直せば、「途窮」とは、政治的な栄達を望むという欲望が満たされないという状況を示す語だと捉えられる。白居易が実際にこのように考えていたかどうかはわからない。しかし、中尾氏が「彼ら（引用者注…「竹林七賢」や陶淵明等）の如く危難を避けようとするならば、やはり中央政界に執着

の無いことを示す必要があったのではないか」と言うことを考慮すれば、白居易は、自身の政治的な栄達を望むという欲望が消失したことを示すため、もしくは欲望を隠すために、このように「途窮」の使用法を変化させたとは考えられないだろうか。

これを前提に、洛陽時代の阮籍に言及した詩を見れば、「琴酒に對す」では、

昔から琴や酒はあったが、

この素晴らしさをわかる者は稀だった。

ただ嵇康と阮籍、

そして私の三人だけがわかつているのだ。二三

と、琴と酒の素晴らしさがわかることを言う。これは、洛陽時代に言及が多く見られる劉伶への言及と同趣のものであり、「詩酒琴の人、例として多くは薄命なり、予酷だ三事を好む、雅に此科に當れり、而るに得る所已に多く、幸たること斯に甚し、偶狂詠を成し、聊か愧懷を寫す」では、

嵇康と阮籍は高位に上らず、

孟郊と張籍は貧窮の内に人生を過ごした。二四

と、高位に上らない（＝政治的な栄達を果たさなかった）ことが触れられる。そして、「鄭二司録と李六郎中と寒食の日相過り、同じく宴して贈らるるに酬ゆ」では、

お出迎えする老いぼれの私を憐れんでください、

もてなしを見て阮籍のような我が家の貧乏を笑わないでください。二五

と、阮籍の貧乏を自身の貧乏に譬える。このように阮籍を、酒を好み、高位に上らず、貧乏であった人物として描く。そして、このような阮籍に仮託されるのは、「詩酒琴の人、……」を除いて、老いぼれた白居易自身である。「詩酒琴の人、……」では、白居易は阮籍と同じように三事を好みながらも、「名厚禄」^{二六}を受けたことを言う。

このように、洛陽時代の作も細かい表現を見れば、中尾氏の言う「中央政界に執着の無いことを示す」ということを読み取れる。

3 嵇康と「慵」

前項では、阮籍に関わる故事を見た。ここでは、嵇康について見ていく。しかし、嵇康に関する故事を用いた例は、白居易の詩では見つからない。よって、嵇康に言及した詩の細かい描写を中心に見ていく。

「中央政界に執着の無いことを示す」ということを、中尾氏は嵇康に言及した詩ではない詩で当時の状況を踏まえて論証された。しかし、嵇康に言及した詩だけでも、それが表現されていることを示せるのではないだろうか。

そこで、まず考えたいのは、なぜ洛陽時代になると嵇康とともに「慵」「懶」を詠うことが多くなるのだろうか、という点である。そのうち、特に「慵」について、細かい描写とともに、洛陽時代と洛陽時代以前の詠われる属性の変化から考えてみたい。

先に洛陽時代になると、嵇康とともに「慵」を詠うことが多くなると言ったが、洛陽時代の作の中で、一つだけ傾向の異なるものがある。

「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」
年は日々老いていき、

体は日々暇になつていく。

暇なときに都の門を出て見渡せば、

見えるのはただ山水の景色のみ。

関山は緑映えてそびえ立ち、

伊水の流れは清らかに流れている。

そんな景色の内に古びた寺があり、

戸締りもされていない。

岸辺の草は一休みするために敷いてあるようで、

小道の蘿はよじ登るためにあるようだ。

朝には浮雲とともにこの寺を出て、

夜には鳥とともに帰ってくる。

私は元々処世に拙い人間であり、

艱難辛苦がとりわけ多かった。

嵇康と呂安が、

とりわけ後悔したのは気分にはむらがあり頑なだったことだそうだ。

また巢父は悟って箕山潁水の間に隠れ、

四皓は商山に隠れたそうだ。

彼らは世俗の拘束から離れることを好んだだけだろうか、

身に迫る心配事を避ける意もあつたのではないだろうか。

私も同じように心配事を避けるため、

伊水嵩山の間に身を終えようと思う。二七

この詩は洛陽時代の作であり、閑職に身を置く白居易の感慨を述べたものである。ここで言う、「嵇康と呂安」のことは、呂安の兄が呂安の妻に手を出したことによるもめ事に際し、兄弟の間を何とか取り持とうと努力した嵇康だが、反対に兄から「不孝」の罪で訴えられた呂安に連座して処刑されたことを示していると考えられる。このような嵇康と呂安の最期の理由として、挙げられるのが「気分には頑なだったこと」である。これは、同様な欠点が、向秀によって指摘されている。

しかしながら嵇康の志は遠大だがむらがあり、呂安の心は広大だが気ままである。二八

このような欠点を持つ、嵇康と呂安に対するのは、隠者として著名な、巢父や四皓である。彼らに対し、単に隠遁しなかったから隠れたのではなく、災いを避けるための意味もあつたという白居易の解釈が示されている。この両者の内、白居易は、嵇康や呂安ではなく、巢父や四皓のように、世を逃れ災いを避ける方を選ぶことを宣言して、詩を終える。「私は元々処世に拙い人間である」という白居易自身の告白と、最終的な選択を比べ合わせれば、白居易は、以前は嵇康や呂安と同じように、思うまま生きていたが、今現在においては、悟った巢父や四皓のように、世間から隠れようと考えていることがわかる。

実際、白居易は洛陽時代以前の詩において、自身を「疏頑」としている。「常樂里に閑居し、偶たま十六韻を題し、兼ねて劉十五公興・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十敦質・張十五仲方に寄す。時に校書郎爲り」の部分挙げる。

都長安は名利の場、
鶏が鳴けばのんびりしている者などいない。

ただ一人なまけ者の私は、
日が高くなっても髪も整えていない。

(中略)

ひと月に二十日役所に勤めればよく、
私も気分にはむらがり頑な自分そのままです。二九

この詩は、登第し起家として校書郎となった時の作である。ここでは、自身を「気分にはむらがり頑な(頑疏)」としている。また、「なまけ者(懶慢者)」「髪を整えない(頭未梳)」三〇という語から、自身を嵇康に擬えて、その属性である「気分にはむらがり頑な」「なまけ者」としていることは明らかである。

洛陽時代以前、自身を嵇康に擬えていた白居易が、洛陽時代に入ると、嵇康を否定し、巢父や四皓の振る舞いを選択する。この変化はどう説明されるだろうか。

洛陽時代以前の作では、「琴」、「酒」という属性を挙げる「馬上の作」、「風流」を挙げる「王質夫を哭す」、「超越」を挙げる「新樓北園に偶集し、……」、「処刑」に関わる属性を挙げる「讀史五首」其二、「雜感」、「処刑」に加えて「養生」を挙げる「鄭侍御が東陽にて春悶に懷を放にし越遊を追ひて寄せられしに酬ゆるに和す」、嵇康の「山巨源に與ふる絶交書」をユーモアとして用いた「馬侍御の贈らるるに答ふ」と、嵇康の属性を多様に描いているが、洛陽時代になると、阮籍とともに詠われる場合、先に挙げた「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」を除いたほとんどが、「慵」という属性を詠う。このような傾向を考慮に入れて、「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」に示された白居易の見解を解すれば、次のようになるのだろう。

まず、嵇康／巢父・四皓という対立が見られる。そして、巢父・四皓と同じように隱遁を願う白居易が示される。

また、「巢父・四皓」が災いを避け得た一つの理由として、「隱遁」ということが挙げられる。つまり、巢父や四皓も「隱遁」しなければ、嵇康と同様な結末になったかも知れない。これを逆から言えば、嵇康も隱遁していれば、「疏頑」が「心配事」の原因とはならなくなり、「巢父・四皓」と同じように、「心配事を避ける」ことができたのではないのだろうか、ということになる。

洛陽時代に描かれた嵇康の属性のうち、「酒」や「琴」のような阮籍とともに詠われるものを除けば、

嵇康が個人的に詠われる属性は、「処刑」に関する属性と「慵」である。「処刑」は、「疏頑」が原因となったという白居易の見解を考慮すれば、「隱遁」することで、「疏頑」という属性が排除され、嵇康の個人的な属性としては、「慵」が残る。「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」と、洛陽時代及びそれ以前に詠われた属性の変化を合わせ考えれば、このように説明できる。

前項で見たように、阮籍に関する故事を用いた場合も、白居易は、政治的な榮達を望むという欲望の消失を示すかもしくは隠すために、「途窮」の語の使用法を変化させていた。

ここでは、嵇康に関して、その詠われる属性の変化と「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」から、白居易の思考を追跡してきたが、「慵」という属性が増えることは何を示すのか。

ここまで見てきた白居易の論理では、嵇康から「疏頑」という属性を取り除いてしまえば、「慵」に生きる隠者でしかないということになる。そして、そんな嵇康と白居易自身が同じだと、むしろ自分の方が「慵」であると白居易は洛陽時代以前から言っている^三。つまり、洛陽時代の白居易は、「疏頑」という属性が無くなった嵇康であり、「慵」の中に生きる隠者であると宣言していると考えられる。これは、中尾氏の言う、「中央政界に執着の無いことを示す」という説に沿った白居易の自己表現と見做し得るだろう（小論で詩から抽出した白居易の思考や論理を、白居易自身がどれだけ自覚していたかはわからないが）。

本節では、中尾氏の研究を受け、その指摘を中尾氏の用いなかった材料を用いて論証するということを目的とした。白居易の研究を進める中尾氏が、「竹林七賢」に言及した詩よりも、より白居易の後半生の処世への認識を示す詩を用いて考察されることは、当然のことだろう。

しかし、ここでは、中尾氏の指摘が「竹林七賢」に言及した詩からも読み取れることを示した。これは、筆者の白居易への関心よりも「竹林七賢」の描き方への関心の方が強いからである。しかしながら、小論が成立するには、よりわかりやすい形で、中尾氏が指摘されたおかげであることは確かである。

一 劉伶を扱わない理由としては、本文後述の中尾氏論考で指摘されるように、劉伶に関する変化は、「量的」なものに過ぎず、本章が目的とする阮籍、嵇康に関して見られる「属性の変化」とは異なるためである。

二 中尾健一郎氏「洛陽時代の白居易と魏晉の士人——『竹林七賢』を中心に」（『中唐文学会報』、第十八号、二〇一一年十月、一七〜三六頁）。

三 前掲論文、二二頁。

四 前掲論文、二九頁。

五 引用は『白居易集箋校』（上海、上海古籍出版社、二〇〇三年一〇月、第一版第二刷）を使用する。なお、中国語文は拙訳により、注に原文を示す。

六 原文「籍又能爲青白眼，見禮俗之士，以白眼對之。及嵇喜來弔，籍作白眼，喜不懌而退。喜弟康聞之，乃齎酒挾琴造焉，籍大悅，乃見青眼。」（房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版、一三六一頁）。

七 原文「各有詩千首，俱拋海一邊。白頭吟處變，青眼望中穿。」（前掲『白居易集箋校』、一〇五九頁）。

八 原文「晚來籃輿雪中迴，喜遇君家門正開。唯要主人青眼待，琴詩談笑自將來。」（前掲『白居易集箋校』、一六〇四頁）。

九 原文「偶作關東使，重陪洛下遊。病來從斷酒，老去可禁愁。款曲偏青眼，蹉跎各白頭。蓬山閑氣味，依約似龍樓。」（前掲『白居易集箋校』、一七三二頁）。

一〇 原文「各以詩成癖，俱因酒得仙。笑迴青眼語，醉並白頭眠。」（前掲『白居易集箋校』、一九九六頁）。

一一 原文「洛川汝海封畿接，履道集賢來往頻。一復時程雖不遠，百餘步地更相親。朱門陪宴多投轄，青眼留歡任吐茵。聞道郡齋還有酒，風前月下對何人。」（前掲『白居易集箋校』、二二二五頁）。

一二 原文「吉馭吏耆酒，數逋蕩。嘗從吉出，醉歐丞相車上。西曹主吏白欲斥之，吉曰：『以醉飽之失去士，使此人將復何所容。西曹地忍之，此不過汗丞相車茵耳。』遂不去也。」（班固撰、顏師古注『漢書』、北京、中華書局、一九七五年四月、第一版第三刷、三一四六頁）。

一三 原文「後聞步兵厨中有酒三百石，忻然求爲校尉。於是入府舍，與劉伶酣飲。」（劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』、上海古籍出版社、二〇〇二年十二月、第一版第一次印刷、六一一～六一二頁）。

一四 原文「何處春深好，春深隱士家。野衣裁薜葉，山飯曬松花。蘭索紉幽珮，蒲輪駐軟車。林間箕踞坐，白眼向人斜。」（前掲『白居易集箋校』、一八三〇頁）。

一五 「阮籍傳」に「裴楷弔之，籍散髮箕踞。」（前掲『晋書』、一三六一頁）とある。

一六 原文「時率意獨駕，不由徑路，車迹所窮，輒慟哭而反。」（前掲『晋書』、一三六一頁）。

一七 後藤秋正氏は、杜甫の詩に見える「窮途」を、「あるいは旅先での生活のゆきづまりを言い、あるいは安史の乱以後も各地で戦乱が続く国家の状況とも結びついて自身の進路が見出せない悲痛な心境を表現している」（後藤秋正氏『窮途』補記・詩語のイメージ）『北海道教育大学紀要』人文科学・社

- 会科学編、五三卷一号、二〇〇二年九月、二七〜四二頁、引用箇所は二八頁）と説明している。
- 一八 原文「物故不可論。途窮能無慟。」（前掲『南北朝詩』、一二三五頁）。
- 一九 原文「賈誼哭時事，阮籍哭路歧。唐生今亦哭，異代同其悲。」（前掲『白居易集箋校』、四三頁）。
- 二〇 原文「途窮任憔悴，道在肯徬徨。」（前掲『白居易集箋校』、八七六頁）。
- 二一 原文「何處春深好，春深貧賤家。荒涼三逕草，冷落四鄰花。奴困歸傭力，妻愁出貨車。途窮平路險，舉足劇褒斜。」（前掲『白居易集箋校』、一八二八頁）。
- 二二 原文「何處征戍行，何人羈旅遊。窮途絕糧客，寒獄無燈囚。勞生彼何苦，遂性我何優。撫心但自愧，孰知其所由。」（前掲『白居易集箋校』、一二四七三頁）。
- 二三 原文「自古有琴酒，得此味者稀。祇應康與籍，及我三心知。」（前掲『白居易集箋校』、二〇六〇頁）。
- 二四 原文「中散步兵終不貴，孟郊張籍過於貧。」（前掲『白居易集箋校』、二二七八頁）。
- 二五 原文「迎接須矜疏傅老，祇供莫笑阮家貧。」（前掲『白居易集箋校』、二二五五頁）。
- 二六 原文「榮名厚祿」（前掲『白居易集箋校』、二二七八頁）。
- 二七 原文「我年日已老，我身日已閑。閑出都門望，但見水與山。闕塞碧巖巖，伊流清潺潺。中有古精舍，軒戶無局關。岸草歇可籍，逕蘿行可攀。朝隨浮雲出，夕與飛鳥還。吾道本迂拙，世途多險艱。嘗聞嵇呂輩，尤悔生疏頑。巢悟入箕穎，皓知返商顏。豈唯樂肥遁，聊復祛憂患。吾亦從此去，終老伊嵩間。」（前掲『白居易集箋校』、二〇三七頁）。
- 二八 原文「然嵇志遠而疏。呂心曠而放。」（李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、二二九頁）。
- 二九 原文「帝都名利場，雞鳴無安居。獨有懶慢者，日高頭未梳。（中略）三句兩入省，因得養頑疏。」（前掲『白居易集箋校』、一一六三頁）。
- 三〇 「山巨源に與ふる絶交書」に原文「性復疏懶。筋驚肉緩。頭面常一月十五日不洗。不大悶癢。不能沐也。」（前掲『文選』、六〇一頁）とある。
- 三一 「慵を詠ず」に「嘗聞嵇叔夜，一生在慵中。彈琴復鍛鐵，比我未爲慵。」（前掲『白居易集箋校』、三三五頁）とある。

*本章は、中央大学人文科学研究所「中国文化の伝統と現代」研究チームにおける研究活動の成果である拙稿「白居易の『竹林七賢』観」（『人文研紀要』第七九号、中央大学人文科学研究所、掲載予定）を改稿したものである。

第二節 劉禹錫

劉禹錫（七七二—八四二）は、若年での政治的な成功から一転、長年に渡る左遷を経験し、それでも最後まで中央政界への復帰を諦めずにいた人物とされている。このように、自身の志を遂げようという意志を持ち続けた詩人の詩に、「竹林七賢」はどのように描かれるのだろうか。

本節では、劉禹錫の「竹林七賢」観を考察するのに、補助線として、前節で見た白居易の「竹林七賢」観を用いることとする。劉禹錫は、晩年近くになってからの白居易との交友が知られ、多くの唱和した作品が残されており、詩を贈りあっていたことが知られているからである。

前節では、白居易の「竹林七賢」に言及した詩を考察した。洛陽に閑居した時代とそれ以前という中尾氏の設定した区分に従い、阮籍、嵇康に対する白居易の言及を確認したところ、言及される属性の変化が見られた。よって、本節でも、同様の傾向が劉禹錫の詩からも読み取れることを確認したい。

1 「不遇を嘆く」という属性

劉禹錫は、よく知られるように「阮公の體を學ぶ三首」を作っており、阮籍を意識していたことは認められる。しかし、「阮公の體を學ぶ三首」は、阮籍に倣って懷中を述べるということを主眼としており、作品の中で阮籍に触れることはない。

劉禹錫の詩に見られる阮籍へ言及は、顔延之「五君詠」に見られる「途窮」を用いたものである。顔延之「五君詠」の該当箇所は、次のとおり。

人の善し悪しを論じることはないが、
ただ行き詰まっては慟哭するばかりだ。二

この「途窮」が用いられる「韓十八侍御が岳陽樓にて竇司直に別れる詩を示さるるに因りて屬り和せしむ、重ねて以て自述し故に六十二韻を成すに足る」（以下「韓十八侍御」とする）の冒頭部分を挙げる。

幸いなことに万物は安らかであり、
私は一人行き詰った状況にいるのではない。
私の傷ついた羽はさらに傷を重ね、

その驚きはたびたび私の精神を奪う。三

この詩は韓愈の詩に和したものであり、永貞元（八〇五）年の作とされ、朗州司馬に貶せられた時期にあたる。左遷され、その行き詰ったという思いが阮籍の属性「途窮」で表現されている。この「窮途」が顔延之「五君詠」から離れ、熟語として単なる「行き詰まり」という状況を示しているのではないかという疑問が生じるが、挙げた部分の三句目「傷ついた羽」は、顔延之が「五君詠」で嵇康を詠った語を踏まえていると考えられる。該当する部分は次の通り。

鳳凰のような翼が時には傷つこうとも、

龍のような性質は誰にも飼い馴らすことはできない。四

さらに、この詩の末句で、「顔光祿」と顔延之に言及することから、明らかに顔延之「五君詠」を意識しており、阮籍と嵇康を並べて挙げているのだと考えられる。

もう一例、「途窮」を用いたものが見られる。

「眼醫の婆羅門僧に贈る」

秋の終わりに遠くを眺める眼を傷め、

一日中行き詰った状況に泣いていました。

両目の見る先は真つ暗であり、

まだ中年であるのに老人のようなのです。

赤色を見てようやく青緑色に見え（た王僧孺のように心が乱れ）、

日の光を恐れ風が堪え切れません。

あなた（婆羅門僧）は眼を開かせる術をお持ちですが、

どうやってこの陰りを除くのでしょうか。五

この詩は、眼医者であった婆羅門僧に贈った詩である。詳しい制作年代はわからないが、詩中にて「中年」と言っていることから、若くもなく老いてもいない時期にあたるのだろう。内容は、自身が眼を傷めたことが中心となるが、実際に劉禹錫が眼を傷めていたかはわからない。眼の傷みを、自身を取り巻く状況の象徴として用いているようにも読める。つまり、眼を開かせる眼医者である婆羅門僧は、阮籍の置か

れたのと同様の「行き詰った（途窮）」状況を打開する方法も知っているのではないか、という諧謔ともすがりつく思いとも読めるということである。

「途窮」を用いて阮籍に言及したものは、以上に見た二例のみしか見られないが、どちらも、自身の思い通りにいかない状況を嘆く意で用いられている。

先に見た「韓十八侍御」では、行き詰まった自身の境遇を嘆くために、阮籍とともに嵇康が用いられていた。もう一例、同時期の作で、嵇康に言及したものがある。「武陵にて懷ひを書す五十韻并序」の部分のみ挙げる。

靈芝が年に三度花開くことを挙げ嵇康のような我が身を嘆き、
壮年での白髪交じりの髪によって潘岳のような我が身を嘆く。六

この詩は、武陵という楚の地で作られたということもあり、自身を屈原に擬えて不遇を嘆いている。そのような構造の作品の末尾近くにて、嵇康（表記は「中散」）が引かれている。嵇康とともに引かれる「三秀」の語は、嵇康「幽憤詩」の語である。

煌々と輝く靈芝は、
一年に三度花開く。

私一人だけがどうして、
志を遂げられないのだろう。七

劉禹錫は、嵇康の嘆きと同様、自身の志を遂げられぬことを、この詩で嘆いている。このように、比較的若い時期の劉禹錫は、阮籍や嵇康の属性を用いて、自身の不遇を嘆いていることが確認できる。

2 属性の変化

前項では、相対的に若い時期（晩年とは言えない時期として）の詩を見てきた。これらの詩では、阮籍や嵇康に自身を仮託して、不遇を嘆く。それが晩年に近づくようなように変化するのか。次の詩では、嵇康を否定している。

「偶作二首」其の一

夜明けまで樽酒に向かい、
興は好むが酒の美味さを好むのではない。

一日中大勢の人に向き合うが、

思うままに発言しても気ままに話しているわけではない。

世間の物事を閑かに尽く見据え、

薬によって病にはほとんど慣れてしまった。

嵇康に言付けよう、

私は（あなたと違って）非常に堪えがたいことはないのだ。八

この詩は、嵇康（表記は「嵇中散」）に言及し、嵇康が「山巨源に與ふる絶交書」にて挙げた非常に堪えられないことを、私（劉禹錫）は堪えがたいとは思わないと否定する。嵇康の七つの堪えられないことは、以下の通り。

- ① 朝寝坊が好きなのに、門番にしきりに催促されること。九
- ② 琴を抱えて歩きながら吟詠したり、草原で鳥を狩ったり魚を釣ったりするのが好きなのに、下役人がついて回し、勝手に動き回れないこと。一〇
- ③ 正座をするとすぐに足がしびれ、虱が多い体質なので、しょっちゅう搔き筆っているのに、きちんとした服を着て、上官に挨拶をしなければならないこと。一一
- ④ 普段から手紙を書くのに慣れておらず、また苦手なのに、世間にはいろんなことが起こるので、案件が山積みとなってしまう、しかるべき返事を出さなければ、礼教に反し義理を欠くことになるので、自分を叱咤して行おうとしても、どうにもできないこと。一二
- ⑤ 葬式が好きではないのに、世間の道徳では葬式を非常に重んじ、私という者を理解してくれない人々に非難され、中傷される私としては、驚き恐れて自分を責めてはみるものの、生まれつきの性質はどうしようもなく、心を従わせ世俗に適うよう努力してみても、それは真情を偽っていることであり、結局「咎もなく誉れもない」という目障りとはならない存在にはなれないこと。一三
- ⑥ 俗人が好きではないのに、彼らと力を合わせなければならず、また座敷に溢れんばかりのお客さんに交じり、呼び交わすうるさい声を聞き、がやがやごみごみした場所で、あらゆる駆け引きが、面前で行われるのを見なければならぬこと。一四

⑦面倒なことは嫌いなのに、職務となれば果たさなければならず、雑多な仕事で気が休まらず、世間の常識が考えにまとわりつくこと。一五

以上が嵇康の「七つの堪えられないこと」であるが、これは、「人倫には礼が有り、朝廷には守るべき法が有る。それを突き詰めて考えてみれば、私には七つの堪えられないことと二つの許されることがある」^{一六}という文に続くものである。つまり、世間に生き、仕官する上での欠点を挙げている部分であり、これらを否定する劉禹錫は、世間に生き、仕官する上での欠点はないという自己認識を述べていることとなる。また、この「山巨源に與ふる絶交書」の一段の前には、阮籍について述べている。

阮籍は人の欠点を論じることはなく、私は常に彼を師として学ぼうとしているが、その境地に達することができない。一七

また、「偶作二首」其の一に詠われる句を見てみれば、「興は好むが酒の美味さを好むのではない」は、阮籍の韜晦としての酒、「思うままに発言しても気ままに話しているわけではない」は、「至慎」と称された阮籍の態度、といった阮籍を念頭に置いているような内容が述べられている。つまり、劉禹錫は、阮籍のように、人々の間にあっても、うまくやって行くことができ、また、朝廷に仕えても、嵇康のような欠点はないと自分を語っているのである。

「韓十八侍御」は、永貞元（八〇五）年の作とされ、「偶作二首」は、年代は確定されていないが、晩年の作とされている。若かりし頃の左遷という躰きから晩年に至って、劉禹錫が「嵇康」に見る属性は、不遇を嘆くという属性から、世俗や仕官に不向きな性質を持つという属性に変化している。これは、たび重なる左遷、中央への回帰という願いによって、劉禹錫の認識が変化したことを示しているのだろう。詳細は異なるが、白居易の認識と同様な属性の変化が見られる。

次の「令狐相公の遷拜を賀すの什を寄せるに酬す」でも、嵇康の「七つの堪えられないこと」の①「朝寝坊が好きなのに、門番にしきりに催促されること」が用いられている。前半部分を挙げる。

行きなやむこと二十三年で再び郎中となったが、

（都の長安ではなく）洛陽を彷徨っている。

門番が朝早くに呼びに来ることもなく、

まして宿直することもない。一八

この詩は、大和元（八二六）年に、主客郎中分司東都事を授かったことを祝ってくれた令狐楚に対しての返事である。「郎中」ではあるが、「分司東都事」であるため、都長安ではなく洛陽に居り、さらに朝早くからの勤務や宿直がないということを使うことで、「分司官」への不満を述べている。ここでは、嵇康が「堪えられない」としていた、①「朝寝坊が好きなのに、門番にしきりに催促されること」がないことに不満を述べている。前詩とおなじく、官への期待が述べられており、嵇康への否定を含蓄していると考えられる。

このように、左遷に遭っている状況において、「阮籍」、「嵇康」に与えられていた、不遇を嘆くという属性は、世間にあっても上手くやっつけていける、仕官に不向きなではないといった属性へと変化し、さらに、仕官に不向きな属性として述べられる嵇康は否定されるということになっっている。

以上に見てきたように、白居易の詩において見られた、阮籍、嵇康に与えられた属性の変化が年月とともに変化するという傾向を、劉禹錫の詩からも読み取ることができる。

さらに、「竹林七賢」によつて、「仲間意識」を示しているものがある。

次の「陳許の王尚書が白少傅侍郎の長句に酬するに和し因りて汝洛の舊遊の什を通簡す」（以下「陳許の王尚書」とする）では、阮籍、嵇康を引いて「仲間意識」に言及している。末尾のみ挙げる。

竹林では王戎（あなた）から去つて行き、

嵇康・阮籍（私と白君）は貧窮してはいますが風流さはまだ衰えてはいませんよ。一九

この詩は、開成三（八三八）年、劉禹錫の没する二年前、つまり、晩年の作である。省略した内容は、再び節度使となった王彦威に、昔共に遊んだことを語っている。そして、挙げた部分となるのだが、同姓ということによつて王彦威を王戎に擬え、自身と白居易を阮籍、嵇康に擬えていることから、かつての交遊は、「竹林の遊」に擬えられていることがわかる。後に栄達した王戎が、竹林から「去つた」とされ、残った阮籍、嵇康は「貧窮しているが衰えてはいない」と言う。言及される属性は、「貧窮（貧）」「風流（興）」であるが、それ以外の属性は読み取れない。これは、阮籍、嵇康の有する個々の属性が重要なのではなく、王戎が加えられているように、「竹林の遊」という交遊によつて示される、「仲間意識」が重要なのだろう。この点については、次節にて、劉禹錫と白居易が参加した連句によつて、友人との交遊の際に、共作するという状況での表現を確認する。

同様に「竹林七賢」によって、仲間意識を示しつつも、その中に潜在的に「引き立て」を求めているものがある。「門下相公が冊命を榮加され天下同に忝くも眷私に沐するを歡び輒ち敢へて賀を申ぶ」（「門下相公が」の末尾部分を挙げる）。

竹林七賢にはまだ残された人物（わたし）がいて、清風のような響きであなたを称えています。二〇

この詩は、大和四（八三〇）年、裴度が司徒となった際の作である。裴度は、劉禹錫や白居易と交友があり、ともに連句を作るなどしていることから、ここに挙げる「七賢」には、仲間意識が示されていると考えられる。また、「清風のような響き（詠清風）」の語は、『詩経』「大雅」「烝民」の次の句を踏まえていると思われる。

尹吉甫が仲山甫を称えて詠うと、
和らいだ清風のような響きがあった。二一

この句を踏まえているとすれば、裴度を仲山甫に、劉禹錫自身を尹吉甫に擬えていると考えられる。当然ながら、この詩は、裴度を称えるためのものではあるが、劉禹錫自身が詩の中に登場し、自身を「残された人物（遺老）」と言っていることから、明らかに引き立てを願っていることが窺われる。「陳許の王尚書」では、仲間意識に言及しているが、「門下相公」とは異なり、引き立てを求める表現は見られない。つまり、どちらの詩も仲間意識に言及しているが、「門下相公」では、詩の宛先や状況などによって、「仲間意識」に潜在していた「引き立てを求める」という願望が前景化してきたのではないだろうか。

以上の二例では、友人との「仲間意識」を示すために「竹林七賢」が言及されている。阮籍、嵇康の個々の属性が変化して用いられるのと並行して、「竹林七賢」という語は、よく詠われる「隱者」、「風流」といった属性^{二二}で用いられるのではなく、「仲間意識」として用いられている。その理由として考えられるのは、ここまで見てきた詩に描かれていたように、「仲間意識」という属性とそこに潜在する「引き立てを願う」という願望があったことだろう。

劉禹錫の場合、白居易のような洛陽時代とそれ以前という截然たる区分は見られないが、若年から晩年にかけての変化の傾向として、以上のような属性の変化を認めることができるだろう。

3 その他の属性

「不遇を嘆く」という属性が、引き立てを願うことによって、否定されることになる嵇康だが、このよ
うな出処進退、政治に関わるもの以外の属性でも詠われる。ここでは、宴席で用いられる酔い姿の形容と
友人を傷むという属性を見ていく（後者の属性は、向秀「思旧賦」によって、嵇康を傷む向秀という図式
で示される場合が多い）。

・宴席で言及される嵇康

まずは、宴席にて言及される嵇康を見ていく。「揚州にて春夜、李端公益、張侍御登、段侍御平仲、密縣
の李少府暢、祕書張正字復元、同に水館に會し酒に對して聯句せしに、刻燭、擊銅鉢の故事を追ひ、遅れ
しは輒ち觥を舉げ以て之を飲む、夜に速びて艾しく、羣公沾酔し紛然として枕に就くに余偶ま獨り醒む、
因て詩を段君の枕上に題し、以て其の事を志す」を挙げる。

私は一人寂しく静かにろうそくの燃え残りを見、

群公は入り乱れて玉山が崩れるような酔い姿を見せている。

自分が大酒飲みではないことを恥ずかしく思いながら、

一晚中眼が冴えて騎馬が巡る音を聞く。二三

この詩は、貞元十七（八〇一）年の作とされている。春の夜に集まって連句を作り、昔の故事に因んで
罰杯を設け、皆が酔いつぶれて寝ている中、劉禹錫は眼が冴え、詩を作っている。この詩の第二句の「玉
山頽」は、嵇康の酔った姿の形容として知られる。

山濤は言った、嵇康の人となりは、きびしく一本の松がひとりそそり立つようであり、その酔いつぶ
りは、ぐらりと傾き玉山が崩れおちるようであると。二四

この故事は、嵇康の酔い姿を善きものとして扱っていると考えられるため、劉禹錫も同様に、人々の酔
い姿を形容したと思われる。それは、第三句にて大酒のみではない自身を恥じていることから窺われる。

次の「河南の王少尹の宅に宴し、張常侍、白舍人、兼ねて盧郎中、李員外の二副使に呈す」でも「玉山頽」が用いられる。末尾の部分のみ挙げる。

この最も優れたうてなに素晴らしいお客さんがいらつしやったのだから、どうか玉山が崩れるような酔い姿を見せるのを惜しまないでください。二五

この詩は、大和二（八二八）年の作とされている。この詩では、人々はまだ酔ってはいないが、思う存分飲んでいただきたいという思いを述べるために、容姿の優れた人が酔っぱらう姿を挙げていると思われる。

以上、「玉山頽」を用いた二例を見た。劉禹錫個人の作品で用いられたのは、二例だけだが、この「玉山頽」という表現は、劉禹錫の参加した連句で、度々用いられている。連句での表現については、次節にて改めて論じるが、この「玉山頽」という表現が度々用いられることは、嵇康自身が否定されていたということではなく、嵇康の不遇を嘆くという属性が否定されていたことを示していると考えられる。

・友人を悼む

ここまで、宴席という場の詩で言及される嵇康を見てきた。次に、友人を傷詩に描かれる嵇康を見ていく。

まずは、嵇康の処刑の際の故事として有名な「広陵散」を用いたものを見るが、次の詩は、詩本文では言及せずに、詩題にて触れている。

「令狐僕射、余と投分素より深し、縦ひ山川阻峭なるも、然れども音問相繼げり、今年十一月、僕射疾みて起聞せず、予已に訃書を承け、寢門に長慟す、後日使者の兩輩書并びに詩を持する有り、其の日時を計れば已に是れ疾に臥せり、手筆幅に盈ち、翰墨尙新なり、新詞一篇、音韻彌よ切なり、涙を収めて管を握り以て報章を成す。廣陵の絃今に絶てりと雖も、而れども蓋泉の感猶聞くを庶わん、之を總帳の前に焚き、舊編の末に附く」^{二六}

詩題の大意を述べれば、「令狐楚さんとは仲が良く、どんなに離れていても手紙のやり取りは続けていた。今年の十一月に、彼が病に倒れ、先日訃報を受けた。後日使者が手紙と詩を届けてくれたが、計算してみ

れば既に病の床で書かれたものだった。紙幅いっぱい書かれた文字は、まだ墨が新しく、詩一首はまして心に迫る。私は涙を収めて筆をとり、返事を書いた。彼の作る詩文はもうこの世から失われてしまったけれど、僕の言葉を聞いてくれることを願い、この詩を霊前に焚き、彼との唱和集の巻末に付録しておく」というものである。

嵇康の故事は以下の通り。

嵇康は東市での処刑に臨んで、顔色一つ変えなかった。琴を取って爪弾き、「広陵散」を奏でた。曲が終わると、言った。かつて袁準がこの曲を教えて欲しいと言ったとき、私は秘密にして教えなかった。「広陵散」はこれで失われてしまった。二七

この故事が示す通り、「広陵散」とは琴の曲であるが、劉禹錫は詩本文でも以下の通り言うように、令狐楚の詩文として用いている。

琴の音が絶えてしまい、
玉のような響き（の様な文章）が聞けないことが悲しい。二八

このような友人を傷む詩にも嵇康は用いられる。以下に挙げる例は、嵇康の死を傷んだ向秀の「思旧賦」を用いている。「樂天が敦詩の舊宅を過りて感じるところ有りの一篇を示す、之を吟じれば泫然として昔事を追想す、因りて繼和を成し以て苦懷を寄す」の前半部分を挙げる。

白くんと共に今は亡き友人の家までやってきたが、
門前には寒々しい川が流れ木々はまばらに立っついて寂しい気分になった。

向秀は友人がもういないのに家は変わら残っていることを嘆き、
蕭何が死してのち書物が散じたように崔くん亡き後誰が人民のために励むのだろうか。二九

この詩は、白居易と共に崔羣（字は敦詩）の旧居を過ぎたときに、亡き友人を嘆いて作られたものである。第三句に、向秀の「思旧賦」の次の部分が引かれている。

家屋は今も残って壊れていないが、

そこに住んでいた人はもういない。三〇

「思旧賦」は、向秀が亡き嵇康の旧宅を訪れた際、寒々とした冬の夕暮れに隣人の吹く笛の音が聞こえてきて、かつての交遊を思い出し、嘆いたものである。劉禹錫は、自身を向秀の立場に置き、友人の崔羣を嵇康に擬え、かつての交遊を悲しみ嘆いている。

同じように、「愚溪を傷む三首并引」其三でも、向秀「思旧賦」が引かれている。

（愚溪の傍の）柳の門や竹の路地はしなやかに風になびきながら生え、
野草や青い苔は日々増える。

たとえ隣人が笛を吹けたとしても、

山陽の昔の友人を誰も訪れない。三一

この詩は、柳宗元を傷んで作られたものである。直接引かれているのは、「思旧賦」の序文である。

隣人に笛を吹く者がいて、その音色は透き通って遠くまで聞こえる。昔共に遊んだ付き合いに思いを馳せ、その笛の音色に心を動かされ悲嘆にくれる。よって賦を作って言う。三二

ここでも、友人である柳宗元を嵇康に擬えているが、前詩とは少し表現方法が異なる。前半二句の風景の描写は、柳宗元が左遷された永州の愚溪の風景を描いていると思われる。この点では、前詩で、友人亡き後も「家」が依然として残っていることと対応し、友人亡き後も愚溪の風景は、変わらず自然の営みが続いていることを示している。しかし、後半二句では、「誰も訪れない」と言う。これは、友人である柳宗元亡き後、誰が愚溪へ行くだろうか、という友人を嘆く思いによって、「愚溪へなど誰もいかない」という表現になっていると思われる。前詩では、実際に友人の旧宅を訪れていたが、この詩では、実際には行かずに作られている。地理的な要因も考えられるが、詩序によれば、ある僧が愚溪のある永州に行き、愚溪の現状を教えてくれたことが発端とされている三三ので、このような結構となったのだろう。

次の「樂天が揚州にて初めて逢ひし席上にて贈らるるに酬す」では、特定の人物が挙げられず、向秀「思旧賦」が引かれている。前半部分を挙げる。

巴や楚の地は寂しい土地であり、

私はそこに二十三年も身を捨て置かれた。

その間亡き友人を思い空しく「思旧賦」を吟じていたが、

故郷に戻ってみれば爛柯の人が見たように何もかもが変わっている。三四

この詩では、左遷されて過ごした二十三年の間に、多くの友人が亡くなったことを、「思旧賦」を用いて表現している。また、「懐旧」の語は、潘岳の「懐旧賦」によるが、どちらもなくなった人を傷んだものである。

ここまで、「広陵散」に言及したものの一例、「思旧賦」に言及したものの三例を見てきた。友人を傷むために、必ずしも「広陵散」、「思旧賦」を用いる必要はないのであるから、ここから、何がしかの意図を読み取っても良いだろう。

まず、考えられるのは、「思旧賦」は、その向秀が嵇康を傷むという構造が、言及される大きな要因であるということである。よって、一概に嵇康を表現しているとは言いがたい。しかし、「広陵散」に言及して令狐楚を傷み、人物と共に何か善きものが失われたと嘆く認識に顕著に見られるように、亡くなった人物を傷むという行為には、何らかの価値の喪失を悲しむという認識が認められる。それは、人物そのものである。つまり、人物に付随する価値、さらには、そのような価値をも含めた「人物」とも考えられよう。つまり、傷まれる人物は、価値を有する人物であり、「向秀が嵇康を傷んだ」という構造を用いるからには、嵇康に価値がなくてはならない。いかに「亡き友人を傷む」という「思旧賦」の構造が、友人の死を傷むのに有用だとしても、亡き友人を価値の低い人物に擬えることはしないだろう。劉禹錫の認める嵇康の価値の一つとして、先に「玉山頽」を用いた容姿の素晴らしさ、酔いつぶりという属性を評価した表現を見たが、「思旧賦」を用いた表現でも、嵇康の価値は認められると考えられる。

このように、嵇康はその価値を認められている。嵇康が否定されるのは、前項で見たように、劉禹錫の晩年（もしくはそれに近い時期）に、出処進退に関わる属性で詠われた場合のみである。しかも、若年の劉禹錫は、阮籍と嵇康を引き、自身の不遇を嘆いている。これは、阮籍や嵇康自体に対する評価が低いのではなく、左遷された状況からの脱却を願う劉禹錫が、再び中央の要職に就くことを目的とした「操作」によるものではないだろうか。

おわりに

本節では、前節にて確認した、白居易詩の洛陽時代とそれ以前において見られる、阮籍、嵇康に言及す

る際の属性の変化が、同時期の詩人であり、白居易とも交友のあった劉禹錫にも見られることを確認した。そして、特に、劉禹錫の用いる嵇康の善き属性として、「酔い姿」、「善きものの喪失」といった属性を確認した。ここから、晩年に近づき、否定される嵇康は、嵇康自身が否定されているのではなく、政治的なものに関わる属性が否定されていることが認められた。それとともに、嵇康の善き属性が友人を擬えて用いられていること、「竹林七賢」として用いられるときに、「仲間意識」を持たせていることから、劉禹錫の彼らへの認識として、善きグループとしての認識が窺われる。この点に関しては、次節にて、白居易、劉禹錫の参加した連句を見ることで、確認したい。

以上のような組み立てによつて、前節と同様、阮籍と嵇康を主に扱い、「竹林七賢」の他の人物には、付随的に触れるか、触れなかったかのどちらかとなった。各人物の詠われた割合を比べると、母数が明確でない以上、意味がないことだが、「竹林七賢」への言及の割合は、やはり阮籍、嵇康の二人に偏る。よつて、致し方ない部分でもある。本節では触れなかった人物を引いたものとして、劉伶を詠った二例三五、阮咸を詠った一例三六があることを付記しておく。

一 引用は、劉禹錫著、瞿蛻園箋証『劉禹錫集箋証』（上海、上海古籍出版社、二〇〇五年四月、第二刷）を用いる。中国語文は拙訳により、原文を注に示す。

二 原文「物故不可論。途窮能無慟。」（前掲『南北朝詩』、一二三五頁）。

三 原文「幸逢萬物泰，獨處窮途否。鍛翮重豐傷，兢魂再三褫。」（前掲『劉禹錫集箋証』、一二九一頁）。

四 原文「鸞翮有時鍛。龍性誰能馴。」（前掲『南北朝詩』、一二三五頁）。

五 原文「三秋傷望遠，終日泣途窮。兩目今先暗，中年似老翁。看朱漸成碧，羞日不禁風。師有金篋術，如何爲發蒙。」（前掲『劉禹錫集箋証』、九六四頁）。

六 原文「三秀悲中散，二毛傷虎賁。」（前掲『劉禹錫集箋証』、六〇七頁）。

七 原文「煌煌靈芝。一年三秀。予獨何爲。有志不就。」（李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、三二八頁）。

八 原文「終朝對尊酒，嗜興非嗜甘。終日偶衆人，縱言不縱談。世情閑盡見，藥性病多諳。寄謝嵇中散，予無甚不堪。」（前掲『劉禹錫集箋証』、五五六頁）。

九 原文「臥喜晚起。而當關呼之不置。」（前掲『文選』、六〇二頁）。

一〇 原文「抱琴行吟。弋釣草野。而吏卒守之。不得妄動。」（前掲『文選』、六〇二頁）。

一一 原文「危坐一時。痺不得搖。性復多蝨。把搔無已。而當裹以章服。揖拜上官。」（前掲『文選』、六〇二頁）。

- 一二 原文「素不便書。又不喜作書。而人間多事。堆案盈几。不相酬荅。則犯教傷義。欲自勉強。則不能久。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一三 原文「不喜弔喪。而人道以此爲重。己爲未見恕者所怨、至欲見中傷者。雖瞿然自責。然性不可化。欲降心順俗。則詭故不情。亦終不能獲無咎無譽如此。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一四 原文「不喜俗人。而當與之共事。或賓客盈坐。鳴聲聒耳。囂塵臭處。千變百伎。在人目前。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一五 原文「心不耐煩。而官事鞅掌。機務纏其心。世故繁其慮。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一六 原文「人倫有禮。朝廷有法。自惟至熟。有必不堪者七。甚不可者二。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一七 原文「阮嗣宗口不論人過。吾每師之。而未能及。」(前掲『文選』、六〇二頁)。
- 一八 原文「遭迴二紀重爲郎。洛下遙分列宿光。不見當關呼早起。曾無侍史與焚香。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一一六八頁)。
- 一九 原文「竹林一自王戎去，嵇阮雖貧興未衰。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一三七八頁)。
- 二〇 原文「七賢遺老在，猶得詠清風。」(前掲『劉禹錫集箋証』、六三五—六三六頁)。
- 二一 原文「吉甫作誦。穆如清風。」(『十三經注疏』、台北、藝文印書館、中華民國六二年五月、五版、第二冊、六七七頁)。
- 二二 「許給事が工部劉尚書を哭す詩を示され因りて同に作るを命ず」にて、「淒涼竹林下，無復見清塵。」(前掲『劉禹錫集箋証』、五九八頁)とあるのは、人物を傷むと同時に、「竹林七賢」の「風流」、「清」といった屬性を挙げていると思われる。
- 二三 原文「寂寂獨看金燼落，紛紛只見玉山積。自羞不是高陽侶，一夜星星騎馬回。」(前掲『劉禹錫集箋証』、六八九頁)。
- 二四 原文「山公…『嵇叔夜之爲人也，巖巖若孤松之獨立，其醉也，傀俄若玉山之將崩。』」劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』上海古籍出版社、二〇〇二年一月、第一版、五二三頁)。
- 二五 原文「第一林亭迎好客，殷勤莫惜玉山頽。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一〇五七頁)。
- 二六 前掲『劉禹錫集箋証』、一一一一頁)。
- 二七 原文「嵇中散臨刑東市，神氣不變，索琴彈之，奏廣陵散，曲終曰，袁孝尼嘗請學此散，吾靳固不與，廣陵散於今絕矣。」(前掲『世說新語彙校集注』、三〇二頁)。
- 二八 原文「危絃音有絕，哀玉韻猶虛。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一一一一頁)。
- 二九 原文「淒涼同到故人居，門枕寒流古木疏。向秀心中嗟棟宇，蕭何身後散圖書。」(前掲『劉禹錫集箋証』、

一二三一頁)。

三〇 原文「棟宇存而弗毀兮。形神逝其焉如。」(前掲『文選』、二二九頁)。

三一 原文「柳門竹巷依依在，野草青苔日日多。縱有鄰人解吹笛，山陽舊侶更誰過。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一〇一一頁)。

三二 原文「鄰人有吹笛者。發聲寥亮。追思曩昔遊宴之好。感音而歎。故作賦云。」(前掲『文選』、二二九頁)。

三三 「愚溪を傷む三首」詩序に「柳子沒三年，有僧遊零陵，告余曰：『愚溪無復曩時矣。』一聞僧言，悲不能自勝，遂以所聞爲七言以寄恨。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一〇一一頁)とある。

三四 原文「巴山楚水淒涼地，二十三年棄置身。懷舊空吟聞笛賦，到鄉翻似爛柯人。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一〇四七頁)。

三五 「吳方之が獨酌小酔の首篇を示され、樂天が續ひて酬ひて答ふる有り、皆戲謔を含みて極めて風流に至る。兩篇の中並びに蒙ひに屬らる、輒ち濫吹を呈し、益す來章を美す」に、「散金疏傳尋常樂，枕麴劉生取次歌。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一二二七頁)とあり、また、「馬大夫に酬ゆるに以て通草茭契酒を愚獻し、通拔の二字に感じ、因りて而して別れの作を寄す」に「莫訝提壺贈，家傳枕麴風。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一二二六頁)とある。なお、詩題の「通」の下の「草」は、『劉禹錫集箋証』では抜けているが、瞿氏の箋証によって改めた。

三六 「令狐相公の南齋にて小讌し阮咸を聽くに和す」に「阮巷久蕪沈，四絃有遺音。雅聲發蘭室，遠思含竹林。」(前掲『劉禹錫集箋証』、一二〇八頁)とある。詩句の「阮」は『劉禹錫集箋証』では「陋」に作るが、『全唐詩』によって改めた。

第三節 劉白連句

ここまで、白居易、劉禹錫それぞれの作品に見られる「竹林七賢」に言及したのを見てきた。ここでは、白居易、劉禹錫が参加した連句を見ていく。個人の作品の中で言及と複数名による共作という状況の違いが、詠われる属性の選択に影響を与えることは予想されるが、それが、どのように変化するのを見るためである。

「花下醉中聯句」

風光明媚なこの地で君たちと共に酒を飲んでみると、

花びらが飛んできて杯に落ちた。

終わりがけた春もまだ素晴らしいのだから、

日暮れの景色よ、急かさないでおくれ。

幸いにも酒は毎年有るし、

花も当然毎年咲く

今しばらくは美しい響き（詩）を打ちならすため、

酔っぱらってはいけないよ。

このような素晴らしい宴は本当に惜しまれるものだね、

良い時節に共に酒を飲めるのは簡単なことではないのだから。

誰が散る花を引き留めることができるだろうか、

どうしたら過ぎゆく春を引き戻すことができるだろうか。

我々はいつでも花見に来られるが、

宰相のような高貴な方は次はいつ来られるのでしょうか。

三人の宰相への言付けをお願いし、

散会しようとするが（名残惜しくて）しばらくぐずぐずと徘徊する。

（白居易、時に戸部相公が同席していた）二

この連句は、大和二（八二八）年の作とされ、李絳、劉禹錫、白居易、庾承宣、楊嗣復の五名による。宴席での素晴らしい風景とともに、過ぎゆく時を惜しむ方向で、全体の構造が結ばれている。八句目の李絳の句に、宴に参加した人々を「容姿の優れた人物が酔う様」という意味で、嵇康の次の故事が用いられ

ている。

山濤は言った、嵇康の人となりは、きびしく一本の松がひとりそそり立つようであり、その酔いつぶりは、ぐらりと傾き玉山が崩れおちるようである。三

本章第一、二節にて見たように、嵇康はその反権力的な属性によって、言及を避けられたり、否定的に扱われることが多かったが、ここでは、友人たちの酔った姿の形容として用いられており、否定的なニュアンスは読み取れない。

次の連句では、嵇康の「玉山頹」の故事と共に阮籍の「青眼」の故事が用いられている。

「興化の池亭に宴し、白二十二が東に歸るを送る聯句」（以下、「興化の池亭」とする）

白くんが洛陽に歸るので、

ここ西園で送別の宴を開いた。

白髪頭の気の合う仲間は、

池のほとりに集まり手には杯。（裴度）

別れの曲を心を込めて奏で、

飾った舟でくまなく池を巡る。

君を載せて車が動き出そうとしているかのように出立の日は近い、

この賓閣での宴は誰のために用意されたのか（もちろん君のためだ）。（劉禹錫）

舟縁に座っては透き通った水を弄び、

歩いては緑の絨毯に敷き詰められたような丘に登る。

花が枝垂れて美人が水面に映っているようであり、

水草はちりぢりになってもろみが吹いているようだ。（白居易）

岸を覆うように新たに竹の子が顔を出し、

あずまやには熟れた梅の香りが漂ってくる。

皆さんにつき従って存分に高笑いし、

素晴らしい景色に出会ってしばらくぶらぶらしてみる。（張籍）

静止したような透き通った水面は空と境を接し、

勢いよく流れる水音は地中から鳴り響く雷のようだ。

この素晴らしい林と池を共に楽しむのは簡単なことではないのだから、馬を急ぎ立ててはいけない。(裴度)

私たちの信義の厚さがわかるのか、魚も楽しげに泳ぎ、邪な企みを抱くことがないため鳥も疑わずに寄ってくる。

晴れ上がった夕方となれば槐の芽は露のように見え、夏が近づき石にも苔が生じます。(劉禹錫)

皆さんとお別れは天と地ほどの隔たりに例えられるほどなので、しばらくの間共にいたいと思う。

数珠の玉が切れるかのように歌は止み、十分に飲んだ皆は酔っぱらってしまった。(白居易)

白くんには世俗を超越しようとする志があるけれど、それは大きくて優れた才能である。

きつとまた中央に呼び戻されるだろうから、ここでの別れもそんなに長いものにはならないだろう。(張籍) 四

この連句は、大和三(八二九)年の作とされ、参加者は、裴度、劉禹錫、白居易、張籍の四名である。

内容は、白居易の送別の宴であるが、前詩と同じく、宴席での風景の素晴らしさが詠われる。季節の移り変わりを惜しむという要素が、白居易と共に過ごす時間を惜しむということに変化している。

まず、三句目、裴度によって、集まった人々が皆「気の合う仲間」という意味で、阮籍の次の故事が用いられる。

阮籍は青眼と白眼を使い分けることができ、礼俗の士を見るときは、白眼で対した。五

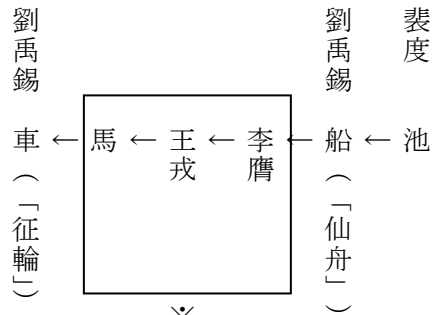
そして、末尾から五句目、白居易によって、人々の酔っぱらった姿の形容として、「玉山頽」の故事が用いられている。この連句でも、先の「興化の池亭」と同様、否定的なニュアンスは読み取れない。

この連句で眼を引くのは、冒頭の裴度の担当する四句の次に位置する劉禹錫の担当部分である。裴度が言うように宴席には池があり、劉禹錫はそれを引き継いで、池を「飾った船(仙舟)」で巡ることを言う。この「飾った船(仙舟)」には典故がある。江総の「洛陽道二首」其の一の次の部分を基にしていると考えられる。

飾った船で李膺は棹を取り、
王戎は轡を取って子馬に跨る。六

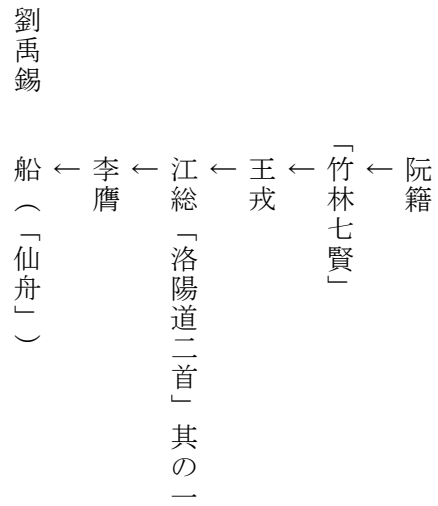
前句は、郷里に帰るため船に乗った李膺と郭太を人々は神仙かと思ったことを基にし、後句は、使徒となった王戎が子馬に乗って出掛けたので、人々がその人物が王戎とは思わなかったということが基となっている。

連句に戻り、その流れにこの典故を組み込んで劉禹錫の作句の組み立てを解釈すれば、次の通りとなる。



つまり、「池」からの連想で、「船」となり、船を用いた典故、それも白居易の向う洛陽に関わる典故として江総の「洛陽道二首」其の一へと繋がりが、その「洛陽道二首」其の一の詩句の中で、「船」と共に描かれる「李膺」、その対句となる「王戎」へと連想が進み、「王戎」の「馬」から、馬によって引かれる「車」へと連想が繋がったのではないだろうか。さらに、もう一つ、別の連想を挙げれば、次のようになる。

裴度 「青眼」
←



どちらの連想によって（もしくは別の連想で）、劉禹錫が句を作ったかはわからないが、末尾近くの白居易担当部分で、嵇康の「玉山頽」の故事が用いられていることから、ある程度、参加者全員が「竹林七賢」を意識していることが窺えるので、このように劉禹錫の連想を読み取ることが可能だろう。このような「竹林七賢」をさらに意識していると思われる連句がある。

「予洛中に到りしより樂天と文酒の會を為し、時時詠を構ひ、樂しみは支ふ可からず。則ち慨然として共に夢得を憶ふ。而るに夢得も亦た分司として此に至る、歡愜知る可し。因りて聯句を為す」（以下、「予洛中に到りしより」とする）

この洛陽での文酒の会、我が友人は鄒陽・枚乗に勝る才能の持ち主だ。

ただ劉くんがいないことを残念に思っていたが、なんと劉くんがやってきた（裴度）。

履物を逆さまにしながら急いで出迎え、宴席についてさっそく飲みます。

劉くんは劉伶の向こうを張る酒豪で、詩は劉禎の才能を凌ぐほどだ（いずれも基づくところがある、白居易）。僕は久しく辺鄙な土地で卑しい音楽を聴いていたが、

再び裴さんの素晴らしい宴席に参加できて喜んでいます。

昼から話始めて気づくと影の向きは変わっており、

夜の楽しみも気がつくとも星座が巡っている（劉禹錫）。

新作の詩を共に聴き、

以前のように談笑する。

目を引くものがあれば皆でまず鑑賞し、

花はまだ半開だから楽しむのはこれからだ（裴度）。

立ち上がると隠者の帽子はずり落ちそうで、

到る所で皆酔っぱらっている。

私たち文人墨客は宰相の東閣で騒ぎまわり、

裴度さんの気品を損なってしまう（白居易）。

詩を吟じれば君「白居易」が一番だが、

気ままさにかけては私が一番だ。

王徽之のように友人「劉禹錫」を思っていたが訪れるまでもない（ちょうど劉くんが分司としてやってきた）。

淳于髡「白居易」をそのまま留めておいても妓女に戯れる心配はない（宴中私はしばらく席を立った

が、白くんは座ったまま動かなかった、裴度）。

私は杯を差し出して酒を勧め、

筆をとって詩を捧げる。

裴度さんは私の冠が傾いていることも気にせず酒を受けてくれるし、

その詩の勢いにはかなわない（この四句は、裴度さんを称賛したものである、白居易）。

水辺の建物からカワセミを見、

石の敷かれた小道を苔を踏みながら歩く。

子供たちは竹馬に乗って遊び、

美人は梅の詩を吟じている（南側の屋敷にお供した、劉禹錫）。

我々三人は「洛中の三子」と言うべきだ、

鄴下の七子はもう遠い昔の話なのだから。

季節の移り替わりは早いものだから、

管弦の演奏で急ぎ立てるのはよそう（裴度）。

管弦の演奏で急ぎ立てるのはよそう（裴度）。

魚が飛び跳ねるのを眺めて楽しみ、
鶴がうろうろするのを暇つぶしに愛でる。

柳は黛を引いたように青く、
水面に浮く水草はもろみが吹いているようだ（白居易）。

清明の時期には火を改め、
律管の中に灰を入れて季節を占う。

赤い芍薬の多くは遅れて花開き、
緑の松が不規則に植えてあるのが素晴らしい眺めだ（劉禹錫）。

馬は洛陽の銅駝陌で嘶き、
水鳥は洛陽の水に浮かぶ。

様々なことで時の移りが惜しまれるので、
ちよつとしたことなら病に託けてやめたりしない（裴度）。

私（劉禹錫）は才能乏しくばたばたしているが、
裴度さんはゆったりと余裕を持っていらつしやる。

私（劉禹錫）が裴度さんに心服しているのを知って頂いたので、
わざわざ自ら取り入れることはしないでおきましょう（劉禹錫）。

昔からの同僚の隣に座ることが許されるでしょう、
劉くんの宴での風流さは嵇康や阮籍のようであり、

その友誼の厚さは陳重と雷義のようなのですから（この二句は、劉禹錫のことを言う、白居易）。

大きな炉には優れた職人が必要で、
大きな建物には多くの材料が必要です。

今後は裴度さんの引き立てで竜門に登れるので、
登れずにえらを曝すことなどないとわかつておりますよ（劉禹錫）。七

この連句は、開成二（八三七）年の作とされ、参加者は、裴度、白居易、劉禹錫の三名である。詩題と冒頭の裴度の句によれば、洛陽にて文酒の会を開いていた裴度たちは、劉禹錫がいないことを惜しんでいたが、その劉禹錫が洛陽にやってきたことを中心に宴席の様子を描いている。

「竹林七賢」に言及した部分は、まず七、八句目の白居易による比喻を用いた劉禹錫の賞賛である。

劉くんは劉伶の向こうを張る酒豪で、
詩は劉禎の才能を凌ぐほどだ（いずれも基づくところがある、白居易）。

劉禹錫を同姓ということから、「竹林七賢」の劉伶と「建安七子」の劉禎に擬えている。酒飲みという点では劉伶、試作に関しては劉禎よりも勝るとも劣らないという賞賛である。この「竹林七賢」|| 酒 / 「建安七子」|| 詩という二項対立はこの詩において重要な意味を持つ。だが、ひとまず、「竹林七賢」に言及した部分を見ていく。

次の言及は、白居易担当の十八句目である。ここは先に挙げた二つの連句でも用いられている嵇康の「玉山頽」の故事を用いたものである。

到る所で皆酔っぱらっている。

その次は、裴度担当の二十二句目である。二十一句目から挙げる。

詩を吟じれば君（白居易）が一番だが、
気ままさにかけては私が一番だ。

この部分は、詩作の分野における白居易への賞賛と自身の「気ままさ（疏放）」の主張である。直前の十九、二十句目の白居易の自己卑下に対する返答である。この「気ままさ（疏放）」は、単なる熟語として用いられていることも考えられるが、先に見た嵇康の「玉山頽」の故事を用いた部分に対する応答として、嵇康と呂安を評した向秀「思舊賦」序の次の部分を踏まえていると考えられよう。

しかしながら嵇康の志は遠大だがむらがあり、呂安の心は広大だが気ままである。八

向秀は、嵇康の志、呂安の心を評している。それぞれ挙げられた「遠大（遠）」と「むら（疏）」、「広大（曠）」と「気まま（放）」の内、否定的な評価である「疏」と「放」を合わせたものが、「疏放」である。

最後の言及は、末尾から六句目の白居易によるものである。

劉くんの宴での風流さは嵇康や阮籍のようであり、

ここでは、劉禹錫の宴席における「風流さ」を嵇康と阮籍に擬えている。
以上が、「竹林七賢」に言及した部分であるが、非常に興味を引く句がもう一つある。裴度担当の三十三、三十四句目を挙げる。

我々三人は「洛中の三子」と言うべきだ、
鄴下の七子はもう遠い昔の話なのだから。

この三十三句目で、裴度は、自分たち三人を「洛中の三子」と称している。そして、この句の対となる三十四句では、「鄴下の七子」、つまり「建安七子」を挙げている。
先に七、八句目の白居易による「竹林七賢」|| 酒 / 「建安七子」|| 詩という二項対立を挙げたが、この三十三、三十四句目では、「洛中の三子」 / 「建安七子」という対立が見られる。先に挙げた末尾から六句目とその対句をもう一度確認してみれば、

劉くんの宴での風流さは嵇康や阮籍のようであり、
その友誼の厚さは陳重と雷義のようなのですから（この二句は、劉禹錫のことを言う、白居易）。

「酒」 「風流」 || 嵇康・阮籍 / 「友誼」 || 陳重・雷義という対立が見られる。これを整理すれば、次のようになる。

(白居易) 「竹林七賢」 || 酒 / 「建安七子」 || 詩
(裴度) 「洛中の三子」 / 「建安七子」
(白居易) 「酒」 「風流」 || 嵇康・阮籍 / 「友誼」 || 陳重・雷義

つまり、裴度は、自分たち三人を「竹林七賢」に擬えて「洛中の三子」と言い、それは白居易の挙げた対立を引き継ぎ、ずらして用いていると考えられる。そして、白居易は自身の挙げた対立（「竹林七賢」

酒／「建安七子」詩）に対する裴度のずらし（「洛中の三子」／「建安七子」）を踏まえて、さらにずらして（「酒」「風流」「嵇康・阮籍」「友誼」「陳重・雷義」）用いている。

劉禹錫の担当部分には、「竹林七賢」に言及したのを見ることはできないが、この連句には全体を通して、自分たちを「竹林七賢」に擬えているという構造が確認できる。そのため、この連句では、他の連句では類を見ないほどに、「竹林七賢」に言及しているのではないだろうか。

以上、三つの連句を見た。「花下醉中聯句」と「興化の池亭」では、一つ二つの言及しか見られなかったが、「予洛中に到りしより」では多くの言及が見られる。「予洛中に到りしより」では、自分たちを「竹林七賢」に擬えるということが重要な点であったが、それを言い変えれば、「仲間意識」の表現と言えるだろう。一つ二つの言及しか見られなかった「花下醉中聯句」と「興化の池亭」でも、「青眼」や「玉山頽」の故事を用いて、参加した人々を仲間として捉える意識が見られることから、政治的なことに関わる属性以外の部分で、「竹林七賢」は、仲間意識を表すためにも用いられていると考えられる。

劉禹錫のところで見たように、劉禹錫個人の作品でも「竹林七賢」を用いて、「仲間意識」を示すことはあった。連句では、複数名での作という前提があるため、より強く「仲間意識」を打ち出すことになるだろう。

おわりに

白居易、劉禹錫らの生きた中唐という時期は、党派争いの激しい時期であり、中尾氏は、その影響を白居易の「竹林七賢」、特に阮籍、嵇康、劉伶の三者に言及した詩に見た。本章では、第一節にて、中尾氏の説を氏の用いなかった材料を使って確認し、第二節では、そのような白居易の操作が同時期の他の詩人に見られるのか、一例として劉禹錫の作品を見た。白居易、劉禹錫の二者だけで、この時期の全ての詩人を代表させるのは無理があるが、順調な官界での生活を得られなかった詩人の代表としては、一定の意味を持ちえるのではないだろうか。

また、白居易、劉禹錫の参加した連句を見ることで、嵇康への否定的な言及は、政治的なコンテキストでのものであり、それ以外の、例えば宴席という場では、嵇康の属性は、人々を善きものとして形容するためのものへと変化している。前者は、社会的なコンテキストによる影響であり、後者は、個人的（個別集団）コンテキストによると考えられる。

しかしながら、社会的コンテキストによって、言及を避けたり、表現を限定されたりするにもかかわら

ず、嵇康の属性に言及するのは、嵇康を好んだということ以外に何かしらの理由が必要だろう。この点については、他の詩人とも合わせて、「結語」にて考えたい。

一 引用は、劉禹錫著、瞿蛻園箋証『劉禹錫集箋証』（上海、上海古籍出版社、二〇〇五年四月、第二刷）を用いる。中国語文は拙訳により、本文を注に示す。

二 原文「共醉風光地，花飛落酒杯。絳送劉二十八。殘春猶可賞，晚景莫相催。禹錫送白侍郎。酒幸年年有，花應歲歲開。居易送兵部相公。且當金韻擲，莫遣玉山頽。絳送庾閣長。高會彌堪惜，良時不易陪。承宣送主客。誰能拉花住，爭得換春迴。禹錫送吏部。我輩尋常有，佳人早晚來。嗣復送兵部。寄言三相府，欲散且徘徊。居易。時戶部相公同會。」（前掲『劉禹錫集箋証』、一一五一頁）。「嗣復送兵部」の部分は、次の四句を白居易が担当しているため、『全唐詩』によって「白侍郎」に改めた。

三 原文「山公曰…『嵇叔夜之爲人也，巖巖若孤松之獨立，其醉也，傀俄若玉山之將崩。』」劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』上海古籍出版社、二〇〇二年一月、第一版、五二三頁）。

四 原文「東洛言歸去，西園告別來。白頭青眼客，池上手中盃。度。離瑟殷勤奏，仙舟委曲迴。征輪今欲動，賓閣爲誰開。禹錫。坐弄琉璃水，行登綠綺臺。花低妝照影，萍散酒吹醅。居易。岸蔭新抽竹，亭香欲變梅。隨遊多笑傲，遇勝且徘徊。籍。澄澈連天鏡，潺湲出地雷。林塘難共賞，鞍馬莫相催。度。信及魚還樂，機忘鳥不猜。晚晴槐起露，新雨石添苔。禹錫。擬作雲泥別，尤思頃刻陪。歌停珠貫斷，飲罷玉峰頽。居易。雖有逍遙志，其如磊落才。會當重日用，此去肯悠哉？籍。」（前掲『劉禹錫集箋証』、一一五二～一一五三頁）。

五 原文「籍又能爲青白眼，見禮俗之士，以白眼對之。」（前掲『晉書』、一三六一頁）。

六 原文「仙舟李膺棹，小馬王戎鑣。」（遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、北京、中華書局、二〇〇六年一月、第一版北京第五次印刷）、二五六九頁。

七 原文「成周文酒會，吾友勝鄒枚。唯憶劉夫子，而今又到來。度。欲迎先倒屣，入座便傾杯。飲許伯倫右，詩推公幹才。並以本事，居易。久曾聆郢唱，重喜上燕臺。晝話牆陰轉，宵歡斗柄迴。禹錫。新聲還共聽，故態復相哈。遇物皆先賞，從花半未開。度。起時烏帽側，散處玉山頽。墨客喧東閣，文星犯上台。居易。詠吟君稱首，疏放我爲魁。憶戴何勞訪？指夢得，時夢得分司而來，留髣不用猜。宴席上，老夫是起，樂天堅坐不動。度。奉觴承麴藥，落筆捧瓊瑰。醉弁無妨側，詞鋒不可催。此兩韻美令公也。居易。水軒看翡翠，石徑踐莓苔。童子能騎竹，佳人解詠梅。陪遊南宅之境。禹錫。洛中三可矣，鄴下七悠哉。自向風光急，不須絃管催。度。樂觀魚踊躍，閒愛鶴徘徊。煙柳青凝黛，波萍綠撥醅。居易。春榆初改火，律管又飛灰。紅藥多遲發，碧松宜亂栽。禹錫。馬嘶駝陌上，鷓泛鳳城隈。色色時堪惜，些些病莫推。度。涸流尋軋軋，餘

刃轉恢恢。從此知心伏，無因敢自媒。禹錫。室隨親客入，席許舊寮陪。逸興嵇將阮，交情陳與雷。此二句屬夢得也。居易。洪鑪思哲匠，大廈要羣材。他日登龍路，應知免曝顛。禹錫。一（前揭『劉禹錫集箋証』，一二四二—一二四三頁）。

八 原文「然嵇志遠而疏。呂心曠而放」（李善注『文選』、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、二二九頁）。

第六章
蘇軾

はじめに

ここまで、六朝、唐を代表する詩人の詩を見てきたが、本章では、宋の蘇軾（一〇三七―一一〇一）の詩一において「竹林七賢」がどのように語られたのかを見ていく。

蘇軾が「竹林七賢」の各々に言及する分量が異なっているため、言及される量の多い、阮籍・嵇康に一節を割り、残りの五名を一節として考察したい。

第一節 阮籍と嵇康

1 阮籍

蘇軾の阮籍に対する評価はどのようなものか。まず、阮籍の事跡を詠った「阮籍の嘯臺」を見ていく。

「阮籍の嘯臺」

阮籍は古の狂達であり、

世を逃れて世の中のことを語らなかった。

けれどまだ胸中には思いが残っており、

長嘯して一人自得していた。

気高い心は万物から逃れようとし、

世俗の議論には関わらなかった。

高きに登って思いのたけを述べれば、

その激しい感情が世界を震わせる。

酔いが醒めれば長嘯し、

飲めば酔っぱらうまで飲む。

誰にも比べることなどできないだろう、

このように乱世でも生き延びることができた人を。 三

冒頭一句目にて、阮籍に「狂達」という評価が与えられる。「狂達」とは、「狂放眩達」ということであり、つまり、「恣に振る舞い、物事に拘らない」という意味となる。この「狂達」の意味については、蘇軾

の阮籍評価として重要になると思われるが、この句だけでは、価値の正負が決しないことから、詩全体を見た上で判断したい。

二句目の「世を逃れ世の中のことを語らなかつた」とは、隠遁はしなかつたが、儒家の説く「立身出世」を考慮せず、自身の判断基準で出仕し、己むを得ない場合以外は、積極的に権力機構に近づくことのなかつた阮籍の生涯をまとめていると考えて良いだろう。

三、四、五、六句は、『晋書』に描かれる阮籍の言動として人口に膾炙している内容^四を踏まえている。次の七、八、九、十句は、陳留にあつたという臺^五に、阮籍が登つて、長嘯し、酒を飲んでる姿^六を思い描いていると思われる。

そして、最後の二句では、乱世において「生き延びることができた」とその処世の態度に対して、「誰も比べることができない」と最大級の評価が与えられている。

ここで、冒頭の「狂達」に戻るとしよう。「狂達」という語によって示される「恣に振る舞い、物事に拘らない」という意味は、阮籍の「超俗」という属性を表しており、また、その「超俗」という属性を含めた処世の態度に肯定的な評価を下していると考えることができよう。

阮籍の処世の態度に言及した詩は、他にも見られる。「劉放海陵に倅たるを送る」では、新法の不便を論じて、王安石の怒りを買ひ、海陵に左遷させられた劉放を見送る詩であるが、劉放を忠告する目的で、冒頭に阮籍が引かれている。部分のみを挙げる。

君は阮籍のことを知らないのか、

彼が人の善し悪しを論じなかつたのを。七

この詩における阮籍も「人の善し悪しを論じなかつた」という故事^八によって、処世の態度を評価されている。

次に挙げる詩も阮籍の処世の態度を評価していると読める。

「重ねて寄す」

凛々とした気高い節義はこの時代の人々を照らすほどなのだから、
信じられない、小役人が君を罷免して辱めたとは。

蔣済は阮籍を招来できると言い、

薛宣は朱雲を部下にしたいと切に願つた（がだめだった）。

素晴らしい詩が口をついて出れば誰がえりわけることができらるだろうか、俗人は人を疑い未だに（あなたのことを）聞きにもこない。

君の詩千篇を求めてその素晴らしさを見たのだから、軽々しく鮑照に比べようとは思わない。九

この詩は、友人の詩作の才能を讃え、微禄の職に就くのを忠告している。具体的には、阮籍が蔣濟に招かれた故事^{一〇}や、朱雲が薛宣に招かれた故事^{一一}を引くが、これは阮籍や朱雲を友人に喩え、高潔な人物が出仕して、つまらない役職につかないようにと言っている。ここで阮籍に言及するということは、蔣濟の招きに応じず、怒りを買って、親類の説得によって出向き、病と称して帰ったという阮籍の行動を、友人の手本となり得る行動として示していると捉えられる。つまり、阮籍の行動は称賛するに値するものの評価である。

また、処世の態度として、阮籍に対する高い評価を示す、次のようなものもある。

「夜舒堯文を過ぎ戯れに作る」

舒堯文さんの家の堂の前では月が非常に美しく、

お弟子さんたちは脇のお部屋でにぎやかに勉強。

扉を開けて部屋に入れば書物でいっぱい、

蠟紙が張られた燈籠は雲母が輝いている。

舒堯文さんはさわやかな人柄であまり眠らず、

長い夜を黙って座って時を知らせる鼓の音を数えている。

硯に氷が張りそうなほどの寒さだが、

火にかけられた銅の瓶には過ぎ去った雨のように少しの水しか残っていない。

ご息子が客を迎えようとまず自己紹介すると、

客は衣服を整え誰も敢えて侮ろうとはしない。

明朝は阮籍が父を訪ねずにその子を訪ねたような素晴らしいご息子にご挨拶しよう、

王羲之が素晴らしい息子を持った弟を羨んだのと同じように羨ましい。一二

この詩は、蘇軾が夜に舒堯文の家に行った際のことを描いた詩である。ここでは、舒堯文の息子を賛美するために、阮籍が王渾よりもその息子である王戎との交遊を好んだという故事^{一二}が引かれているが、阮

籍の人物鑑定を引き合いに出し、舒堯文の息子を賛美していることから、蘇軾の阮籍の人物鑑定の正しさへの評価を読み取ることができる。
また、先に見た「阮籍の嘯臺」と同じく、蘇軾が阮籍の「狂達」という属性を見ているものを見てみたい。

「定惠院顛師余が為めに竹下に嘯軒を開く」

フクロウが啼くのは空が明るくなるころであり、

互いに誹り合うかのようにうるさく啼く。

キリギリスは夜を通して啼き続け、

自らを慰めているかのようだ。

風を飲んで生きるセミは清い存在であり、

その長い吟詠のような啼き声は調子が変わらない。

土を食べて生きるミミズには腸はないが、

同じように夜通し叫ぶ。

鳶が獲物を貪る啼き声は最も卑しいものだが、

鵲の啼き声はうれしそうに聞こえる。

これらは皆不平によって啼いているが、

慟哭もうれしいときの笑い声と変わらない。

阮籍は物事に拘らなかつた人物だが、

孫登もまだ神妙という域ではない。

顛師はこの嘯軒を建て、

静かに座り黙って自分自身を振り返って反省しておられる。

つむじ風が世間を騒がしているが、

それを嘆いて永久に叫んでいることはできない。

憂いが窮まってしまった私は何も言うことができないが、

風が吹けば竹は自然と長嘯するのだ。一四

ここでは「阮籍は物事に拘らなかつた人物だが、孫登もまだ神妙という域ではない」と、隠者孫登と共に引かれている。句の意味として考えれば、阮籍は一定の境地に近づいたが、阮籍よりも世俗を超越して

いたとされる孫登でさえも、まだ神妙という境地には至っていないという低い評価と考えられる。

しかし、詩全体からこの二句の意味を考えると、この詩は、定惠院の顛師を褒め称えるために、阮籍や孫登を引いていると考えられる。その場合、阮籍は、顛師と比べて相対的に低い評価を与えられているのであって、阮籍自体に対する評価が低いのではない。むしろ、世間的に評価の高い人物を引き合いに出し、評価したい対象をその上位に置くことで、より一層高い評価を与えていると考えられる。そうであれば、この詩において、蘇軾は、阮籍に対して一定の評価をしていると考えられる。

ここまでに挙げてきた詩から読み取れる蘇軾の阮籍の処世の態度に対する評価は、非常に高いものであったと考えられるだろう。

では、阮籍の処世の態度以外の面についての蘇軾の評価はどのようなのか。

「張安道の樂全堂」

かの列子は風を御して虚空に遊び、とりわけ悪いとは言えないが、

莊子には汲々としていと誹られた。

阮籍の飲酒や嵇康の琴など、

それによって「全き」を得るのは「至樂」ではない。

張安道さんは道によって天を全うし、

病の唯摩詰が丈室は空しいが本人は超然としていたようである。

かつては痛飲していたが今はあまり飲まない、

それは琴に弦が無いだけではなく琴そのものが無いのと同じことだ。

天から与えられた英雄の姿を有し、

龍や鳳凰が魚や鳥の気高いものを代表しているように気高い人間の代表である。

ただ礼服を着て廟堂に座らせれば、

野蛮な民族も談笑してしまう。

彼も老いた今となっては故郷に帰ることを願ひ、

私に手ずから詩を送ってくださった。

楽しみが窮まったとは何を全うした状態なのか、

窮まることはないのにどこが更に欠けると言うのかと。一五

この詩は、詩題の示す通り、張方平（字は安道）の樂全堂を詠った詩であるが、詩全体の内容から考え

ると、『莊子』の思想に則りながら、「樂全堂」の「樂」「全」をキーワードに、張方平の素晴らしさを説いているように見える。例えば、五く八句では、「樂全居士 張方平は天を全うしており、かつては痛飲したが今は飲まず、陶淵明のように琴に弦がないだけでなく、そもそも琴がないのだ」と言うが、これは、『莊子』の言う「至樂無樂」一六の境地に張方平が至ったと讃えていると見なせる。

この「張安道の樂全堂」の中で、阮籍は、嵇康と共に引かれ、「阮籍の飲酒、嵇康の琴」として言及されるが、阮籍や嵇康のように、酒や琴に「全」を得るのは、「至樂」ではないとされている。

つまり、阮籍がその処世の態度によって下された、乱世において「自ら存するに足る」という評価に対して、ここでは、酒に「全きを得る」のは「至樂」ではないとして、相対的に低い評価がなされている。

しかし、「張安道の樂全堂」は、その目的が張方平の賛美にあるため、先に見た「定惠院顛師余が為めに竹下に嘯軒を開く」に見られる論理構造と同様、張方平の価値を高めるために、レトリックとして阮籍が引かれ、相対的に低い評価を受けたということが考えられる。であるから、ここでも蘇軾は阮籍に対して一定の評価をしていると考えられる。

詩において、蘇軾は阮籍の「狂達」や超俗という属性を見ているが、これらの属性は、阮籍の処世の態度の源泉であり、またその発露だと考えられる。総じて見れば、そのような属性を含めた阮籍の処世の態度に対して、肯定的な評価を下しており、表面上低い評価を下されているように見える場合であっても、それは、他の人物を賞賛するために、相対的に低い評価を下されているのであって、実際は一定の評価をしていると考えられる。

しかし、ここまで見てきた詩では、蘇軾は、自身を阮籍に仮託して用いることはなかった。友人を評価するためのものさしとして用いたり、阮籍の言動を教訓として用いたり、あるいは客観的にその事跡を詠ったりしていた。

しかし、「途窮」を用いた例では、少し異なる。「瓊、僮間を行き、肩輿にて坐して睡る。夢中句を得て云ふ『千山鱗甲を動かし、萬谷笙鐘を酣しむ。』と。覺へて清風急雨に遇ひ、戯れに此の數句を作る」(以下「瓊、僮間を行き」の部分のみ挙げる)。

高い所へ登り中原を眺めれば、

ただ積み重なった雨と空が見えるだけ。

私はどうやって帰ったらいいだろう、

四方はどこも行き詰まってしまった。一七

この詩では、行き詰った状況にいる自身を、阮籍の「途窮」を用いて表している。また、次の詩でも、「途窮」を用いている。

「寒食雨二首」其の二

皇帝の門は九重の深さであり、

墳墓は万里の遠くにある。

行き詰まりに泣いた阮籍に擬えてみるが、

死んだ後の灰は風に吹かれても飛ばないだろう。一八

「瓊、僮間を行き」では、物理的な「行き詰り」を「途窮」で表現しているが、その描かれる物理的な「行き詰り」は、蘇軾の心象風景だろう。それに対して、「寒食雨二首」其の二では、自身の「行き詰まった」状況を直接表現している。

次の「伯父の『先人の下第して蜀に歸るを送る』詩に云ふ『人稀なる野店にて休みて安枕し、路靈關に入りても穩やかに驢に跨る。』と。節を安んじて將に去らんとす、為に此句を誦じ、因りて以て韻を為し、小詩十四首を作りて之に送る」其の九では、阮籍の「途窮」が否定される。部分のみ挙げる。

別れに際して涙が止まらないが、

阮籍のように行き詰って泣くようなことはしない。一九

この否定は、阮籍の行為そのものを否定しているのではなく、伯父との別れを悲しんでいることを強調するための比較材料として引かれている。

以上見たように、「途窮」を用いて阮籍に言及している場合、自身を仮託しているのが認められる。しかし、前章までに見たように、このような「途窮」を用いて自身の行き詰った状況を描く表現は、定型化している。また、蘇軾は、歴史的な人物や事跡を主題として詩を作ることが多かった詩人でもあることから、客観的に人物や事跡としての阮籍を描くともに、自身を仮託する場合もあるという指摘に留めておく。

次に嵇康に対する評価を見ていく。
嵇康に言及する場合には、阮籍に対するのと異なり、嵇康に自身を重ね合わせている表現が多く見られる。「正輔、既に和せらるる。復た前韻に次し、鼓盆を慰め、佛を學ぶことを勸む」の部分のみを挙げる。

君はまさに功名を挙げたのだから、

范蠡のように舟を浮かべて去った方が良いだろう。

私はまた天子の恩恵を受けて、

楚の冠を抱き続けた鍾儀のように縛めを解かれるだろう。

私には張良の慎み深い希望すらないのだ、

三万戸の領地より留の地を選んだような

しかしまだ嵇康よりはましだろう、

長い幽囚で一人憤慨するよりは。二一

この詩では、「なお嵇康がいつまでも獄中において、『幽憤詩』二三を作るようなことがないだけでした」と言及されている。この詩は、紹聖二（一一〇九五）年、惠州にての作であるので、新法党との政争によって、惠州へ流罪となった自身の境遇を、嵇康の事跡と比べて、「勝」っていると書いていると考えられる。嵇康は、呂安の事件に連座したのだが、嵇康が獄に繋がれる明確な理由はなく、魏の姻戚であったことが大きな要因と考えられる。この理由なき下獄は、蘇軾自身が旧法党の領袖とされて流罪になったことと構造的に同じである。つまり、蘇軾は、ここで嵇康を引き、牢獄にて憤慨するしかなかった嵇康と、流罪とはいえ、ほぼ自由に過ごせる自身を比べて、「勝」っていると書いているのだろう。ここでは、嵇康に対する評価を知ることができないが、同様な経験をした嵇康に、自身を重ね合わせているのは確かだろう。

時代は前後するが、開封府の進士の試験にて、王安石を風刺した問題を出し、罪には問われなかったが、杭州へ転任となった際、着任前に金山に遊んだことを詠った詩「金山より船を放ち焦山に至る」にも、嵇康は登場する。部分のみを挙げる。

柳下惠のようにまだ三度その官を退けられてはいないが、

嵇康が七つの堪えられないことがある二三と言ったような思いである。二四

蘇軾は、流罪やそれに近い状況のとき、自身を重ね合わせる人物として嵇康のことを考えていると思われる。

また、次のような言及もある。「曹九章見贈に次韻す」の部分のみを挙げる。

禰衡が敢えて孔融に従って学ぶのだから、

嵇康はどうして袁淮に「広陵散」を教えるのを惜しむだろうか。二五

この詩は、曹九章が贈ってきた詩に次韻して贈った詩である。ここでは、禰衡が孔融に従って学んだ故事^{二六}と、嵇康が処刑に臨んで袁淮に「広陵散」という曲を教えなかったことを惜しんだ故事^{二七}が引かれている。禰衡、袁淮を曹九章に、孔融、嵇康を蘇軾自身に比していると思われるが、故事と異なるのは、「嵇康が袁淮に『広陵散』を教えなかったのを悔やんだのとは違い、私は君に学問を教えるのに吝かではない」と言っているところである。ここで、注目したいのは、嵇康と共に孔融が、蘇軾自身に比されていることである。孔融は、孔子の子孫であり、曹操に逆らって処刑された人物であるが、嵇康と同じように、奔放不羈な人物と知られていたことである。つまり、蘇軾はそのような属性を自身に認めていたと考えられる。

以上の三例は、嵇康の境遇や奔放不羈という属性を挙げているが、次のように、趣味を挙げているものもある。「試筆」の部分のみを挙げる。

私の文房四宝への執着はすでに阮孚の下駄への思いと似ており、

また嵇康が柳の下で鍛冶をしていたのと同じだ。二八

この詩は、文房四宝を詠った詩だが、その中に嵇康の鍛冶の故事^{二九}が引かれている。ここで、蘇軾は、自身の文房四宝に対する趣味について、阮孚の下駄と嵇康の鍛冶とを引き合いに出している。この言及から、一定の評価を読み取るのは難しいが、蘇軾の心情を勘案すれば、何かに熱中する阮孚と嵇康のような人物を、文房四宝に熱中する自身と重ね合わせ、暖かい眼差しで眺めていると思われる。

ここまで、蘇軾が嵇康に自身を仮託している様を見てきたが、その自身を仮託する嵇康に対してどのような評価を下しているのだろうか。

「陶の飲酒二十首に和す、其の十三」

酒に酔っては楽しむべきだと言うが、それはまだ生と死の間のことである。

どのようにしてこの身を全うしようか、それは酔わずまた醒めずという境地によってだ。

痴愚とは劉表の大事にしていた牛のようなもので、結局曹操によって兵士に分け与えられてしまった。

狡猾とは東郭先生がオオカミを助けたように、最後には縛られて筆の毛とされてしまう。

だからわかるのだ、嵇康はその生を全うできなかったが立派な人物ではなかったのではないと。三〇

この詩は、次項で扱う「蘇自之の酒を恵むを謝す」にて詳しく見るが、「酔／醒」という対立を超越することを述べている。そうでなければ、「癡（痴愚）」や「黠（狡猾）」であっても、いづれ全うすることはできないとする。そこで秋になって虎の毛色が美しく変化する三二のと異なり、嵇康は、もともと素晴らしい人物であったことがわかると言うのだ。つまり、ここでは、嵇康が素晴らしい人物であったと評価されていると考えられる。

また、友人の卓越性を讃えるために、嵇康を持ち出している詩が二つある。一つが「故李誠之待制六丈挽詞」である。ここでは嵇康に言及している部分のみを挙げる。

あなたは嵇康のような人物であり、

その龍のような性質は誰にも飼いならすことはできなかった。三二

李師中（字は誠之、一〇一三—一〇八七）は、王佐の才を有しながらも、度々左遷されたとされる人物である。この詩は、その李師中を嵇康に比している。「その龍のような性質は誰にも御することはできない」と、顔延之が「五君詠」において嵇康に与えた評価三三を引いている。ここでは、嵇康の属性が、友人の属性を讃えるものとなっている。

次に、「京師にて任遵聖を哭す」だが、これも部分のみを挙げる。

あの年に洛陽へ行き、

生死をお互い訪ね合っていたら。

王戎のような私だけが生き残り、

嵇康のようなあなたの昔のあり様が思い浮かぶ。三四

この詩では、同郷の任遵聖を哭している。ここでは、任遵聖の子を嵇康の子、嵇紹になぞらえて、王戎の故事三五を引いている。それは、嵇紹が入洛した時、彼を見たある人が王戎に「野鶴が群鶏の内にいるようだ」と言い、それに対して王戎が、「君は嵇康を見たことがないからそう思うんだ」と言ったものである。これは、この故事に見られる、子を褒めることでさらにその親を褒めるという方法を利用し、任遵聖の子を褒めることによって、任遵聖を褒めている。この方法が成り立つためにも、嵇康に対する高い評価が必要である。

このように、友人を讃えるために用いられていることを考えれば、蘇軾は、嵇康に対して高い評価を下していると考えられる。

しかし、次のようなものもある。「廣陵にて三同舎と會し、各の其の字を以て韻と為し、仍て邀へて同じく賦す、孫巨源」の後半部分を挙げる。

我が友人が久しぶりに集まったが、

疑われて排斥されてしまわないか不安だ。

私の偏狭さは嵇康に似ているが、

君の通達は本当に山濤のようだ。

嵇康のように絶交などもちろんしようとは思わないが、

しばらくまた東南へ行つてこよう。三六

この詩は、廣陵にて劉攽・孫洙・劉摯と再会したときに作られた連作三首の内の一つであり、三名内の孫洙の字を韻としたものである。内容としては、排斥されることを恐れて、久しく友人に会うことのできなかったことを詠うが、詩中にて、蘇軾自身を嵇康、孫洙を山濤に比している。孫洙は、字が巨源であるため、同じ字であった山濤に繋がり、その山濤との関係と、蘇軾の自身に対する評価から、嵇康に譬えることになったのだろう。山濤についての詳細は、後に触れるが、この詩における嵇康との関係から考えると、孫洙の「通達」（原文「通」）を山濤に譬えていることから、表面上山濤を評価していることがわかる三七。それに対して、蘇軾は、自身を「偏狭」（原文「偏」）とあまり良い属性では語らず、それが、嵇康

のようだとやっている。ここから、嵇康の偏狭という属性に対する評価があまり高くないのが読み取れる。しかし、この詩にて言及される嵇康の「偏狭」という属性と、先に「故李誠之待制六丈挽詞」で見た友人を讃えるのに用いられた「龍性」という属性は、同一の属性の二つの側面であり、それは、その属性の良い面を捉えるか、それとも悪い面を捉えるかの違いでしかないと考えられる。

つまり、同一の属性に言及しながらも、友人を讃えるため、蘇軾が謙遜していると考えられる。であれば、この詩は、嵇康に対して低い評価を下していると一義的に判断することはできないが、嵇康に自身を仮託しているのは確かだろう。

また、仙性という属性についても、言及が見られる。「圓通禪院は、先君の舊游なり。四月二十四日晚、至りて、宿す。明日、先君の忌日なり。乃ち寶積が蓋を獻じ佛を頌する一偈を手寫し、以て長老僊公に贈る。僊公掌を撫し笑ひて曰く、昨夜夢む寶蓋飛下し著處輒ち火を出すを。豈此の祥たりやと。乃ち是の詩を作る。院に蜀僧宣逮有り、訥長老に事へて先君を識ると云ふ」の後半部分を挙げる。

袖の中の宝書はまだ取り出していないのに、

僊公の夢の中ではすでもう伝わっていた。

誰が知っているだろうか、

嵇康は仕官せずに俗世間を超越しており意気盛んだがまだ仙人にはなっていないことを。三八

この詩は、詩題にて既に詩作時の状況が語られている。それによれば、蘇軾が写した経を長老に渡す前に、長老はその前兆となる夢を見ていた。そこでこの詩を作ったということである。そして、詩中では、嵇康が出てくるが、この嵇康は、蘇軾が自身を仮託したものだだろう。つまり、長老が経を受け取る前に、それを示す前兆を夢見て知り得たように、自分が嵇康のように、まだ仙人ではないが、「野鶴」（仕官せずに俗世間を超越している人物）であり、「昂藏」（意気盛んなさま）であることを誰がわかるだろうかと、嵇康を自身に重ね合わせている。ここから読み取れるのは、嵇康の仙性とその卓越性に対する評価だろう。

嵇康の仙性に言及したものは他にもある。

まず、「石芝、並びに引」である。末尾の部分のみを挙げる。

また神仙が住むという洞窟を知り移り気なことを嘲るが、

しまいには嵇康が王烈を羨んだのには勝る。

神山が一度合わされば五百年開かず、

石髓は風に吹かれて鉄のように固くなってしまふのだから。三九

この詩では、嵇康は、王烈と共に言及されている。嵇康と王烈との交遊^{四〇}は人口に膾炙しており、『神仙伝』に見える記述を踏まえている。この詩は、蘇軾が見た夢を語ったものである。「嵇康が王烈を羨んだのに勝る」と言うのは、『神仙伝』の記述によれば、嵇康は石髓を服していなかったもので、まだ得道するに至っていないが、蘇軾は夢の中で、石髓を服したので「勝る」ということだろう。ここで、嵇康は、蘇軾自身より低い評価をされているが、それは夢の中で「石髓」を服したからであり、この言説が効果を得るためには、嵇康が世俗を超越した存在であり、その嵇康を蘇軾が凌駕するという論理が成り立たなければならぬ。

次に「丹元姚先生の韻に次す二首」其の二だが、ここでも嵇康は王烈と共に言及される。部分のみ挙げる。

王烈がどのような人物か、

嵇康はまだ推し量ることができずにいた

神山が開くを見れば、

すぐにでも石髓を服すのに。四一

ここで、「王烈はどのような人物か、嵇康はまだ推し量ることができずにいた」と言うのは、蘇軾が姚丹元を推し量ることができないということを示しており、王烈のように「神山が開くを見れば、すぐにでも石髓を服すのに」と、得道することを望んでいる。つまり、先に「石芝、並びに引」で見たのと同じように、ここでも嵇康に低い評価を与えることで、王烈に比される姚丹元の価値を高めていると考えられる。そして、その効果を得るには、嵇康に対する高い評価が存在しなければならぬ。

以上、嵇康に言及した詩を見てきたが、これまでに挙げた詩の内、友人を嵇康に比した「故李誠之待制六丈挽詞」「京師にて任遵聖を哭す」、夢の中で嵇康を凌駕した「石芝、並びに引」、単純に嵇康を評価している「陶の飲酒二十首に和す、其の十三」を除いた詩は全て自身を嵇康に仮託しているものと読める。

また、その嵇康に対する評価は、「陶の飲酒二十首に和す、其の十三」のようにはっきりと高い評価を下すものもあれば、謙遜して低い評価を下す「廣陵にて三同舎と會し、各の其の字を以て韻と為し、仍て邀へて同じく賦す、孫巨源」もあるが、総じて嵇康に高い評価を下していると考えられる。

阮籍と嵇康は、この後見ることになる「竹林七賢」の他の五人に比べて言及される回数が多い。中でも嵇康は、阮籍に対するよりも、自身を仮託した表現がより多く見られる。つまり、蘇軾は阮籍ではなく嵇康を、自身を仮託するに足る人物として捉えており、それが阮籍よりも嵇康を評価していたという断定に直接繋がりはしないが、重要視していたことは確かではないだろうか。

3 その他の言及

この節では、阮籍・嵇康に言及しているが、一義的に評価を判断できないものを見ていく。
まずは、先に見た「張安道の樂全堂」と同じく『莊子』を踏まえた観点で、さらにはつきりと低評価を下している詩がある。

「蘇自之の酒を恵むを謝す」

高士たるものみな酒を好むものである、

この言葉はかつて韓愈の説として聞いたことがある。

私には今違った意見があり、それは同じではない、

酒は必ずしも高士に好まれるものではない。

莊子は言った、酔った者は車から落ちる、

だから酒によって身を全くするのは、天の道（自然）によるのに及ばないと。

そもそも達人は完全無欠であるから、

更に完全の完全を求めることがあるだろうか。

徐邈は意識を失い阮籍は思い上がった振る舞いをし、

畢卓は盗みを働き劉伶は倒れた。

狂いまわり奇を衒うなど取るに足らないものであるのに、

世俗の人々はその奇抜さを好み賢者として敬う。

杜甫の詩はもつとも笑うべきものだ、

八人の人物を羅列して仙人とした。

涎を垂らして頭巾を濡らすことなど言うまでもないが、

考えてみようではないか、どうやって禪から逃れるのかと。

私が今酒を飲まないのは飲めないのではない、

心が満月のように欠けるところがないからである。

機会があつて来客があれば飲むことはあるが、

琴を捨て去つたりはしないが弦を張るのを忘れている。

私の先生には深い考えがあり、

百里の遠くから二甕も酒を贈つてくださった。

そして言うには飲まないことももちろん高尚なことだと、

世の中の人みな同じなのに私一人だけが異なっている。

これら二つの考えは両方とも愚かだとするのになかなわないうらう、

鹿を得て羊を失うように遊び戯れるのと同じだ。

まずはこの酒を飲もう、断つてはいけないよ、

醒めているか酔っているかを比べることなどやめて。四二

ここで、まず引かれるのは、韓愈の酒と高士とに関する説である。蘇軾は、韓愈の「崔立之評事に贈る」詩^{四三}中の「高士例須憐麴蘖」句を引き、それに反論する形で自説を述べている。韓愈は、「高士たるものみな酒を好むものである」と言うが、それに対して蘇軾は、「酒は必ずしも高士に好まれるものではない」と言う。その理由として、ここでも『莊子』『達生』篇^{四四}を踏まえて、「酒によつて身を全くするのは、天の道（自然）によるのに及ばない」と言い、「そもそも達人は完全無欠であるから、更に完全の完全を求めることがあるだろうか」と述べている。そして、奇を衒つて世にもてはやされた人物として、徐邈、阮籍、畢卓、劉伶、また、杜詩「飲中八仙歌」に歌われた八子が引かれている。

この詩における蘇軾の認識では、まず、本々完全無欠な「達人」という審級があり、それに及ばない「酒によつて身を全くする」人物という審級が存在している。そして、「酣飲を常と為」、「傲然として獨り得」としていた阮籍は、奇を衒つた言動がとりあげられるだけであり、「達人」ではないとの評価が読み取れる。

以上が冒頭から中頃までの蘇軾の酒と人格とに関する議論だが、後半部分において、蘇軾は酒を贈られた自身の状況を述べる。「今酒を飲まないのは、飲めないのではない、心が満月のように欠けるところがないからである」と、自身が、『莊子』の言う「達人」の境地に至っていないことを言い、そのような境地にあれば、陶淵明の琴のように、「琴に弦があるうがなからうが関係ない」と同じであり、「来客があれば飲む」と言う。これは、末尾で語られるように、「醒めているか、酔っているかを比べるのはやめて、この酒を飲もう」という考えによる。

つまり、心に欠けるところがなく、「達人」の境地にあれば、飲む飲まない、酔っている醒めている、と

いう区別は意味をもたず、達するために酒を飲むのではなく、機会があれば飲むのだということ述べている。そして、詩中に引かれた阮籍など酒飲みとして有名な人物は、このような「達人」という境地に達していなかったがため、酣飲し、奇を衒った言動を行ったとの評価が下されている。

この「飲／不飲」や「酔／醒」という対立は、蘇軾のテクストにいくつか見られる。例えば、「陶の影形に答ふに和す」詩^{四五}の「酔いや醒めはみな夢と同じだ、その優劣を議論することなどやめよう」や、「漁父四首、其三」詩^{四六}の「酒が醒めれば酔った状態に戻り酔えば醒めた状態に戻る、人の世の今も昔もおかしなものだ」、「張長史の草書に書す」^{四七}の「これはつまり長史がまだ妙という域に達しておらず、なお酔いと醒めを論じている」など。

つまり、蘇軾は、「達人」という高みから、酒の「飲／不飲」や「酔／醒」を眺めているので、このような区別、比較は意味を持たず、むしろ、そのように区別、比較しようとする分別心を捨てよと主張しているのだと考えられる。

この詩において、阮籍は、低い評価を下されているが、有名な酒飲みである人物を列挙し、否定するという一連の流れのことであり、むしろ冒頭に引いた韓愈の説に対して異議を唱えるために、敢えて有名な酒飲みを否定してみせたというところにこの詩の眼目があり、阮籍に対する低い評価をそのまま受け取るのは難しい。

また、次の詩では、「達人」という観点とは違った観点で、阮籍の酒に関するエピソードが語られる。

「陶の飲酒に和す二十首、其の十一」

民が大変なのは役人に徳がないためで、

一年を通して災害がないのは天の道に則っているからだ。

暑いおりの雨は麦を潤さず、

暖かな風は蚕の死を見送る。

三度の鳴咽を初めて聞いたが、

それを注いでも地の乾きはどうにもならない。

天子は年貢を緩める詔書を発してください、

土地の父老も喜んでい。

父老は再拝して我が君を嘉する、

言うには貪ることのない宝のような役人（私）を得たと。

酒に酔ってくつろぎながら阮籍を笑い、

酔ったまま天子に感謝を述べる文章を書く。四八

この詩は、災害などによって不作の年に、蘇軾が民の困窮を奏上し、天子が詔を下して、年貢の取り立てを緩やかにし、父老が天子と蘇軾に感謝したという内容である。ここでは、阮籍が酔っ払いながら、司馬昭に晋王封爵を勧める勸進文の草稿を書いたエピソード^{四九}が引かれている。同じく酔っているが、状況は大分異なる。阮籍は権力に近づかないように、積極的に酒に韜晦し、それでも寝ているところを起こされ、草稿を書かされる。一方、蘇軾は、「貪らざるの宝」^{五〇}と称され、良い気分で天子に謝表を書く。この状況の違いから、蘇軾は阮籍を笑ったのだろう。阮籍は笑われてはいるが、阮籍自体を笑っているというよりも、置かれた時代、状況が異なることにより、奏上という同じ行為が異なる心理的状況で行われることの可笑しさを示していると考えられる。

ここまで挙げてきた詩は、阮籍と嵇康に単独で言及しているものだったが、二人が同時に言及されるものもいくつか見られるので、同時に言及される場合の語られ方を見てみたい。「陶の連雨獨飲に和す二首」^{五一}の二の部分のみ挙げる。

誤って無功郷に入ってしまったからは、

嵇康・阮籍の間でひじを振るっている。

杜甫の詠った飲中の八仙人は、

私とともに仙人となった。

陶淵明が道を知らないなどどうしてあろうか、

酔って語り出せばたちまち天を論じるのだから。五二

この詩は、序に「ことごとく酒器を売って、衣食の足しにしたが、唯一つ、荷葉杯だけは、作りが美しく素晴らしいので、留めて楽しむことにした」^{五二}と言うように、荷葉杯のことを詠うが、そこに阮籍・嵇康を始め、酒によって有名な人物が引かれている。阮籍・嵇康に関しては、「誤って無功郷^{五三}に入ってしまったからには、嵇康・阮籍の間でひじを振るっている」と言っている。ここでは、酒飲みとして有名な人物の一人としてしか描かれておらず、高低いずれの評価とも判別できない。「李伯時の淵明東籬圖に題す」の冒頭部分を挙げる。

彼ら嵇康・阮籍は、

明察であったがために苦しむこととなった。 五四

第一句の「彼ら」（彼哉）は、『論語』「憲問」篇五五を踏まえていると考えれば、嵇康と阮籍に対して語るまでもない人物という否定的な評価が下されていると考えられるが、それ以降の句を見るとわかるように、この詩は陶淵明のことを賛美しているので、同じように酒を好んだが、陶淵明とは異なり、危うく困難に見舞われそうになった阮籍、処刑された嵇康の二人を引いている。ここでの二人には、「明（明察）」という肯定的な評価と「自膏（自ら災いを呼ぶ）」という否定的な評価が語られている。最後に「清溪詞」を部分のみ挙げる。

私は杖を用意し、

一人長嘯して阮籍・嵇康に挨拶しに行こうか。 五六

この詩全体の内容は、清溪に遊んだ際のその情景の素晴らしさを詠ったものであり、その仙境と見紛うばかりの景色から、阮籍・嵇康が引かれたのだろう。ここで、二人は、仙人とまでは言われていないが、仙境のような景色に相応しい人物として引かれている。

この項では、一義的に評価を判断できないものを扱ってきたが、ここまでに挙げた詩を見ると、酒に関する言及では、それぞれの詩との間で評価に揺らぎがあり、一義的に評価を判断することができない。

また、第一、二項で見たように、阮籍と嵇康、それぞれの属性は、例えば阮籍の「物事の善し悪しを口にしないかった」^{五七}という属性と嵇康の「言いたいことは言ってしまう」^{五八}という属性のように相入れない部分があるため、阮籍・嵇康の二人に同時に言及するには、当然ながら、二人に共通する属性を挙げるのが求められる。よって、前項までに見てきた阮籍や嵇康それぞれに特有な属性ではなく、共通の属性が示される。そうすることによって、単独で言及するときとは異なり、高低いずれの評価とも判断できない言及が多くなっている。

そして、阮籍と嵇康が同時に言及されたものを見ると、ほぼ必ず、嵇康が上に来て、「嵇阮」となっている。「阮嵇」となっているのは、「清溪詞」だけである。「清溪詞」は、斉韻にて作られている^{五九}ので、脚韻を合わせるために、「阮嵇」としたと考えられる。つまり、蘇軾は、阮籍・嵇康の二人については、一貫して嵇康・阮籍の順番で考えていると思われる、先ほど述べた蘇軾は、阮籍・嵇康二人の間では、嵇康を重視していたのではないかということの一つの証左と考えることができるだろう。

第二節 山王と劉伶

前節までは、阮籍・嵇康の二人について見てきたが、本章では、残りの五名について見ていく。
なお、阮咸・向秀に関しては、二人に言及した資料を見つけないことができなかった。筆者の稚拙な調査のみで、蘇軾が阮咸・向秀の二人に言及した資料は存在しないと断定するのは、誤りを生む可能性があるが、差し当たって阮咸・向秀を除いた三人を問題とすることになる。

1 山濤・王戎または「五君詠」

山濤に単独で言及したものは、嵇康のところでは「廣陵にて三同舍と會し、各の其の字を以て韻と為し、仍て邀へて同じく賦す、孫巨源」が挙げられる。今は部分のみを挙げる。

私の偏狭さは嵇康に似ているが、

君の通達は本当に山濤のようだ。

嵇康のように絶交などもちろんしようとは思わないが、

しばらくまた東南へ行ってこよう。六〇

ここで、山濤は、「通（通達）」という表面上肯定的な評価を与えられている。この「通」とは、山濤が人材抜擢を担当し、晋文帝の信頼を得た^{六〇}ことからわかるように、山濤の物事や人物を見抜く能力を指していると思われるが、嵇康のところでは「通」という語に込められた意味を考慮し、蘇軾の山濤に対する評価を考えれば、「通達」という山濤の属性を肯定的に評価しつつも、大局を考えて意を曲げてしまったという点で、否定的な評価を含む複雑なものになっていると考えられる。

次に、王戎に言及しているものとしては、嵇康のところでは「京師にて任遵聖を哭す」^{六二}がある。

あの年に洛陽へ行き、

生死をお互い訪ね合っていたら。

王戎のような私だけが生き残り、

嵇康のようなあなたの昔のあり様が思い浮かぶ。

この詩は、王戎に言及している。しかし、この詩において、王戎は、嵇康に関する故事を述べるために存在しており、たとえそれが他の誰かであっても、嵇康の生前の姿、形を知っていれば成り立つので、ここから王戎に対する評価を読み取ることはできない。強いて挙げれば、切り返しの妙ということになるだろうか。

蘇軾が、山濤、王戎を「山王」として言及した詩は、三首見られる。「叔弼云ふ、履常飲まず、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む」「丹元姚先生の韻に次す二首」其の二「杞を過ぎて馬夢得に贈る」である。

この三首の中で、蘇軾は、山濤・王戎の二人に触れているが、三首ともその表現は、「山王を責める」となっている。まず、「叔弼云ふ、履常飲まず、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む」では、「あの年の五君詠では、山濤・王戎が一時責められていた」とあり、次に「丹元姚先生の韻に次す二首其の二」では、「まさしく嵇康・阮籍に従うべきなのだから、ちよつと山濤・王戎を責めてみよう」とあり、そして「杞を過ぎて馬夢得に贈る」では、「竹林での親しい交遊を夢に見、山濤・王戎のような自分自身を責める」とある。三首とも「山王」と、山濤・王戎の二人をまとめて捉えているが、山濤・王戎の二人をまとめて言う場合、まず念頭に上がるのは、顔延之「五君詠」^{六三}である。

顔延之は、地方へ左遷されたことに憤慨し、竹林七賢の阮籍・嵇康・劉伶・阮咸・向秀の五人を「五君」として、自身の不遇を託して詠った。この「竹林七賢」から「五君」へという顔延之の操作により、山濤・王戎の二人は詠われなかったが、その理由は、『宋書』卷七十三「顔延之伝」の記載に拠ると、顔延之は、「『五君詠』を作り竹林七賢のことを詠ったが、王戎、山濤の二人は高位に達したので詠わなかった」^{六四}とされている。

また、蘇軾の詩に「山王」もしくは、「山王」「五君詠」の語が同時に見られることから、蘇軾が「山王」という表現を用いて山濤・王戎に言及するとき、竹林七賢から山濤・王戎の二人をはずすという顔延之の操作がまず思い浮かぶ。

つまり、「山王」という詩語は、山濤・王戎の二人を示すだけではなく、顔延之による操作をも同時に示すことができると考えられよう。

それでは、顔延之は、自身を「五君」に仮託し、「山王」を排除したが、蘇軾はどうか。

まず、「叔弼云ふ、履常飲まず、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む」の内容を見ていく。

詩題によれば、歐陽修の三男である歐陽叔弼が言うには、陳履常が酒を飲まないから、自分も詩を作ら

ないとのことなので、この詩を作って、陳履常に酒を飲むことを勧めるということである。蘇軾は以前、「趙景旼に次韻し兩歐陽に詩を督し、陳の酒戒を破る」^{六五}という詩を作っている。その詩で、蘇軾は、歐陽二子に詩を作ることを勧め、また陳履常に酒を飲むことを勧めている。「叔弼云ふ、履常飲まず、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む」は、その続きの位置を占めている。

私はもともと酒を畏れるものであり、杯を前にして飲めないと言ったことはなかった。

日頃詩によって苦しい立場となつてはいるが、

句を思いついても吐き出さずに我慢することなどない。

酒を吐き出し良い詩を腹に収めていけば、

内臓におりが生じる。

このことの得失を比べれば、

天（自然）は従うに足らないということはないだろう。

友よ、この二物（酒、詩）でなければ、

長い歳月を何とともに過ごすのか。

寂しく長く憂うことになるのだから、

そのような考えはすでに大いに間違っている。

二人の欧陽くんは詩を作らないのではなく、

残念ながら君が酒を飲まないから作らないのだ。

無理にでも一杯飲んでくれ、

憂いをもたらすものではないのだから。

この言葉は嘘偽りではない、

筆を執って私は自ら詩を作ろう。

昔の作品「五君詠」では、

山濤・王戎が一時責められたのだから。^{六六}

ここで問題とするのは、最後の二句「昔の作品「五君詠」では、山濤・王戎が一時責められたのだから。」で触れられた山濤・王戎だが、蘇軾は、山濤・王戎と、「五君」とのどちらに自身を仮託しているのか。先に挙げた「趙景旼に次韻し兩歐陽に詩を督し、陳の酒戒を破る」を含めて考えれば、ここでの「五君」

とは、蘇軾自身と趙景貺、歐陽叔弼、歐陽季默、陳履常の五名だと思われ、「五君」に自身を仮託していることになる。そして、陳履常に酒を飲むことを勧めていることからすると、酒を断っている陳履常は、本来「五君」ではあるが、酒を飲まないのであれば、「山王」となってしまうとして、「五君詠」を持ち出していると考えられる。つまり、顔延之が「五君詠」にて行った排除という操作の判断基準である「高位に昇った」かどうかということではなく、酒を「飲む／飲まない」という基準で判断していると考えられる。次に、「丹元姚先生の韻に次す二首」其の二である。部分のみ挙げる。

蓬萊はどこにあるのだろうか、

どこであろうが水と空がともに眺められるここには敵うまい。

正に嵇康・阮籍に従うべきであり、

少しばかりまた山濤・王戎を責める。

達人は四海を友とし、

つまらぬ人間は一隅を守るだけ。六七

この詩は、自身の長生を得て、仙人となることを望んで叶わずにいるが、修養を続けようという内容である。この詩でも、「正に嵇康・阮籍に従うべきであり、少しばかりまた山濤・王戎を責める。」と山濤・王戎が言及されている。「山王」とあることから、この詩でもやはり顔延之「五君詠」が念頭にあり、直前に「嵇阮」とあることから、「嵇阮」／「山王」という対立が読み取れる。「嵇阮」とは、もちろん嵇康・阮籍のことだが、この場合、「嵇阮」とは、仙道の先輩である姚丹元であり、「山王」とは蘇軾自身と考える。つまり、蘇軾は、「竹林七賢における嵇康・阮籍のような存在である姚丹元に従うべきであり、山濤・王戎のような俗物である自分自身を責める」と言っていると考えられる。ここでは、「仙／俗」という基準で判断されていると考えられる。

次に、「杞を過ぎて馬夢得に贈る」である。

万古から仇池の穴があるように、

隠遁を思う心は我が雪堂を頼りにしている。

楽しかった竹林での遊びを夢に見て、

なお山濤・王戎のような自分を責める。六八

この詩は、馬夢得に贈った詩であるため、詩の宛先も馬夢得だと考えられる。であれば、「慇懃竹裏の夢」とは、馬夢得との交遊を「竹林の遊」に比して懐かしんでおり、「山王」のような自分を仲間に入れてくれたことを感謝していると考えられる。つまり、感謝しているからこそ、山濤、王戎のような俗物である自身を責めているのだ。「仇池穴」という語が出てくることを考えれば、やはり「仙／俗」という基準で判断されていると考えられる。

次に「山王」という語は出てこないが、「五君」が出てくるものがある。

「趙德麟の陳傳道を送るに和す」

陳傳道と履常はすでに妙士であり、

歐陽叔弼と季默は有徳の人である。

趙德麟は龍のような人物で、

世間では雲を覆うような名声の持ち主である。

この五君が私に付き合つて遊んでくれ、

おかしな様子や珍しい様子をさらけ出している。

阮籍はかつて俗物が人の良い気分を壊すと言つたが、

我々の交遊は清らかで純粹である。

離れ離れになるなんて思いもよらなかつたが、

楽しい夢からもう目覚めてしまった。

私の舟が清い川を下れば、

水は玉屑を吹くようだった。

君の歩みが明け方の月を踏めば、

疎らな木々に銀がかかったようだった。

別れて後の詩を送ってください、

淮南の春という題材を使って。^{六九}

この詩に出てくる「五君」とは、「二陳」つまり陳傳道と履常、「兩歐」つまり歐陽叔弼と季默、そして「王孫」つまり趙德麟の五人を指している。しかし、趙德麟を「龍種」と言い、「俗物人意を敗る」という阮籍が王戎に発した文言が出てくることから、単なる「五人の人物」という意味ではなく、「五君詠」に詠われた「五君」をも指していると考えられる。彼らの交遊には、「竹林七賢」とは違い、「人意を敗る」

ような「俗物」がいなかったので、「清醇」であったと語られる。つまり、ここには、「清／俗」という対立があり、王戎は「俗」であったとの評価が語られている。「我れに従ひて遊ぶ」と言っていることから、蘇軾自身も「清」であるとの認識があり、「五君」と言っていることから、ここでは触れられないが、山濤も「俗」であると評価が下されていると推測できる。

また、同様に「山王」という語は出てこないが、「五君詠」が出てくるものに「故李誠之待制六丈挽詞」がある。関連する部分のみを挙げる。

帰ってみれば友人は居なくなっており、

零落しつとも生き残っている人は誰だろうか（私だ）。

あなたは嵇康のような人物で、

その龍のような性質は飼いならすことはできなかった。

あなたは李邕のような人物で、

慷慨し素晴らしい作品を多く残した。

あなたを思うと五君詠は寂しく感じられ、

八哀詩は悲しく感じられる。

正邪は古くから明らかであり、

人々は今あなたへの思いを致す。

あの世に行ってしまったのはどうすることもできないので、

遠い昔からどうすることもできない悲しみを詠っているのだ。セ〇

この詩は、嵇康のところで触れたように、李師中の死を悼んだ詩である。李師中を嵇康に比して、「五君詠」に繋げ、また李邕に擬して、「八哀詩」に繋げている。「五君詠」に対して「寂しい」（淒涼）としているのは、「五君」の一人であった嵇康は、処刑され長寿ではなかったが、「五君」に含まれなかった山濤・王戎は二人とも長生きであったことから、「零落しつとも生き残っている人は誰だろうか（私だ）」と言うように、『山王』のような私は、まだ生を保ち、嵇康のようであった李師中は死んでしまった」と嘆いているからだと考えられる。

単独で山濤・王戎に言及しているものでは、山濤については、その物事や人物を見抜く能力が賞賛されてはいるものの、一つの例しか見られず、それも蘇軾の複雑な思いを含んでおり、純粋に肯定的な評価と

は考えられない。王戎に至っては、積極的に評価しようとしていないとは思えない。

次に同時に言及される場合、「山王」「五君」「五君詠」と言う以上、すぐに顔延之「五君詠」が浮かぶが、蘇軾は顔延之の行った操作を踏襲して引いているわけではない。つまり、顔延之の「高貴に昇った」という判断基準は閑却され、「酒を飲まない」「俗」「長寿」といった属性で、その場に応じて判断されている。

また、「五君」と「山王」という分割は踏襲しているが、蘇軾における「五君」が指しているのは、「丹元姚先生の韻に次す二首」其の二に見られる「嵇阮」／「山王」という対立からわかるように、阮籍・嵇康の二人であると考えられる。もちろん、挙げた詩には、顔延之「五君詠」の存在がなければ、成立しなくなるものもある。つまり、蘇軾は顔延之「五君詠」に対して二つの操作を行っているということである。一つは、「五君」と「山王」という結構を変えず、その判断基準を変えるところであり、もう一つは、同様に結構を変えず、顔延之「五君詠」を背景に置きながらも、「五君」という語を「嵇阮」の意で用いるということである。

そして、「五君」と「山王」のどちらに自身を仮託して表現しているかということに着目すれば、「叔弼云ふ、履常飲まず、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む」「趙德麟の陳傳道を送るに和す」の二つでは、自身を「五君」に仮託しており、「丹元姚先生の韻に次す二首」其の二「杞を過ぎて馬夢得に贈る」「故李誠之待制六丈挽詞」の三つでは、自身を「山王」に仮託していることから、この自身を「山王」に仮託している三つは、いずれも詩を贈られる人物を賛美しており、そのため蘇軾は謙遜し、自身を「山王」に仮託したのだと考えられる。この行為には、明らかに「山王」よりも「嵇阮」を高く評価していることが表れている。

2 劉伶

蘇軾の酒に対する認識の一端は、先に「張安道の樂全堂」「蘇自之の酒を恵むを謝す」で見たが、阮籍と同様に酒に関するエピソードが多く見られる劉伶に対して、蘇軾はどのように語っているのか。まず、「頓教授の寄せらるるに和し除夜の韵を用ふ」だが、これは前半部のみ挙げる。

私は陶淵明を笑ってしまふ、
酒用の穀物を植えたそうだ。
妻の言葉は聞かず、
また子を責めて嘆いている。

弦が無ければ琴がないことと同じで、
どうして弦の無い琴を撫でなければならぬのか。

私は劉伶も笑ってしまう、
酔っぱらって髪の毛がぼさぼさだったとか。

「酒徳頌」に出てくる二人の人物は話を聞いてもらえずに苦しみ、
一人従者に鋤を担がせて出かける。

既に死んでいるのであれば、
身体は夜でも朝でも同じことである。

この二人が賢者であると誰が言ったのだろうか、
私がこの二つの案件に結論をつけてみた。七一

この詩で、劉伶は陶淵明と共に引かれている。

陶淵明は、「酒の材料となる穀物を植え、（食べる穀物を植えるようにという）妻子の言葉は聞かないが、
（学問を好まない）子供を責めて嘆き」、その憂悶を解くために酒を飲んだ。そして、弦の張っていない
琴を撫して琴中の趣を得んと言ったが、それに対して、蘇軾は「弦がなければ、琴も存在せず、どうして
わざわざ琴を撫でる必要があるか」と笑っている。

劉伶は、「いつも酔っ払い髪の毛は蓬や茅のようにぼさぼさで、（「酒徳頌」に見られるように、議論に
来）二人の偉い人は、話を聞いてもらえず苦しげに側に佇み七一、一人の従僕に鋤を持たせ、『死んだらそ
の場に埋める』と言って（鹿車でぶらつく）」が、それに対して、蘇軾は「すでに死んでいるのであれば、
埋めることは重要ではない」と言い、『莊子』『大宗師』篇を引いて、「この身は天に昼と夜があるように天
命である」七三と笑う。

つまり、この二人の人物は、物事に拘泥せず、思うがままに過ごしていたと思われるが、それは表
面上でのことであり、実際には、達観できてはいなかったという読みが示されている七四。
他にも酒に関する言及がいくつか見られる。「碧香酒を送り趙明叔教授に與ふ」の末尾の部分のみ挙げる。

劉伶が一人で飲んでいた態度を真似してはいけないう、

一壺の酒を贈るのは眉に等しい高さに挙げられたお膳の助けとしてなのだから。七五

ここでは、「劉伶がその妻に酒を断つように泣きながら諫められたが、自分一人では禁酒はできないから、

鬼神に誓いをたてるために、酒と肉を用意させ、そのお供えものを飲み食いした」という故事^{七六}を踏まえているが、それに対して「一壺の酒を贈るのは眉に等しい高さに挙げられたお膳の助けとしてなのだから」というのは、「後漢の隠士梁鴻が仕事から帰ってくる、眉の高さにお膳を捧げ給仕した」というその妻孟光の故事^{七七}を指している。劉伶のように夫のためを思う妻を騙すのではなく、孟光のように給仕するであろう趙明叔の妻を思って酒を贈るということだが、酒に執着しすぎる劉伶を悪い手本と挙げている。また、阮籍のところでは「蘇自之の酒を恵むを謝す」では、劉伶も言及されている。部分のみ挙げる。

徐邈は意識を失い阮籍は思い上がった振る舞いをし、畢卓は盗みを働き劉伶は倒れた。狂いまわり奇を衒うなど取るに足らないものであるのに、世俗の人々はその奇抜さを好み賢者として敬う。^{七八}

この詩では、やはり先に見た阮籍の場合と同じように、酒による負の評価が下されている。最後に「周安孺に茶を寄す」を見る。部分のみを挙げる。

昔の人にもちろん癖は多かったが、私の（お茶好きという）癖は許されるものだろう。酒を好んだ劉伶に聞いてみよう、どうして糟や麴に枕すとまで言ったのか。^{七九}

この詩は、茶について語っているが、劉伶は、その末尾にて言及されている。「糟や麴に枕す」^{八〇}と語られるが、ここでは、飛び抜けた酒好きとして描かれており、自身の癖がそこまで酷くはないという一種の弁明に利用されている。

酒を好んだという共通の属性から、阮籍と劉伶を比べてみれば、劉伶についての言及では、精神性の高さが語られず、むしろその記述では、酒に対する偏執を取り上げられることが多い。そもそも言及される数が少なく、阮籍が処世の態度を評価されているのに比べて、別の属性が評価されていない。つまり、蘇軾の言及から考えると、劉伶は、酒に耽溺した人物としか見られていなかったと思われる。

おわりに

ここまで、蘇軾の詩に見られる「竹林七賢」の語られ方を見てきたが、二十九首の例があるなかで、「七賢」という語が一度も使われていない。「七賢」という語は見つけることができなかつたが、「竹林」は一つだけ見つけることができた。「王震に次韻す」の末尾の部分を挙げる。

詩や酒は晩年になっても楽しむことはできるが、

私はしばしば竹林での遊びへの参加を許された。ハ一

これは、友人（王震）との交遊をいわゆる「竹林の游」に見立て、君たちのお陰で自分もその「竹林の游」に参加することができると言う。ここでは、素晴らしい友人同士の交遊を言うのに「竹林の高會」という語が使われている。「竹林七賢」という呼称を生み出した「竹林の游」という故事を引いてはいるが、「竹林七賢」自体に対して何らかの評価を下しているとは考えにくい。

最後に、詩から見える蘇軾の「竹林七賢」観をまとめておく。

「竹林七賢」と称された七人全員に対する言及がほとんど見られず、「竹林七賢」としての評価が語られないことから、蘇軾において、「竹林七賢」と称される七人は、均等な価値を持っていないと考えられる。つまり、蘇軾の認識においては、「竹林七賢」という概念に先立って、阮籍や嵇康といった人物が存在していると考えられる。

また、顔延之による「五君詠」での操作を受け入れてはいるが、必ずしもその操作を行った動機を受け入れているのではない。しかし、友人を「五君」とし、謙遜して自身を「山王」に仮託していることからすれば、山濤、王戎に対しては「五君」よりも低い評価がなされていると考えられる。

そして、「五君」の中でも、阮咸・向秀に対する言及を見つけることができないことから、この二人は、阮籍、嵇康、劉伶に比べ、語るに足る人物ではなかったと考えられる。また、劉伶は、阮籍、嵇康と比べ、言及される数に差があり、その内容も高い評価とは言えないものであった。「五君」と「山王」に言及するときも、顔延之の「五君詠」を背後におきながらも、「山王」に対して「嵇阮」という対立を持ち出していることから、主眼は嵇康、阮籍にあると考えられる。

言及の多く見られる阮籍と嵇康とは、仮託していること、「嵇阮」という順番を考慮すれば、蘇軾は、

嵇康をより重要視していると考えられる。

一 蘇軾のテクストの引用は、蘇軾著、張志烈、馬德富、周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（石家莊、河北人民出版社、二〇一〇年六月）を使用する。以下では『全集』とする。なお、中国語文は拙訳により、注に原文を示す。

二 阮籍一例、嵇康一四例、山濤四例、王戎五例、劉伶四例、阮咸・向秀についての言及は見られなかったが、「五君」または「五君詠」として二例が見られる（同時に言及されている場合も個々の数に含む）。

三 原文「阮生古狂達，遁世默無言。猶餘胸中氣，長嘯獨軒軒。高情遺萬物，不與世俗論。登臨偶自寫，激越蕩乾坤。醒為嘯所發，飲為醉所昏。誰能與之較，亂世足自存。」（前掲『全集』、第一冊、一六九頁）。

四 「阮籍伝」に「籍本有濟世志，屬魏晉之際，天下多故，名士少有全者，籍由是不與世事，遂酣飲為常」や「文帝初欲為武帝求婚於籍，籍醉六十日，不得言而止」、「當其得意，忽忘形骸」（房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一〇月、第一版第一次印刷、一三五九〜一三六〇頁）などがある。

五 『宋本太平寰宇記』第一卷「河南道」の「尉氏縣」の項に「阮籍臺在縣東南二十步。籍每追名賢携酌長嘯登此也。」（樂史撰『宋本太平寰宇記』、北京、中華書局、一九九九年、影印本、一九頁）とある。

六 陳留にあつたとされる「嘯臺」がいわゆる「蘇門山」と同じかはわからないが、阮籍が飲酒し、長嘯した様子を描いたものとして、「阮籍伝」に「籍嘗於蘇門山遇孫登，與商略終古及栖神導氣之術，登皆不應，籍因長嘯而退。至半嶺，聞有聲若鸞鳳之音，響乎巖谷，乃登之嘯也」（前掲『晋書』、一三六二頁）とある。

七 原文「君不見阮嗣宗，臧否不挂口。」（前掲『全集』、第一冊、五〇五頁）。

八 「阮籍伝」に「口不臧否人物」（前掲『晋書』、一三六一頁）とある。

九 原文「凜然高節照時人，不信微官解浼君。蔣濟謂能來阮籍，薛宣真欲吏朱雲。好詩衝口誰能擇，俗子疑人未遣聞。乞取千篇看俊逸，不將輕比鮑參軍。」（前掲『全集』、第三冊、二〇八四〜二〇八五頁）。

一〇 「阮籍伝」に「太尉蔣濟聞其有雋才而辟之。」（前掲『晋書』、一三五九頁）とある。

一一 「楊胡朱梅云伝」に「薛宣為丞相，雲往見之。宣備賓主禮，因留雲宿，從容謂雲曰：『在田野亡事，且留我東閣，可以觀四方奇士。』雲曰：『小生乃欲相吏邪。』宣不敢復言。」（班固撰『漢書』、北京、中華書局、一九七五年四月、第一版第三次印刷、二九一六頁）とある。

一二 原文「先生堂前霜月苦，弟子讀書喧兩廡。推門入室書縱橫，蠟紙燈籠晃雲母。先生骨清少眠卧，長夜默坐數更鼓。耐寒石硯欲生冰，得火銅瓶如過雨。郎君欲出先自贊，坐客斂衽誰敢侮。明朝阮籍過阿戎，應作羲之羨懷祖。」（前掲『全集』、第三冊、一八五一〜一八五二頁）。

一三 「王戎伝」に「阮籍與渾爲友。戎年十五，隨渾在郎舍。戎少籍二十歲，而籍與之交。籍每適渾，俄頃輒去，過視戎，良久然後出。謂渾曰：『濬冲清賞，非卿倫也。共卿言，不如共阿戎談。』」（前掲『晋書』、一

二三一頁)とある。

一四 原文「啼鳩催天明，喧喧相詆讎。暗蛩泣夜永，唧唧自相吊。飲風蟬至潔，長吟不改調。食土蚓無腸，亦自終夕叫。鳶貪聲最鄙，鵲喜意可料。皆緣不平鳴，慟哭等嬉笑。阮生已粗率，孫子亦未妙。道人開此軒，清坐默自照。衝風振河海，不能號無竅。累盡吾何言，風來竹自嘯。」(前掲『全集』、第四冊、二二一六頁)。

一五 原文「列子御風殊不惡，猶被莊生譏數數。步兵飲酒中散琴，於此得全非至樂。樂全居士全於天，維摩丈室空恹然。平生痛飲今不飲，無琴不獨琴無絃。我公天與英雄表，龍章鳳姿照魚鳥。但令端委坐廟堂，北狄西戎談笑了。如今老去苦思歸，小字親書寄我詩。試問樂全全底事，無全何處更相虧。」(前掲『全集』、第二冊、一二九五頁)。

一六 『莊子』「至樂第十八」に「吾以無為誠樂矣，又俗之所大苦也。故曰：『至樂無樂，至譽無譽』」(郭慶藩撰、王孝魚点校『莊子集釈』、新編諸子集成、北京、中華書局、一九八九年一〇月、第五刷、第三冊、六一一頁)とある。

一七 原文「登高望中原，但見積水空。此生當安歸，四顧真途窮。」(前掲『全集』、第七冊、四八四二頁)。

一八 原文「君門深九重，墳墓在萬里。也擬哭途窮，死灰吹不起。」(前掲『全集』、第四冊、二三四三頁)。

一九 原文「臨分亦泫然，不爲窮途泣。」(前掲『全集』、第四冊、二三〇七頁)。

二〇 他に、「途窮」を用いたものに、「丙子の重九二首」其の二と「李兕彦威秀才に贈る」があるが、どちらも用い方は、本文に例示した三作のいずれかと同じである。

二一 原文「君方卒功名，一泛范蠡舟。我亦霑霑渥，漸解鍾儀囚。寧須張子房，萬戶自擇留。猶勝嵇叔夜，孤憤甘長幽。」(前掲『全集』、第七冊、四六四六、四六四七頁)。

二二 「嵇康伝」に「後安爲兄所枉訴，以事繫獄，辭相證引，遂復收康。康性慎言行，一旦縲繼，乃作幽憤詩」(前掲『晋書』、一三七二頁)とある。

二三 「山巨源に與ふる絶交書」に「又人倫有禮。朝廷有法。自惟至熟。有必不堪者七。甚不可者二。」(蕭統撰、李善注『文選』、北京、中華書局、一九七七年、第一版第二刷、六〇二頁)とある。

二四 原文「展禽雖未三見黜，叔夜自知七不堪。」(前掲『全集』、第二冊、六一一、六一二頁)。

二五 原文「正平獨肯從文舉，中散何曾斬孝尼。」(前掲『全集』、第四冊、二五〇五頁)。

二六 『後漢書』「文苑伝」に「唯善魯國孔融及弘農楊脩。常稱曰：『大兒孔文學，小兒楊德祖。餘子碌碌，莫足數也。融亦深愛其才。』」(范曄撰『後漢書』、北京、中華書局、一九七四年一〇月、第一版第一次印刷、二六五三頁)とある。

二七 「嵇康伝」に「康將刑東市，太學生三千人請以爲師，弗許。康顧視日影，索琴彈之，曰：『昔袁孝尼嘗從吾學廣陵散，吾每斬固之，廣陵散於今絶矣！』」(前掲『晋書』、一三七四頁)とある。

- 二八 原文「既似蠟屐阮，又如鍛柳嵇。」（前掲『全集』、第七冊、四四四六頁）。
- 二九 「嵇康伝」に「性絶巧而好鍛。」（前掲『晋書』、一三七二頁）とある。
- 三〇 原文「醉中雖可樂，猶是生滅境。云何得此身，不醉亦不醒。癡如景升牛，莫保尻與領。黠如東郭隄，束縛作毛穎。乃知嵇叔夜，非坐虎文炳。」（前掲『全集』、第六冊、三九九八頁）。
- 三一 『周易』「第四十九卦」に「九五。大人虎變。未占有孚。象曰。大人虎變。其文炳也。」（『十三經注疏』、台北、藝文印書館、中華民國六十二年五月、五版、第一冊、一一二頁）とある。
- 三二 原文「比公嵇中散，龍性不可羈。」（前掲『全集』、第五冊、三一七九頁）。
- 三三 顏延之「五君詠」「嵇中散」に原文「龍性誰能馴。」（遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、北京、中華書局、二〇〇六年一月、第一版北京第五次印刷、一二三五頁）とある。
- 三四 原文「他年如入洛，生死一相訪。惟有王濬沖，心知中散狀。」（前掲『全集』、第三冊、一四七二頁）。
- 三五 「忠義伝」に「紹始入洛，或謂王戎曰：『昨於稠人中始見嵇紹，昂昂然如野鶴之在雞群。』戎曰：『君復未見其父耳。』」（前掲『晋書』、一二二九八頁）とある。
- 三六 原文「吾儕久相聚，恐見疑排根。我編類中散，子通真巨源。絕交固未敢，且復東南奔。」（前掲『全集』、第一冊、六〇一頁）。
- 三七 この詩の解釈については、孫洙を山濤に譬えて肯定的な評価を下しているのか、否定的な評価を下しているのかという問題がある。これまでの注釈者によって提出されてきた意見の応酬を鑑み、前掲『全集』校注は、この「通」には、「通達」とともに「委曲求全」の意を挙げている。つまり、王安石が権力を握る当時の情況と、この詩に込められた風刺性に着目すれば、「通」とは、物事の道理をわきまえている（「通達」）ことによって、大局を考え、意を曲げて折り合いをつける（「委曲求全」という行動を示している）と考えられる。この詩における蘇軾の評語「通」は複雑な評価を含んではいるが、そのように意を曲げられない自身を「編」と否定的な言葉で語る以上、世間的な観点から、表面上肯定的な評価を下していると考えたい。
- 三八 原文「袖裡寶書猶未出，夢中飛蓋已先傳。何人更識嵇中散，野鶴昂藏未是仙。」（前掲『全集』、第四冊、二五四四～二五四五頁）。
- 三九 原文「亦知洞府嘲輕脫，終勝嵇康羨王烈。神山一合五百年，風吹石髓堅如鐵。」（前掲『全集』、第四冊、二一九〇～二一九一頁）。
- 四〇 「嵇康伝」に「康嘗採藥游山澤，會其得意，忽焉忘反。時有樵蘇者遇之，咸謂爲神。至汲郡山中見孫登，康遂從之遊。登沈默自守，無所言說。康臨去，登曰：『君性烈而才雋，其能免乎！』康又遇王烈，共入山，烈嘗得石髓如飴，卽自服半，餘半與康，皆凝而爲石。又於石室中見一卷素書，遽呼康往取，輒不復

見。烈乃歎曰：『叔夜志趣非常而輒不遇，命也！』其神心所感，每遇幽逸如此。」（前掲『晋書』、一三七〇頁）とある。また『神仙伝』卷六「王烈」に「王烈。字長休。邯鄲人。常服黄精并鍊鉛。年二百三十八歲。有少容。登山如飛。少為書生。嵇叔夜與之游。烈嘗入太行山。聞山裂聲往視之。山斷數百丈。有青泥出如髓。取搏之須臾成石。如熱臘之狀。食之味如粳米。仙經云神仙五百歲輒一開其中有髓得服之者舉天地齊畢。」（『四庫全書』上海古籍出版社、一九八七年八月、第一版、一〇五九冊、二八八九頁）とある。

四一 原文「王烈亦何人，叔夜未可量。獨見神山開，遽餐石髓香。」（前掲『全集』、第六冊、四一四九頁）。
四二 原文「高士例須憐麴蘖，此語常聞退之說。我今有說殆不然，麴蘖未必高士憐。醉者墜車莊生言，全酒未若全於天。達人本是不虧缺，何暇更求全處全。景山沉迷阮籍傲，畢卓盜竊劉伶顛。貪狂嗜怪無足取，世俗喜異矜其賢。杜陵詩客尤可笑，羅列八子參群仙。流涎露頂置不說，為問底處能逃禪。我今不飲非不飲，心月皎皎常孤圓。有時客至亦為酌，琴雖未去聊忘絃。吾宗先生有深意，百里雙壘遠將寄。且言不飲固亦高，舉世皆同吾獨異。不如同異兩俱冥，得鹿亡羊等嬉戲。決須飲此勿復辭，何用區區較醒醉。」（前掲『全集』、第一冊、四六九頁）。

四三 北京大學古文獻研究所編『全唐詩』（北京、北京大學出版社、一九九一年七月、第一次印刷）第十冊、三七九六～三七九七頁。

四四 『莊子』「達生第十九」に「夫醉者之墜車，雖疾不死。骨節與人同而犯害與人異，其神全也。乘亦不知也，墜亦不知也，死生驚懼不入乎其胸中，是故遺物而不懼。彼得全於酒而猶若是，而況得全於天乎。」（前掲『莊子集釈』、第三冊、六三六頁）とある。

四五 前掲『全集』、第七冊、四九七二頁。

四六 前掲『全集』、第四冊、二七八五頁。

四七 前掲『全集』、第一九冊、七七九七頁。

四八 原文「民勞吏無德，歲美天有道。暑雨避麥秋，溫風送蠶老。三咽初有聞，一溉未濡槁。詔書寬積欠，父老顏色好。再拜賀吾君，獲此不貪寶。頽然笑阮籍，醉几書謝表。」（前掲『全集』、第六冊、三九九三～三九九四頁）。

四九 「阮籍伝」に「文帝初欲爲武帝求婚於籍，籍醉六十日，不得言而止。」（前掲『晋書』、一三六〇頁）とある。

五〇 『春秋左氏伝』「襄公十五年」に「宋人或得玉。獻諸子罕。子罕弗受。獻玉者曰。以示玉人。玉人以為寶也。故敢獻之。子罕曰。我以不貪為寶。爾以玉為寶。」（『十三經注疏』、藝文印書館、中華民國六二年五月、五版、卷六、五六六頁）とある。

五一 原文「誤入無功鄉，掉臂嵇阮間。飲中八仙人，與我俱得仙。淵明豈知道，醉語忽談天。」（前掲『全集』、

第七冊、四八六〇頁）。

五二 原文「吾謫海南，盡賣酒器，以供衣食。獨有一荷葉杯，工製美妙，留以自娛」（前掲『全集』第七冊、四八五八頁）。

五三 「無功」とは唐の王績の字であり、王績は「醉郷記」を著し、酔いの境地を醉郷と称した。「醉郷記」に「阮嗣宗陶淵明等十數人並遊於醉郷」（前掲『四庫全書』、一〇六五冊、二二頁）とある。

五四 原文「彼哉嵇阮曹，終以明自膏。」（前掲『全集』、第五冊、三三一八頁）。

五五 『論語』「憲問第十四」に「或問子產。子曰。惠人也。問子西。曰。彼哉。彼哉。問管仲。曰。人也。

奪伯氏駢邑三百。飯疏食。沒齒。無怨言。」（『十三經注疏』、台北、藝文印書館、中華民國六二年五月、五版、第八冊、一二四頁）とある。

五六 原文「我欲往兮奉杖藜，獨長嘯兮謝阮嵇。」（前掲『全集』、第八冊、五五七九頁）。

五七 注八参照。

五八 「山巨源に與ふる絶交書」に「剛腸疾惡。輕肆直言。遇事便發。」（前掲『文選』、六〇二頁）とある。

また「阮嗣宗口不論人過。吾每師之。而未能及。」（前掲『文選』、六〇二頁）ともある。

五九 韻字は、西、溪、蹊、迷、低、畦、淒、泥、鷺、堤、雞、齊、枿、嘶、璃、颯、犁、攜、霓、提、梯、棲、閨、妻、麝、藜、嵇。その内「璃」を除いた全てが齊韻である。

六〇 注三六参照。

六一 「山濤伝」に「濤再居選職十有餘年，每一官缺，輒啓擬數人，詔旨有所向，然後顯奏，隨帝意所欲爲先。故帝之所用，或非舉首，衆情不察，以濤輕重任意。或譖之於帝，故帝手詔戒濤曰：『夫用人惟才，不遺疏遠單賤，天下便化矣。』而濤行之自若，一年之後衆情乃寢。濤所奏甄拔人物，各爲題目，時稱山公啓事。」（前掲『晉書』、一二二五～一二二六頁）とある。

六二 注三四参照。

六三 前掲『文選』、三〇三～三〇四頁。

六四 原文「作五君詠以述竹林七賢，山濤、王戎以貴顯被黜」（沈約撰『宋書』、北京、中華書局、一九七四年一〇月、第一版第一次印刷、一八九三頁）。

六五 原文「商也哀未忘，歲月忽已秋。祥琴雖未調，餘悲不敢留。矧此乃韻語，未入金石流。羲之生五子，總角出銀鈎。吾家有二許，下筆兩不休。君言不能詩，此語人信不。千鍾斯爲堯，百榼斯爲丘。陋矣陶士衡，當以大白浮。酒中那有失，醉則不驚鷗。明當罰二子，已洗兩玉舟。」（前掲『全集』、第六冊、三七五八～三七五九頁）。

六六 原文「我本畏酒人，臨觴未嘗訴。平生坐詩窮，得句忍不吐。吐酒茹好詩，肝胃生滓汚。用此較得喪，天豈不足付。吾儕非二物，歲月誰與度。悄然得長愁，為計已大誤。二歐非無詩，恨子不飲故。強為釀一酌，將非作愁具。成言如皎日，援筆當自賦。他年五君詠，山王一時數。」（前掲『全集』、第六冊、三七六二頁）。
六七 原文「蓬萊在何許，弱水空相望。且當從嵇阮，聊復數山王。達人友四海，曲士守一疆。」（前掲『全集』、第六冊、四一四九頁）。

六八 原文「萬古仇池穴，歸心負雪堂。殷勤竹裏夢，猶自數山王。」（前掲『全集』、第六冊、四三三三頁）。
六九 原文「二陳既妙士，兩歐惟德人。王孫乃龍種，世有籥雲麟。五君從我游，傾寫出怪珍。俗物敗人意，茲游實清醇。那知有聚散，佳夢失欠伸。我舟下清淮，沙水吹玉塵。君行踏曉月，疎木挂寸銀。尚寄別後詩，剪刻淮南春。」（前掲『全集』、第六冊、三九二六頁）。

七〇 原文「歸來耆舊盡，零落存者誰。比公嵇中散，龍性不可羈。疑公李北海，慷慨多雄詞。淒涼五君詠，沉痛八哀詩。邪正久乃明，人今屬公思。九原不可作，千古有餘悲。」（前掲『全集』、第五冊、三一七九頁）。
七一 原文「我笑陶淵明，種秫二頃半。婦言既不用，還有責子歎。無絃則無琴，何必勞撫玩。我笑劉伯倫，醉髮蓬茅散。二豪苦不納，獨以錫自伴。既死何用埋，此身同夜旦。孰云二子賢？自結兩重案。」（前掲『全集』、第二冊、一二六一頁）。なお、前掲『全集』では、「絃」を「弦」に作るが、注において「『無絃』二句」としていることから、誤植と捉え、「絃」に改めた。

七二 「酒徳頌」に「二豪侍側。焉如蝮蠱之與螟蛉。」（前掲『文選』、六六二頁）とある。

七三 原文「死生，命也。其有夜旦之常，天也。」（前掲『莊子集釈』、第一冊、二四一頁）。

七四 また、劉伶に対する「頓教授の寄せらるるに和し除夜の韵を用ふ」と同様の認識が、これは史評と思われるが、「劉伯倫達に非ず」に示されている。「劉伯倫嘗以錫自隨，曰：『死便埋我。』蘇子曰：『伯倫非達者也。棺槨衣衾，不害為達。苟為不然，死則已矣，何必更埋。』」（前掲『全集』、第一八冊、七二六三頁）。

七五 原文「不學劉伶獨自飲，一壺往助齊眉餉。」（前掲『全集』、第三冊、一四一九頁）。

七六 「劉伶伝」に「嘗渴甚，求酒於其妻。妻捐酒毀器，涕泣諫曰：『君酒太過，非攝生之道，必宜斷之。』伶曰：『善，吾不能自禁，惟當祝鬼神自誓耳。便可具酒肉。』妻從之。伶跪祝曰：『天生劉伶，以酒爲名。一飲一斛，五斗解醒。婦兒之言，慎不可聽。』仍引酒御肉，隗然復醉。」（前掲『晋書』、一三七六頁）とある。

七七 「逸民伝」に「每歸，妻爲具食，不敢於鴻前仰視，舉案齊眉。」（前掲『後漢書』、二七六八頁）とある。

七八 原文「景山沉迷阮籍傲，畢卓盜竊劉伶顛。貪狂嗜怪無足取，世俗喜異矜其賢。」（前掲『全集』、第一冊、四六九頁）。

七九 原文「昔人固多癖，我癖良可贖。為問劉伯倫，胡然枕糟麴。」（前掲『全集』、第四冊、二四三三～二四三五頁）。

八〇 「酒徳頌」に「枕麴藉糟」（前掲『文選』、六六二頁）とある。

八一 原文「詩酒暮年猶足用，竹林高會許時攀。」（前掲『全集』、第五冊、二九三八頁）。

結語

前章まで、各時期の詩人の詩に見られた「竹林七賢」像を見てきた。最後に、「竹林七賢」とそれぞれの人物像をまとめたい。

・阮籍

後代の詩人によって阮籍に付与された属性は、大きく二つに分けることができる。一つは、「風流」という属性であり、もう一つは、「途窮」という属性である。「風流」は、宴席が詩作の場として選ばれたことが大きな要因だろう。小論で挙げた詩人の詩では、みな何らかの形で「風流」という属性で阮籍が描かれている。

「途窮」は、顔延之が「五君詠」で用いたのが始めだが、典故として定着したのは、庾信からだろう。その後、杜甫、白居易、劉禹錫、蘇軾らは、この「途窮」という属性で阮籍を詠っている。白居易、劉禹錫は、第五章で見たように、この「途窮」によって阮籍を詠い、自身を仮託することを避けており、李白が「途窮」という属性で阮籍を詠わないのも、白居易や劉禹錫に類するものだろう。それは、つまり、猟官運動のためである。しかし、彼らが阮籍を詠い、「途窮」という属性を自身に仮託していると読まれることを避けているのを見れば、阮籍の属性として、「途窮」がいかに中心的なものであったかがわかるだろう。

・嵇康

嵇康は、阮籍とともに「風流」という属性で詠われることも多いが、それ以上に、「処刑」に関する属性と、「怠惰」という範疇にまとめられる属性が重要となるだろう。「処刑」に関する属性は、東晋期では、「臨終詩」という形式で用いられ、嵇康の泰然とした態度を示すものから、次第に、向秀「思旧賦」とともに描かれ、亡くなった人物を傷む際に示されるようになる。この構造は、六朝期から見られ、その後も用いられ続ける。友人を賛美するという構造では、その他に「龍性」という属性でも詠われる。

「怠惰」や「怠け者」といった性質を表す属性は、杜甫、白居易、蘇軾に見られ（劉禹錫は否定するという形で用いている）、自身の性質に対する他人への寛容の要求や、自身への慰めとして示されている。

・劉伶

劉伶は、良くも悪くも酒を好んだ人物としか描かれない。

・向秀

向秀は、顔延之「五君詠」では、その学問的な資質が着目されるが、その後、嵇康の死を嘆く「思旧賦」ばかりが着目され、単独で描かれることは少ない。ここから、嵇康の存在の大きさが分かるだろう。

・阮咸

阮咸は、その資質を賞賛されることも多いが、向秀と嵇康の関係と同様、阮籍との関係によって描かれることが多い。李白、杜甫は、それぞれの位置する場所は異なるが、阮籍・阮咸の関係に着目して、叔父・甥の関係を示す。

・山濤

山濤の属性として着目されるのは、その官吏としての経歴、つまり、人材推挙の能力であり、また、それは、高官という属性を示してもいる。蘇軾の詩では、顔延之「五君詠」による影響が多く見られ、「五君」と「山王」の対立を用いた例がいくつか見られる。その場合の山濤は、「俗物」などの否定的な属性が描かれる。

・王戎

王戎は、小論で見てきた範囲で、言及される属性の振れ幅が非常に大きい人物である。六朝期に見られる、王戎Ⅱ「風流」という属性は、貴族制が終焉を迎えるにつれて、「俗物」へと変わる。山濤と同様、蘇軾においては、否定的に扱われている。

・「竹林七賢」

それぞれの人物が個別に言及される場合、多様な属性が着目されているが、「竹林七賢」として言及さ

れた場合、その属性は、主に「風流」となる。阮籍の嘆きや嵇康の世に合わない性質などは触れられず、交遊を示すものとなってしまふ。

以上が、描かれた「竹林七賢」像のあらましとなるが、ここで、顔延之「五君詠」の影響について考えたい。

詩において阮籍を描くのに「途窮」が用いられたのは、「五君詠」に始まる。そして、詠史詩以外の形式で「途窮」を用いたのが庾信である。この「途窮」を多く用いたのは杜甫であり、また、白居易、劉禹錫、蘇軾など、小論で取り上げた庾信以後の詩人のほとんどがこの属性に着目している。

「途窮」を用いなかった李白も、嵇康を詠う際に、「五君詠」の句を踏まえた表現をしており、また、その認識の枠組みも、基本的には、「五君詠」を踏襲している。

さらには、「竹林七賢」それぞれの描かれた属性自体が、顔延之の描いた属性に多く収斂され、時には目新しいものもあるが、大筋の表現は「五君詠」の有する表現の空間からはみ出すものではない。

また、「五君詠」では詠われなかった山濤、王戎を詠った蕭統の詩も、「五君詠」を意識したものであり、「五君詠」の存在が無くては成立しないものだろう。そして、蘇軾は、「五君詠」の「五君」／「山王」という対立を用いた表現をしている。

これらの点を考慮すれば、描かれた「竹林七賢」像は、「五君詠」の影響下にあるものが多い。つまり、「五君詠」によって、ある程度の「竹林七賢」像が成立していたと考えられる。それ以後の「竹林七賢」像は、その反復やそこからのずれとも考えられ、それは、いかに「五君詠」の影響力が強かったのかを示しているだろう。

これらの「竹林七賢」像は、「序」で述べたように、現在見ることでできるものに限って観察されたものであるため、実際とは異なる可能性がある。また、考察の対象となった詩人も、「竹林七賢」に言及した詩を作った詩人すべてでないため、小論で扱った詩人とは全く異なる「竹林七賢」像が描かれているかもしれない。しかし、小論で取り上げた詩人が着目した属性の類似性を考えれば、大幅に異なることはないだろう。

小論では、「竹林七賢」の描かれ方を中心に見てきたため、何のために「竹林七賢」を用いたのかという詩人たちの認識についての考察を加えることがあまりできなかった。しかし、「竹林七賢」を中心とした文学史というものを考えたとき、どのように「竹林七賢」が描かれたのかということとともに、詩人がなぜ「竹林七賢」を描いたのかという点は、重要なものとなるだろう。

そこで、多少重複するところはありますが、最後に、詩人の「竹林七賢」に対する認識を素描しておきたい。しかし、何度も繰り返すように、対象となる詩は、当然ながら、現存するものに限られるため、限定付きの考察となる。よって、小論で取上げた詩人の全ての作品を見ることはできず、まして、彼らの認識を全て理解することはできない。また、その認識が本場に「竹林七賢」に対する認識だったのかということを考えれば、彼らの「真の」認識を理解することなど不可能であり、無意味である。よって、考察の対象となるのは、書かれたものであり、それは現在を生きる我々からすれば、残されたものとなる。

・阮籍

顔延之が「五君詠」を詠った動機として、自己の憤懣を表現しているということが言われるが、それを阮籍のみならず、「竹林七賢」に対する認識と捉え返せば、顔延之は、「超俗」の人物の世に容れられないという苦しみを、「竹林七賢」に見ていたということになるだろう。これは、後の庾信にも繋がる認識である。

その後、六朝期では（庾信を除いて）、何遜、張正見が典故として、阮籍に言及している。彼らが用いたのは、阮籍の「風流」という属性であり、当時、詩制作の場として大きな割合を占めたのは宴席であった、という社会的なコンテキストを考慮に入れれば、このような属性を取上げるといふ選択は妥当だろう。阮籍に対して他の属性を見ていた可能性はあるが、創作の場という要因によって、取り上げにくかったと考えられる。つまり、六朝期の人々の認識としては、阮籍Ⅱ「風流」であったのだろう。

そのような中で、祖国を離れるという悲劇に見舞われた庾信は、阮籍を異なる属性で詠った。庾信は、自身の置かれた志を遂げようと思っても遂げることのできないという境遇を、阮籍が司馬氏の支配する社会における行き詰まりに擬え、「途窮」という語で表現した。阮籍の「途窮」という属性に言及したのは顔延之の方が先だが、自身の詩に典故として組み込むという形式を確立したのは、庾信であると言ってよいだろう。

もちろん、庾信は、「風流」という属性で阮籍を詠うことはあった。しかし、庾信においては、六朝で支配的であった阮籍Ⅱ「風流」という認識を引き継ぎながらも、自身の境遇に合った「途窮」という属性を阮籍に与えた点が評価されるべきだろう。その後も、阮籍Ⅱ「風流」という認識は、他の属性とともに、詠われ続けていく。

時代は移り、唐詩の絶頂期とされる盛唐の代表として李白と杜甫の阮籍観を見れば、また異なっている。阮籍像が見られる。貴族制が残りつつも、科挙という新しい道が開かれたことにより、官界へ進出し、志

を遂げようとする人々の数が増えた中で、李白と杜甫は、望んでも地位を得られない状況を、阮籍を用いて表現している。しかし、それは両者異なる方向を取る。

李白が阮籍を用いるのは、行き詰っている自身の状況を打開するための戦略としてである。その論理は、老荘を好んだ阮籍が政治を行えば、それは「名利に恬淡な官吏」としてであり、利権の独占などを企み、民を苦しめることはないという認識から、道士であり、また李氏に連なる自分は、阮籍のような「無為」を基本とした「名利に恬淡な官吏」として働けるということになる。実際は、李氏であったかも確かでないが、猟官運動において、李氏であることを強調する。このような自身の売り込みのために使われたのが阮籍であり、その属性は、庾信の詠った悲劇的でもある「途窮」とは異なる。

それに対して杜甫は、祖先に『左伝』を修めた杜預を持ち、あくまで儒者として、猟官運動に阮籍を用いた。それは、阮籍には元々経世の志があつたとされていたことが大きな要因である。同じく猟官運動を行いながらも、その個人的なコンテクストによつて、一方は道家から、もう一方は儒者からという観点が異なる。同じ故事を用いながらも、その観点によつて認識が異なるのは、読解の仕方が異なつていたことを示している。その点、杜甫の「途窮」は、庾信の「途窮」に近い。庾信は初め、自身が志を遂げられない外在的な要因として、祖国から離れている、もしくは、祖国が滅亡しているということを挙げており、割り切つて北朝で志を遂げようと心境の変化があつても、今度は、異民族という壁がそれを阻んでおり、杜甫は、自身が容れられない理由として、既に没落している貴族であり、有力な後ろ盾を持たないということが考えられる。このような差異はありながらも、同じような認識で阮籍を捉えているのは、庾信が「途窮」に哭す阮籍像という典故を確立したことに加えて、すでに多くの指摘があるように、杜甫が庾信を好んでいたことが挙げられる。しかしながら、阮籍は志を持つてはいたとされてはいるが、官職に就こうとはしなかった（東平へ行つたのを除いて。この時の意図はよくわからない）。この点において、庾信も杜甫も、また、李白も阮籍を誤読しており（意識的かどうかはわからないが）、自身の用いやすいように解釈し直している。

このような庾信から、李白、杜甫へと繋がる阮籍Ⅱ「途窮」という認識は、白居易、劉禹錫に至つて、その認識はそのまま、異なる用い方がなされる。白居易、劉禹錫が生きた中唐という時代は、庾信の時代のような異民族との戦いや李白、杜甫の時代のような内乱と異なり、政争が激しかった時代である。中央政府を出たり入ったりを繰り返した白居易、若い頃、中央政府で権力を握る一員となつたが、その後は、左遷続きであつた劉禹錫は、ともに中央政府の視線を意識しながらの詩作となつた。白居易の場合、洛陽時代とそれ以前という区切りで、阮籍への言及の質が変化し、「途窮」という、ある意味、官界での栄達を望むという欲望を隠すようになる。洛陽時代以前では、自身を阮籍に仮託し、その欲望が満たされないこ

とを述べていたのに、である。このような変化は、劉禹錫にも見られる。劉禹錫の場合、截然たる区切りは見られないが、同様の傾向が窺える。

このように、自身を売り込むために用いられた阮籍Ⅱ「途窮」という認識は、阮籍Ⅱ「途窮」という図式はそのまま、その認識に触れなくなるか、阮籍そのものの否定がなされることとなる。この否定は、中尾氏の挙げた「中央政界に執着のないことを示す」ということが理由と考えられる。

それでは、蘇軾はどのような属性を阮籍に与えていたのか。どこまで真剣に考えていたかはわからないが、蘇軾の阮籍に対する認識として中心となるのは、「隱逸」という属性であろう。儒は当然として、道、仏にも造詣が深かったとされる蘇軾は、儒者として政治に参与することとともに、俗世を離れて隱逸したという願望が阮籍への認識に表れているのではないだろうか。阮籍を用いた例として多く見られるのは、道や仏に関わる人物を描いたり、贈ったりした作品である。それらは、贈られた宛先である人物を称賛するための踏み台である場合もあるが、称賛するためには、その踏み台は高いものであるはずである。そのような人物と繋がりを持ち、称賛に用いることから、阮籍Ⅱ「隱逸」という認識が、蘇軾にとつて重要なものであったのではないだろうか。これまで見てきた詩人たちが、阮籍Ⅱ「隱逸」という認識を持つてはなかったわけではない。しかし、他の認識が強く表れており、中心を占めるものではなかった。その意味で、蘇軾の阮籍への認識として中心を占めるものは、特に目新しいものではない。しかしながら、蘇軾は、それまでの詩人の詩から読み取れる、それぞれの認識とは異なつた認識を抱いていたのは、確かだろう。

・嵇康

嵇康は、阮籍やその他の人物とは異なり、顔延之が「五君詠」で詠う以前に、詠われている。それは、臨終詩という形式でのことである。この処刑されるといふ特殊な状況において、処刑に臨んで泰然と琴を弾いたとされる嵇康は、一つの理想の姿とされたのだろう。しかし、これは、特殊な状況における嵇康像であり、このような形式で詠われることは、その後、見られなくなる。

次に、顔延之「五君詠」によつて詠われる。「五君詠」に描かれた嵇康は、主に「隱逸」や「超俗」、「仙性」といった俗世と対立する属性で詠われることとなる。そして、そのような属性を持つ嵇康は、龍や鳳凰で形容される。詠史詩に近い形で嵇康を詠つた庾肩吾の「賦して嵇叔夜を得る」では、このような形容はなされないが、俗世を離れた人物として描かれる。

その他庾信以前の六朝の詩人の詩では、阮籍と同様、宴席での詩作というコンテキストによつて、ある

意味不穏な属性とも思われる。「処刑」などは用いられず、宴席とそこに参加した人々の価値を高める「風流」という属性が用いられる。この嵇康Ⅱ「風流」という図式は、阮籍同様、この後も頻繁に用いられるものとなる。

庾信に至って、臨終詩という形式で用いられた嵇康Ⅱ「処刑」という図式が再び取り上げられる。しかし、臨終詩とはその用い方が異なっている。庾信においては、嵇康が単独で用いられるのではなく、向秀とともに用いられ、特に、向秀「思旧賦」が引かれたり、言及されたりする。これは、臨終詩という形式においては、処刑に臨む人物による、嵇康Ⅱ詩人という図式となるが、庾信の場合、亡くなった友人を傷むという状況で用いられ、嵇康Ⅱ友人となり、嵇康を傷む向秀Ⅱ庾信という図式となる。向秀については後述するが、要点を述べれば、今は亡き友人を善きものとして価値を高めるために嵇康を用い、自身はその善きものを理解できるが、そのレベルには達せずにいるという自己卑下ともなる。

また、阮籍と同様に、自身の不遇を嘆く、または、自身を慰めるためにも嵇康は用いられるが、嵇康を単独で用いてこのような属性に言及することが見られないという、庾信の用い方から考えると、阮籍とともに引くことによって、阮籍の「途窮」という属性が嵇康にも被せられているのではないだろうか。この点は、李白、杜甫の嵇康の用い方を見た上で、もう一度考えたい。

李白の嵇康の用い方は、猟官運動という方向で徹底されている。「五君詠」を踏まえて、「龍性」に言及することはあるが、それも一例だけであり、その他の作品では、嵇康の呂安、向秀との交遊を、表現を変えながら何度も言及する。それは、もちろん、人との繋がりを求めており、目指すところは官界だろう。友情による発露という面もあるかも知れないが、阮籍への認識、用い方などを考えれば、嵇康の用い方も、目的は、猟官運動ではないのかという読みへ導かれてしまう。盛唐という時代、李白の経歴などを考え合わせれば、「道家」や「仙性」という嵇康の属性にもっと触れていた可能性はあるが、現存するという小論での限定の内では、そこは考えてはならない。

李白の認識とは、真逆の認識を持っていたと考えられるのが杜甫である。杜甫が嵇康の属性として頻繁に引くのが、「無精もの」「怠け者」という属性である。阮籍を用いたときは、あれほど志を果たせない自身を嘆いていたのに、その本人は、「無精もの」「怠け者」であると言うのである。杜甫の嵇康Ⅱ「無精もの」「怠け者」という認識は、このまま額面通り受け取って良いものではないだろう。杜甫は、嵇康が阮籍を師として学ぼうとしていたことを、真似て嵇康を師とすると言っていた。これは、嵇康の属性と自身の属性が近いと考えていたことによるのだろう。つまり、謙遜して自身を表現する際に嵇康を用いているのだろう。このように、李白と杜甫の両者は、どちらもこれまで触れられてきた頻度の高い属性ではなく、自分が用いやすい、仮託しやすい属性を選んでいると考えられる。

このような李白、杜甫の言及の仕方を見ると、先程、保留にしていた庾信の用い方にも、同様な表現、用い方の選択肢があったのではないだろうか。つまり、意識的か無意識的かに関わらず、庾信はこのような選択はしなかった。それは、庾信の嵇康解釈が李白、杜甫よりも素朴なものだったからだろう。嵇康は、官界に関わることを嫌った。嵇康が志を遂げることができないと嘆いたのは、思うように生きられないからであって、官界での栄華といったことではなかった。これが一般的な解釈だろう。庾信は、この一般的な解釈に近い解釈で嵇康を理解しており、李白、杜甫は、そこから離れて、言わば飛躍した解釈で用いていると考えられる。

このような李白、杜甫の認識は、白居易と劉禹錫の詩ではあまり見られない。白居易は基本的に嵇康を「物憂い」「怠け者」として用いている。これは、第五章で見たように、政治的な表現を避けたためと思われる。杜甫の嵇康は「無精もの」「怠け者」が、謙遜として用いるのと同様、白居易の嵇康は「物憂い」「怠け者」も、謙遜として読むことはできる。しかし、白居易の目的の一つが、「中央政界に執着の無いことを示す」ことであつたため、杜甫とは異なり、現状に満足しているかのように、嵇康は「物憂い」「怠け者」を示している。

それに対して、劉禹錫の詩では、政治的な事柄を巡る嵇康の属性は、はっきりと否定されている。嵇康の「山巨源に與ふる絶交書」を否定し、「嵇康とは異なり私は中央政界に戻りたい」という思いが述べられているのである。これは、白居易が度々左遷されながらも、時に中央政界に戻る機会があり、さらに、洛陽に滞在することが多く、対する劉禹錫は、若い頃の左遷から約三十年間、地方へ出されており、中央政界から逃れて隠遁しようという意志を見せた白居易とは異なり、死ぬまで中央政界へ返り咲くことを願ったからなのだろう。

蘇軾は、自身を嵇康に仮託した表現が多くみられる。度々左遷されたという経歴から考え合わせれば、自身の境遇を重ね合わせるのに相応しい人物として認識していたのだろう。また、そのように自身の境遇を重ね合わせるだけではなく、友人を称賛するための踏み台として用いられることから、嵇康を価値あるものとして捉えていたのだろう。

嵇康は、六朝期から北宋の詩人まで、「風流」という属性で詠われ続ける。しかし、庾信以後の詩人にとって、とりわけ重要なのは、政治的な物事に関わる属性だろう。貴族制であつた六朝期では、出仕せずには済むこともできたかもしれないが、唐以後では、詩人も官吏という図式から逃れられない。詩人も官吏という社会では、詩人が政治的な物事と関わらないことは、ほぼ無理であり、そのようなコンテキストでは、嵇康の「反権力」という属性は、否定されることが多くなるのは当然の帰結だろう。

・劉伶

劉伶に関しては、小論で取上げた詩人の認識は、ほぼ一致している。劉伶Ⅱ「酒」という図式である。詠史詩として、人物を詳細に描いた顔延之「五君詠」でも、劉伶は、酒に関する故事がいくつも引かれるだけであり、それ以外の属性には触れられない。時に、酒に対する認識の違いによって、肯定されたり、否定されたりという差異はあるが、一貫して、取上げた詩人全員が、劉伶Ⅱ「酒」として認識している。現在見ることでできる劉伶の故事も酒に関するものしかないことから、それぞれの時代でも、劉伶の他の属性に触れた資料があったとは思えない。

・阮咸

阮咸は、阮籍との甥叔父関係によって言及されることが多い。顔延之「五君詠」でも、阮籍との関係には触れないが、阮籍と同じような認識で捉えられている。それは、人物としての素晴らしさを酒で韜晦したということ、音楽に優れた才能を持っていたこと、政治に関わろうとしなかったことなどである。そもそも、小論で取上げた詩人で阮咸に言及しているのは、李白、杜甫の二人だけである。阮籍と同じような認識で捉えられるのであれば、その属性を用いるとき、より名の通る阮籍を用いるのは当然であり、阮咸にあつて阮籍にない属性を用いるのでなければ、阮咸の出番はない。それでは、なぜ李白、杜甫は、阮咸に言及したのか。

阮籍、嵇康観の変遷として先に見たように、李白は、獵官運動を盛んに行っており、自身を唐朝の李氏と連なる「李氏一族」として喧伝し、獵官運動を有利に運ぼうとしていた。この「李氏一族」の対として、「阮氏一族」とりわけ阮籍、阮咸の叔父甥を挙げ、唐朝が祖先としていた老子、またそこから派生する道家という思想体系に、「阮氏一族」は符合する。つまり、同姓、道家を好んだ、という李白と唐朝の李氏に共通するコンテクストがあり、阮籍、阮咸の人物としての素晴らしさという属性によって、強引に唐朝の李氏に自分を繋いでいるのである。

杜甫は、李白とは異なり、獵官運動に阮咸を使うことはなかった。杜甫が用いたのは、親しい付き合いのあつた本当の甥を阮咸に擬え、直接的に阮籍に擬えなくとも、自身を阮籍の位置に置くためであった。もちろん、甥を称賛する目的もあつたろうが、それによって、自身の価値を高めているように読み取れる。なぜ、李白と杜甫の二人だけが言及したのかということを考えれば、それは、詩に叔父甥の関係を描くかどうかということになるだろう。李白は、主に年長の権力者に対して、甥の立場から詩を送り、杜甫は、

甥に阮籍の立場で詩を送った。李白は、「偽」の叔父甥関係だが、杜甫は「真」の叔父甥関係である。このような詩を残さなかった他の詩人たちは、阮咸に触れることはなかった。それは繰り返しになるが、阮咸にあつて阮籍にはない属性というものが認識されていなかったからである。つまり、阮咸は、阮籍の縮小版という位置付けなのだろう。

・向秀

顔延之「五君詠」では、向秀は、その学問的な才能が詠われている。しかし、六朝期の嵇康の処刑に臨む態度を理想として詠う、ということから、次第に亡くなった友人を嵇康に擬えて傷むという定型表現とも言える形が用いられるようになると、向秀は、嵇康の死後、その死を傷んだ人物として言及されることが多くなる。友人Ⅱ嵇康Ⅱ善きもの、という構造があるため、それを傷む詩人Ⅱ向秀は、悪しきものとも行かなくとも、何も為し得ず生きているという否定的なニュアンスで詠われる。向秀の学問的な著作に關しては、文選にその論が載っており、『莊子』の注釈関連の故事なども『世説新語』、史書類にも記載があるので、一般的に知られていたと考えられる。しかしながら、向秀に単独で言及することは、ほとんど見られない。嵇康が詩人たちに与える印象が強烈であることが、向秀の嵇康を引き立てる、もしくは嵇康に付随する人物としての在り方に影響しているのかも知れない。

・山濤

山濤は、高位に昇ったということで、顔延之「五君詠」には詠われなかった。そこで、代わりに山濤、王戎を詠ったのが蕭統である。その詩で、山濤はその官吏としての能力を絶賛されている。事実、山濤の人物抜擢の才能は、文献に見ることができる。しかし、その官吏としての有能さゆえ、その後の詩人にも、隠逸という属性に關しては触れられることはなく、「五君」とは異なった存在として認識されている。

山濤に対する認識は、その「人を見る眼」と結果的に「高位に昇った」という属性に集約される。李白、杜甫など官職を望む詩人は、有力な人物を山濤に見立て、自身を「五君」の位置に置くことで、引き立てを願うという構図で用いている。そのような戦略が直接引き立てに繋がらなかったのは、山濤による嵇康、阮咸の推薦は、被推薦者の拒否や受け入れ先である皇帝による拒否によって、成功しなかったのだから、当然なことかもしれない。

また、「高位に昇った」という属性では、肯定的に用いられる場合と、否定的に用いられる場合がある。

肯定的な場合は、先の「人を見る眼」と同様、山濤に擬えられる人物を称賛しているが、否定的な場合では、自身を山濤に擬えることとなる。この否定的な言及を用いたのが蘇軾である。蘇軾は、友人グループにおける何らかの区別を、「五君」と山濤・王戎という二つのグループに分け、「五君」を善きものとしている。友人が「山王」側の場合は、「五君」側に来るように説得し、自身が「山王」側の場合は、「五君」側に入れてもらえてうれしいという喜びの表現となる。

阮籍、嵇康の知名度を考えれば当然のことだが、始めそちらに言及が集中し、言及されなかった山濤が、李白や杜甫といった引き立てを願う詩人によって、善きものとして言及されるようになるが、そのような引き立てを願うという要素が失われると、蘇軾のように、これまで用いられてこなかった「五君」／「山王」という対立によって用いられるようになる。後半生では引き立てを願わなかった白居易が山濤に言及しないのは、理解できるが、中央政界への復帰を最後まで諦めなかった劉禹錫が、山濤に触れていないのは、よくわからない。課題として残しておく。

・王戎

王戎は、蕭統によって詠われたところまでは、山濤と同様であるが、それ以外ではほぼ真逆な認識、用いられ方をされている。蕭統に詠われた内容も、官吏としての有能さの欠如が読み取れ、そこから、蕭統の意識を推測すれば、詠いたかったのは、山濤であり、「五君詠」で詠われなかった人物として詠うことから、仕方なく王戎も詠ったかのように思われる。

しかし、六朝期では、王戎は阮籍、嵇康に匹敵するほど詠われている。これは瑯琊の王氏という出自が大きな要因であったろう。貴族の力が強かった六朝期では、多くの瑯琊の王氏出身の人物が活躍しており、「風流」という属性で用いるのに適していたのだらう。そのため、貴族の力が衰えて行くに連れ、王戎の評価も下がっていく。六朝期では、「風流」の代名詞のように用いられていた王戎は、唐に入ると阮籍が言ったように「俗物」として言及されることになり、言及される数も限られてくる。

・「竹林七賢」

これらの七名が「竹林七賢」として詠われる時、それぞれに与えられた属性は見られず、主に「風流」として詠われる。また、私的な宴席の場で用いられる際には、「仲間意識」という形でも触れられることがある。これは「風流」を内に含んだ「仲間意識」と言えるだらう。宴席Ⅱ「風流」な場という意味と、そ

ここに集まる人物は「風流」、そして、そこに参加する「私」という三者の価値を高める働きをしているのだろう。

ここまで、「竹林七賢」に言及した詩から読み取れる認識の変遷を見てきた。ここでは、なぜ詩人は「竹林七賢」を、自身を仮託する人物として用いるのかという点について考えたい。

ある詩を読んだとき、その詩の中で古の人物への言及がなされている場合、読者は、古の人物の属性の集合を呼び起こされ、それがコンテキストの作用によって、どの属性が焦点とされているかが確定される。そして、その古の人物に詩制作者が仮託されている場合、その確定された古の人物の有する属性が、詩制作者に付与される。この過程が、詩を読んだ読者の認識が辿る過程だろう。

この過程が示すことは、古の人物に自身を仮託することは、自身を消すということである。つまり、古の人物は自身とすることで、読者は、「知」として共有されている古の人物の属性を詩から読み取ることとなり、「知」として共有されているがために、何らかの属性を詩人の有する属性として読み取る前に、古の人物の属性として認識している。古の人物の属性の認識が先であり、古の人物に詩制作者が仮託されていることを認識するのは後となる。この順序は、当然のことだろう。

例えば、杜甫の詩に「阮籍」とあれば、魏晋の際に竹林で酣飲したとされる「阮籍」という名で呼ばれる人物を思い浮かべるのが自然であり、「阮籍」という語を見た時点で、詩制作者である杜甫自身を思い浮かべることはないだろう。まずは、阮籍を思い浮かべ、コンテキストの作用という認識の一段階を踏んで、杜甫が阮籍に自身を仮託しているということに思い至るであろう。つまり、阮籍の属性によって、杜甫の属性は上書きされてしまう。

古の人物に自身を仮託する詩制作者の意図は、ここにあると考えられる。自身の言葉で表現しにくい状況、経験などを語る際、同じような状況に置かれた古の人物、あるいは、同じような経験を示す故事に思い至り、自身の言葉ではなく、古の人物、故事を引いて表現する。

それは、古の人物の属性によって、自身の属性を上書きし、自身を消す（もしくは隠す）。これまで取上げてきた詩人を見れば、官職に就くことを願った李白や杜甫は、証明されていない（自身の手腕を発揮できる地位にいなかったのだから当然だが）自身の力量を、阮籍の属性（東平郡で見せた行政手腕や経世の志など）によって上書きし、自身の価値をより高めることを願った。そして、少なからず政治的な功績を持っていた白居易は、その政治的な野心を阮籍の属性（酒による政治的な事柄からの逃避）によって上書きし、自身の保身を図った。

また、臨終詩を残した詩人は、嵇康の刑に臨んで泰然としていたという属性を、自身に上書きし、死後

の名が高まるよう求めた。これらの用法は、古の人物の属性によって、自身の属性を上書きし、自身の価値を高めるために用いられている。

つまり、古の人物に自身を仮託することは、正しく「操作」であり、「竹林七賢」を用いた場合、それによって得られるのは、「価値を高める」という作用だろう。宴席の場、そこに集まる人々、参加する自分などの宴席を舞台にした価値の操作とともに、不遇な自身の価値を高めるための使用など、個人的な場面でも用いられる。個人的な場面での使用は、更に「慰め」という作用もあるだろう。異郷にある自身の不遇や、外在的な要因による不遇、それに対する自己弁護、保身を図りつつも矜持を保つため、自身の価値を高めるための否定など、用いられ方は様々であるが、共通するのは自身への「慰め」であろう。

「竹林七賢」もしくは、それぞれの人物像の変遷とそこから読み取れる、なぜ「竹林七賢」を詠うのかという点について、考察を加えてきた。最後に、なぜ、その言表が異なってしまうのかという点について考えたい。それぞれの人物についての認識の差異はなぜ生まれるのだろうか、ということである。共通点がありつつも、それぞれの認識が異なってしまうことを考えると、そもそも、彼らは、同じ人物について詠っているのかという疑問が生じる。

これまで見てきた詩人たちは、人生のいずれかの段階（おそらくは幼少期から青年期）で、「竹林七賢」に関する故事やその作品を読んだはずである。それが、彼らの中で、どれほどの印象を残したのかは知ることはできないが、自身の境遇を擬えて言うところからすれば、一定の印象を受けたのは確かであろう。

しかし、そもそも「読む」ということは、常に忘却から逃れることはできず、読了の如何に関わらず、読んでいる最中にも、忘却は襲ってくる。つまり、「読む」という行為は、読み進めつつ、読んだ内容を忘却という脅威にさらされながら、再構成していくことと考えられる。これは、もちろん、読み進めているその段階でのみ起こるものではなく、読了後、一定の時間を経過後でも、誰にでも起こる普遍的な現象だろう。

つまり、これまで見てきた詩人たちの詠った「竹林七賢」とは、彼ら自身がそれぞれの読書体験から再構成した「内なる『竹林七賢』」となる。この「内なる『竹林七賢』」は、それぞれの生きた時代という社会的なコンテキストやそれぞれの置かれた境遇、作品の動機などといった個人的なコンテキストによって規定され、それぞれに差異を持ったものである。であるからこそ、共通点がありつつも、微妙に異なった言表となる。

このように、それぞれの詩人の「竹林七賢」というイメージの源泉として、再構成された「竹林七賢」、

つまり、「内なる『竹林七賢』」という観点から、「竹林七賢」とその面々に対する、詩人たちの認識の差異を考えれば、彼らは、同じ人物、同じ人物群について詠っているのではなく、それぞれが再構成したそれぞれの「内なる『竹林七賢』」について詠っているのだと考えられる。

これは他の人物、事象においても、複数の人の認識があれば、起こる現象であり、避けられないことだろう。だからこそ、「内なる」を再構成する喜びがあり、それを表出する喜びがあり、またそれを再構成する喜びがあるのだろう。つまり、「竹林七賢」に言及した詩の系譜とは、「竹林七賢」の読みの系譜であり、その再構成の系譜であり、その表出の系譜であろう。